

松本市文化財調査報告No69

松本市千鹿頭北遺跡

—— 県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 ——

1989・3

松本市教育委員会

松本市千鹿頭北遺跡

—— 県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 ——

1989・3

松本市教育委員会

序

千鹿頭北遺跡は薄川の南方で、里山辺林地区と神田地区の界にあたり、名前が示すとおり、千鹿頭山の北裾にあります。此の度長野県松本地方事務所より松本市教育委員会が委託を受け、県営ほ場整備事業にさきがけてこの遺跡の発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は昭和62年の7月から9月にかけて実施され、遺跡は古墳時代後期を中心とするかなり大規模な集落であることが判明しました。その後の整理作業とあわせて結果を本書にまとめここに報告するものであります。

山辺地区は屈指の前方後方墳である弘法山古墳を南西に控え、国府の推定所在地のひとつであり、又広沢寺、林城などもゆかりが深く歴史的に重要な地であるといえます。本書が当地区の歴史解明のための資料としていささかの貢献を為すことを願って止まぬものであります。

最後に、今回の調査の遂行に際して多大な御理解、御協力をいただいた薄川土地改良区、また甚大な御協力をいただいた里山辺公民館・出張所及び地区の皆様にご心より謝意を表し、さらに地域の一層の文化財保護の機運が高まることを願い序といたします。

平成元年3月

松本市教育委員会教育長 中 島 俊 彦

例 言

1. 本書は、昭和62年6月27日から9月7日にかけて行われた、松本市里山辺に所在する千鹿頭北遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は昭和62年度県営ほ場整備事業山辺地区に伴う緊急発掘調査であり、松本市が長野県松本地方事務所から委託を受け、松本市教育委員会が実施したものである。
3. 本書の執筆は、第1章：事務局 第2章：森 義直
第3章第4節2、第7節2、第8節：関沢 聡
第3章第3節1、第4節1、第5節1、第6節1：中村賢二・直井雅尚
その他は直井雅尚が行った。
4. 石器の石材鑑定は太田守夫、炭化材・焼獣骨の鑑定は森義直の各氏にお願いした。
5. 遺物の写真撮影は宮嶋洋一氏による。
6. 本書の編集は事務局が行った。
7. 本書第3章中の挿図の縮尺はそのつど示したが、基本的に次に統一してある。

住居址・建物址遺構図	1：80	土器実測図	1：4
住居址遺物・礫出土図	1：80	石器実測図	1：2 (大)、1：3 (中)、1：4 (小)
住居址カマド部分図	1：40	鉄器実測図	1：2
		土製品・石製品	1：2
8. 周辺遺跡の記述については、松本市文化財調査報告No61およびNo73と重複する部分が多いので割愛した。同書を参照されたい。
9. 発掘調査・整理にあたり、次の方々から御指導・御協力を賜った。記して感謝する。
桐原 健、原 明芳、望月 映、石上周蔵、山田真一
10. 本調査に関する事務記録、作業日誌類、出土遺物、測量図面類は松本市立考古博物館が保管している。

目 次

序	
例言	
目次	1
第1章 調査経過	
第1節 事業の経緯と文書記録	5
第2節 調査体制	
1 昭和62年度(発掘調査)	7
2 昭和63年度(整理作業)	7
第2章 遺跡の立地と地形・地質	9
第3章 調査	
第1節 調査の概要	
1 調査成果の概要	11
2 調査・提示の方法	13
第2節 縄文・弥生時代の遺物	14
第3節 古墳時代前期の遺構と遺物	
1 住居址	
(1) 第1号住居址	17
(2) 第21号住居址	17
(3) 第28号住居址	20
(4) 第40号住居址	22
(5) 第50号住居址	23
(6) 第53号住居址	26
(7) 第54号住居址	26
2 渡路址1	27
3 遺構外出土の遺物	28
第4節 古墳時代後期の遺構と遺物	
1 住居址	
(1) 第2号住居址	42
(2) 第3号住居址	44
(3) 第4号住居址	46
(4) 第5号住居址	49
(5) 第6号住居址	50
(6) 第7号住居址	52
(7) 第8号住居址	54
(8) 第9号住居址	56
(9) 第10号住居址	56
(10) 第11号住居址	59
(11) 第12号住居址	60
(12) 第13号住居址	62
(13) 第14号住居址	64
(14) 第15号住居址	64
(15) 第16号住居址	69
(16) 第17号住居址	72
(17) 第19号住居址	75
(18) 第20号住居址	77
(19) 第22号住居址	80
(20) 第23号住居址	80
(21) 第27号住居址	83
(22) 第29号住居址	84
(23) 第30号住居址	84
(24) 第32号住居址	87
(25) 第33号住居址	89
(26) 第36号住居址	92
(27) 第37号住居址	92
(28) 第38号住居址	94
(29) 第39号住居址	95
(30) 第41号住居址	99
(31) 第44号住居址	101
(32) 第45号住居址	102
(33) 第47号住居址	104
(34) 第51号住居址	106
(35) 第52号住居址	106
(36) 第58号住居址	109
(37) 第61号住居址	111
(38) 第62号住居址	111
(39) 第64号住居址	113
(40) 第65号住居址	113
2 掘立柱建物址	
(1) 第1号建物址	114
(2) 第2号建物址	114
(3) 第3号建物址	115

	(4) 第4号建物址	115.	(5) 第5号建物址	116	(6) 第6号建物址	116
3	ピット群	122				
4	流路址2	122				
5	遺構外出土の遺物	122				
第5節 奈良時代の遺構と遺物						
1	住居址					
	(1) 第18号住居址	176	(2) 第35号住居址	176	(3) 第42号住居址	179
	(4) 第43号住居址	181	(5) 第49号住居址	181	(6) 第55号住居址	182
	(7) 第56号住居址	185	(8) 第57号住居址	185	(9) 第59号住居址	187
	00 第60号住居址	188				
2	遺構外出土の遺物	188				
第6節 平安時代の遺構と遺物						
1	住居址					
	(1) 第25号住居址	201	(2) 第26号住居址	203	(3) 第31号住居址	205
	(4) 第34号住居址	205	(5) 第46号住居址	207	(6) 第63号住居址	207
	(7) 第66号住居址	209				
2	遺構外出土の遺物	209				
第7節 時期不明の遺構						
1	住居址					
	(1) 第24号住居址	216	(2) 第48号住居址	216		
2	溝址	218				
3	焼土	218				
第8節 その他の遺物						
1	鉄器	220				
2	石器	226				
3	石製品・土製品	230				
第4章 調査地周辺出土の遺物						
第5章 調査のまとめ						
第1節 遺構について						
1	古墳時代前期の遺跡と住居	239				
2	古墳時代後期の住居	240				
第2節 土器について						
1	古墳時代前期の土器	242				
2	古墳時代後期の土器	242				
3	奈良時代の土器	257				
4	平安時代の土器・陶器	259				
第3節 集落の変遷について						
1	相対的な時期	260				
2	遺構配置の変遷	260				
3	集落の変遷	263				
第6章 結語						
265						

目 次

第1図 遺跡の範囲と調査地の位置……………6	第38図 第16号住居址……………70
第2図 調査範囲と周辺的地形……………8	第39図 第16号住居址カマド……………71
第3図 土層柱状図……………10	第40図 第17号住居址……………73
第4図 調査地全体図……………12	第41図 第17号住居址カマド……………74
第5図 縄文・弥生時代の遺物……………15	第42図 第19号住居址……………76
第6図 古墳時代前期の遺構配置……………16	第43図 第20号住居址……………78
第7図 第1・40号住居址……………18	第44図 第20号住居址カマド……………79
第8図 第21号住居址……………19	第45図 第22・27号住居址……………81
第9図 第28号住居址……………21	第46図 第23号住居址……………82
第10図 第28号住居址遺物出土……………22	第47図 第29・30号住居址……………85
第11図 第50号住居址……………24	第48図 第32号住居址……………86
第12図 第53・54号住居址……………25	第49図 第32号住居址遺物出土……………88
第13～20図 古墳時代前期の土器(1)～(8)……29	第50図 第33号住居址……………90
第21図 古墳時代後期の遺構配置……………41	第51図 第33号住居址遺物出土・カマド……91
第22図 第2号住居址……………43	第52図 第36・37号住居址……………93
第23図 第3号住居址……………45	第53図 第38号住居址……………96
第24図 第3号住居址遺物出土……………46	第54図 第38号住居址カマド……………97
第25図 第4号住居址……………47	第55図 第39・45号住居址……………98
第26図 第4号住居址遺物出土……………48	第56図 第41号住居址……………100
第27図 第5号住居址……………49	第57図 第44号住居址……………101
第28図 第6号住居址……………51	第58図 第47号住居址……………103
第29図 第7号住居址……………53	第59図 第47号住居址遺物出土……………104
第30図 第8号住居址……………55	第60図 第51号住居址……………105
第31図 第9・11号住居址……………57	第61図 第52号住居址……………108
第32図 第10号住居址……………58	第62図 第58・61号住居址……………110
第33図 第12号住居址……………61	第63図 第62・64・65号住居址……………112
第34図 第13号住居址……………63	第64図 第1・3号建物址……………118
第35図 第14号住居址……………65	第65図 第2号建物址……………119
第36図 第15号住居址……………67	第66図 第4・5号建物址……………120
第37図 第15号住居址カマド……………68	第67図 第6号建物址……………121

第68～104図	古墳時代後期の土器(1)～(7)……123	第129図	第24・48号住居址……………217
第105図	奈良時代の遺構配置……………175	第130図	第1～4号溝址……………219
第106図	第18号住居址……………177	第131～133図	鉄器(1)～(3)……………223
第107図	第35号住居址……………178	第134・135図	石器(1)・(2)……………228
第108図	第42・43号住居址……………180	第136図	石製品……………230
第109図	第49・56号住居址……………183	第137図	土製品……………231
第110図	第55号住居址……………184	第138図	調査地周辺の地形と遺物出土地点 ……232
第111図	第57・59・60号住居址……………186	第139～142図	調査地周辺出土の遺物 (1)～(4)……………234
第112～119図	奈良時代の土器(1)～(8)……189	第143・144図	土師器坏集成(1)・(2)……………244
第120図	平安時代の遺構配置……………200	第145図	土師器甕集成……………247
第121図	第25号住居址……………202	第146図	土師器壺集成……………249
第122図	第26号住居址……………204	第147図	土師器把手付壺集成……………251
第123図	第31・34・46号住居址……………206	第148図	須恵器蓋A集成……………253
第124図	第63・66号住居址……………208	第149図	I地区の遺構配置変遷……………262
第125～128図	平安時代の土器(1)～(4)……210		

表 目 次

第1表	遺構一覧……………11
第2表	遺物一覧……………13
第3表	古墳時代前期土器一覧表……………37
第4表	古墳時代後期土器一覧表……………160
第5表	奈良時代土器一覧表……………197
第6表	平安時代土器一覧表……………214
第7表	鉄器一覧表……………222
第8表	石器一覧表……………227
第9表	調査地周辺出土土器一覧表……………238
第10表	住居址の床面積段階別一覧……………241
第11表	古墳時代後期坏器形分類表……………243
第12表	古墳時代後期住居址出土土器主要器形一覧……………255
第13表	土師器甕が須恵器類と組み合さる比率……………256
第14表	各時期の対比……………261
第15表	住居址一覧表……………267

第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録

- 昭和61年8月29日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月23日 昭和62年度補助事業計画書提出。
- 昭和62年4月27日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 5月16日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 6月1日 昭和62年度県営ほ場整備事業山辺地区千鹿頭北遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 6月27日 千鹿頭北遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 6月30日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）内定。
- 7月11日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月20日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月5日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 9月7日 昭和63年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 9月14日 千鹿頭北遺跡埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。
- 12月21日 昭和63年度補助事業計画書提出。
- 昭和63年4月5日 千鹿頭北遺跡埋蔵物の文化財認定通知。
- 4月27日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月31日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 6月14日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 6月21日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月25日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。



● 調査地点



第1図 遺跡の範囲と調査地の位置

第2節 調査体制

1 昭和62年度（発掘調査）

調査団長	中島俊彦（松本市教育長）
調査担当者	神沢昌二郎（松本市立考古博物館館長）
現場責任者	直井雅尚（社会教育課主事）
調査員	森 義直（大町高校教諭） 土橋久子（長野県考古学会員）
事務局	浅輪幸市（社会教育課長）、小松晃（文化係長）、柳沢忠博（主査）、 大村敏博（主査）、熊谷康治（主事）、直井雅尚（主事）、洞田透子

調査協力者

青柳政治、青柳洋子、赤羽包子、阿久津美映、天野智広、荒井唯邦、五十嵐周子、石合英子、石井淳之、石川末四郎、伊丹早苗、乾靖子、岩野公子、臼井美枝子、海野洋子、大出六郎、大久保忠光、太田千尋、大谷成嘉、大塚製瓷六、奥原富蔵、尾崎友季、小野千代子、小野光信、開嶋八重子、葛西徹、金井ひろみ、金井要二郎、金子富人、上条美幸、菊地信雄、清野文彦、黒田恵、小池直人、小出寛嗣、小岩井初美、小岩井美津子、神戸巖、小林格、小松啓吾、小松正子、坂根和佳、坂本恵美、沢柳秀利、篠田善文、柴田依子、荘秀也、渡田篤、鈴木好子、瀬川長広、袖山勝美、田島靖子、都築佐吉、鶴川登、張賢玉、永井玲子、中島新嗣、中島直美、長沼泉、中村恵子、中村文子、西原いさ子、西原明子、西原千代子、市崎助治、林昭雄、林伊和夫、藤島隆志、藤村俊樹、藤本嘉平、降旗大太郎、牧田浩幸、町田正司、丸山恵美、丸山誠、丸山愛徳、村山正人、木橋真理子、百瀬二三子、森道雄、矢敷裕子、百合草朋弥、横山倍七、横山美佳、横山光代、余良遷、李開元、劉吉樞、劉鉄軍、劉莉、若井七十郎、若井孝夫、渡辺信也、

2 昭和63年度（整理作業）

前年同様市教育委員会の直営事業として実施したが、特に調査団の編成はせず、以下のような体制で行った。

総 括	神沢昌二郎（市立考古博物館長）
責 任 者	直井雅尚（社会教育課主事）
調 査 員	森義直、土橋久子、岩野公子
事 務 局	浅輪幸市（社会教育課長）、田口勝（文化係長）、熊谷康治（主査）、降旗英明（主事）、山岸清治（事務員）、三沢利子



0 50 100m

第2章 遺跡の立地と地形・地質

本千鹿頭北遺跡は、松本盆地の東端鉢伏山の山麓にあり海拔610m付近に位置している。発掘地点付近は、美ヶ原と鉢伏山の水を集めて西流し、流路の首振りの結果生じた薄川扇状地の南限にあり、ここが南限となった要因は、遺跡のすぐ南に接する海拔657mの千鹿頭山に阻まれ、すそ野を浸食はしているがそれ以南に首を振れず流路が北進したためである。一方千鹿頭山と東山との間を掘削して北流する小河川である逢初川の堆積物が、この薄川扇状地の堆積物と混成または寄木状に交錯し、遺跡の北側は薄川系が、また、南側は逢初川系の堆積物が卓越している。地形的には両扇状地がほぼ直交しているため全体として、西北方向の盆地の中心部へ向って緩く傾斜している。

この付近の地形・地質を地史的にみると、新生代第三紀中新世のフォッサマグナの海に堆積した泥岩、砂岩、礫岩などの堆積物に、火成活動による石英閃緑岩や玢岩のマグマが貫入し、そのときの活動で噴出した安山岩や火山灰が海中に堆積して緑色凝灰岩などの地層が生成された。これ等のフォッサマグナの海はその後隆起し、第三紀末から第四紀洪積世にかけて起きたいわゆる島弧変動により、日本列島が幾つものブロックに断層で分断され、それ等の各ブロックが隆起や陥没をしながらも列島全体としては隆起して、現在見るような地形が形成されてきた。本遺跡のある松本盆地も、この造構造運動の結果として西部山地と鉢伏山や美ヶ原などの東部山地は隆起し、松本盆地は陥没して生じたものであり、北は白馬盆地、南には諏訪や甲府などの盆地が連なっている。この松本盆地を埋没させた主な河川は第1に梓川水系と奈良井川水系であり、北部では高瀬川水系が中心になっている。これ等の水系の堆積物に盆地の四方から流入する中小の河川や沢などによる堆積物が、大小さまざまな扇状地をつくり松本盆地の現地形ができあがってきた。そのため1地点をとっても、同一河川の堆積物とは限らず各河川の堆積物が複雑に入り混ざっている場合が多い。

発掘深度の浅い本遺跡付近だけをとりても、薄川系の堆積物は石英閃緑岩、玢岩、安山岩、緑色凝灰岩、砂岩などであるが、主体は安山岩礫で最大は径25cm程である。そして、これ等の礫と風化により生じた有機物含有量が多くゆるい分けの悪い黒色土がN40°E→S40°W方向に堆積している。

これ等の薄川系の堆積物と混成したり、寄木状に交錯または、これを覆うような形で逢初川の堆積物が、S40°E→N40°W方向に両者がほぼ直交するように堆積している。

この逢初川は薄川と比較すれば沢に近い小河川であるが、本遺跡のある盆地への出口に当り、常時堆積が行なわれているので第1地区では薄く、第2、第3と出口に近づく程厚くなっている。この堆積物の岩質及び土質は、安山岩、砂岩、凝灰質泥岩の他硅化作用を受けた砂岩やホルンフェルス化した泥岩、それに硅化した緑色凝灰岩などの礫も多くみられる。土層は本遺跡の南に接してい

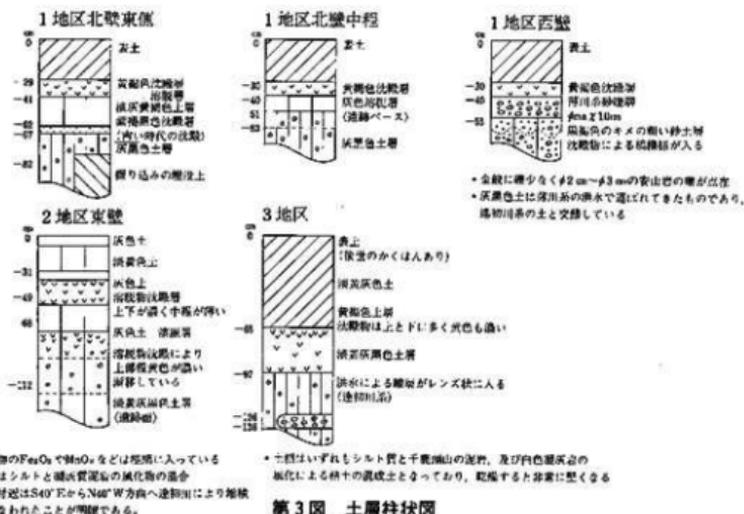
る千鹿頭山の泥岩と白色凝灰質泥岩→白色凝灰岩の風化による灰色粘土と逢初川により運ばれた淡黄色シルトの混合物であり、有機物が少なく湿れば粘土、乾けば非常に堅くなる性質がある。

土層柱状図について

第1地区は、表土が30cm程あり、主体は逢初川によるシルト質粘土である。その下のおよそ30～40cmは表土と同質であるが、表土の溶脱物（酸化鉄）の沈澱により黄褐色の斑紋に富んでいる。この沈澱層の下は-40～-60cmは、古い時代の溶脱層で灰色～淡黄灰色のシルト質粘土である。この地区の西側は薄川系の洪水による礫層となっておりこの溶脱層を欠いている。溶脱層の下には紫褐色の溶脱物沈澱（酸化鉄、酸化マンガンなど）の層があるが、この地区の中部より西では、その下の灰黒土層の中に拡散し斑紋をつくっている。-55～-60cm以下は主として、ふるい分けの悪い薄川系の礫混じりの黒色土と上記逢初川系のシルト質粘土との混成または交錯土層となり灰黒色層となっている。そのため土質は一定せず変化に富んでおり、遺跡面もこの土層中にある。

第2地区は70cmくらいまでは全て逢初川系のシルト質粘土であり、その下は薄川系との混成による淡黄灰黒色土層となる。千鹿頭山に近づくにつれ逢初川系の堆積物は急に厚さを増し、遺跡面までは-112cm程となる。

第3地区は上部が後世の人為的影響を受けているため正確なことはわからないが、第2地区と近似している。遺跡面のある淡黄灰黒色土層中に逢初川系の洪水性の礫層がレンズ状に入っている。この礫層の岩質は、砂岩、泥岩、緑色凝灰岩が主で、それ等のなかには熱変成や硅化作用を受けて非常に堅く、ホルンフェルス化しているものもある。その他として閃緑岩や安山岩も含まれている。



第3図 土層柱状図

第3章 調査

第1節 調査の概要

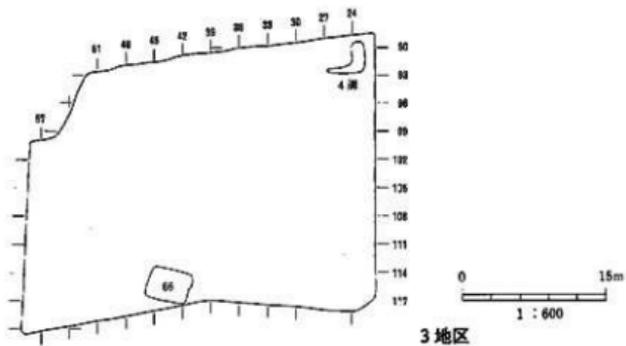
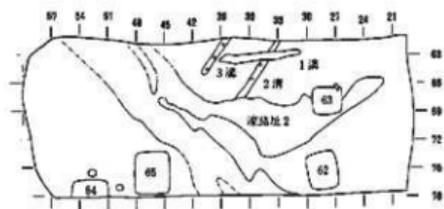
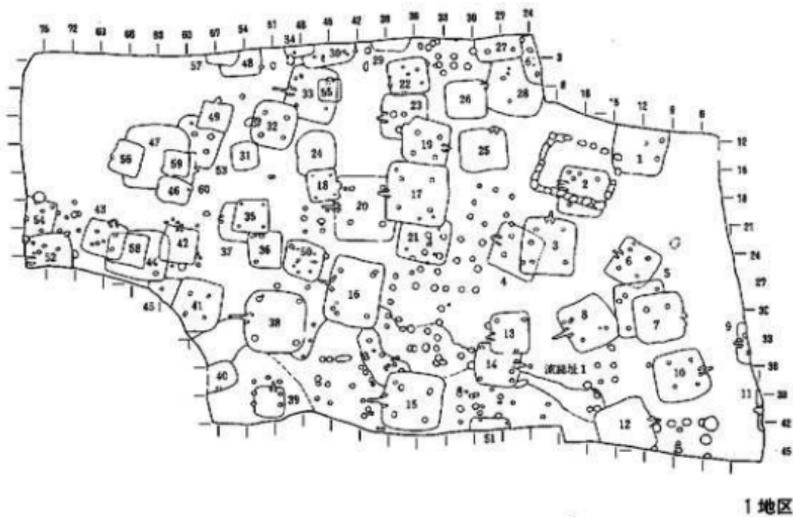
1 調査成果の概要

本遺跡は、松本市大字里山辺の林地区から、神田地区にかけて広範に広がっているものと考えられるが、今回の調査面積は1地区2571m²、2地区657m²、3地区964m²の計4192m²にすぎない。しかしこの狭い範囲内から、以下に述べる多量の遺構・遺物が発見され、本遺跡の重要性が明らかになった。

まず遺構では、竪穴住居址（以下、単に「住居址」とする）、掘立柱建物址（以下「建物址」）土壇、ピット、溝址、流路址などの種類があり、特に1地区に集中・重複が著しい。住居址は遺構の主体をなすもので、古墳後期を中心に、古墳前期、奈良、平安の各時代のものが総数66棟発見された。特に古墳後期の住居址には平面規模も大きく掘り込みもしっかりしていて、立派なカマドと煙道を残すものもいくつかある。建物址は6棟あるが、調査地区外にかかったり他遺構に破壊されて全形のはっきりしたものは少ない。古墳後期から奈良時代に属するものと推定している。土壇・ピット類は、合計で228基あるが、特徴的な、注目に値するものは少ない。ただし分布が、1地区南部の古墳時代前期の砂質土溜り（流路址1）の一带から、中央部の2号建物址の南にかけて集中する。ほとんどが古墳後期のものと考えられる。溝址は2地区に3本、3地区に1本あり、2地区のものは2本が東西に平行して走りもう1本がそれを斜めに横切る形で、集中して分布する。流路址は1地区の南部と2地区に見られ、1地区のものは前述のように非常に砂質の強い土が多数の古墳時代の前期の土器を含みながら、東西方向に不規則に蛇行して存在し、かなり緩い流れかあるいは一時的な溜りの結果と考えられる。2地区のものはこれと対照的に砂礫・砂利を多量に含み、古墳後期の土器を伴い平安時代の遺構に切られている。このほか住居址などに伴わない焼土が1か所あった。

第1表 遺構一覧

古墳時代前期	住居址7、流路址1
古墳時代後期	住居址40、建物址6、溝址4、流路址1、多数のピットもこの時期と推定
奈良時代	住居址10
平安時代	住居址7
時期不明	住居址2、焼土1
合計	住居址66、建物址6、溝址4、流路址2、ピット228



第4图 调查地全体图

遺物はこれら遺構の覆土・床面及び検出面から多量に出土した。土器・陶器・土製品・石器・鉄器がある。土器・陶器は出土遺物の主体をなし、特に住居址内より多量に出土したが、縄文土器・弥生土器など遺構がない時期のものも検出面や他の時期の遺構内から若干見られた。最も多いものは古墳時代後期の遺構にともなった同期の土器で、土師器と少量の須恵器で構成される供養形態の坏・鉢類や、土師器で雑な成形により作られる大小の甕・把手付壺、甕等いろいろな器種・器形の存在が明らかになった。土製品は紡錘車と手捏ねで古墳時代後期の住居址から出土している。石器は遺構に伴うものは砥石や軽石製の浮子、古代以降によく見られるタイプの凹石（状の石器）などであるが、混入品に磨製石包丁、打製石斧がある。弥生土器・縄文土器に伴うものであろう。鉄器は鎌、刀子、釘、鋸等でいずれも古墳時代後期以降の遺構に伴う。

第2表 遺物一覧

縄文	中期土器片、打製石斧
弥生	後期土器片、磨製石包丁
古墳前期	土師器、砥石
古墳後期	土師器、須恵器、紡錘車（土製・石製）、鉄器（鎌、鋸、刀子、釘）、砥石、軽石製浮子、手捏ね、磨製石製品、滑石製丸玉
奈良	土師器、須恵器、鉄器（鎌、刀子、釘）、凹石状の石器
平安	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器片、鉄器（釘、刀子）
中世以降	陶器、青磁

2 調査、提示の方法

調査地は地形や水路の関係から3地点にわかれたため、北から1地区、2地区、3地区とした。しかし測量用のグリッドは、3つの地区を共通の3m四方の方眼が覆うように、北東の隅を起点として東西、南北の線はそれぞれ起点からの距離で示す一つの座標系を設定した。これにより調査地内のすべての点は（南北方向、東西方向）で示す座標で表され、グリッド名はその北東隅の座標に「G」を付けて示す。

遺構番号は時代を考慮に入れずに検出順に付けたが、重複のある同種のものについては出来るかぎり新しい順にした。このためかなりバラツキがあるが、後の混乱を避けるため整理時に振り直すことはしなかった。

遺構測量図は基本的に1/20の縮尺で作成したが、残存状態の良いカマドや遺物・礎等の出土状態部分図は1/10で、また住居址1棟単位の遺物・礎等の出土状態図は1/20で行った。特に炭・炭化材や遺物・礎等出土状態図は、それらのあり方が際立って他と異なるものについてのみ作成してある。

本書作成にあたっては、本文・挿図による遺構の提示は、まず時期ごとに行い、そのなかで住居

址・建物址など遺構の種類ごとにまとめてある。遺物についても同様でさらに遺構ごとにまとめたものが、その主体は土器・陶器で、鉄器・土製品・石器など出土量の少ないものは時代・遺構の枠を取り払ってひとまとめにした。尚、古墳時代後期の遺構に紛れ込んでいた古墳時代前期の土器のような、その遺物の時期より後代の遺構から出土したものについては、本来の時期の項目に「遺構外出土品」としてまとめて取り扱ったため、遺構ごとの提示が若干崩れているところもある。文中に出てくる土器・陶器の器種・器形の名称は主なものについて第5章で触れた。

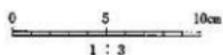
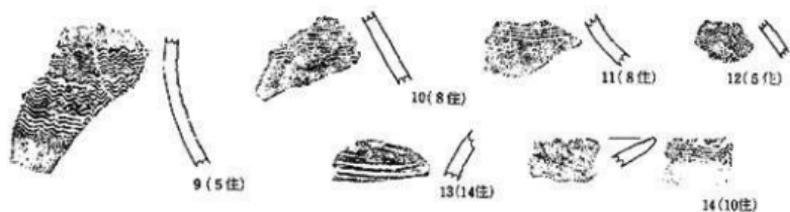
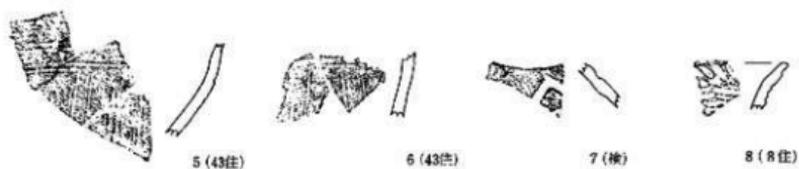
第2節 縄文・弥生時代の遺物

1 縄文時代の遺物 (第5・134図)

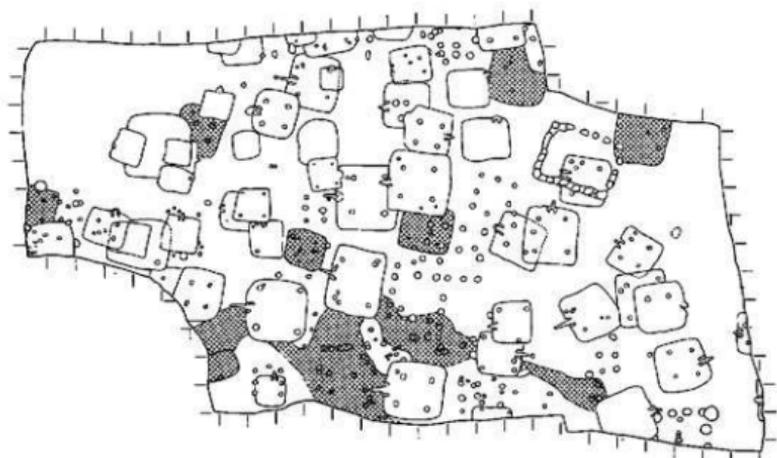
土器・石器(打製石斧)がある。いずれも後代の住居址内から出土した。土器は拓影で提示できたもの4点(第5図1~4)。縄文中期の深鉢の胴部破片で、1・3が中期初頭、2が中期中葉に属する。石器については本章8節で触れる。以上の縄文時代の遺物は、調査地周辺出土の遺物(第4章)によって古墳時代の遺構面の下層に縄文時代の包含層がある可能性が明らかになっているので、そこからの混入と考えられる。

2 弥生時代の遺物 (第5・134図)

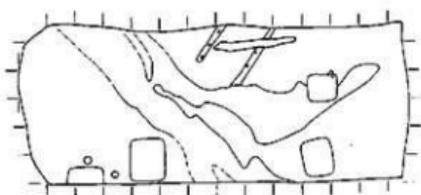
土器と石器(磨製石包丁)がある。後代の住居址内あるいは検出面から出土した。土器は拓影で12点を示したが、弥生中期のもの(5~8)、後期~終末のもの(9~16)の2群に分かれる。5・6は中期前半に遡ると見られる甕の胴部破片、8も同様の甕の口縁部。7は中期後半の甕の胴部上半。9~11は後期の甕の胴部上半。12~14はたぶん甕と思われ、14は口縁部内面に波状文が巡る。15・16は甕の胴部上半で篋描の羽状沈線を横位に回す。外器面には赤色塗彩の痕跡が残っている。石器については本章8節で触れる。以上の弥生時代の遺物は、今回の調査地外に近接して同期の遺構が存在することを示すのか、古墳時代遺構面の下層に同期包含層があることを暗示するものなのか、不明であるが後者の可能性も充分あろう。



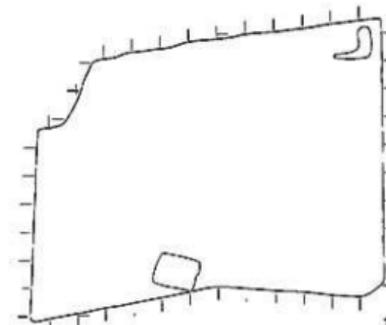
第5図 縄文・弥生時代の遺物



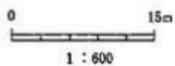
1地区



2地区



3地区



第6図 古墳時代前期の遺構配置

第3節 古墳時代前期の遺構と遺物

1 住居址

(1) 第1号住居址

遺構 (第7図)

1地区東端、(10~16, 9~15)に位置し、第6号建物址に切られる。一部調査区域外にかかり、全体のプランは定かでないが、主軸N 12-Eを示す、南北4.80m、東西5.40mの隅丸長方形を呈する。壁高は8cm前後と低く、緩やかな傾斜を示す。砂礫質土中に掘り込まれた床面は、中央部西側にわずかに黄色砂質土を貼るほかは、地山をそのまま用いている。軟弱・不明瞭な床で、一部を抜いてしまった。本址に付随する施設は、ピット・周溝のみで、炉は検出されなかった。周溝は南・西壁下を幅20cm、長さ140cmほど巡っている。ピットは東側に2個並んで、二段に掘り込まれているが柱穴とするには疑問が残る。床面積は23.9m²を測る。

本址は砂礫質土中に掘り込まれており、遺構検出時には本址部分のみ砂礫がなく、きわめて明確にプランを把握できた。しかし掘り下げを進めると古墳前期特有の浅さで、床もしっかりしておらず、中途半端な形となってしまった。

遺物

覆土中から少量が散発的に出土した。土器(13図1~5)と石器(砥石:第134図9)があるが土器は破片ばかりである。土器の器種は、甕・甕・鉢・灰環だがいずれも全形を知りえない。

(2) 第21号住居址

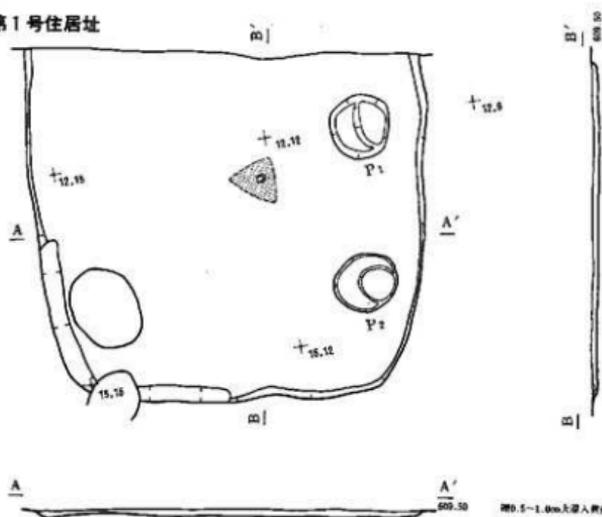
遺構 (第8図)

1地区中央部、(20~25, 33~39)に位置し、第17号住居址、第2号建物址に切られる。残存の規模は南北5.20m、東西4.40mで、主軸N-10 E、隅丸の方形プランが想定される。壁高は北壁20cm、南壁12cm、東壁14cm、西壁12cmと比較的浅いが、掘り込みはしっかりしている。黄~黄褐色砂質土の砂礫質土の地山に掘り込まれた本址の床は、黄色砂質土と黒褐色粘質土を斑状に5cmほど貼って構築され、平坦でわずかに西へ傾斜する。床面積は残存部で19.4m²、推定復元は21.8m²を測る。ピットは5個検出され、P₁(40×40×50cm)、P₂(30×30×20cm)、P₃(40×40×20cm)は、位置・規模より主柱穴と見られる。炉は床面中央にあり、P₂と第2号建物址の掘り方に切られている。

本址は後代の遺構に切られてはいるが残存部分も多く、炉址と柱穴を備え、古墳時代前期住居址の特徴をよく示しているものといえよう。

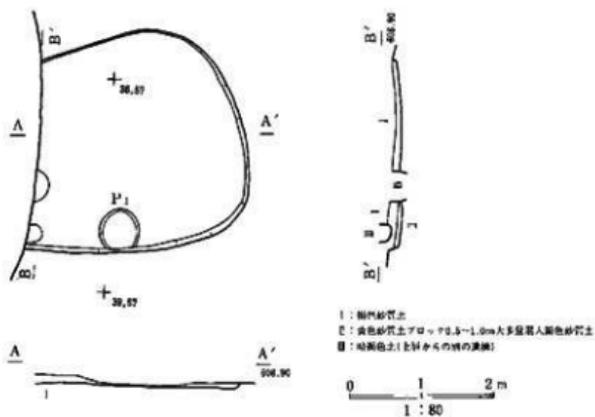
遺物の出土状態

第1号住居址



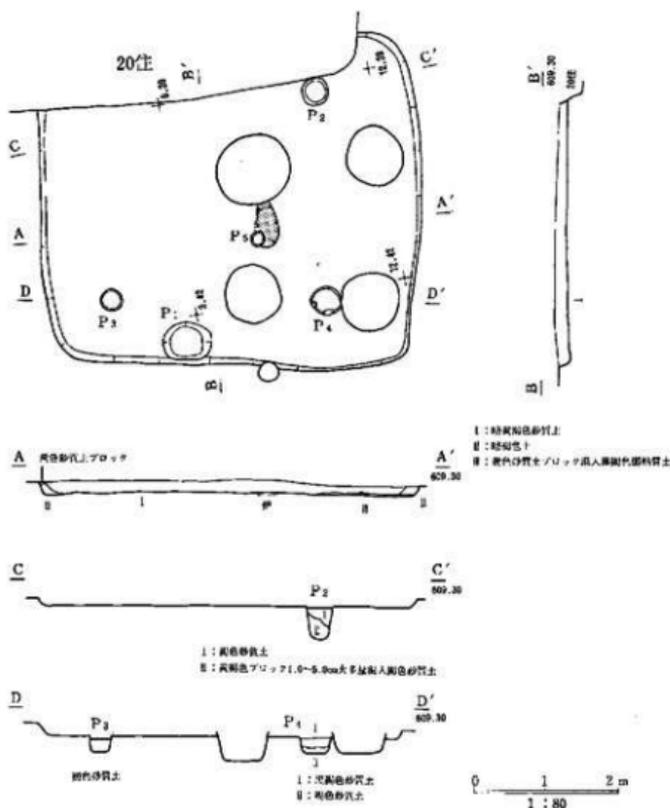
第1号住居址の平面図

第40号住居址



- I : 掘削面
- II : 黄色砂土(1.0m)
- III : 黄色砂土(1.0m)
- IV : 黄色砂土(1.0m)
- V : 黄色砂土(1.0m)
- VI : 黄色砂土(1.0m)
- VII : 黄色砂土(1.0m)
- VIII : 黄色砂土(1.0m)
- IX : 黄色砂土(1.0m)
- X : 黄色砂土(1.0m)
- XI : 黄色砂土(1.0m)
- XII : 黄色砂土(1.0m)
- XIII : 黄色砂土(1.0m)
- XIV : 黄色砂土(1.0m)
- XV : 黄色砂土(1.0m)
- XVI : 黄色砂土(1.0m)
- XVII : 黄色砂土(1.0m)
- XVIII : 黄色砂土(1.0m)
- XIX : 黄色砂土(1.0m)
- XX : 黄色砂土(1.0m)
- XXI : 黄色砂土(1.0m)
- XXII : 黄色砂土(1.0m)
- XXIII : 黄色砂土(1.0m)
- XXIV : 黄色砂土(1.0m)
- XXV : 黄色砂土(1.0m)
- XXVI : 黄色砂土(1.0m)
- XXVII : 黄色砂土(1.0m)
- XXVIII : 黄色砂土(1.0m)
- XXIX : 黄色砂土(1.0m)
- XXX : 黄色砂土(1.0m)

第7図 第1・40号住居址



第8図 第21号住居址

土器のみの出土で量は少ない。全形が揃うものはなかったが、いずれの土器も比較的まとまって残存しており、床面からの出土である。むしろ覆土中に浮遊する小破片がほとんど無く、奇異であった。覆土には土器以外に礫などの投入も見られなかった。

遺物 (第13図6~11)

土器のみ6点を図化・提示した。器種は鉢(6)・小型高坏(7)・直口壺(8)・壺(9)・台付甕(10)と甕の一種と推定されるもの(11)、が見られる。7の小型高坏は脚部が大きく広がり、3個1単位の円孔が上下2段、計6個穿たれている。9の壺は唯一全形がわかるもので、底面は上げ

底になっている。

(3) 第28号住居址

遺構 (第9図)

1地区北東、(3~12, 23~28)に位置する。南北5.90m、東西6.0mの残存規模をもち、かなり大形の住居だったと思われるが、遺構の重複が激しく全体のプランを把握することができない。北側を第27号、西側を第26号、東側を第61号の各住居址に切られ、主軸の推定も難しい。本址は検出時に遺構の輪郭がなかなかつかめず、かなり削り込んでしまったため、西壁はほとんど失われ、南壁もわずかに10cmを残すのみである。床面は黄色砂質土と黒褐色粘質土が斑状に混じった土で貼って構築しているが軟弱であった。ピットは4個検出されている。P₁・P₄は住居址全体のプランから見て主柱穴の位置にあてることも可能だが、東側にこれらに対応するものがない。炉址にあたるものも検出できなかった。床の残存部の面積は26.6m²である。

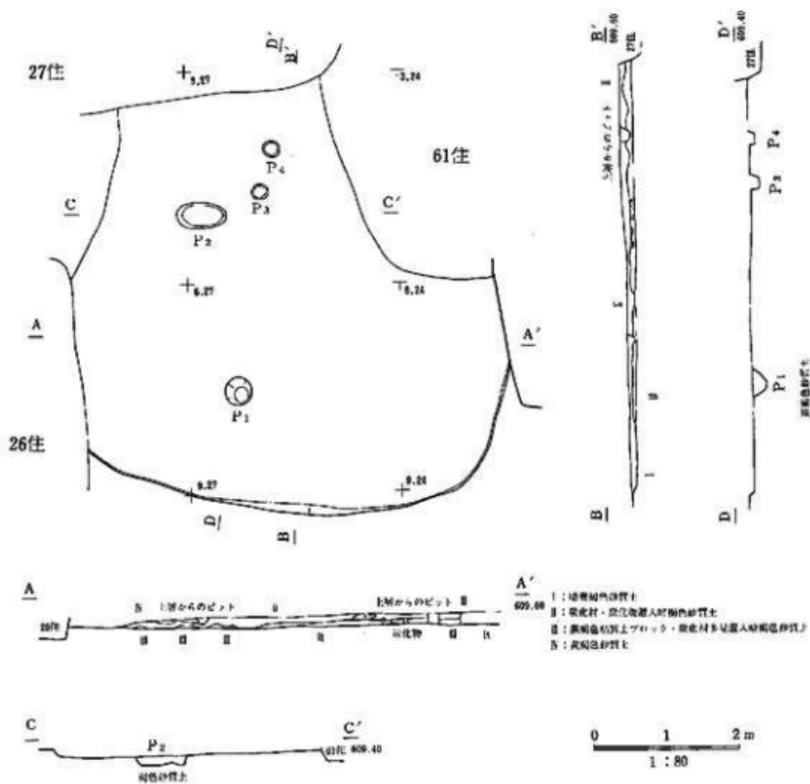
遺物等の出土状態 (第10図)

本址の遺物出土の最大の特徴は、多数の炭化物の存在である。既に検出時から少量の炭化物が顯を出し、ある程度予想されたが、掘り下げを進めると覆土下層・床面上から多量の炭化材・炭化物が現われた。大形の炭化材は住居中央部に集中して残存し、そのなかには幅14cm、長さ140cmほどのものもあった。また炭化材の周辺には図示できないような細かい炭化物も多数見られた。太い炭化材は上屋の構造材である可能性がある。その点では本址はいわゆる焼失住居・火災住居と呼ばれるものの範ちゅうに含まれよう。炭化材の樹種は、第10図№1と2がコナラ、№3がクリだが、大半はコナラでクリは少ない。

遺物は土器のみで、炭化物・炭化材の間の床面上から出土した。量は非常に少ない。特徴的なこととして、小破片で散在することがなくすべて一括品でまとまり、それ以外はほとんど土器がなかった。これは炭化材ができる理由(例えば火災など)により住居が放棄されたあと土器片の投棄などがまったく行われず、そのまま埋没したためと考えられるが、それにしては土器の点数が少ないという難点もある。土器の出土地点は、16・17が東部の炭化材周辺に、12・14が北西部の西壁際に、15が南壁近くにあり、ある程度集中する傾向が見られる。中でも15は特大の壺で、置かれていた位置のまま上からの圧力で潰れた形で出土した。頸部以上を欠いているが、本址が浅かったために排土作業の際にでも失われてしまったのであろう。

遺物

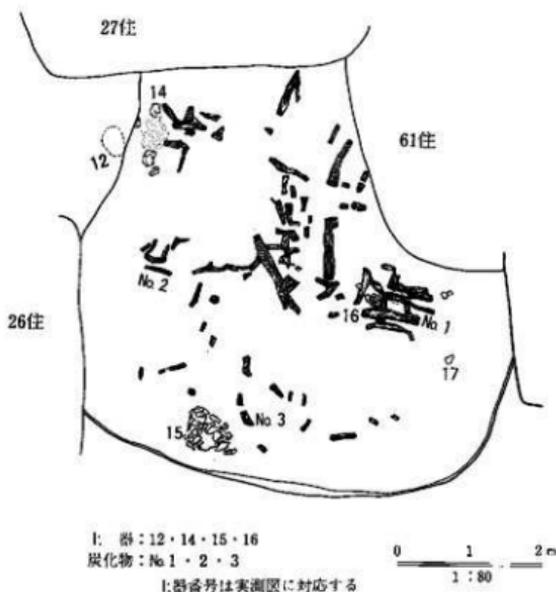
土器のみ6点を図化・提示した。器種には、壺(15・17)・直口壺(16)・甕(12)・台付甕(14)がある。13は器種不明。壺あるいは鉢にでもなるのであろうか。15の壺は高径15cm、残存高48cm、推定高65cmを測る大形品で、外壁面にはミガキがあり、胴部最大径以下の底部への集約の仕方が弥生時代後期の大型の壺を思わせる。17もかなり大形の壺で、当初15と同一個体かとも思われたが外形のカーブが異なる。14の台付甕はいわゆるS字状U縁台付甕で、口径13.4cmを測る中型品である。



第9図 第28号住居址

口縁部の形態や胴部外面のハケメからみて当該土器の新しい時期のものなかに含まれると考えられる。16の直口壺は外面のミガキがかなり省略され、口縁端部も丸く収まっていて、やはり古墳時代前期の土器でも新しいものなのであろう。

本址は前述したように少数の土器を除いてほとんど遺物がなく、それゆえここに示した土器は一



第10図 第28号住居址遺物出土

括して本址の廃絶に伴うものとして扱うことができる。

(4) 第40号住居址

遺構 (第7図)

1地区南部、(36~38, 55~59)に位置する。西側を調査区域外に残すため、全体のプランは不明だが、調査部分は南北2.8m、東西3.0mを測り、主軸は推定N—68—Eをとる。壁は非常に不明瞭で浅く、南壁16cm、東壁8cm、北壁6cmで傾斜も緩い。床面は黄色土あるいは黄褐色砂質土の地山をそのまま用いており、平坦だがきわめて軟弱であった。本址に伴う施設は南壁下にあるピット1個のみで、その他はまったく検出できなかった。床面積は調査部分で7.7m²、全形を推定すると9.2m²になる。本址はプランや貧弱な内部施設、堅さのない床などからみて住居ではない可能性もある。

遺物 (第15図18)

土器の小破片が数点出土したのみ。図化・提示できたのは18の莨1点だけである。「く」の字に外開する頸部と口縁部で、外面をハケメが覆う。

(5) 第50号住居址

遺構 (第11図)

1地区中央、(22~28, 45~51)に位置する。南北5.0m、東西5.2mの隅丸長方形を呈し、主軸をN—120—Eにとる。壁はこの時期の住居にしてはしっかりしていて、一部を遺構検出時に削り込んでしまったが、北壁40cm、南壁40cm、東壁20cm、西壁10cm、の高さを有する。床は黄褐色砂質土の地山をそのまま叩き固めた良好なものであった。特に、P₃・P₄・P₇・P₉で囲まれた部分・帯はとりわけ平坦・堅緻であった。本址に伴う施設はピット・貯蔵穴・炉・土手状の突帯、が検出できた。ピットは数個あったがそのうちP₁(14×20、-30cm)、P₄(30×20、-14cm)、P₇(14×20、-60cm)、P₉(20×20、-20cm)の4個が方形配列をなし、位置・規模より支柱穴と判断したい。西壁の北隅直下にあるP₁は50×50、-20cmの規模をもち、貯蔵穴を想定する。炉址はP₄・P₉間にある径40cmの地床炉で炉縁石(枕石)をもつ。強く焼けた痕はなかったが、内部には炭化物や被熱土粒がつまっていた。土手状の突帯はP₁からP₉にかけての間とP₉南方にあり、幅は20~25cm、高さは6~10cmで、地山の掘り残しではなく、炭化物の混じる褐色土を叩き固めて形成していた。

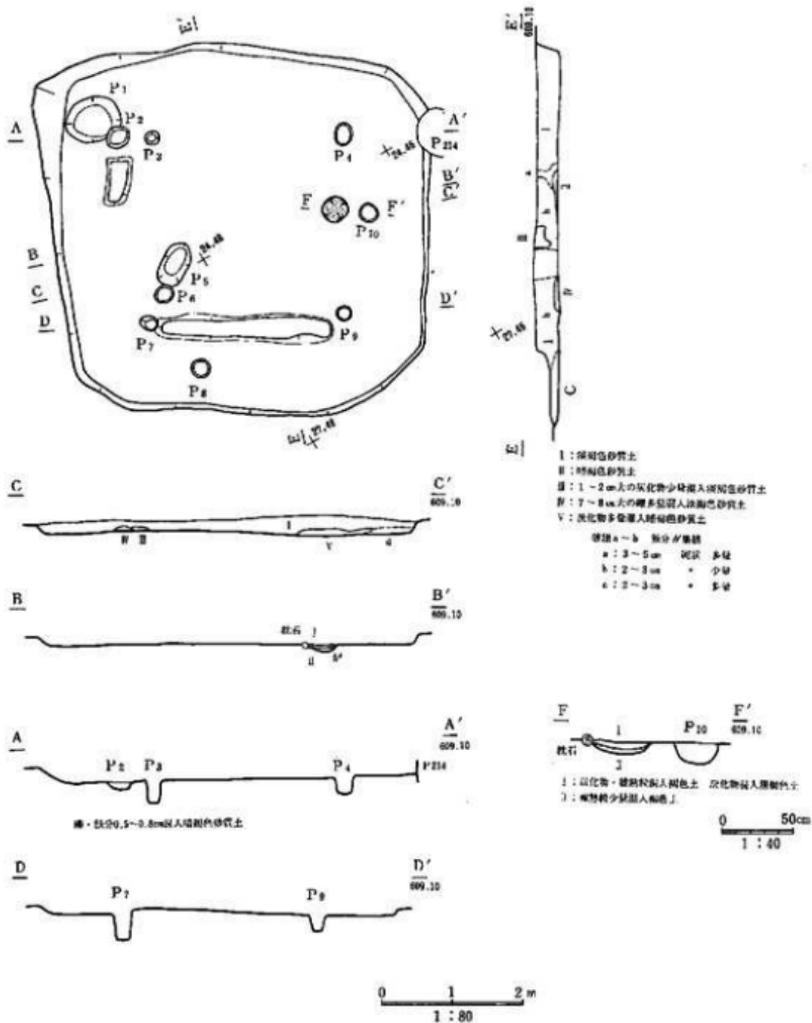
本址はプランの確認に最も手苦かった遺構の一つである。調査劈頭の検出の際、後に本址となる一帯の上面には径20cmを超える礫がいくつかあり下部に遺構の存在が予測されたが、その時点ではまったくわからず、遺構番号のみ付けて範囲については保留しておいた。その後サブトレンチを入れたりしてとうとう本址の範囲をつかんだのであるが、隣接する古墳時代後期の住居址より場所によっては検出面が10cm近く下がってしまった。古墳時代前期の遺構はいずれも検出が難しかったが本址がその典型例といえる。

遺物の出土状態

土器と石器2点(砥石)が出土したが、全体の量は少ない。土器は覆土下層に各個体がまとまりをもって遺存し、その他の覆土中からは小破片がごくわずかに出土したのみである。今回調査での古墳時代前期の住居址は概してこのような遺物出土状態を呈す。ただし前述のように本址の南東部上面には径30cm大の礫が10数個まとまってあり、埋没の過程で人為的に集められたものと理解したい。遺物の出土地点を個々に見ると、第15図22・23・27が北壁西寄りの比較的高い所から、また同図19・20・21・25は南東部の深いところから出土しており、基本的に北から南へ向かって出土地点が低くなっている。

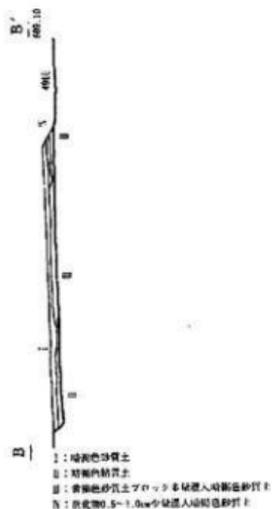
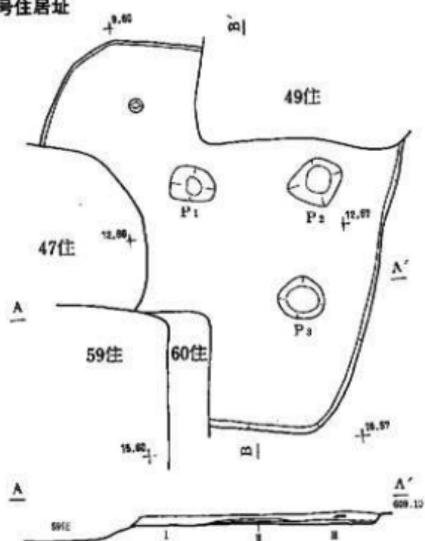
遺物 (第15・16図19~30・第134・135図13・6)

土器13点、石壺2点(砥石・石斧木製品?)を図化・提示した。土器の器種は、小型器台(20・21)、小型丸底土器(22)、両口壺(27)、甕(23)、小形・中形の莨(19・24~26)、台付甕(28~30)がある。小型器台には脚が直線的に開くものと外反するものの2種が見られる。台付甕はいずれも



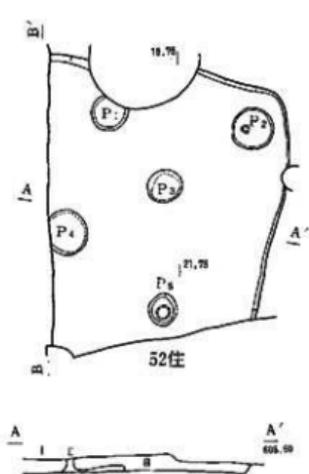
第11図 第50号住居址

第53号住居址

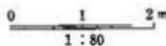


- I : 暗褐色砂質土
- II : 暗褐色粘質土
- III : 黄褐色砂質土ブロックを埋没した暗褐色砂質土
- IV : 黄褐色0.5~1.0m厚の硬い暗褐色砂質土

第54号住居址



- I : 黄分多砂質土層褐色土
- II : 黄色ブロック70.5~1.6m厚の硬い土
- III : 硬い土
- IV : 黄褐色ブロック0.5m厚の硬い土層



第12図 第53・54号住居址

いわゆるS字状口縁台付甕になるものと推定する。25の甕は口縁部が途中で「く」の字に屈曲する珍しい外形を呈す。石器については本章8節で触れる。

(6) 第53号住居址

遺構 (第12図)

1地区やや西寄り、(10~14, 57~60)一帯に存在する。主軸はN—7—Eを指し、南北5.0m、東西5.1mの規模をもつ隅丸方形のプランを呈すと推定する。北側を第49号住居址に、また南西部を第47・59・60号住居址に切られ、全体の1/4以上を失っている。壁は東側と、南側の一部で良好な残存を示し、壁高20cmを測るしっかりした掘り込みのものである。床は、黒褐色~暗灰褐色粘質土の地山に、0.5cm大の黄色砂質土ブロックが混じる褐色砂質土を2~5cmほど貼って構築しているがあまり堅くない。むしろ地山のほうが堅いくらいであった。ピットは4個検出されている。ただしP₁~P₃は、上層から掘り込まれた、本址を切る遺構である可能性が高い。炉址は発見できなかった。床面積は残存部が14.0m²、推定復元で23.5m²を測る。

本址はこの時期の遺構にしては遺構確認が容易ではっきりしていたが、掘り下げを進めると思いの外、住居施設が貧弱であった。

遺物の出土状態

土器小片、1/4程の破片が床面直上や覆土下層から散見する程度に出土。量は少ない。北隣りの第49号住居址(奈良時代)掘り下げ時にわずかに本址覆土を崩してしまい、第16図31・32はそのときに出土した。本址の遺物出土状態は、今回調査の他の同期住居址と同様であったといえる。

遺物 (第16図31~35)

土器のみ5点を図化・提示した。器種は、小型器台(31)、埴(32)、甕(34)、台付甕(33・35)である。32の埴は完形品、33はいわゆるS字状口縁台付甕の口縁部破片で、口径復元不能のため断面のみ示した。

(7) 第54号住居址

遺構 (第12図)

1地区西端、(18~22, 74~76)に位置する。南側を第54号住居址に切られ、西は調査区域外にかって、全体の規模はつかめない。残存部分は、南北3.8m、東西3.2mを測り、壁の方向から主軸はN—18—Eと推定する。壁は東側の残存が良好で、傾斜を有し壁高15cmを測る。床は非常に軟弱で地山をそのまま用いているが、地山自体が南半では黄色砂質土あるいは黄白色砂質土なのに対し北に行くほど黄褐色~暗黄褐色土に移行する。ピットは5個検出されたが、主柱穴に比定できるものはない。炉址も見当たらなかった。

本址は検出時からラインが不明瞭で、境界を確定して掘り下げを始めた後も住居ではないとの感が強かった。床面が軟弱なこと、住居施設が少ないことはこれを裏付けるものであったが、ここでは一応、住居址として扱っておく。

遺物 (第16図36)

土器のみで、しかもきわめて少ない。54の高坏1点を図化・提示できたのみ。これの個体の半分は本址を切る第52号住居址に混入していた。ただし本址周辺からは後述の流路址1の関係か、同時期の土器片が多数出土している。

2 流路址1

遺構

1地区南端部、第12号住居址西隣りから始まって、西方へ不規則に蛇行しながら第14・15・16・38号住居址周辺を通り、第41号住居址の南で調査区域外へ消える溝状の遺構。また第38号住居址の南西で二股に別れ、太いほうはそのまま南に下って第15号住居址西隣りで調査区域外へ出ていく部分もある。上記の住居址およびその周辺のピットすべてに切られる。延長45m、幅は細いところで約1m、太いところでは6m以上を測り一定しない。深さはトレンチを入れた部分で最深10~15cm程度、断面形は船底状で端部へ向かってグラグラと浅くなっていく。覆土は周囲の黄褐色砂質土の検出面とほとんど変わらず、わずかに砂質が強い程度で、検出は非常に困難であった。最終的に見分けがつかず境界を推定した部分もある(推定線は一点鎖線で表現)。一見浅い溝状を呈し、水流の痕かとも考えられたが、礫や粗砂などの堆積物はまったく無い。遺構の性格は、現在のところ、きわめて緩い流れのあとか、その周囲にできた砂・シルト質土の溜りと理解している。尚、1地区西端、第54号住居址の北、(12・15, 72・75) G一帯にも範囲は限定できなかったが、後述する本址の土器の出土状態と同じ様な状況を呈す部分があり、第41号住居址南で調査区域外へ出た本址が、大きく方向を転じて北西へ向かったものである可能性も指摘できる。

遺物の出土状況

覆土上層から多数の土器が出土した。土器は小破片であるよりは一括品が多く、すべて古墳時代前期に属する。そもそも本址発見のきっかけは、車機による表土剥ぎの最終段階や、それに続く遺構検出時に次々と土器が現われ、何らかの遺構の存在が想定されたためで、土器の出土がなかったならば遺構と認定することなく終ったかもしれない。出土状態は部分的に集中することはなく、各所に点在する形であったが、全体的に見ると中央部の(33~39, 33~42) G一帯の密度が高く、西や東ほどまばらであった。土器の他の遺物や、礫の流入・投入などは見られない。本址から出土した土器群は全体としてみると古墳時代前期の所産で一括できるが、その特殊な出土状態からして同時に一括投棄されたとは考えられず、その一方でまったく無作為の産物とも言い切れない側面も持つ。住居址出土品と同等に扱うのは問題かもしれない。

遺物

古墳時代前期の土器のみである。第16~18図37~43・45~49・52~54・56~68の計28個を図化・提示できた。器種は、鉢・小形器台・高坏・甕・台付甕・壺など多岐にわたり、質、量ともに今回調査出土の古墳時代前期土器の主体をなす。(12・15, 72・75) G一帯の出土品は第17~18図50・51・

55・73・75・76の6個を図化・提示、器種は甕・台付甕・小型丸底土器である。これらの土器にはかなり雑な器面調整も見られ、古墳時代前期も新しいほうのものと考えたい。

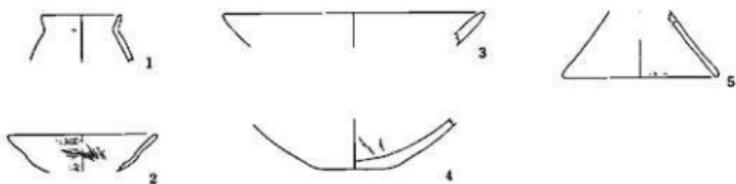
3 遺構外出土の遺物(第19・20図)

流路址1およびその周辺から出土したものを除く、検出面出土品と後代の遺構内に混入していたものを扱う。すべて土器で、これらの土器を覆土に含んでいた遺構は、ほとんどが流路址1を切ったり、その周辺にあった住居址とピットで、主要なものは、1地区南部の第10・12・14・15・16・38・39・41号の各住居址、第2号建物址南方のピット、本時期の第1・28号住居址に近い第2・3号住居址、西部の第47号住居址などである。細かくは土器一覧表(第3表)を参照されたい。

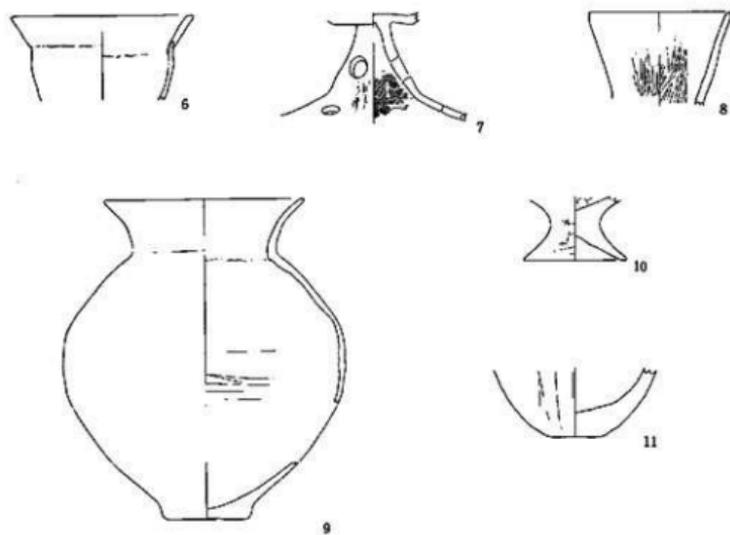
49個体を示した(69・70・71・72・74・77~120)。器種はまったく無差別で、様々なものがあるが、小破片が多く図化・提示できるのはどうしても小形品に限られる。主なものでは、甕(83~85・88~90・96)、高坏(82・86・87・91~93・95)、小型丸底埴(77・94)、鉢(98・99)、甕(69~71・79・101・104~108・116・120)、台付甕(72・74・97・100・103)、壺(80・81・102・109~115・117~119)等の器種に分けられるが、残存度が低く推定の域を出ないものもある。

古墳時代前期の遺構は至って少ないのであるが、このように各所から同期の土器が出土し、その総量は同期遺構内出土よりはるかに多い。多数の住居が存在した古墳時代後期の土器でも、その次代の奈良・平安時代の住居にこれほどたくさんは混入していなかった。なぜ検出面に土器が多いのか。その起源はどこにあるのだろうか。まず考えられるのは、今回の調査範囲を外れて、しかしそれほど遠くないところにこの時期の遺構の集中の中心があることである。そこからもたらされる大量の土器(土器の廃棄物)によって出土量も多くなるとの推定に従えば、流路址1からのものも説明がつく。そうではなく、時代が遡るにつれて遺構検出面が深くなるから遺物包含層が良好なまま残っていたということも言えなくないが、これは、同期の住居が特に浅い点から疑問である。第4章でも述べるが、今回調査地の東方に同期土器出土地点があり、その周辺が問題になるかもしれない。

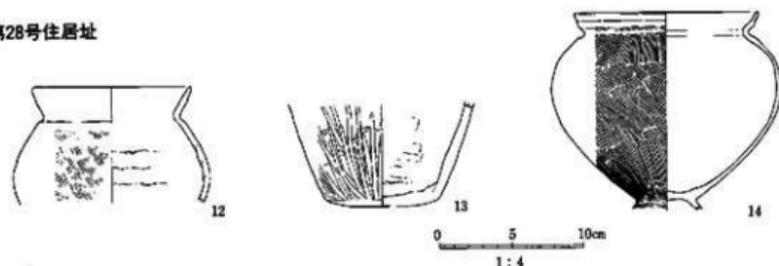
第1号住居址



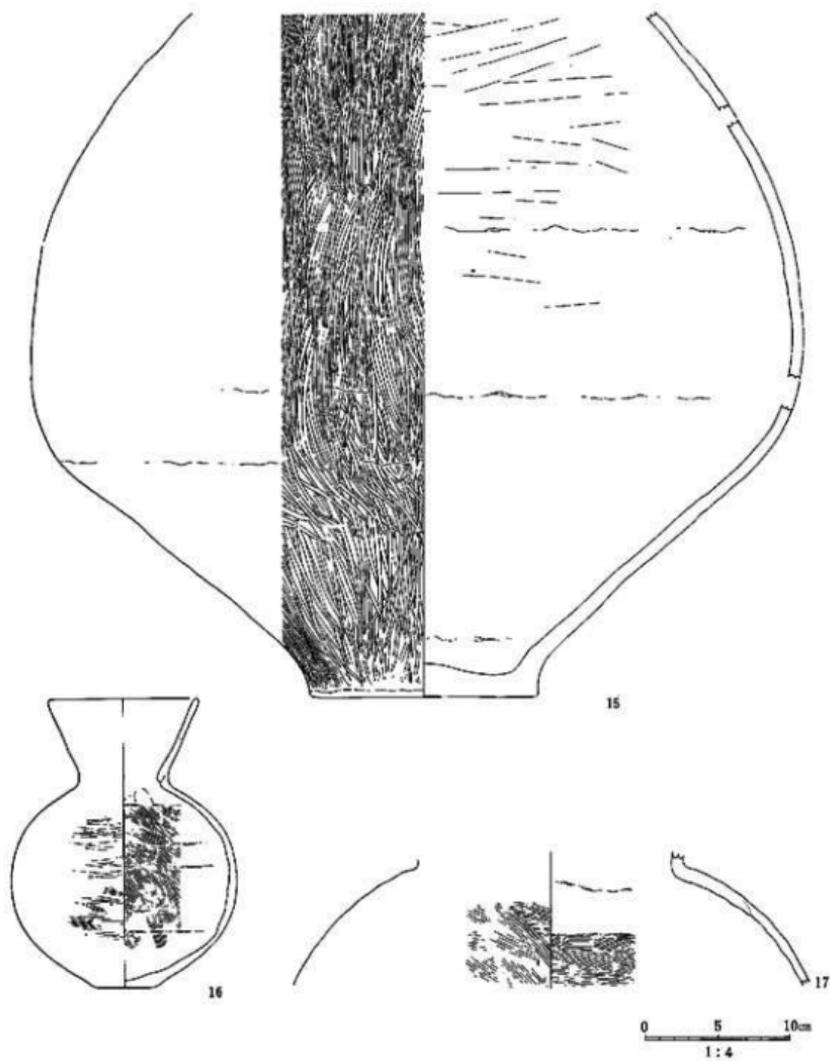
第21号住居址



第28号住居址



第13図 古墳時代前期の土器 (1) 1~5:1住 6~11:21住 12~14:28住



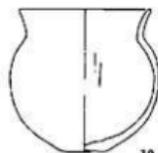
第14図 古墳時代前期の土器 (2) 15~17: 28住

第40号住居址



18

第50号住居址



19



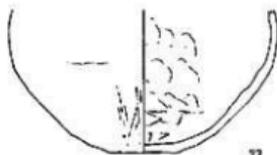
20



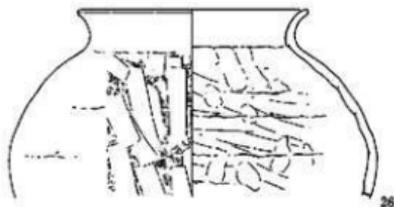
21



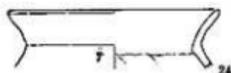
22



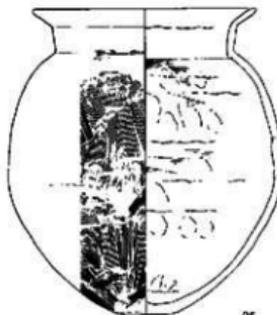
23



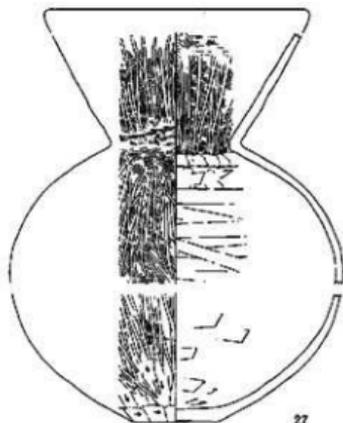
26



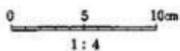
24



25



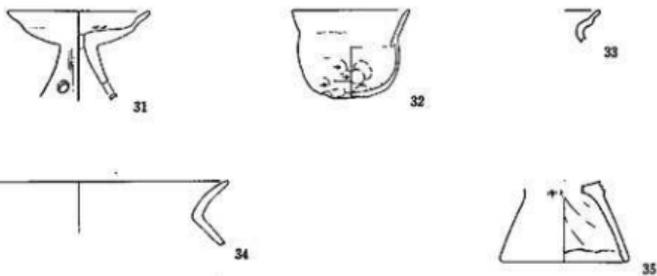
27



第15図 古墳時代前期の土器 (3) 18:40住 19~27:50住



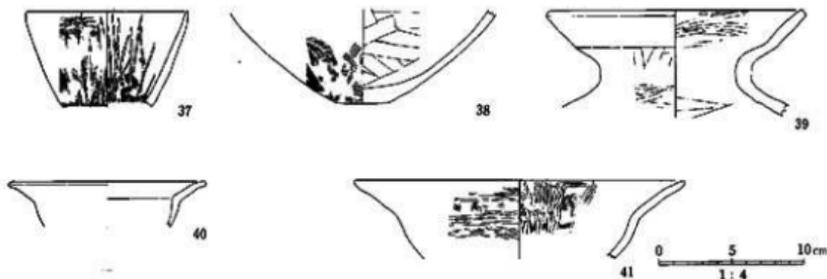
第53号住居址



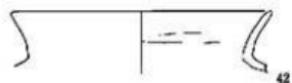
第54号住居址



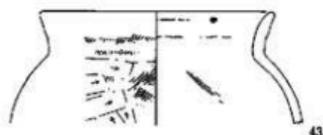
流路址 1



第16図 古墳時代前期の土器 (4) 28~30:50住 31~35:53住
36:54住 37~41:流路址



42

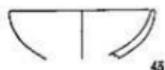


43

検出面



44



45



46



47



48



49



50



51



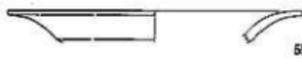
52



53



54



55



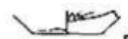
56



57



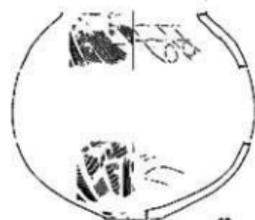
58



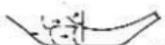
59



60



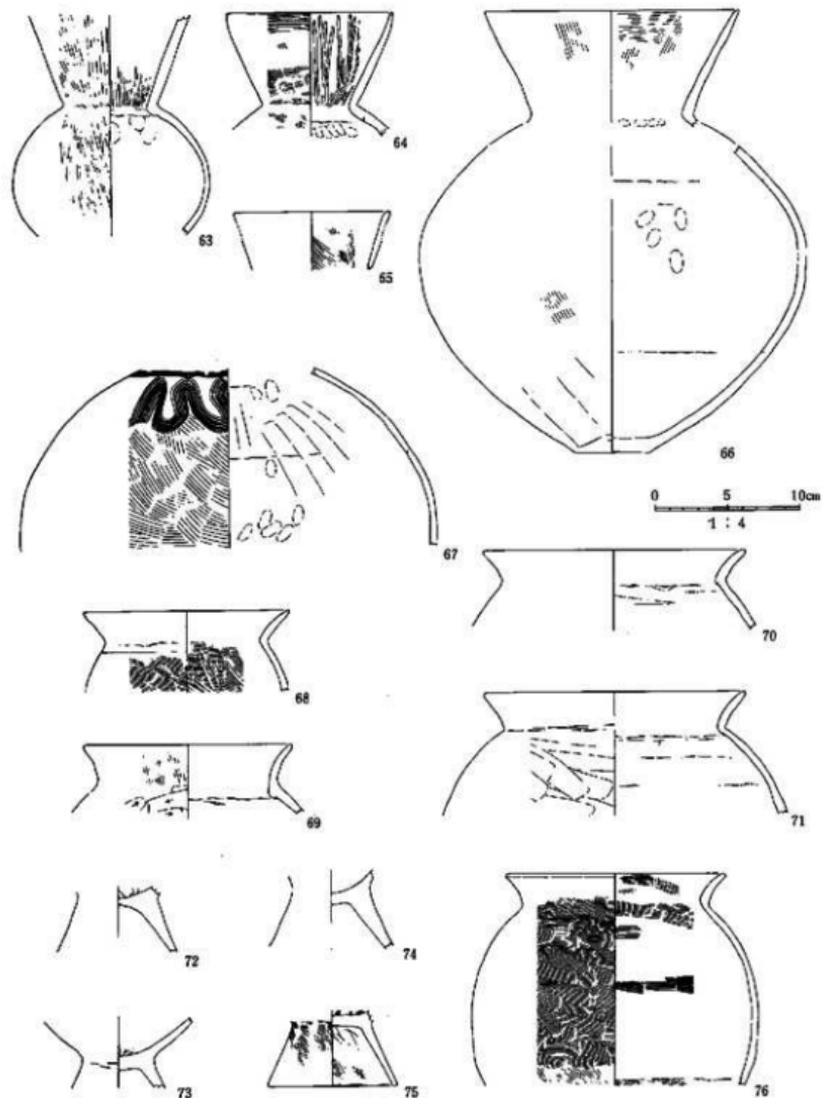
61



62

0 5 10cm
1 : 4

第17図 古墳時代前期の土器 (5) 42~44: 流路址
45~62: 検出面



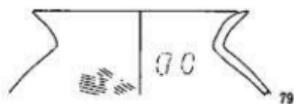
第18図 古墳時代前期の土器 (6) 63-76: 検出面



77



78



79



80



81

遺構外 (後代遺構への混入)



82



83



84



85



86



87



88



89



90



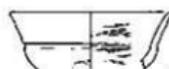
91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



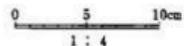
101



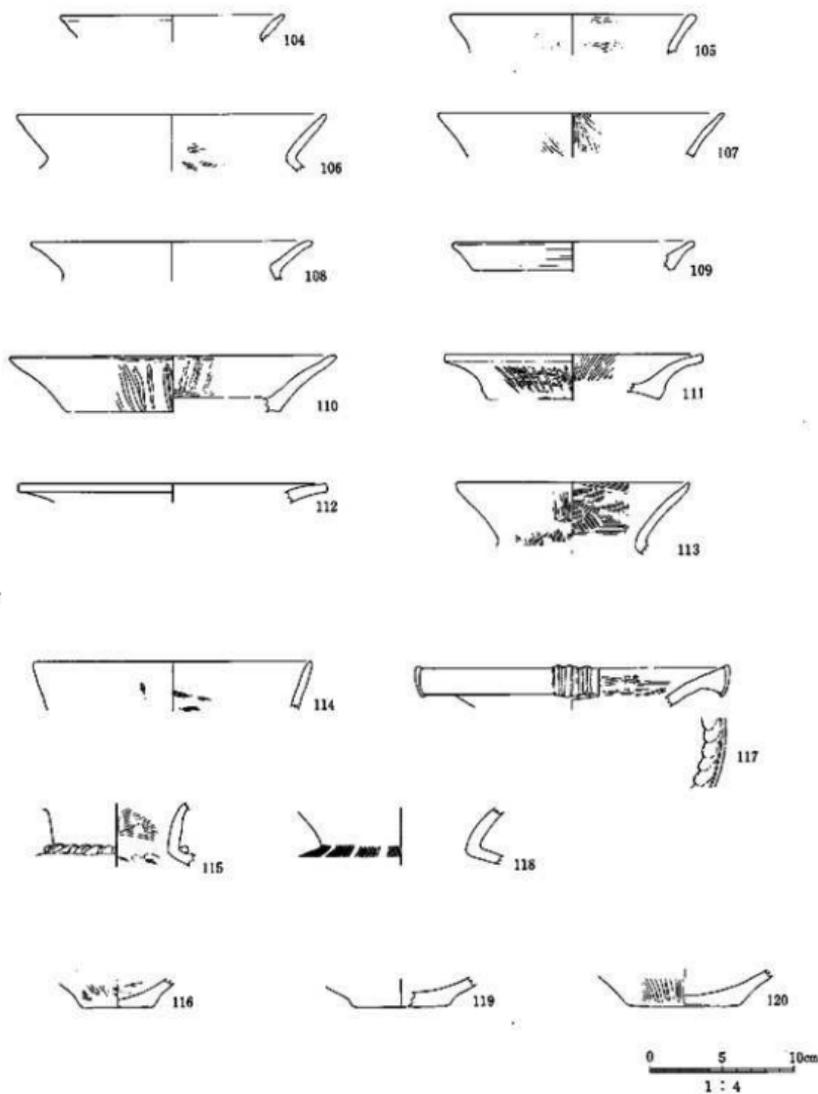
102



103



第19図 古墳時代前期の土器 (7) 77~81:検出面 82~103:遺構外



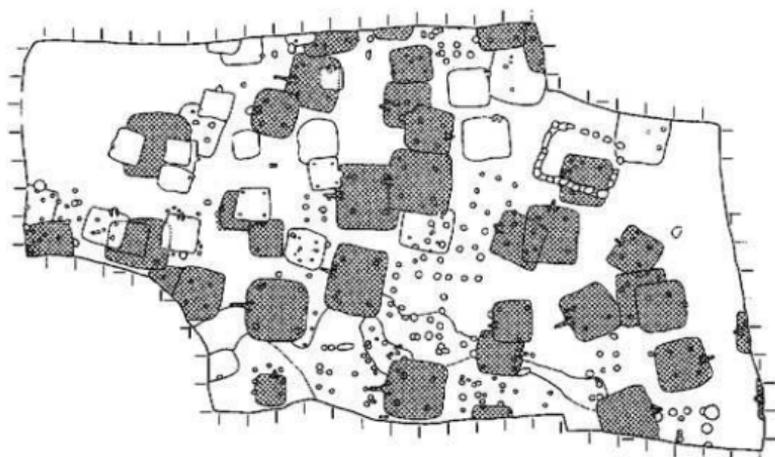
第20図 古墳時代前期の土器 (8) 104~120: 透網外

第3表 古墳時代前期土器一覽表

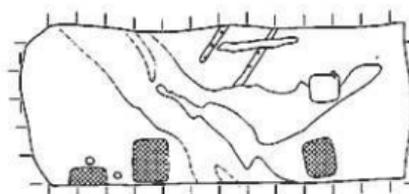
地土地点	類別	形状	寸法(cm)		重量(両)	土質	5		底形・周縁・形類の特徴	備考・真偽・注記
			口徑	底徑			外	内		
1	1位	土師器	56.0		4	灰褐色	外	底形外周ハケム	1-3, 1位群	
2	2	2位	58.2		4	灰褐色	外	口縁部コナダ・外周直上ナ	1-2, 1位下群	
3	3	3位	58.2		4	黄褐色	外	底形	1-4, 1位下群	
4	4	4位	58.2	5.4	4	灰赤褐色	外	外周ハケム・外周直上ナ	1-6, 1位直上群	
5	5	5位	58.2	5.4	4	灰赤褐色	外	内周ハケム・外周直上ナ	1-1, 1位下群	
6	2位	土師器	58.2		4	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	21-5, 21位群	
7	7	7位	58.2		4	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	21-1, 21位群	
8	8	8位	58.2		4	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	21-4, 21位群	
9	9	9位	58.2	6.6	4	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	21-2, 21位群	
10	10	10位	58.2	7.2	4	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	21-2, 21位群	
11	11	11位	58.2	4.0	4	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	21-3, 21位群	
12	28位	28位	58.2	11.1	4	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	28-3, 28位群	
13	13	13位	58.2		4	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	28-2, 28位群	
14	14	14位	58.2		4	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	28-1, 28位群	
15	15	15位	58.2		4	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	28-6, 28位群	
16	16	16位	58.2		4	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	28-5, 28位群	
17	17	17位	58.2		4	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	28-4, 28位群	
18	48位	48位	58.2	17.0	4	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	48-1, 48位群	
19	50位	50位	58.2	2.6	10.3	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	50-1, 50位群	
20	20	20位	58.2	12.0	6.3	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	50-2, 50位群	
21	21	21位	58.2	10.4	7.2	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	50-3, 50位群	
22	22	22位	58.2		6.0	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	50-4, 50位群	
23	23	23位	58.2		4.2	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	50-10, 50位群	
24	24	24位	58.2	15.0	4	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	50-7, 50位群	
25	25	25位	58.2	4.1	21.5	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	50-11, 50位群	
26	26	26位	58.2		6.1	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	50-12, 50位群	
27	27	27位	58.2		6.1	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	50-13, 50位群	
28	28	28位	58.2		6.1	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	50-14, 50位群	
29	29	29位	58.2		6.1	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	50-15, 50位群	
30	30	30位	58.2		6.1	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	50-16, 50位群	
31	53位	53位	58.2		6.1	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	53-1, 53位群	
32	32	32位	58.2	8.2	2.5	6.1	灰赤褐色	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	53-5, 53位群	
33	33	33位	58.2		6.1	灰赤褐色	外	底形直上ハケム・外周直上ナ・外周直上ナ	53-3, 53位群	

海	土	地	高	標	高	寸	長	(cm)	色	質	形状・構造・断面の特徴		備考、調査地、建設
											断面内	断面外	
34	53	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	53-1, 53後5A, 5M
35	54	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	53-2, 53後5A, 5M
36	54	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	53-3, 53後5A, 5M
37	4C	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	53-4, 4C後5
38	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-1, 4C後5
39	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-2, 4C後5
40	4C	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-3, 4C後5
41	4C	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-4, 4C後5
42	4C	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-5, 4C後5
43	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-6, 4C後5
44	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-7, 4C後5
45	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-8, 4C後5
46	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-9, 4C後5
47	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-10, 4C後5
48	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-11, 4C後5
49	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-12, 4C後5
50	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-13, 4C後5
51	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-14, 4C後5
52	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-15, 4C後5
53	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-16, 4C後5
54	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-17, 4C後5
55	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-18, 4C後5
56	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-19, 4C後5
57	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-20, 4C後5
58	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-21, 4C後5
59	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-22, 4C後5
60	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-23, 4C後5
61	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-24, 4C後5
62	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-25, 4C後5
63	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-26, 4C後5
64	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-27, 4C後5
65	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-28, 4C後5
66	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4C-29, 4C後5

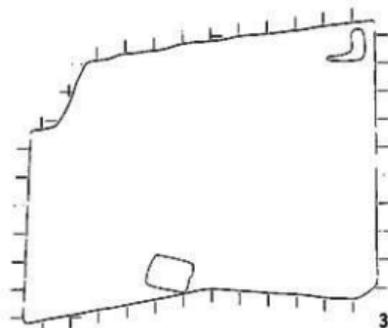
No	出上地点	類別	製法	寸法 (cm)	重量 (kg)	色		調	成形・製法・形質の特徴	備考・異名 No. 産地
						外	内			
100	30庄	1	1							
101	3庄	1	1	(14.4)		黄	黄	口縁部コナダ、胴部外周ハケムの粗織		3-7、2庄フタ土
102	2庄	1	1	(16.0)		黄	黄	口縁部コナダ・コナダ、胴部外周工具ナダ		外周皿縁あり3-11、2庄フタ土
103	30庄	1	1					胴部外周ハケム・内周ナダ		30-7、30庄下層
104	2庄	1	1	(15.6)		黄	黄	口縁部コナダ・ナダ		2-5、2庄下層
105	3庄	1	1	(16.4)		黄	黄	外周ハケムの粗織コナダ		2-5、2庄下層
106	3庄	1	1	(21.4)		黄	黄	外周ハケムの粗織コナダ		3-5、3庄フタ土上層
107	2庄	1	1	(20.0)		黄	黄	内・外周ハケム		2-6、2庄フタ土
108	5庄	1	1	(17.0)		黄	黄	外周ハケム、内周ナダ		2-20、2庄ハダト
109	11庄	1	1	(22.5)		黄	黄	口縁部粗織ハココナダのみミダキ、口縁部内・外周ナダのみミダキ		5-11、5庄フタ土
110	14庄	1	1	(18.1)		黄	黄	口縁部コナダのみミダキ、口縁部粗織		14-1、14庄下層
111	2庄	1	1	(21.4)		黄	黄	外周ハケムの粗織、内周ハケム		2-19、2庄上層
112	4庄	1	1	(19.3)		黄	黄	外周ハケム、内周ナダ		右-19、右庄層
113	3庄	1	1	(19.3)		黄	黄	胴部コナダ・内周ハケム、外周粗織下層に粗織を持つハダ		外周粗織 標3-1、3庄3
114	3庄	1	1	(19.3)		黄	黄	胴部コナダ・内周ナダ		皿縁あり 標3-1、3庄1
115	皿縁あり	1	1					胴部コナダ・内周ナダ		標3-1、3庄1
116	11庄	1	1	(15.0)		(S)	赤	胴部コナダのみミダキ、粗織4ヶ所に4重の粗織赤文		赤赤 22-17、6庄下層
117	12庄	1	1	(20.2)		(S)	赤	胴部コナダのみミダキ、粗織4ヶ所に4重の粗織赤文		赤赤 3-10、3庄フタ土上層
118	3庄	1	1					胴部コナダのみミダキ、粗織4ヶ所に4重の粗織赤文		赤赤 3-10、3庄フタ土上層
119	2庄	1	1	(6.8)		(S)	黄	胴部コナダのみミダキ、粗織4ヶ所に4重の粗織赤文		赤赤 3-10、3庄フタ土上層
120	5庄	1	1	(5.0)		(S)	黄	胴部コナダのみミダキ、粗織4ヶ所に4重の粗織赤文		赤赤 6-13、6庄下層



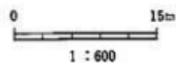
1地区



2地区



3地区



第21図 古墳時代後期の遺構配置

第4節 古墳時代後期の遺構と遺物

1. 住居址

(1) 第2号住居址

遺構 (第22図)

1地区東側、(15~19, 17~21)に位置し、第6号建物址の溝が本址中央を横切っている。平面形は、南北5.10m、東西5.0mの南北にわずかに長い隅丸方形を呈し、主軸はN-84°-Wを指す。壁は16~22cmの高さをもち、全般的に傾斜は緩い。床は黄色砂質土と褐色砂質土が混在するもので北半分は地山の礫層上に貼り床をしており若干堅緻であった。ピットは6個見つかったがこのうちP₂(30×30、-40cm)、P₄(40×34、-20cm)、P₅(20×34、-40cm)、と第6号建物址の溝底面から検出されたP₆(30×20、-13cm)が、位置・規模から支柱穴と推定される。カマドは西壁中央にあり、東にむかって開口する。袖は南側の一部を6建に破壊されるが、長さ1mにおよぶ石材を伴わない粘土質土で作られていた。煙道の検出はない。開口部の焚き口には広範囲に焼土・被熱層があり、その向かって左脇からは土器が集中して出土した。

遺構検出時、本址自体のプランははっきりしていたが、本址を切る6建が溝を伴う特殊な構造を持っていたため、その確認に手間取り、本址覆土の一部として掘り下げを始めてしまった部分もあった。遺構・遺物両面とも早期に誤りの解消を図るよう努めたが、遺物の一部に混同が生じた恐れがある。

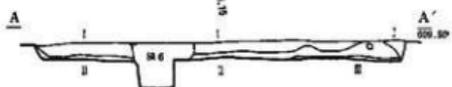
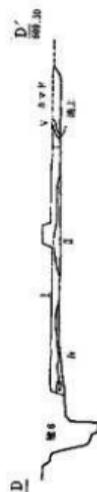
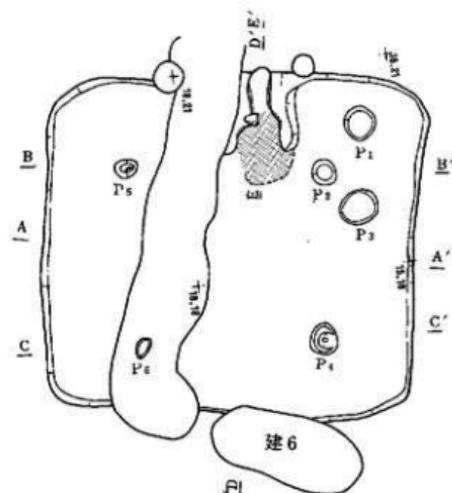
遺物の出土状態

土器・石製品が覆土中から散発的に出土。一括品・大形品がなく遺物出土図の作成は行わなかった。ただし前述のように、カマド南側の袖前面からのみ土器小形壺の一括品(13)が出土している。覆土中に古墳時代前期の土器片が多かったが、これは同前期の第1号住居址に近接するせいであろう。本址出土遺物は一部を除き、本址廃絶時に床上ないしは施設に意図的に置かれたり投棄されたりした形跡はなく、無作為の混入・廃棄によるものと判断される。

遺物 (第68図1~16、第136図2)

土器と石製品(紡錘車)を図化・提示した。土器の器種は、坏(1・3)、小形壺(4・6・7・9~14)、甕(5・8・15・16)、須恵器坏(2)、が見られるが、土器には破片から復元して図化を行ったものが多く、全形を把握することのできたのは12・13の小形壺2点のみである。2の須恵器坏はあるいは蓋になる可能性もあるが、軟質な胎土で摩滅の進んだ小破片であり、本址出土土器群の動向を決める資料にはなりえないと判断した。紡錘車は南東部の覆土下層から出土したもので、滑石製の完形品。側面の傾斜面に8単位で細かい線描きの鋸歯文を刻んでいる。

本址出土土器群の時期は古墳時代後期1段階にあたる。



- I : 褐色砂質土
- II : 砂質土
- III : 暗褐色土ブロック1~2cm混入褐色砂質土
- IV : 黄褐色土ブロック1~2.5cm混入暗褐色砂質土
- V : 硬土



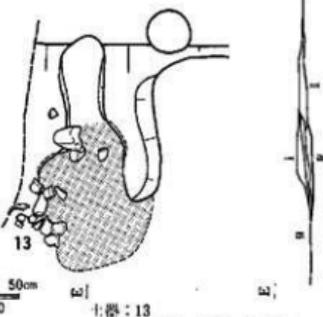
- I : 黄褐色土ブロック1cm混入暗褐色砂質土
- II : 暗褐色土ブロック2~4cm混入黄褐色砂質土



- I : 黄褐色土ブロック1cm混入暗褐色砂質土
- II : 黄褐色土
- III : 黄褐色土ブロック0.5~2cm混入暗褐色砂質土



- I : 黄褐色土ブロック0.5cm・暗褐色土ブロック0.5cm混入褐色土
- II : 褐色土
- III : 黄褐色土
- IV : 黄褐色土・暗褐色土ブロック0.5~1cm混入褐色土



土器番号は実測図に対応

第22図 第2号住居址

(2) 第3号住居址

遺構 (第23図)

1地区東寄り、(21~26, 20~24)に位置し、第4号住居址の東壁を切る。主軸をN-0°にとり、南北6.0m、東西5.8mの長方形プランを呈している。壁は約20cmの高さを持ち、かなり緩やかに傾斜する。本址の一角は洪水で形成された狭い範囲の礫層で、本址床は基本的にこの礫層上にあるが、黒褐色粘質土と黄色砂質土の斑状の部分も見られた。床面積は28.9m²を測る。ピットはP₁~P₄の4個が検出された。いずれも隅部に近い位置にあり方形配列の支柱穴に該当するが、直径30~40cmで深さ8cm前後と浅い。カマドは北壁の中央に設けられた石芯粘土カマドで、袖の間60cm、煙道の長さ70cmを測る。袖はかなり崩れて石材が散乱しており、原形の推測は難しい。焚き口部からその前面にかけて80×140cmの範囲で焼土が広がっている。本址の時期でカマドが北側にあるのは珍しい。

遺物の出土状態 (第24図)

覆土の堆積状態に特徴があったのでそれから触れたい。断面図で示すとおり、中央部が深く端部へ行くほど徐々に浅くなる典型的なレンズ状堆積をなしていた。上層(I層)には径3~20cmの礫が多数含まれていたが人為的な投入によるものとの感はなく、下層(II層)にはこれに黄色砂質土ブロックが混じり、焼土粒・炭化物が広がっていた。本址焼絶後、II層堆積時に焚火の様なことがなされ、その後1層が堆積したのであろう。

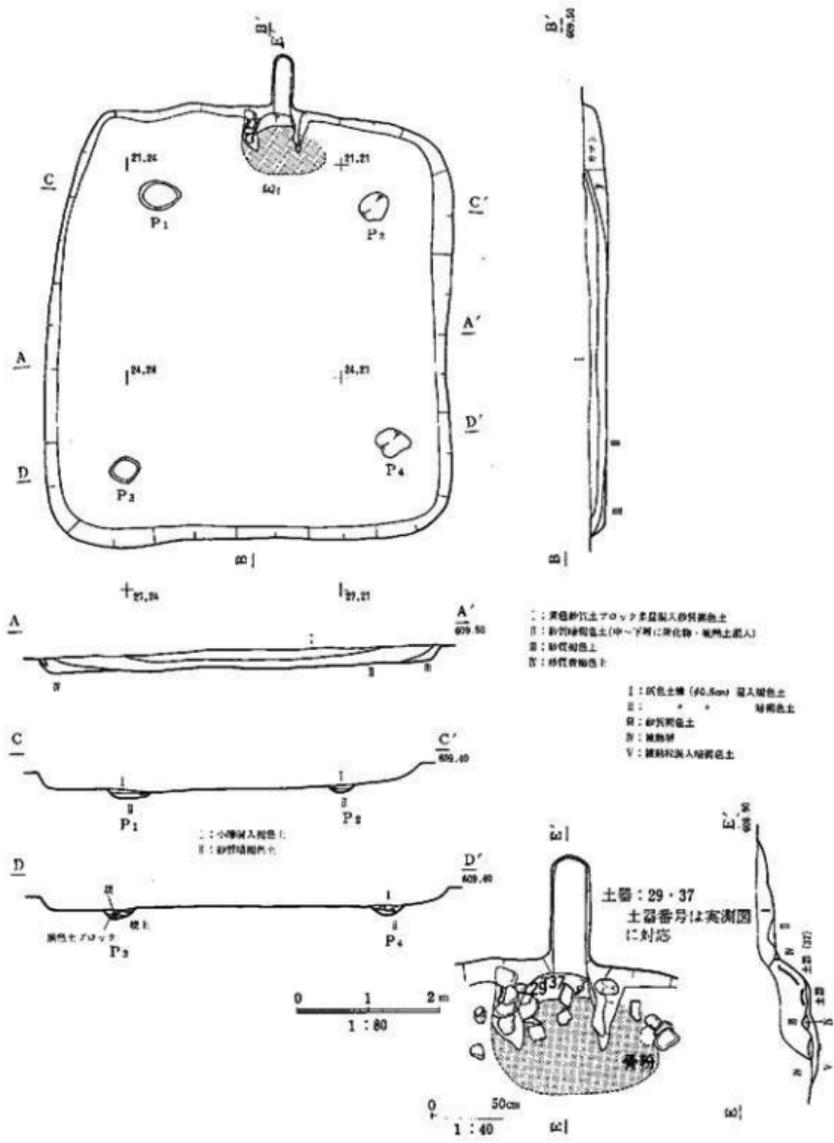
遺物は、土器・鉄器が出土している。覆土上層から下層まで方違なく出土し、前述のI層・II層の違いに対応する状態は、調査時にもかなり注意していたのだが見出せなかった。土器の量は多く、小片から半完形の一括品までが平面的にも層位的にもまとまりなく出土した。ただし、小片のなかには前代の古墳時代前期のものが相当数あり、本址の埋没がかなり自然に近い部分もあったことを窺わせる。床面にも多数の土器と礫が遺存した(第24図)が人為的なものではないと考える。

カマドの東側袖の際からは骨粉の出土がある。

遺物 (第68・69図17~38、第131図1、第137図15)

図化・提示したのは土器と鉄器(器種不明)、土製品(紡錘車)である。土器には土師器と須恵器があり、器種の内訳は、土師器坏(17~19)、同鉢(20)、同甕(27~29・31・34~38)、同小形甕(32・33)、須恵器坏B(21・22・24)、同坏A(25)、同坏(23・26)、同甕(30)となっている。土師器の甕には器面調整にハケメが使われるもの(29:甕Ac)とそうではないもの(37・38など:甕Aa)の2種類がみられる。26の須恵器は、坏という名称はふさわしくないかもしれない。全体的に見て、須恵器の食膳用具が一定数あるのが特徴で、本址出土土器群の時期的特性を示している。

本址出土の土器群は古墳時代後期3段階に該当する。



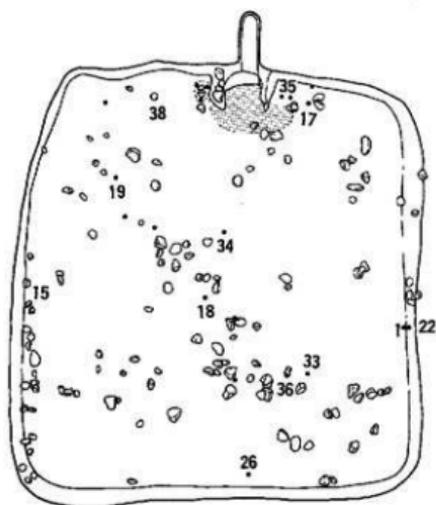
I: 灰色砂質土のブロック多量混入砂質褐色土
 II: 新79緑褐色土(中-下部に灰化層・風乾土混入)
 III: 砂質褐色土
 IV: 砂質黄褐色土

I: 灰色土層(40.5cm) 混入褐色土
 II: * * * 緑褐色土
 III: 砂質褐色土
 IV: 黄褐色土
 V: 黄緑色混入暗褐色土

I: 小礫混入褐色土
 II: 砂質暗褐色土

褐色土層
 P₃

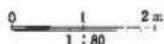
第23図 第3号住居址



遺物出土状況

土器	17:	坏	土師器
	18:	◇	◇
	19:	◇	◇
	22:	坏片	須恵器
	26:	坏	◇
	29:	甕	土師器
	33:	小形甕	◇
	34:	甕	◇
	35:	◇	◇
	36:	◇	◇
	37:	◇	◇
	38:	◇	◇
土製品	15:	紡錘車	◇
鉄器	1:	不明	

遺物番号は実測図に対応する

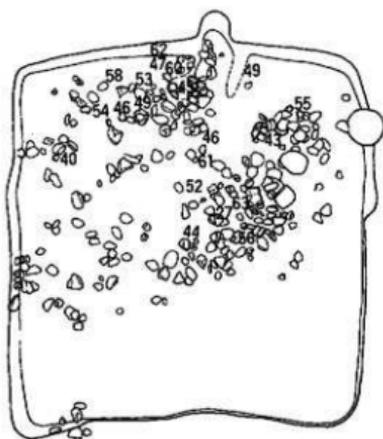


第24図 第3号住居址遺物出土

(3) 第4号住居址

遺構 (第25図)

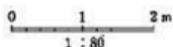
1 地区東寄り、(21~28, 24~27)に位置し、第3号住居址に東側上部を破壊される。第3号建物址にも切られる。主軸方向はN-62°-Eを指し、5.0m×5.2mのわずかに東西に長い隅丸長方形を呈す。壁は第3号住居址との重複部分を除いて、各壁とも壁高20cm前後で傾斜を有す。第3号住居址との重複部分では、本址のほうが約5~10cm深く、その分が残存していた。床は地山の砂礫層をそのまま用いており、貼り床はない。ピットは4個あり、いずれも直径60cm前後、深さ約40cmで、覆土も不自然な堆積を示す部分があって、主柱穴に相当しよう。カマドは西壁中央のやや北寄りにあり、前面に散乱する跡からみて石芯の粘土製カマドであったと推定するが、破壊が著しく袖部の残存は少ない。煙道部は失われている。本址床面積は23.4m²を測る。



遺物出土状況

40:	坏	七師器
43:	高坏	◇
44:	◇	◇
45:	◇	◇
46:	小形甕	◇
47:	◇	◇
48:	◇	◇
49:	◇	◇
52:	甕	◇
53:	小形甕	◇
54:	◇	◇
55:	◇	◇
56:	◇	◇
58:	甕	◇
60:	壺	◇
61:	甕	◇
62:	◇	◇
63:	◇	◇

番号は実測図に対応する



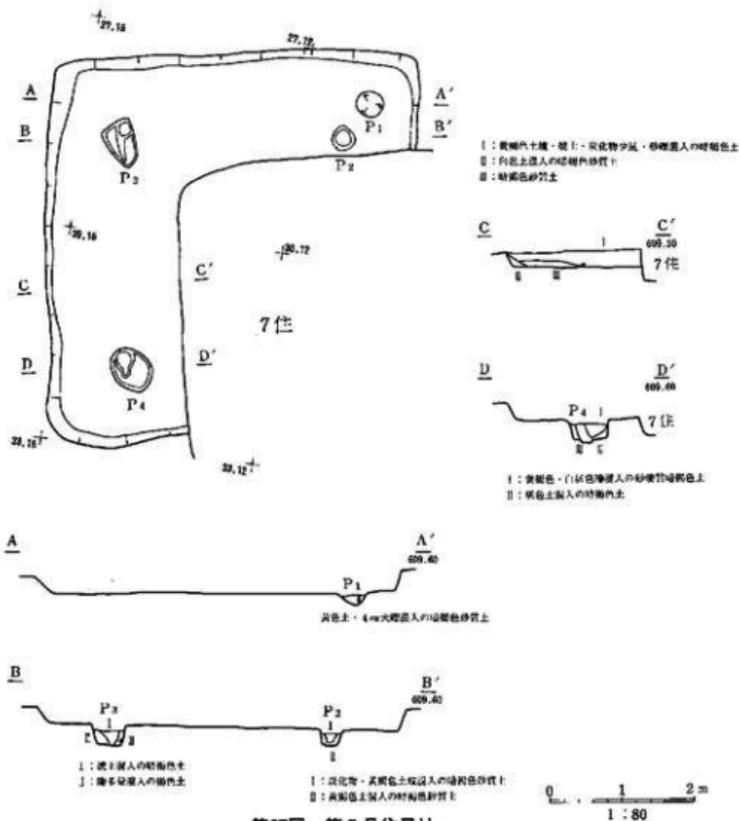
第26図 第4号住居址遺物出土

遺物の出土状態 (第26図)

本址上層のI層黄褐色砂質土中には、人為的に投入されたと見られる直径10~20cmの罽が多数あり、その間から半完形品を含む大形破片の土器が多数出土した。第26図はこの上層の状態を示したもので、右下のまったく罽のない部分は、第3号住居址により罽ごと上層をえぐり取られたものである。これらの土器と罽は主にI層に集中し、下層や床面になると土器の小破片が少量出土したのみであった。

遺物 (第70~72図39~67、第131図2・3、第137図18)

土器と鉄器(鏃)、土製品(棒状のもの)を図化・提示した。土器はすべて土師器で、器種は坏(39~42)、高坏(43~45)、小形甕(46~51・53~56)、甕(52・57~59・61~63)、壺(60・64~66)、甕(67)、と多様である。ほとんどがI層出土で、ひとまとまりの土器群と捉えて問題ないと考える。須恵器がまったくないが、土師器の坏の形態から古墳時代後期2段階にあたと判断した。



第27図 第5号住居址

(4) 第5号住居址

遺構 (第27図)

1地区東寄り、(28~32, 11~15)に位置し、第6・8号住居址を切るが、第7号住居址に大きく切られる。推定プランは一辺5.2mの方形を呈し、N-12'-Eに主軸をとる。壁は20cmほど掘り込まれ、緩やかな傾斜をもつ。床は褐色砂質土に黄色砂質土が斑状に混じる堅い床で、残存部分はかなり平坦であった。ピットはP₁~P₄の4個が検出されたが、主柱穴はP₂~P₄が相当しよう。カマドは北および西壁にまったくその痕跡がないことから、東壁の中央にあり、第7号住居址に破壊されたものと推定する。本址床面積は現況13.2m²、推定復元で24.0m²である。

本址は検出当初、切り合いの順番を誤認して第7号住居址より新しいものと捉え、真っ先に掘り下げを開始したのであるが、あまり進めないうちに間違いに気付き、急遽、修正した。出土遺物についてはすべて取り上げの注記を書き換えたが、若干の混乱があるかもしれない。

遺物（第72図68～78、第131図4、第137図4・12）

全体量は少ない。覆土中より土器の小破片が散発的に出土する程度で、床面に至って初めてまとまりのあるものがわずかに遺存していた。

図化・提示できたものは、土器と鉄器（刀子）、土製品（紡錘車・手捏ね）である。土器には土師器と須恵器の2種類があり、器種には土師器環（74・76・77）、同高環（75）、同小形甕（78）、須恵器環B（69）、同蓋A（72）、同蓋B（73）、同鉢（68・71）、同長頸壺（70）、など多様なものが見られる。72の須恵器蓋Aは上下を逆転させて同環Bとして扱うほうが良いかもしれない。全体的に須恵器が多く、時期的特性を示している。本址出土土器群は古墳時代後期3段階に位置付けられよう。

（5）第6号住居址

遺構（第28図）

1地区東側、(23～27, 11～16)に位置し、第5号住居址と重複して南東隅上層を破壊される。主軸N-62°-Wを指し、平面形は南北4.4m、東西4.6mのわずかに東西に長い長方形を呈する。壁は高さ30cmとやや深めで、かなりの傾斜をもつ。床は黄色砂質土を貼って構築しているが軟弱で、しかもそれは中央部一帯のみで、地山が覆土に似た暗褐色土であるため外周部は床の識別が難しかった。ピットは6個検出され、P₂とP₃は重複する。支柱穴は平面プランからP₁～P₄をもってあてて、深さがいずれも15～25cmしかない。カマドは西壁中央にあり、両袖ともよく残存している。黄色の粘質土を用いて構築しており、石材は見当たらない。焚き口から内部にかけて被熱面が広がっていた。煙道は住居外へ約40cm延びる。

本址は検出時、東西と北のラインは明瞭に現われたが、第5号住居址との前後関係が不確実で、掘り下げは本址の方が古いものとして行ったが、結局、最後まで確定はできなかった。（整理段階での切り合いの順が正しいことが土器により証明された。）

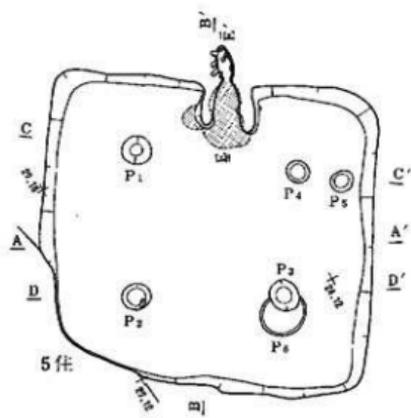
遺物の出土状態

覆土中から散発的に土器の小破片が出土したのみであった。覆土・床面ともに一括品は残していなかったが、カマドに向かって右側の床面に接して、須恵器蓋の肩部以上を逆位に置いたものが出土した(第28図カマド部分土器86)。今回の調査では同様の出土例が3棟あり、偶然の結果ではなく、カマドに付随した施設、具体的には土師器の甕などを置く台として転用されていたものと考えたい。

遺物（第73図79～89）

図化・提示できたのは土器のみ11点である。土師器と須恵器があり、器種は、土師器環（81・82）、同高環（83）、同鉢（84・87）、同甕（85・89）、須恵器環A（79・80）、同甕（86）、で土師器が中心となる。86の須恵器が前述のカマド横から出土した転用の台である。

本址出土土器群は須恵器の食器用具が環Aしかない点から見て、古墳時代後期2段階に属する。



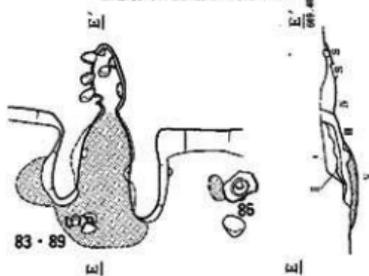
- I : 層 (約 1.0 - 4.5m) - 黄褐色土層に紅瓦片散見
 II : 黄褐色土少量 - 黄褐色土層に砂瓦片散見
 III : 黄褐色土層に砂瓦片散見
 IV : 黄褐色土層に砂瓦片散見
 V : 黄褐色土層に砂瓦片散見



P₁ - P₅
 坑の断面図

0 1 2 m
 1 : 80

土器 : 83 - 86 - 89
 土器番号は裏面に対応する



- I : 黄褐色土
 II : 黄褐色土層に砂瓦片散見 (ノドノアサギ)
 III : 黄褐色土層に砂瓦片散見
 IV : 黄褐色土層に砂瓦片散見
 V : 黄褐色土層に砂瓦片散見

0 50 cm
 1 : 40

第28図 第6号住居

(6) 第7号住居址

遺構 (第29図)

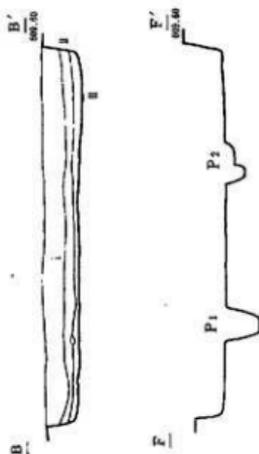
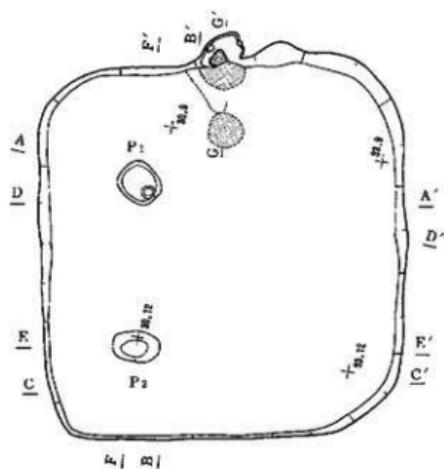
1地区東側、(28～34, 8～13)に位置し、第5号住居址の南東部を破壊する。主軸はN-80°-Eをとり、平面形は南北5.0m、東西5.2mの隅丸長方形を呈す。壁は、かなり深くしっかりした掘り込みで、北壁50cm、南壁40cm、東壁40cm、西壁50cmを測る。床面は非常に軟弱で、しかも南半部には本址下にさらに何らかの遺構があり、その覆土らしき土層が現われて、まったく床という雰囲気ではなかった。ピットは床が捉えられた北半分のみ2個検出され、配置からみて4本配列の主柱穴の半分であろう。もう2個は前述の他遺構の覆土らしき土層に隠れて検出できなかった。カマドは東壁の中央にあるが、ほとんどその形態をとどめていない。隈外へ張り出し、直下前面と1m程前方に焼土面がある。また張り出し部右脇から斜方に土質の変った部分が煙道のように延びていたが、本址のカマドに伴うものかは不明。図中では一点鎖線で示した。本址床面積は23.8m²を測る。

本址の調査・掘り下げではいくつかの不明確な事項があったので若干触れたい。まず床であるが次のように非常に複雑な様相を呈していた。調査時には黄色砂質土の面で掘り下げを中止し、それを床と捉えたが非常に軟弱で、土層断面の観察によると床とした面の5～7cm上の一部に、暗褐色砂質土と黄褐色砂質土が薄層で横に延びる部分があった。このためその薄層が貼り床で実際には床を抜いてしまったのかとも考えたが、その薄層自体も当初想定した床にも増して柔らかく、やはり当初のままが良いとの考えに達した。床の北半部ではこの面でピットの検出もあり確信を深めたのであるが、前述の通り南半部になると暗褐色の覆土らしき土質に移行し、その土中からは人為的に持ち込まれたらしい直径10cmほどの礫も顔を出し始めた。どうやら本址下に他の遺構があったことは確実のようであるが、今回の検出面ではまったく掘めない遺構であり、弥生時代以前のものの可能性が高い。次にカマドについてで、壁に張り出すように現われたカマド(らしきもの)は実は本址に伴うものではなく、本址のカマドは完全に破壊されていて、前述の、前方1mにある焼土がその残骸だったのかもしれないという所見を持った。その理由は、当遺跡の古墳時代後期の住居址でこのような形で張り出すカマドはまったく無いこと、煙道(らしきもの)の方向がおかしいこと、などで、本址に切り合う別遺構を見落とした可能性を第一に考えた。しかし結局検出面での別遺構の確認はなく、奇妙な掘り上りと疑問が残った。

遺物 (第73・74図90～101)

出土量は少なく、土器は小破片が上層から下層まで点々と出土する程度であった。

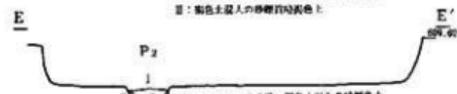
図化・提示できたのは土器のみ12点である。土師器と須恵器があり、器種は、土師器高坏(92・93)、同小形壺(96)、同甕(94・95・97～101)、須恵器坏B(91)、同甕(90)、という構成になる。土師器甕がハケメを持つこと、須恵器坏Bがあること、等が時期的指標にならう。古墳時代後期4段階を示している。



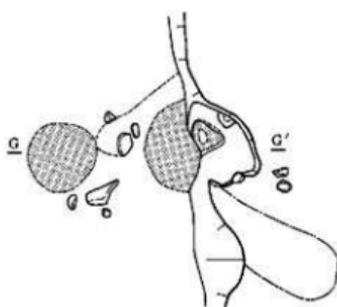
- I : 半輪・黄色砂質土アロツク層人の埋青色砂質土
- II : 埋青色砂質土
- III : 黄色砂質土・灰化層人の埋青色砂質土



- I : 埋土土壁・灰化層・0.7m人の埋青色土
- II : 灰化層・0.7m人の埋青色土
- III : 黄色土層人の砂質埋青色土



- I : 0.8-1m水の層・黄色土層人の埋青色土
- II : 砂質埋青色土



- I : 0.5mの埋青色土アロツク層人の埋青色土
- II : 埋土土壁人の埋青色土
- III : 埋土土壁・埋土アロツク層人の埋青色土
- IV : 灰化層・黄色砂質アロツク層人の埋青色土
- V : 黄色砂質土



第29図 第7号住居址

(7) 第8号住居址

遺構 (第30図)

1地区東側、(28~34, 15~24)に位置し、第5号住居址に南東隅をわずかに切られる。平面形は一辺5.3mの隅丸方形を呈し、主軸をN-114°-Wにとる。壁高は北20cm、南24cm、東20cm、西26cmを測り、傾斜をもつ壁が切り込んでいる。床は砂質の褐色土と黄色土が混じるもので、比較的良好、堅緻でわかりやすい。ピットは6個検出され、深く、位置も手頃なP₃~P₅の3本を支柱穴としたいが、残る1本が予想される位置にどうしても発見できなかった。P₁・P₂は柱穴より径が大きく、特にP₂などは深さもあって、カマドに関連する施設なのだろうか。カマドは西壁の中央にあり、立派な袖と煙道を残している。袖は周囲に構築材の一部であったと見られる径10cm程度の隙をともなっているが、残存部は粘質土でかためたものである。袖部は幅1.3m、煙道は長さ1.5mの大きな規模をもち、内部はよく焼けていた。床面積は23.6m²を測る。

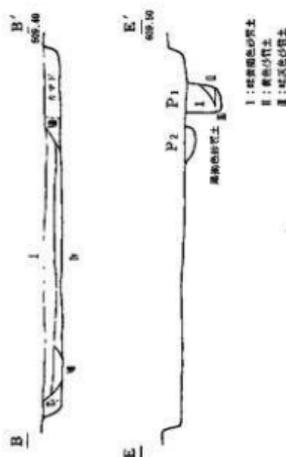
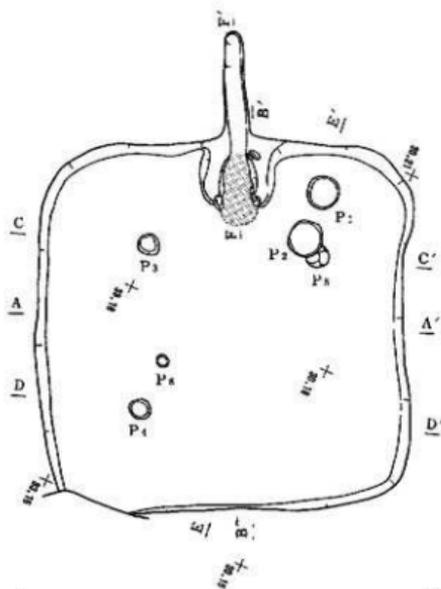
本址覆土は、径3cmを超えるような隙がまったく無く、また下層には黒色土がシミの様に斑状に混じり広がるというきわ立った特徴を持っていた。長時間かけて徐々に埋没したためなのであろうか。

遺物の出土状態

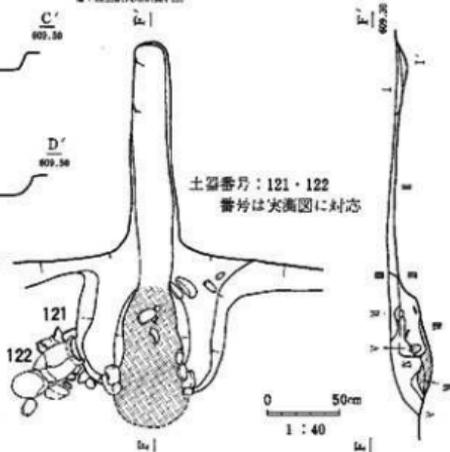
カマドの周辺からきわめて良好な土器の出土があった。まずカマド左袖の外側に接するように土師器の長胴甕が2個体あり(カマド部分図参照:121・122)、上になっていた122は原形をとどめたままで現われた。またカマド前方右に同小形甕(114)、カマド北1mの壁直下に同長胴甕(123)がそれぞれ潰れて出土した。さらにカマド右脇50cmの所には大形の土師器甕の肩部以上の大破片(120)が逆位で床上にあったが、この位置からこの器種がしかもこのような向きで出土することは、第6・52号住居址にまったく同様の例を見、カマド施設の一つとしての台を想定するのである。これらカマド周辺のものほかに、覆土中から大小破片が万遍なく出土した。

遺物 (第74・75図102~123)

図化・提示できたのは土器のみで22点ある。土師器と須恵器があり、器種には土師器坏(103・109~113・115・116)、同高坏(102)、同鉢(108)、同小形甕(114・117)、同甕(118・121~123)、同壺(119・120)、須恵器蓋A(104~106)、同鉢(107)が見られる。全形を知ることのできるものもかなりあり、特にカマド周辺から出土した土師器甕はいずれも完形品で、土器群としても、単品としても非常に良好な資料となった。これらの土器が示す時期は、須恵器蓋が混じるのでもう一段階新しいかとも思うが、土師器の坏類や甕の様相から、古墳時代後期1段階に位置付けておきたい。今回の後期の資料のなかでは古い方を代表する土器群の一つといえる。



- I: 灰土・灰化物・焼(約 7-2m)・黄褐色土層人の焼土の砂質土
- II: 灰土層人褐色土
- III: 焼(約 0.7-1m)少量層人の褐色砂質土
- IV: 灰土・灰化物・黄褐色土(焼土)層人の褐色砂質土
- V: 灰褐色砂質土
- VI: 緑褐色土アロップ層人の褐色土
- VII: 灰土・灰化物・褐色土アロップ・土層人の褐色砂質土
- VIII: 灰土層人の褐色砂質土



土器番号: 121・122
番号は実測図に対比

- I: 灰褐色土アロップ(約 0.5-2cm)・黄色土アロップ(約 0.5cm)層人の褐色砂質土
- II: 土層人
- III: 灰土アロップ・灰化物少量層人の褐色砂質土
- IV: 灰褐色土アロップ(約 0.5-2cm)層人の褐色砂質土
- V: 灰土アロップ(約 0.5cm)少量層人の褐色砂質土
- VI: 緑褐色土アロップ(約 0.5-1cm)層人の褐色砂質土
- VII: 焼土層人の褐色土
- VIII: 黄色砂質土
- IX: 焼土

第30図 第8号住居址

(8) 第9号住居址

遺構 (第31図)

1 地区東端にあり、東側は調査区域外にかかる。地点は(32~35, 3~4)に相当する。正確な平面形は不明だが、他例からみて、隅丸の方形になるものと推定され、主軸方向はN-78°-W、西辺は約4.2mを測る。壁の立ち上がりはなだらかで、高さは30cm前後を示す。本址付近の地山は黒色~黒褐色粘質土で、床はその地山を直に用いており、中心に近い部分にごくわずかに黄褐色砂質土を貼っている。しかし地山が特異なので覆土との弁別は容易であった。ピットは2個検出されたが、住居の全形がわからないので柱穴の比定は難しい。カマドは西壁中央にあり、袖の一部を破壊されるが、露出した石材から石芯カマドであることがわかる。袖の付け根には石の抜き取り痕と見られる穴がある。床面積は調査範囲内で4.6m²である。

遺物 (第76図124~128)

調査した面積が狭いので量は少なく、しかも一定の傾向がなく散発的に出土した。一括品もない。図化・提示できたのは土器のみで、5点と少ない。土師器と須恵器で、器種は土師器が甕、須恵器が坏Bである。古墳時代後期4段階に属する土器群であろう。

(9) 第10号住居址

遺構 (第32図)

1 地区南東部、(35~39, 6~11)に単独で存在する。主軸をN-78°-Eにとり、南北5.6m、東西5.3mのわずかに南北に長い隅丸方形を呈している。壁は比較的高く立ち上がりもしっかりしていて、北壁で40~45cm、南壁で45~58cmを測る。床は褐色砂質土に黄色砂質土が混じる土質だがあまり判然としなないもので、誤って掘り過ぎると覆土の様な土質になり、人為的に集めたと考えられる径10cmくらいの深が現れた。北隣の第7号住居址の状況とよく似ており、本址を含めて第5~8号住居址周辺の下層には、古墳時代よりも遡る時期の遺構面があることは間違いないところであろう。ピットは4個検出でき、配列からみて支柱穴に相当する。ただし住居の掘り方と若干ズレが生じている。カマドは東壁の中央に設けられ、袖は黄色のわずかに粘質の土で構築されている。残存状態の良い右側の袖は長さ1mに達し、袖間が60cm、煙道も1.1mと長い。床面積は24.4m²を測る。

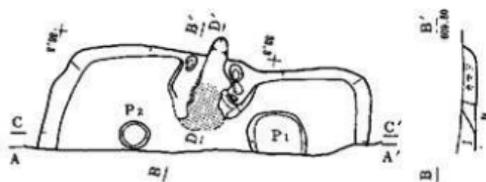
遺物の出土状態

覆土上層から下層まで偏りなく土器の大小破片が出土した。鉄器、土製品も混じる。床面付近の深さでは一括品の出土があり、一方、壁際の上層からも大破片の土器が得られたりして、一定の傾向はないようだ。また調査時の間違いでカマドの左側の袖の一部を削ってしまった際、その中から須恵器の坏Bの完形品が出てきたが、これはカマドの芯材として転用されたものなのであろうか。

遺物 (第76・77図129~145、第131図5~7、第137図17)

図化・提示できたのは、土器17点、鉄器3点(器種不明)、土製品1点(紡錘車)である。土器は

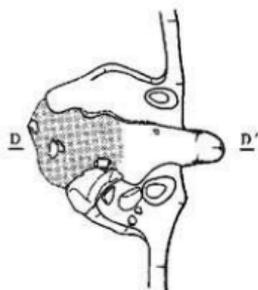
第9号住居址



- I : 0.5~1.0m大の黄色土層・灰土・灰化物混入の褐色砂質土
- II : 灰化物・腐土混入の褐色土
- III : 褐色土ブロック・腐土混入の褐色砂質土
- IV : 腐土・灰化物・褐色土混入の褐色砂質土

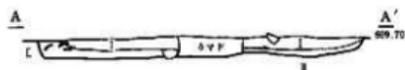
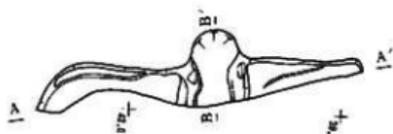


- I : 0.5~2.0m大腐土人の褐色土
- II : * * * 褐色土
- III : 褐色砂質土
- IV : 0.5~5.0m大の黄褐色土ブロック混入の褐色砂質土



- I : 褐色土
- II : 腐熟土層・灰化物多量混入の褐色土
- III : 0.5~1.0m大の褐色土ブロック混入の褐色土
- IV : 灰化土層混入の褐色土
- V : 0.5m大の腐熟土ブロック混入の褐色土
- VI : 0.5m大の黄色灰褐色土ブロック混入の褐色土
- VI : 腐熟土
- VII : 腐熟土
- (VI) : 灰化物

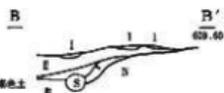
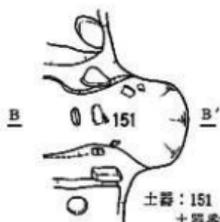
第11号住居址



- I : 粘土・灰化物混入の褐色砂質土
- II : 褐色砂質土

0 1 2m
1 : 50

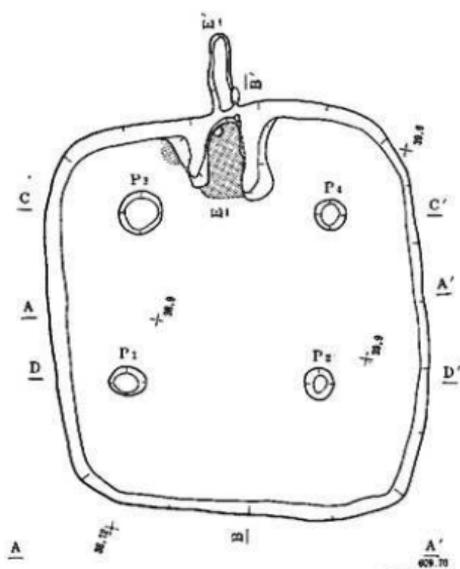
- I : 0.5m大の腐熟土ブロック・灰化物混入の褐色土
- II : 0.5m大の腐・1~5m大の黄褐色土ブロック混入の褐色土
- III : 0.5m大の腐熟土ブロック混入の褐色砂質土
- IV : 0.5m腐熟土ブロック混入の褐色砂質土



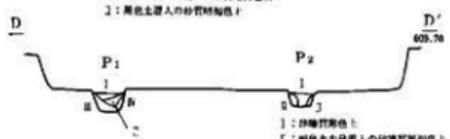
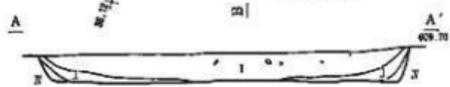
土器 : 151
土器番号は実測図に対応

0 50cm
1 : 40

第31図 第9・11号住居址



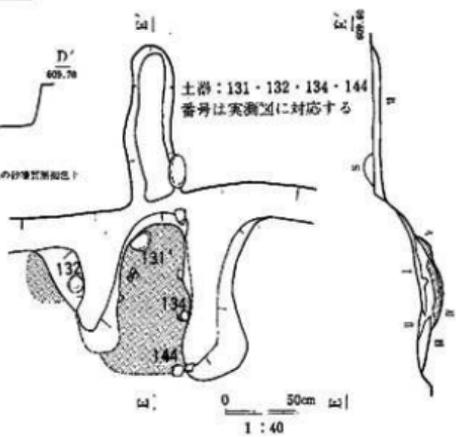
- I : 粘土・0.1-3cm程度の多量土層人の焼物土
- II : 粘土・灰化層・10cm程度の土人の焼物土
- III : 黄褐色土・10cm程度の土人の焼物土
- IV : 黄褐色土・10cm程度の土人の焼物土
- V : 焼物土
- VI : 焼物土



- I : 黄褐色土・粘土・灰化層人の焼物土
- II : 黄褐色土・粘土・灰化層人の焼物土
- III : 黄褐色土・粘土・灰化層人の焼物土
- IV : 黄褐色土・粘土・灰化層人の焼物土
- V : 黄褐色土・粘土・灰化層人の焼物土



- I : 1-3cm程度の黄色ブロック土
- II : 0.5-1.5cm程度の黄色とブロック・灰化層人の黄褐色土
- III : 0.5-3cm程度の黄色とブロック・灰化層人の黄褐色土
- IV : 焼物土
- V : 焼物土
- VI : 焼物土



土器：131・132・134・144
番号は実測図に対応する

第32図 第10号住居址

土師器と須恵器の2種類で、土師器環(134)、同鉢(136)、同甕(137・138・143～45)、同壺(139～142) 須恵器環B (129・131～133)、同蓋C (130)、同甕 (135) の器種が見られる。145の土師器の甕は、胴部内面が横位の工具ナデされるが、非常に強く行われているため段がついている。135の須恵器甕は広口甕である。これらの土器群の特徴は、食膳用具の土器に須恵器が多く、しかも蓋Aと上下の判断に苦しむ環Bは無いことや、土師器の甕にハケメで器面調整を行うもの(144)が見られることである。この特徴からみて、本址出土土器群は最も新しい様相の古墳時代後期4段階に位置する。

土製の紡錘車は完形品で、底面径5.0cm、高さ2.3cmを測り、全面にナアが及ぶ。鉄器については本章8節で触れる。

(10) 第11号住居址

遺構 (第31図)

1地区東端、(39～42, 1～2)に位置する。ほとんどが調査区域外にかかり、カマドを持つ西壁とその下部が調査できたにすぎない。住居全面積の $\frac{1}{6}$ に満たないであろう。プランは他例から推測すると、主軸が東西方向よりわずかに南に振る一辺4.4m位の隅丸方形を呈すのであろう。壁の立ち上がりは、観察されるかぎりでは20～25cmを測り、西壁には途中で段状の部分がある。床については多くは不明だが、地山が黒色～黒褐色の粘質土でその層中にあり、北隣の第9号住居址に類似するものと推定する。カマドは西壁中央にあり、奥壁部分が壁外へ張り出している。袖は全形を把握できなかったがかなり良好に残存しているようで、付け根に石材があり、石芯の粘土カマドである。とにかく本址については推定の部分が多い。

遺物の出土状態

調査面積の狭い割には出土量が多い。特に南端部の調査地区外との境界付近から土師器の甕の一括品(153と152)が出土した。これらは重なるように遺存しており、このほかにも大形破片が多いため、本址の調査がより広範囲に及んだなら第8号住居址や第52号住居址のようにカマドを囲む良好な土器の出土状態を示したかもしれない、残念である。

遺物 (第77・78図146～154)

図化・提示できたのは土器のみである。土師器が8点、須恵器が1点で、器種は土師器甕(150・152～154)、同小形甕(147～149)、同壺(151)、須恵器高環(146)が見られる。食膳用具の土器が欠落しているが、土師器甕の様相からみて、古墳時代後期2段階くらいに位置付けられると考える(あるいは若干古いかもしれない)。

(11) 第12号住居址

遺構 (第33図)

1 地区南東隅、(40~45, 12~17)、に位置する。第1号建物址を切り、南西部が調査区域外にかかる。規模・平面形は、推定で一辺5.4mの隅丸方形をとるとみられ、主軸はN-76°-Eを指す。壁は傾斜を有すがしっかりした掘り込みで、高さは平均して40cmを測る。床は、暗褐色砂質土に黒色粘質土と礫の混じる地山の層中にあり、貼り床もなく軟弱である。この面を抜いてしまうと黒色粘質土の混入が失われて、礫混じりの暗褐色砂質土に移行するため、その深さで初めて床を抜いたことが判明し、掘り下げを停止した部分もある。ピット類はまったく検出できなかった。この原因は、当初からピットの無い住居であったためとの強弁もできるが、むしろ本址一帯(第7・10・12号住居址周辺)の非常にわかりにくい下層の状態のため検出することができなかったと認めたい。カマドは東壁中央にあり、一部が壁外に張り出す。袖はほとんど破壊されて、芯に用いられたとみられる石材が残存しているのみであったが、周辺に被熱面が広がっていた。煙道は張り出しの先端に30cmほど付随し、本址床面の深さから考えると、削平されたとはばかりも言えない。床面積は現況で16.5m²、推定復元で20.4m²を測る。

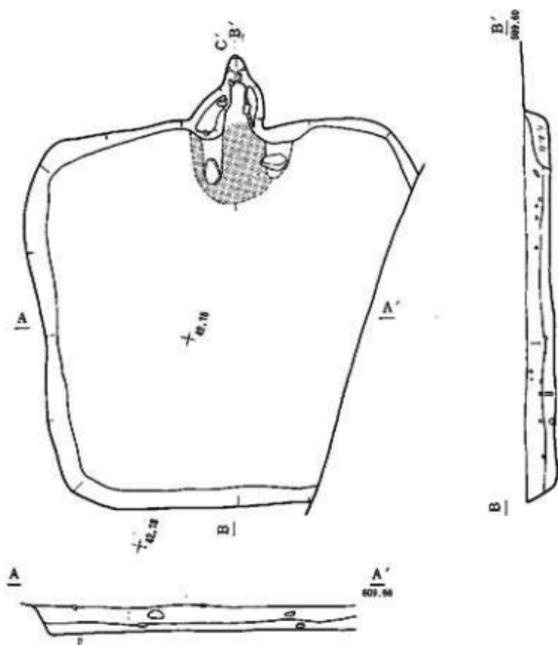
遺物の出土状態

土器を中心に覆土中に散発的に存在し、床面やカマド付近にまとまって遺存したり、一括品が出土したりすることはなかった。とはいえ、大きな住居址で深さもあるため、土器の総量はかなり多い。遺物のほかに覆土中に径3~20cmを超える礫が点々としているのも本址の特徴で、この礫は意図的に投入されたものではないと考えている。

遺物 (第78・79図155~172、第134図11、第131図8)

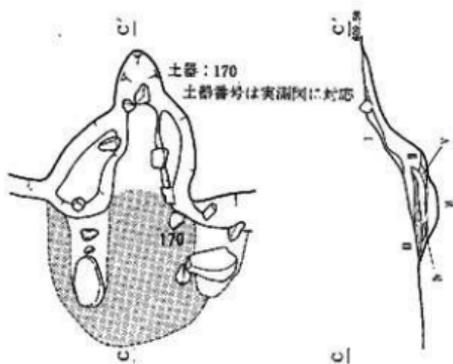
土器と石器(砥石)・鉄器(釘)を図示した。土器は総数で18点、石器1点である。土器には土師器と須恵器があるが須恵器の占める率が高い。器種は、土師器坏(162~164)、同高坏(161)、同鉢(165)、同小形甕(168・169)、同甕(170)、須恵器坏B(155)、同蓋C(157・160)、同高坏(156・158・159)、同壺(166)、同鉢(171)、同甕(172)と多岐にわたるが全形がわかるものは少ない。須恵器の高坏は、156が坏部の底面、158・159が脚の端部の破片である。166の須恵器は短頸甕になる。167の須恵器は成形にタタキが用いられていないが、甕の一種と理解したい。171の須恵器は直線的な体部が外開する外形を呈すあまり類例を見ない器種で、大形の摺鉢かとも考えたが少し大き過ぎるような気がして「鉢」として提示した。172の須恵器甕は広口甕である。

本址の土器群は須恵器製品が多い点や、須恵器の食器用具のなかでも古い坏Aの存在がないことから、本遺跡のなかでは新しい方の古墳時代後期4段階と位置付けたい。



1 : 土層遺土
 2 : 今も残存する土層の残土

0 1 2 m
 1 : 80



土器 : 170
 土器番号は実測図に対応

1 : 土層遺土
 2 : 土層遺土 (A-A) 50cmの幅で掘削された土層の遺土
 3 : 土層遺土
 4 : 土層遺土
 5 : 土層遺土
 6 : 土層遺土
 7 : 土層遺土
 8 : 土層遺土
 9 : 土層遺土
 10 : 土層遺土
 11 : 土層遺土
 12 : 土層遺土
 13 : 土層遺土
 14 : 土層遺土
 15 : 土層遺土
 16 : 土層遺土
 17 : 土層遺土
 18 : 土層遺土
 19 : 土層遺土
 20 : 土層遺土
 21 : 土層遺土
 22 : 土層遺土
 23 : 土層遺土
 24 : 土層遺土
 25 : 土層遺土
 26 : 土層遺土
 27 : 土層遺土
 28 : 土層遺土
 29 : 土層遺土
 30 : 土層遺土
 31 : 土層遺土
 32 : 土層遺土
 33 : 土層遺土
 34 : 土層遺土
 35 : 土層遺土
 36 : 土層遺土
 37 : 土層遺土
 38 : 土層遺土
 39 : 土層遺土
 40 : 土層遺土
 41 : 土層遺土
 42 : 土層遺土
 43 : 土層遺土
 44 : 土層遺土
 45 : 土層遺土
 46 : 土層遺土
 47 : 土層遺土
 48 : 土層遺土
 49 : 土層遺土
 50 : 土層遺土
 51 : 土層遺土
 52 : 土層遺土
 53 : 土層遺土
 54 : 土層遺土
 55 : 土層遺土
 56 : 土層遺土
 57 : 土層遺土
 58 : 土層遺土
 59 : 土層遺土
 60 : 土層遺土
 61 : 土層遺土
 62 : 土層遺土
 63 : 土層遺土
 64 : 土層遺土
 65 : 土層遺土
 66 : 土層遺土
 67 : 土層遺土
 68 : 土層遺土
 69 : 土層遺土
 70 : 土層遺土
 71 : 土層遺土
 72 : 土層遺土
 73 : 土層遺土
 74 : 土層遺土
 75 : 土層遺土
 76 : 土層遺土
 77 : 土層遺土
 78 : 土層遺土
 79 : 土層遺土
 80 : 土層遺土
 81 : 土層遺土
 82 : 土層遺土
 83 : 土層遺土
 84 : 土層遺土
 85 : 土層遺土
 86 : 土層遺土
 87 : 土層遺土
 88 : 土層遺土
 89 : 土層遺土
 90 : 土層遺土
 91 : 土層遺土
 92 : 土層遺土
 93 : 土層遺土
 94 : 土層遺土
 95 : 土層遺土
 96 : 土層遺土
 97 : 土層遺土
 98 : 土層遺土
 99 : 土層遺土
 100 : 土層遺土

0 50 cm
 1 : 40

第33図 第12号住居址

(12) 第13号住居址

遺構 (第34図)

1地区中央部南東、(31~38, 25~30)に位置し、第14号住居址の北東部を切る。主軸方向はN-90°-Wを指し、平面形・規模は南北4.3m、東西4.0mのわずかに南北に長い隅丸長方形を呈する。壁はいずれも垂直に掘り込まれ、壁高も50cmからところによっては70cmに達する。深く非常にしっかりしたもので、今回調査の住居址のなかでは最深の部類にあたる。床は、礫混じりの暗褐色砂質土の地山の層中にあり、わずかに黄褐色砂質土を貼って構築している。中央部は比較的堅固だが地山の礫が所々顔を出している。ピットは当初P₁~P₃の3個が検出されたが、後にP₁は本址に切られる第14号住居址の主柱穴の一つの残存した下部であることが判明した。P₂・P₃を本址主柱穴に想定すると南東と南西のコーナーにもピットが存在するはずであるが、調査時には発見できなかった。カマドは西壁のほぼ中央にあり、両袖間は70cm、煙道は60cmの長さをもつ。袖間には一面に被熱層が広がっていた。カマド奥壁の煙道との境界には、土師器の壺の大破片が煙道を塞ぐように置かれていた。床面積は16.8m²を測る。

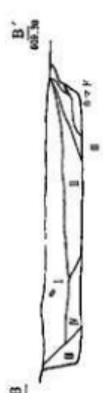
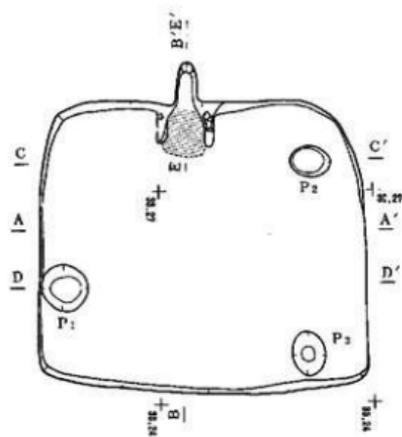
遺物の出土状態

前述のカマド内からの一括品のほかは、覆土中に土器の中小破片が散在していたのみで、人為的な廃棄等の状態は見られなかった。覆土の堆積は自然埋没状で、径10cm大の礫がまばらに含まれている。

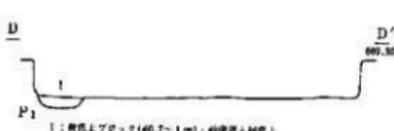
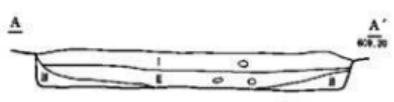
遺物 (第79・80図173~186、第134図1、第137図2)

土器、土製品(手握ね)、石器(打製石斧)を図化・提示した。ただし石器は前代のものの混入であろう。土器は14点を示したが、全形のわかるものはない。土師器と須恵器があり、器種は土師器坏(178~180)、同壺(182~185)、同壺(186)、須恵器坏A(173)、同坏C(176)、同蓋C(174・177)、同高坏(175)、同短頸壺(181)が見られる。カマド内からの出土品は186の土師器壺である。須恵器には古い時期の器種の坏Aが混じっているが、その一方で蓋Cもあることから全体的には新しいものと見たい。土師器の壺には外面の調整にハケメが使われるものがあり、これも新しい要素を示す。本址出土土器群は全体的に見て古墳時代後期4段階に位置付けられよう。

土製品は手握ねのミニチュアで、口縁部を欠け、外面の所々に炭化物が付着する。石器は本章8節で触れる。

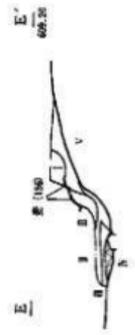
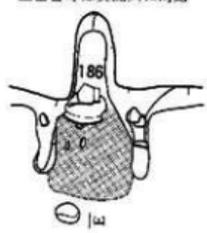


- I : 褐色砂質土
- II : 黒褐色粘質土・褐色砂質土アロックス層状混入褐色砂質土
- III : 暗褐色粘質土
- IV : 黒褐色土アロックス層状混入の褐色土



I : 褐色土アロックス(約0.3-1m)・砂混入褐色土

土器：186
土器番号は実測図に対応



0 1 2 m
1 : 80

- I : 褐色による黒ずみ褐色土アロックス(約0.3-1m)混入暗褐色土
- II : 黄褐色土アロックス(約0.3-1m)混入暗褐色土
- III : 灰化層・粘土砂混入の暗褐色土
- IV : 黄砂土
- V : 黄褐色砂質土

0 50cm
1 : 40

第34図 第13号住居址

(13) 第14号住居址

遺構 (35図)

1地区中央部の南東、(34~38, 25~30)にあり、第13号住居址(古墳時代後期4段階)に北東部を破壊され、流路址1を切る。プランは、主軸をN-94°-Eにとり、一辺5.0mの隅丸方形を呈する。壁高は、北壁25cm、南壁40cm、東壁42cm、西壁44cmを測り、やや傾斜をもつ深い壁であった。床は本址を切る第13号住居址より10cmほど高い位置にあり、地山の黄褐色砂質土を叩き締めた平坦で良好なものになっている。ピットは本址床上に4個検出されたが、前記第13号住居址のP₁は本址のものが底部を破壊されずに残ったもので、本址P₁・P₂・P₃と組み合せて、4本の方形配列の支柱穴を構成する。この4個のピットは一樣に直径40cm、深さ30cmを測る。P₂の性格はわからない。カマドは東壁中央に設けられ、両袖と煙道を残している。袖の間には被熱層があり、石材もいくつか顔を出している。内部の礎は天井部の構築材だったのであろうか。煙道は浅い蒲鉾形断面で、長さは70cm近くある。床面積は残存部で16.5m²、推定復元面積で20.4m²である。

本址の特徴は柱穴が非常にコーナーに寄っていることと、壁の掘り込みがしっかりしていることで、これらはいずれも本址を切る第13号住居址にも共通する。同一住居の移動という捉え方が可能なのではないか。

遺物の出土状態

土器の破片ばかりが出土しているが、それらも上層Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ層に多く、下層になると俄然少なくなるという状態であった。カマド内からは高坏の脚部(187)が出土している。

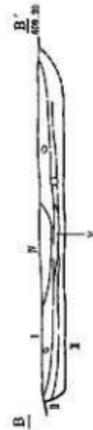
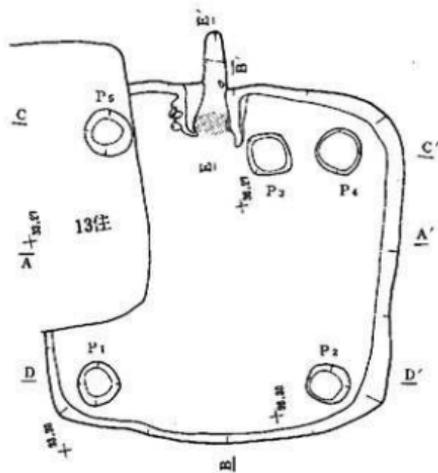
遺物 (第80図187~190)

土器しか出土しておらず、それも小破片のみで図化・提示できたものは4個体しかない。種別と器種は、土師器が高坏1点(187)、甕2点(189・190)、須恵器が壺または瓶類の頸部が1点(188)という至って寂しい内訳である。時期を決めるのも難しいが、須恵器の食膳用具が見られないことと、土師器の壁にハケメがないことから1~4段階の前半にあたることはほぼ間違いない。その上で、非常に問題のある方法だが、本址を切る第13号住居址との連続性を考慮して、古墳時代後期2段階に比定させることとした。

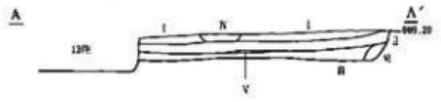
(14) 第15号住居址

遺構 (第36・37図)

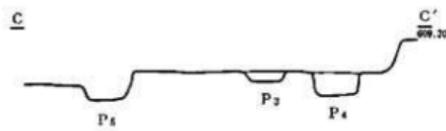
1地区南側中央、(37~42, 34~39)に位置し、流路址1を切るが、同時代の遺構のなかでは単独である。平面形は一辺6.4mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-83°-Wを指す。壁はいずれも40cm内外の壁高をはかり、やや傾斜を有している。床は平坦で堅いものであったが、土質が一樣ではなく、南半分は褐色砂質土に黄色砂質土ブロックが混じる土を叩き、北半分はこれにさらに灰色粘質土が混じっている。ただし貼り床ではないようで、検出面下の地山の土層の違いが本址床に現れた



- I: 埋入瓦筒造砂質土
- II: 埋内砂質土
- III: 流石埋内砂質土
- IV: 埋入漆虫砂質土(土層に埋)
- V: 黄土上粒造入灰色粘質土
- VI: 埋内色砂質土



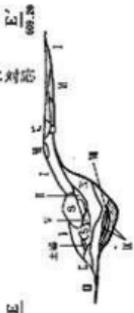
- I: 黄瓦ブロック(約3cm)・実存物少量埋入褐色砂質土
- II: 以化筒埋入褐色砂質土
- III: 埋内ブロック(約0.5-2cm)埋入褐色粘質土
- IV: 埋内砂質土
- V: 埋内筒・埋内ブロック(約1cm)埋入褐色砂質土
- VI: 埋内粒造入褐色砂質土
- VII: 粘土ブロック(約0.5-2cm)埋入褐色粘質土
- VIII: 埋内土
- IX: 埋内層



- P1: 埋内色砂質土
- P2: 埋内色砂質土少量埋入其埋内色砂質土
- P3: 埋内色砂質土ブロック(約1-2cm)少量埋入其埋内色砂質土
- P4: 赤褐色砂質土を約1cm厚に少量埋入其埋内色砂質土
- P5: 埋内色砂質土



土器: 187
土器番号は実測図に対応



第35図 第14号住居址

ものであろう。床面ではP₁~P₅の5個のピットを検出した。P₂(80×100、-50)、P₃(90×50、-30)、P₄(80×25、-22)は位置と規模からみて支柱穴であろう。カマドは西壁中央に設けられており、カマド本体が若干、壁外へ張り出す。袖は前部が破壊されていて規模がよくわからないが、袖の芯や補強に使われていたと見られる石材が袖間に散乱していた。カマド内や前面の焼土の広がりから想定すると、かなり大きいカマドであったようだ。カマドの規模に比例し、煙道も長さ1.4mに達する長大なものである。これらの施設のほかには、東壁の南半にわずかな段があるがどのような機能を持っていたか不明。

本社の床面積は32.6m²で、今回調査した住居のなかでは大形の部類に属する。住居自体だけではなく、柱穴、カマド、煙道など住居内施設も大きく作られている。本社が属する時期・段階の遺構の中で中核を占める住居の一つであったのだろう。

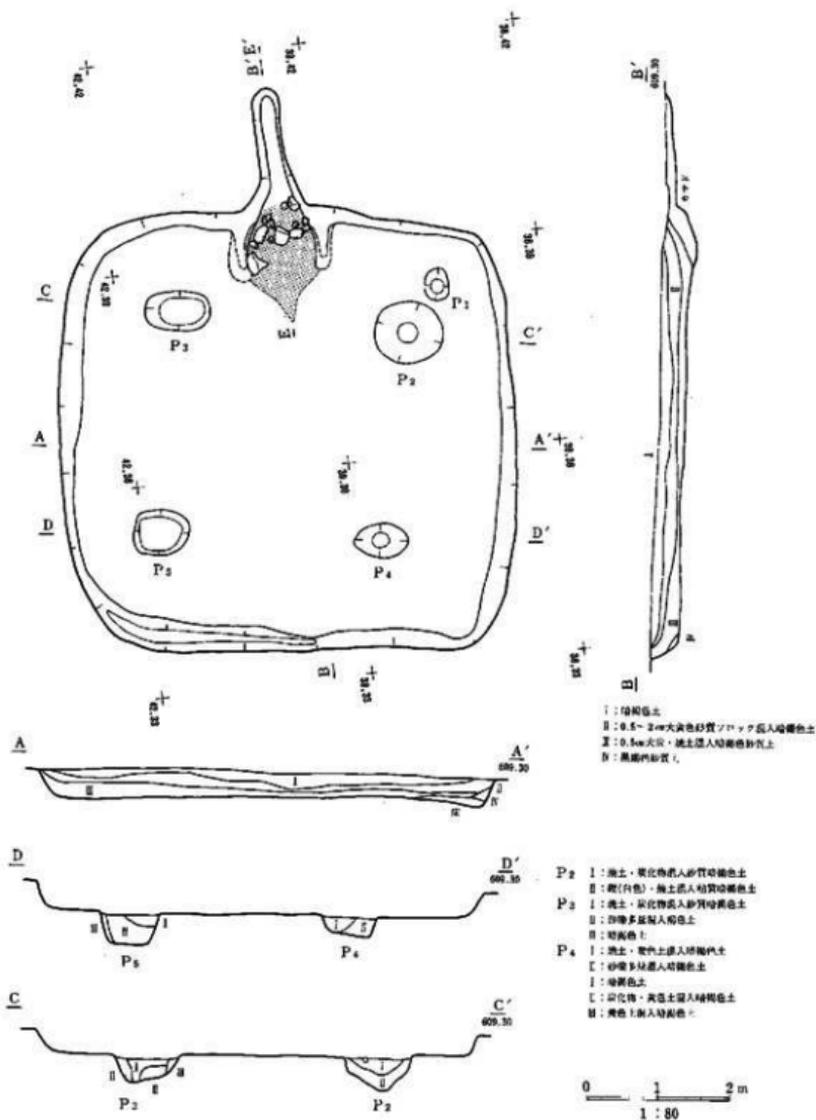
遺物の出土状態

土器・土製品が大量に出土した。しかし、いずれも一括品で遺存するという状態はまったく無く、ほとんどが全形の $\frac{1}{2}$ 以下の破片で、それらが覆土上層から床面近くまで万遍なく出土した。大形の破片は数える程しかない。このため土器の総量ではかなりのものであったが、整理段階の接合・復元作業で壊などの大型品になったものは2点しかなく、しかも図上で復元できる程度であった。このような遺物の出土状態を示す原因は、本社が短期間のうちに多数の土器の小破片をともなって埋没、ないしは埋められたためではないかと考える。土層観察によると、一見自然堆積状に水平な層が広がるが、II層には黄色砂質土のブロックが混じり、III層には炭と焼土粒があって、人為が加わっている可能性が指摘できる。

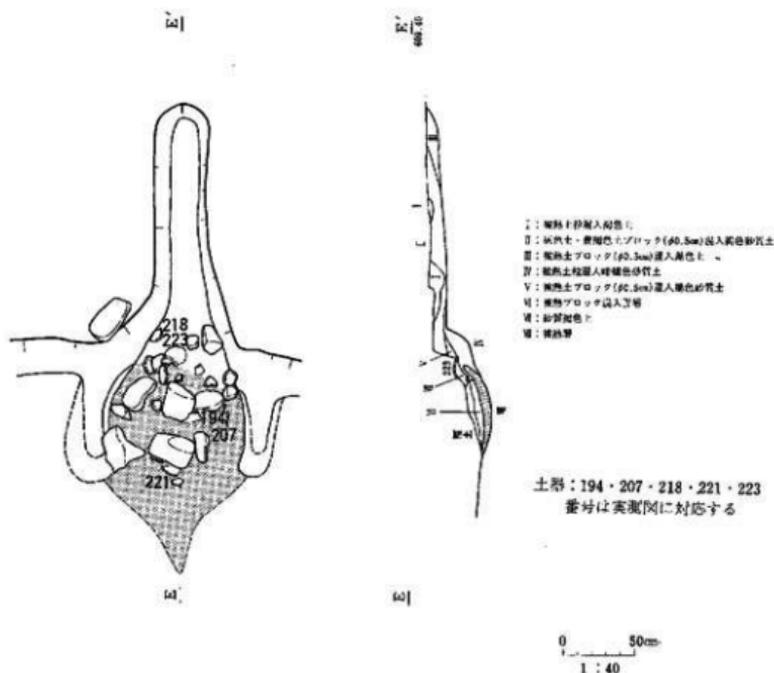
遺物(第80~83図191~232、第137図5・9・10・14・16)

土器と土製品(手捏ね・土製紡錘車)が図化・提示できた。土器は数が多く、42個体を扱った。土師器と須恵器があり、器種はきわめて多様である。食膳用具では、土師器坏(206・208)、同高坏(205・209)、須恵器坏B(199~201)、同坏C(202)、同蓋A(192・193・196)、同蓋B(191)、同蓋C(194・195・197・198)、同盤(203)、同高坏(204)、煮炊き用具では、土師器甕(210)、同小形甕(211~216・218・219)、同甕(217・220・224・225・227・229・231・232)、貯蔵用具では、土師器壺(228・230)、須恵器甕(221・222)、同把手付甕(223)、同壺(226)、と各形態にも様々なものがある。

特に須恵器に珍しい器種がいくつか混じっているので触れてみたい。まず203の「盤」としたものであるが、名称は「皿」のほうが正しい。推定口径25.6cmを測る扁平な外形を呈し、口縁端部には面がある。当地方ではまことに珍しい須恵器だが、東海地方の生糸地道跡や平城宮部の報告では見かける器形である。次に202の須恵器坏Cだが、これも大形で、底径が14.4cmであるから口縁部まで推定復元すると20cm近いものになる。高台は背が高く外方へ開きふんばっている。このように大形の須恵器坏Cはこの地方ではあまり見かけず、前記の「盤(皿)」と同様の性格付けができよう。194



第36圖 第15号住居址



第37図 第15号住居址カマド

の須恵器蓋Cもこの大きな坏Cの蓋である可能性が強い。最後は223の把手付蓋で、広口壺に把手を付けたような外形だが、図示した部位以外の器形は正確にはわからない。やはり当地方ではあまり見たことのない器種であるが、東海地方の生産地遺跡では報告例がある。以上のような当地では珍しい器種が本址からのみ出土したことは、本址が他の住居と時期的に異なるか、特殊な遺構であったかの可能性がある。

本址出土の土器群は、食膳用具に須恵器の坏Bや蓋Cが主流になってくるので、最も新しい時期の指標となり、古墳時代後期4段階にあたる。

手捏ねのミニチュアは3点(5・9・10)あり、9はほぼ完形。土製紡錘車は2点(14・16)で、14は完形。ミニチュアの出土の多さも本址の特殊性を物語るものなのだろうか。

(15) 第16号住居址

遺構 (第38図)

1地区中央部南寄り、(25~31, 40~45)にあり、流路址1を切るが、同時期の遺構のなかでは単独である。主軸方向は、N-78°-Wを指し、規模・平面形は、南北7.0m、東西5.6mの隅丸長方形を呈す。壁は、北と東は垂直に近いが、西と南が緩やかになっている。壁高は北壁30cm、南壁15cm、東壁20cm、西壁18cmを測る。床面は多少の起伏があり、地山の黄色褐色土を叩き締めて構築している。東側の床面にはまばらに地山の小礫が顔を出す。ピットは6個発見されているが、P₁~P₆が主柱穴となる。特にP₂・P₄の掘り方断面には柱痕らしき土層が窺える。P₃・P₅は用途不明。カマドは西壁中央のわずかに北寄りにある。両側の袖はかなり崩れて原形を損なっており、芯に使われていたと見られる石材が露出している。向かって右側の袖は、大きく右に広がって一段高い台状の部分を作っている。両袖間は全面的に被熱している。煙道は長さ1.6mに及ぶ非常に長いもので、幅も30cm近くある。本社のカマドは規模の大きいもので、袖も復元すると1m程の立派なものであったであろう。

本社は床面積が34.8㎡を測り、今回調査の住居址のなかで上位から5番目に大きい住居である。前記第15号住居址同様に、住居の規模に応じてカマド、ピットなどの各施設も大きい作りであった。また、カマド右側の段状の部分は、後述するように一括土器が置かれており、カマドに付随する施設であった可能性は充分ある。

遺物の出土状況 (第39図)

カマド周辺から一括品がいくつか出土したほかは、覆土中から大小の破片で散発的に出土した。しかし住居自体が大きいので総量はかなり多い。

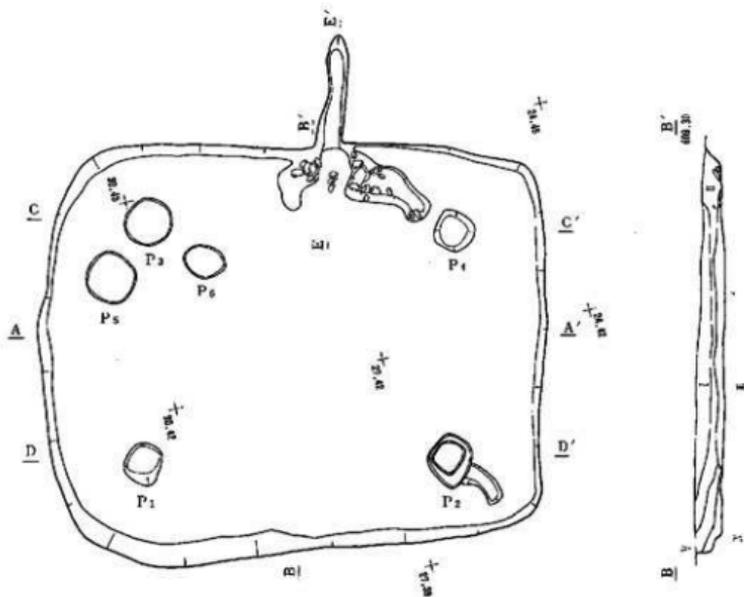
カマド周辺から出土したものでは、258の土師器壺が焚き口部にほぼ原形を保って横転し、その左隣には257の土師器壺の胴部と口縁部の一部が、また左の袖の左外には257の残りの部分が大破片で遺存した。右の袖とその右の段状の部分からは、袖の付け根に260の壺の底部、段状部分に256の小形壺、259・261の壺のそれぞれ底部と胴部が並んでいた。これら6点は強い同時性をもつものとして、一括遺物に認定できると考える。

覆土中から出土したものには一定の傾向がなく、人為的・意図的な状況を見出すことができない。特別な扱いをせず、包括して本社廃絶時前後の土器様相を示すものとする。

遺物 (第83~85図233~261、第134図8、第137図8)

図化・提示できたのは土器、土製品(手握ね)、石器(浮子)、と多種多様である。土器は29点を示した。土師器と須恵器があり、器種は、土師器坏(244~247・253・254)、同鉢(248)、同小形壺(250~252・255・256)、同甕(249・257~261)、須恵器坏B(236・240)、同坏C(241)、同蓋A(233・234・237・238)、同鉢(235・239)、同壺(243)が、揃っている。

須恵器の壺Aのうちの233・234や坏Bの236・240はいずれも中間的な外形で蓋か坏か決めるのが



- 1: 黄土、灰化物混入褐色土
 2: 黄土混入砂質土
 3: 黄色土混入褐色砂質土

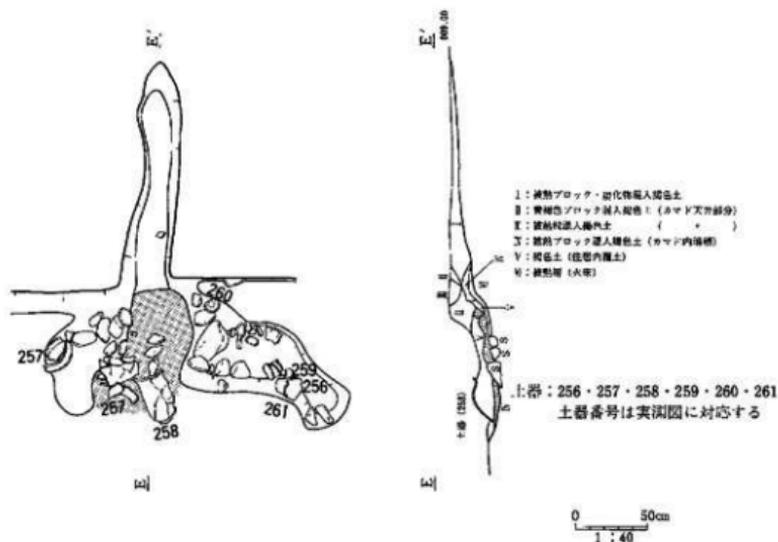


- 1: 灰化物混入褐色土
 2: 黄土混入褐色土
 3: 黄色土ブロック混入褐色砂質土

- 1: 黄色砂質土ブロック混入褐色砂質土
 2: 褐色砂質土
 3: 褐色砂質土
 4: 褐色土ブロック混入褐色砂質土
 5: 褐色土ブロック混入褐色砂質土
 6: 褐色土ブロック混入褐色砂質土

0 1 2 m
1 : 80

第38図 第16号住居址



第39図 第16号住居址カマド

難しい。蓋Aとした233の天井部と体部の間には沈線上の窪みが回るが、坏Bとした236にもよく見るとわずかに窪みが回っている。このように中間的なものを伴うことが時期的な特性となる。

土師器甕の様相が変わり始めている時期でもある。ハケメを持たないそれ以前の甕にハケメの甕が混じり出したのであり、カマドからほぼ並んで出土した土師器の甕257と258はそのことを端的に語ってくれる。

本址土器群は以上に挙げた須恵器と土師器甕の様相からみて、古墳時代後期3段階に相当すると考える。

土製品の手捏ねミニチュアは内外面黒色の破片。石器の浮子についての説明は本章8節。

(16) 第17号住居址

遺構 (第40・41図)

1地区中央部、(15~21, 33~39)に位置し、北に第19号住居址、南に第21号住居址、西に第20号住居址を切る。主軸はN-86°-Wを指し、規模・平面形は南北6.6m、東西6.4mのわずかに南北に伸びる長方形を呈す。壁は全体に緩やかな傾斜をもち、各壁の高さは北30cm、南36cm、東24cm、西30cmを測る。東壁下に非常に低い段がある。床は、黒褐色粘質土と黄色砂質土がブロック状に混じる地山と礫質土の上に、黄色砂質土を貼って堅く叩いている。さらに床の直上には灰の層が広がっている部分があった。ピットは8個検出されたが、P₁・P₂・P₄・P₅が配置からみて支柱穴であろう。P₁(64×60、-36cm)、P₂(40×42、-30cm)、P₄(64×48、-34cm)、P₅(64×60、-20cm)の規模といずれも類似した埋土をもつが、やや浅い。他のピットは用途不明だが、P₃は住居の中軸線上にあり支柱穴であった可能性も捨てられない。カマドは西壁中央にあるが、袖部はかなり崩れている。特にむかって右側の袖は、ほとんど失われており、芯材だったと思われる腰がいくつか現れている。両袖間は復元すると約80cmあり、かなり大きなカマドであったことが窺われる。袖に囲まれた範囲には被熱土粒(焼土粒)が一面に広がっていた。煙道は付け根で少し幅が広がっており、長さ80cm弱を測る。

本址は床面積が36.7m²ときわめて大きく、床などもしっかりした住居址であったが、他の大型の住居と比べると、カマド煙道がちょっと貧弱のような感がある。本址は検出時に重複する第20号住居址と土質の違いが少なく、前後関係の判定に戸惑った。しかし本址カマドに伴う焼土が第20号住居址内にあつたため、それを手掛かりとして前後関係をつかんだ。

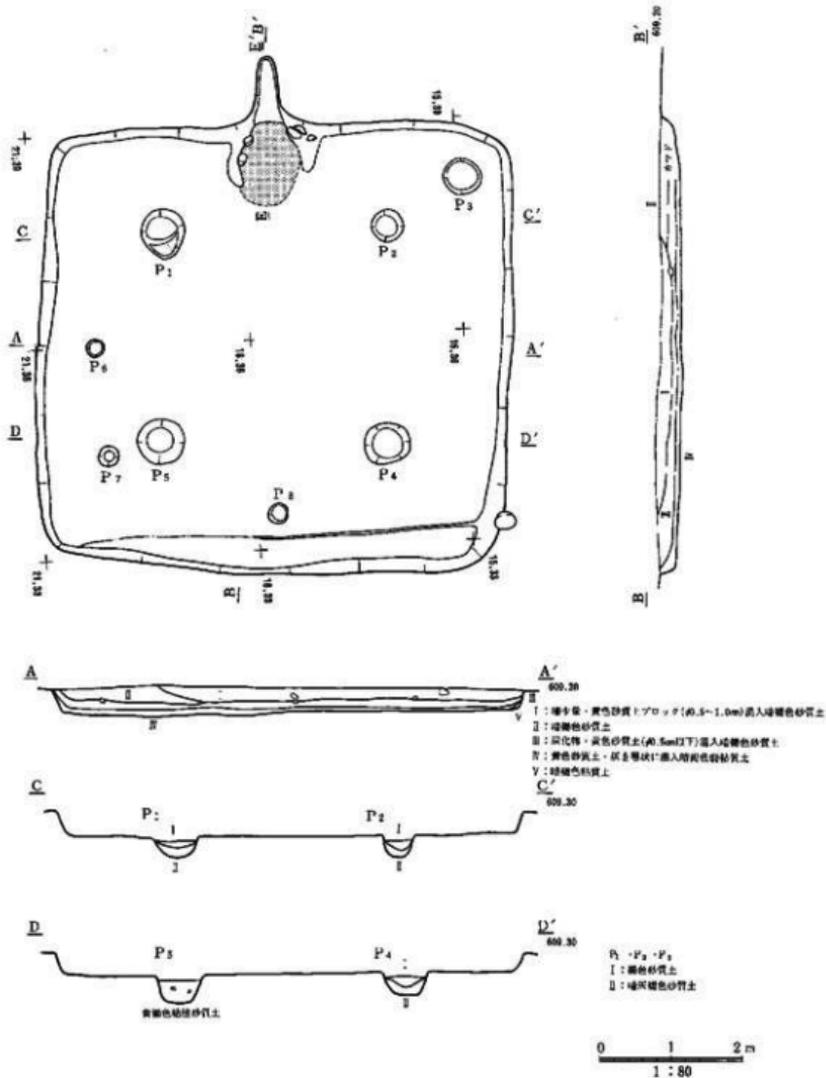
遺物の出土状態

本址からは多量の土器と、鉄器(鎌・刀子)・石器(打製石斧)が出土したが、出土状態が特殊なものはない。すべて覆土中から散発的に出土した。覆土の堆積土層との関連をもった出土状態もない。意図的な投棄・遺棄ではなく、無作為な土器の包含の仕方である。打製石斧は縄文時代のもので混入品。

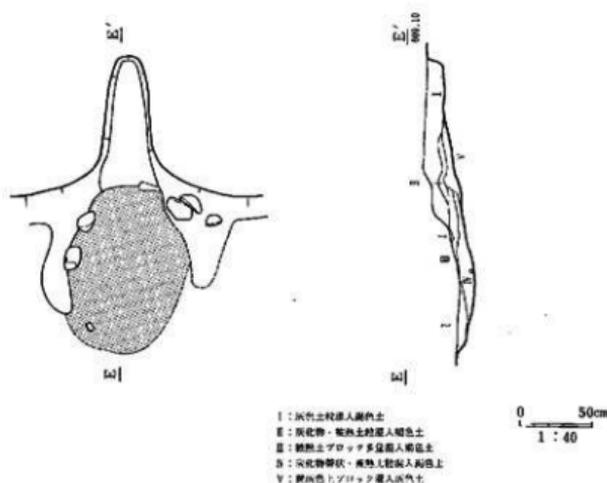
遺物 (第85・86図262~281、第131図9・10、第134図2・3)

土器・鉄器・石器を図化・提示した。土器の数は多く、20点を示す。ただし全形がわかるものは少ない。土師器と須恵器があり、甕は土師器に、坏(270・271)、小形甕(273~278)、壺(279~281)、須恵器に、坏B(262~264)、蓋A(268・269)、蓋C(265)、甌(267)、甌類(272)、が見られる。

土師器の甕は、器面調整にハケメが使われるもの(280・281)と、従来通りのナデ・工具ナデによるもの(279)があり、その違いは対照的である。これは小形甕においても同様で、276と277は口縁部の反り方や胴部の張りなど外形はよく似ているが、ハケメの有無が最大の違いになっている。また小形甕では274・278のような底部が突出するものと、273・276・277の、底面がわずかにあげ底になるものが現れる。前者は古い要素で後者は新規と考える。ハケメについても新来の技法(ハケ



第40图 第17号住居址



第41図 第17号住居址カマド

メ自体は前代からずっとあるが) と捉えたい。

食器用具は須恵器が凌駕し、それが本址出土土器群の大きな特徴となっている。環Bの中には蓋Aと区別がつかないようなものはもうほとんど無く、その点では前出の第16号住居址出土土器群より、確実に新しい様相を持つと言える。また、蓋Aが蓋Cと一緒に存在することも注目すべき点といえる。

以上にいくつか述べてきた事柄は、本址出土土器群が相対的な新しさを有するという事に集約される。遺構としても本址は、古墳時代前期の第21号住居址は別として、同期の第19・20号住居址を切っている。この新しさを、土器群の方からも裏付けられた訳になる。時期としては最も後出の古墳時代後期4段階にあたる。

鉄器・石器については本章8節で触れる。

(17) 第19号住居址

遺構 (第42図)

1地区中央部北寄り、(11~14, 33~37)に位置する。第17号住居址に南壁一帯を切られ、自らも第23号住居址の南東を破壊する。規模・平面形は、西壁の一部が突出し、南北4.8m、東西5.0mを測る不整方形を呈する。主軸方向はN-100°-Eを指している。壁の立ち上がりは、10~15cmと浅く、幾分ならかになる。床は、褐色の砂質土を貼って叩いた堅緻良好なものとなっている。ピットは4個検出されており、方形配列の支柱穴になる。ピットの埋土には小礫・砂礫の混じる部分があり、そのうち3個のピットの土層には柱痕らしきものが現れた。カマドは東壁中央に築かれているが、破壊が進んで、向かって右側の袖はほとんど失われている。袖には芯の石材として用いたと思われる礫が露出・散乱し、その周囲に焼土の面が広がっている。煙道は浅いものが40cmほど延びている。本址のカマドで注目する点は、カマドの軸と住居の軸がずれていることである。住居の平面形と支柱穴の配置はほぼ対応するが、これらのなす軸にたいしてカマドの中心線は約9度、南に振って、ほぼ東西を向いている。視覚的にはカマドに相対した時、カマドがやや右を向くということになる。どのような意図かは不明だが、他の住居址についても詳細に見ると、意図的に軸をずらしてあるものがあるようで、今後の検討課題としたい。床面積は現況19.5m²、推定全形21.0m²。

遺物の出土状態 (第42図右下隅)

床面より若干浮いて、径5~15cm大の礫が住居中央に人為的に集めてあった。多分、本址埋没過程における投入であろう。遺物はほとんどが土器で主としてその礫の間から出土した。完形になるものはないが、一括品も少数あった。この礫の下部、床面近くなると土器は小片がごくわずかに出土するにとどまる。一方、カマドの左脇からは2~3個体分の壺などの大型の土器がバラバラに割れて密集していたが、後日の接合の結果、壺1点(292)、小形壺1点(286)、把手付壺1点(293)、に復元できた。このカマド脇の一群と礫中からのものは性格も、廃業時期も異なるものと考えられる。

遺物 (第86~88図282~293、第131図11)

図化・提示できたのは土器と鉄器(器種不明)である。土器は12点を示したが、すべて土師器で構成される。器種は、坏(282・283)、小形壺(285~287)、壺(288・290~292)、甗(284)、壺(289)、把手付壺(293)、にわたる。このうち239・292・286はカマドの脇から出土したもので、いずれも全形に分かる一括品であった。特に293の把手付壺は非常に珍しい器種であるうえに、ほとんど全形を残していて、この器種の代表的な資料となろう。

本址出土の土器群は、高坏を欠くが、土師器だけで構成される土器のセットをよく示している。出土状態により2群に分かれるが、大枠では一緒に取り扱って構わないものと考えている。

本址土器群の時期的な位置付けは、古墳時代後期2段階くらいに置きたいがやや遡る傾向もある。しかしそうすると本址に切られる第23号住居址の土器様相も問題になるところである。

(18) 第20号住居址

遺構 (第43・44図)

1地区中央部(16~21, 39~44)に位置する。東壁を第17号住居址に、西壁の一部を第18号住居址に切られる。主軸方向はN-90°-Wで、規模・平面形は、南北6.9m、東西6.2mの、南北にわずかに長い長方形を呈す。壁はいずれも高さが30cm前後で、なだらかな傾きをもつ。床は、状態が部分的に異なり、中央部は黄色砂質土の堅緻な貼り床、周辺部は暗褐色土の覆土(住居竪穴の掘り方埋め土か)をそのまま叩いて床としていた。床面全体は平坦だが、わずかに南へ向い緩傾する。ピットは5個が検出され、P₂~P₅が主柱穴になる。P₂(80×60、-60)、P₃(70×70、-60)、P₄(60×50、-66)、P₅(64×60、-64)、の規模をもち、いずれも他の住居のものに比してひととき大ききい。深さも平均60cm以上あり、土層断面に柱痕跡を見事に残していた。カマドは西壁中央にあり、大きな袖と長い煙道をもつ、残りの良いものであった。袖は長さ約1m、幅(厚さ)はそれぞれ50cmほどあり、黄褐色の弱粘質土で固めてあった。両袖の付け根に近い部分には長径25cmほどの窪みがあり、芯に使った石材の抜き取り痕かとも考えたが、浅すぎる感もする。袖の内側には天井部へのせり出しがわずかに残っており、袖間はよく焼けて、土器片が重なり合って詰まっていた。煙道は長さ1.4mを測る長大なもので、内部には焼土ブロックが含まれていた。このほかの住居内施設として、カマド右前方にあった群障(第44図)を取り上げる。この障は大きさも近似し、上面の高さがある程度揃うように床上に置かれていて、あたかも何らかの台あるいは基礎のような観があった。カマドに伴う施設の一部と考える。本址の床面積は現況で34.5m²、推定復元すると39.4m²という、本調査第2位の規模である。

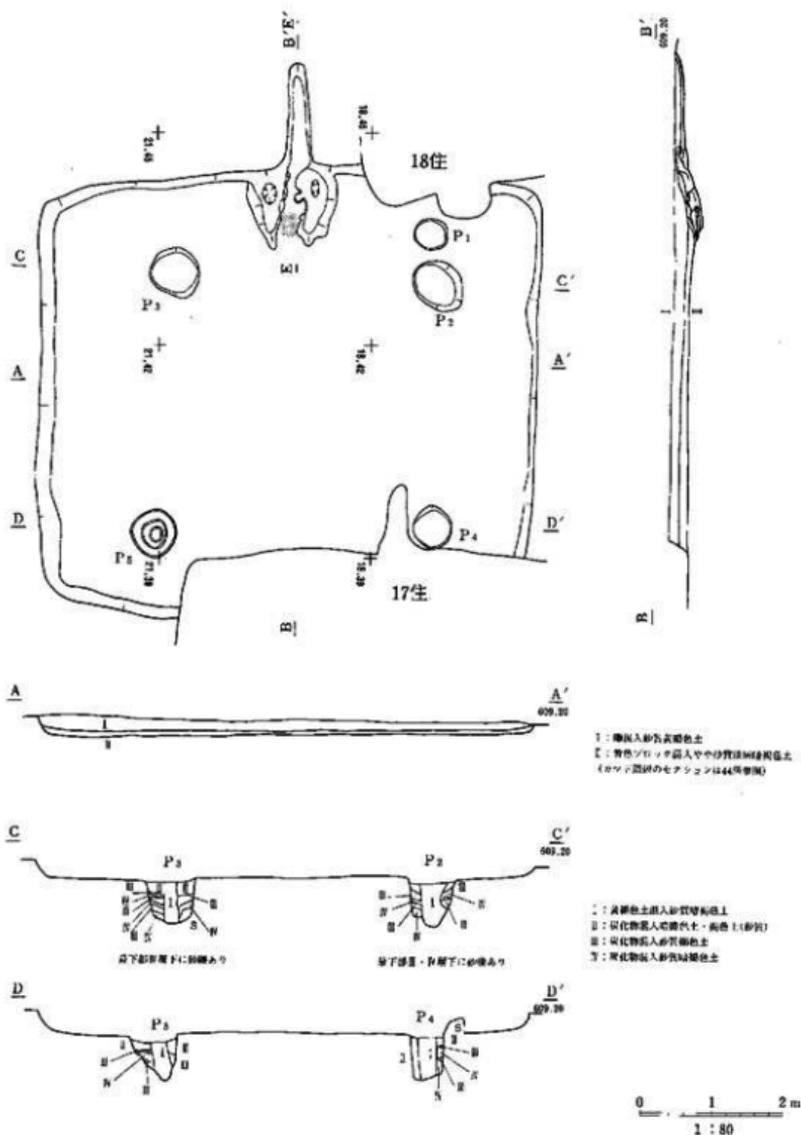
本址は住居自体の規模も大きいものであったが、カマド・柱穴のいずれをとっても最大で、この時期の住居の好例として記録に示すことができる。

遺物の出土状態

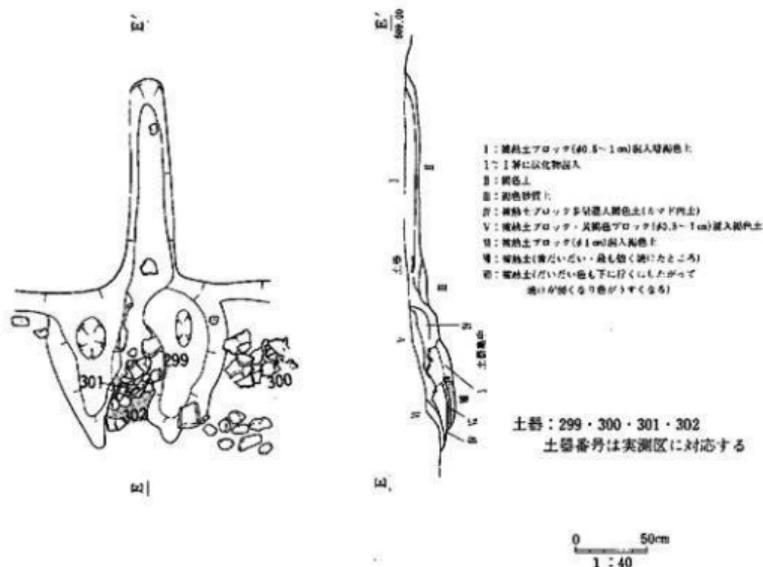
量的に非常に少なく、土器の中小片が散発的に出土する程度であった。住居の面積に比して総量が少なく、遺物の包含密度が低いという表現が適切であろう。ただしカマド周辺からは良好な出土状態を示した。まずカマド内に重なり合って詰まっていた土器片は、3個体の壺・小形甕に復元された(299・301・302)。またカマド北側にひとかたまりであった土器も1個体の壺になった(300)。これらと覆土中から出土した小片は、廃棄・遺棄の性格がまったく異なるものと考えたい。しかし期的なことであれば、一括して扱っても問題はないであろう。

遺物 (第88・89図294~303)

図化・提示できたのは土器のみ10点に過ぎない。うち須恵器が1点で他は土師器である。罎は土師器が坏(295)、高坏(296)、壺(300・302)、小形甕(297~299・301)、壺(303)、須恵器が坏A(294)となっている。295の土師器の坏は高坏の坏部である可能性もある。296の土師器の高坏の脚部は破片なので詳しくはわからないが、縦に細長い透かしが3単位で刻まれていた跡がある。高



第43図 第20号住居址



第44図 第20号住居址カマド

坏の脚に透かしを入れるのは通例須恵器の場合で、本例は珍しい。そもそもこの時期の典型的な高坏は第70図44・45の様な形態をなしており、その点で本例は須恵器模倣品か、高坏ではないまったく別のものの可能性もある。294の須恵器は坏Aの底部と推定したが、あるいは壺型になるのかもしれない。底面にヘラ記号がある。300の壺はカマドの北隣りからまともに出土したものであるが、ほぼ全形が復元された優品で、割部の張りや最大径の位置に特徴がある。底面には何らかの圧痕が残っている。298の小形壺はカマド内から出た破片だが、口縁に1か所の片口が付けられている。

本址出土の土器群は、須恵器を含む率が低く、基本的に土師器で構成されている。これは古いほうの要素であり、個々の土器をみても、壺はやはり古く位置付けるものである。ここから、本址出土土器群の時期は、古墳時代後期2段階を導きたい。

(19) 第22号住居址

遺構 (第45図)

1地区北部中央、(4~7, 35~38)に位置し、第23号住居址の北部と第4号建物址の南西隅掘り方を切る。ただし本址のほうが第23号住居址よりも浅い。主軸はN-93°-Wを指し、規模・平面形は、南北3.6m、東西4.0mの隅丸長方形を呈する。壁は壁高が5cm前後と非常に浅く、立ち上がりはなだらかである。床は、第23号住居址と重複しない部分は黄褐色砂質土の堅い床、重複部分は同住居址の覆土である黒褐色土を叩き締めて構築してある。床面積は13.6m²を測る。ピットは小規模なものが6個検出されたが、主柱穴とは考えられない。カマドは西壁中央やや南にあったらしく、袖の削られたような痕跡や火床の焼土が周辺に集まっている。煙道の検出もない。

本址は非常に浅く、柱穴とはっきりしない住居であったが、床面は良好で、カマドが存在していたことも明確である。

遺物の出土状態

住居址中央の床面より2~5cm浮いて土器の一括品が4点(305・306・308・310)出土した他は土器の小破片が少量出土したのみである。住居自体が小さい上に覆土が薄く、遺物の出土量は非常に少ない。

遺物 (第89図304~310)

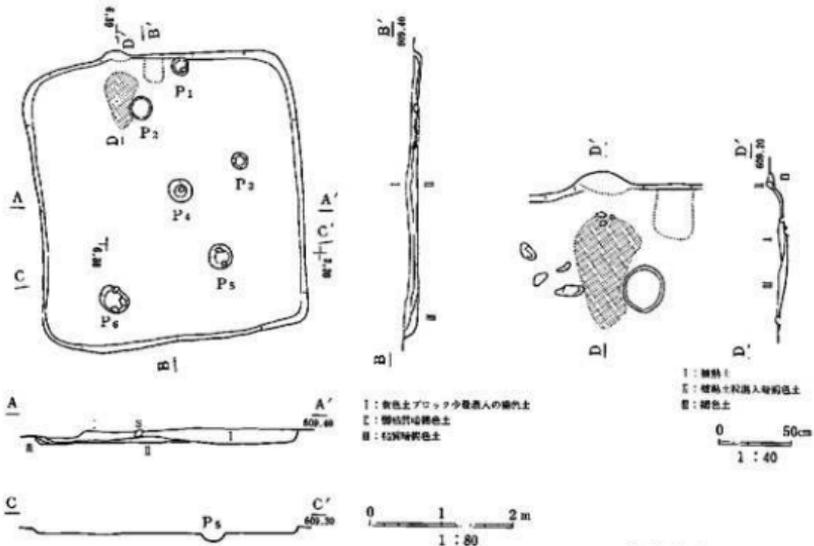
土器のみ7点を図化・提示した。土師器と須恵器があり、器種は土師器環(304・305)、高環(306)、壺(309)、甕(310)、須恵器環B(308)、蓋B(307)に分かれる。須恵器環Bの存在からこの土器群の時期は古墳時代後期4段階に属する。このことは住居址の切り合い関係にも矛盾はない。

(20) 第23号住居址

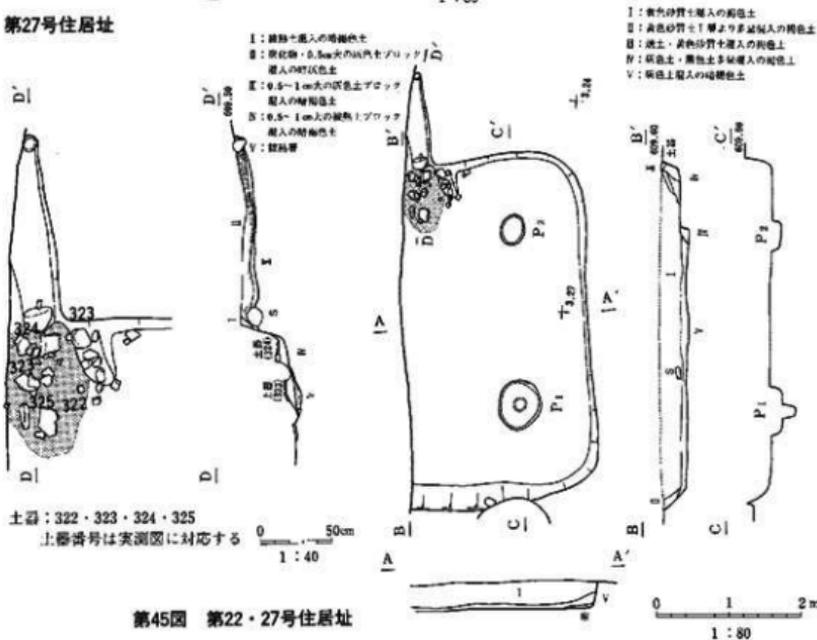
遺構 (第46図)

1地区中央北寄り、(6~11, 34~40)に位置する。北部を第22号住居址に、南部を第19号住居址に破壊されるが、第22号住居址は本址より若干浅いため、北部のプランは幸うじて捉えられた。このほかにも大きなピットが4個、住居内に切り込んでいた。主軸はN-96°-Wを指し、規模・平面形は南北5.0m、東西4.8mの隅丸長方形を呈す。壁は、壁高が北12cm、南8cm、東12cm、西10cmと非常に浅く、壁の傾きの状況などはっきりしない。床は、中央部から南は黄色砂質土に褐色砂質土を混じえた堅緻な床で、貼り床である可能性もある。北半分は、地山の黄色砂質土を叩き締めた床であった。床面積は、現況の残存部分で17.4m²、推定復元は21.7m²を測る。本址に付随すると見られるピットは、P₁が1個だけである。54×40、-40cmの規模をもつ。方形配列の主柱穴の一つとしての位置には適合するが、他の3個のピットは見当たらない。カマドは西壁の中央にあり、長さ30cmほどの短い煙道を壁外へ突き出している。袖などはかなり低く、崩れて原形は損なわれている。周辺には袖の芯に使ってあったと見られる20cm大の礎が数点散乱している。袖間の被熱土の範囲は

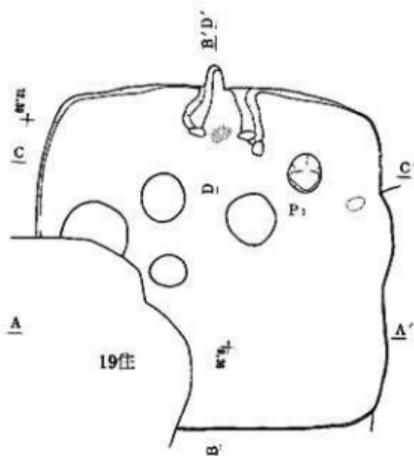
第22号住居址



第27号住居址



第45図 第22・27号住居址



- I : 褐色土層上の埋設物跡土
- II : 褐色土層下の埋設物跡土
- III : 赤土・灰土・灰褐色土層
- IV : 灰土・灰褐色土層
- V : 埋設物跡土
- VI : 埋設物跡土



- I : 0.5~2m大の赤褐色ブロック層入褐色土
- II : 0.5m大の黄色土ブロック層入褐色土
- III : 灰土・埋設物跡土ブロック層入褐色土
- IV : 灰土による赤褐色土
- V : 褐色土(埋土)
- VI : 埋設物跡土(灰土)

- I : 0.5m大の黄褐色土ブロック層入褐色土
- II : 0.5~3m大の赤褐色土ブロック層入褐色土

0 1 2 m
1:80

土器 : 312・314・315・316・318・319
番号は実測図に対応する



第46図 第23号住居址

40×30cmと狭い。

本址は遺構の重複の面からは、古墳時代後期のなかでは他のすべてに切られるという、最も古い遺構の一つにあたる。本址北東にある第4号建物址とその周辺のパットは第22号住居址に切られるが、本址の内部に出てきたパットはこの続きの可能性もある。

遺物の出土状態

土器と混入した縄文時代の石器が出土しているが、覆土中には土器の小中破片が点在した程度である。ただカマドの左袖の外側を中心にカマド一帯からはいくつかの土器の一片品や大形破片が出土している。これらには接合され図示できたものも多い。

遺物（第90図311～319）

土器を9点、石器（打製石斧）を1点、図化・提示した。土器はいずれも土師器で、器種は高坏（311）、甕（315～318）、小形甕（312～314）、甕（319）である。317の甕は全形がわかる大形品で、胴部に張りを持つ。319の甕は大きな鉢形の外形を呈すが、底面には直径3cmの穴があいている。今回の調査で出土した土師器の甕は、大形の逆円錐形の下を切り取ったような形のは見られず、小形で砲弾型や本例のような鉢形ばかりである。

本址は前述のように遺構の重複から見ると古墳時代後期では最古の部類に入り、したがって伴う土器群も同様の様相を示すはずである。その点については、須恵器がないこと、土師器の甕に胴部の張るものがあることから、ほぼ満足のいく結果といえよう。従って古墳時代後期1段階に相当する。

(21) 第27号住居址

遺構（第45図）

1地区北東部、(1～6, 25～30)に位置する。第28号住居址（古墳前期）、第61号住居址（古墳後期）を切り、北側半分は調査地区外へかかる。第4号建物址とわずかに重複し、切られている可能性がある。残存規模は東西は本来の大ききで4.9m、南北が現況2.4mを測り、推定の平面形は一辺が4.9～5mの隅丸方形をなすものと見られる。壁は西壁が傾斜を有すが、南と東は垂直に近い。壁高は南壁40cm、東壁40cm、西壁30cmを測り、しっかりした掘り込みである。床は、1～3cm大の礫が混じる、黄色砂質土と黒褐色粘質土の斑状の地山を堅くしたもので、良好である。パットは2個検出されたが、P₁には柱痕らしき円形の落ち込みがある。住居コーナーから等距離の位置関係にあり、方形配列の支柱穴のうちの2個と推定する。カマドは東壁の中央部と推定されるところにあり、北側の袖は調査区域外に隠れる。袖はかなり崩れて、芯に使われた石材が袖上に露出している。煙道は1.4mを測る長大なものであった。

遺物の出土状態

土器と石器が出土しているが、土器は一般の覆土中からは小破片が散発的に出土する程度で量は

少ない。まとまった出土状態を示したのはカマド内で、大形の土器片がいくつか存在していた。これは後口の接合で1個体の壺となった。石器は磨製石包丁で覆土の中層から単独で出土した。本址に属するものとはおよそ考えられず、では、本址に切られる古墳前期の第28号住居址に属するかどうかというもう少し時期を遡るもので、結局出自は不明であった。

遺物 (第91図320~325、第134図7)

土器6点、石器(磨製石包丁)1点を図化した。土器には土師器と須恵器があり、器種は、土師器甕(322~324)、小形甕(320・321)、須恵器甕(325)である。323の土師器の甕は今回調査の甕で全形がわかるもののうちで最も器高が高い。324の甕は胴部のケズリ調整が著しく強く、甕Fの一種と見る。

(22) 第29号住居址

遺構 (第47図)

1地区北端部、(1~2, 37~41)に位置する。本址の大部分は調査区域外にかかり、南側を程程調査できたにすぎない。規模・平面形は不明だが、調査区境界線上での東西の幅は、4.4mを測る。壁は高さが40cm前後あり、しっかりした掘り込みである。床は、本址付近の地山が黄白色の砂質土のため、そのまま用いてあり、あまり堅さはない。平坦で起伏が少ない。伴う施設は検出されなかった。

遺物 (第91図326)

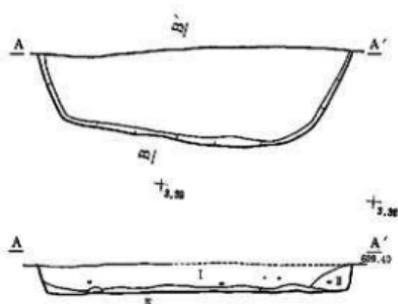
本址からの遺物は、調査面積が狭い上に、出土が散発的で量が非常に少ない。土器のみがあり、図化・提示できたのは、土師器の坏1点だけである。体部に稜がありそれ以上が外反する外形を呈す。相対的に古いもので、他の土器片に須恵器が混じらない点とともに、本址を古墳時代後期2段階に置きたい。

(23) 第30号住居址

遺構 (第47図)

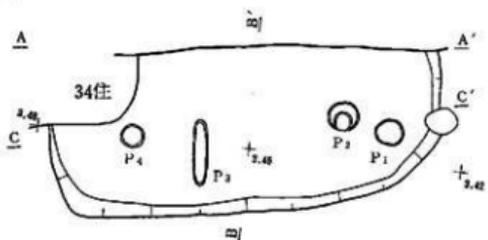
1地区北端部、(2~4, 43~48)に位置する。北側半分以上が調査区域外にかかり、西側は第34号住居址に切られる。また南西隅がわずかに第33号住居址を切る。東西5.5m、南北は調査部分で2.4mを測る。主軸N-80°E、規模一辺5.5mくらいの隅丸方形の住居になると推定する。残存の現況床面積は9.4m²である。壁は、各部とも40cm前後の壁高をはかり、下部は床から徐々に立ち上がり上部がほぼ垂直になる。床はやや軟弱で、黒褐色粘質土の地盤に、わずかに褐色砂質土と黄色砂質土を貼って構築している。カマドは東壁と調査区域境界が交わるあたりの土層に焼土と黄色の粘質土が見え、そのすぐ奥あたりにあると推定する。即ち東壁に設けられている。ピットは溝状のものも含めて4個検出されている。P₂・P₄が位置的には主柱穴にふさわしいが、規模が小さすぎる観

第29号住居址



- I : 0.2~0.7m位の層・0.7~1m人の灰色・褐色の埋積色土
- II : 黒褐色粘質土
- III : 灰褐色砂質土
- IV : 灰褐色粘質土

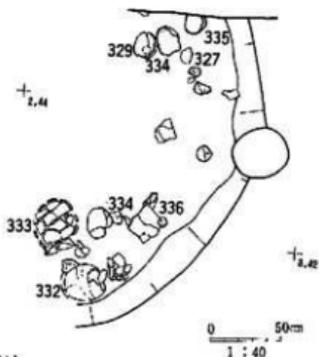
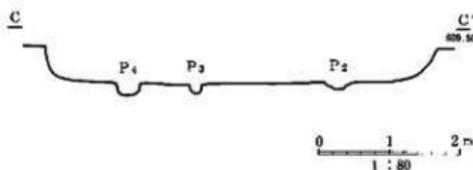
第30号住居址



- I : 暗黄褐色砂質土
- II : 黄褐色粘土ブロック埋人の黒灰色粘質土
- III : 暗黄褐色粘質土
- IV : 灰褐色の暗黄褐色土
- V : 灰褐色砂質土



土器 : 327・329・332・333・334・335・336
番号は尖頭図に対応する



第47図 第29・30号住居址

がある。

遺物の出土状態 (第47図右下)

全般的な覆土中からは土器の小破片が散発的に出土する程度であったが、南東コーナーの覆土下層からカマド推定地にかけての範囲を中心に土器の一括品が何点か出土した。この付近一帯は、壁の中位から床面にむかって焼土ブロックを多量に含む端部堆積土(三角堆土)があり、これら一括品はその上面に沿って転がり込んだような状態で出土した。また、焼土を含む端部堆積土の中には内外面に熱を受けた痕跡の明瞭な大形破片が含まれていた。覆土中から散発的に出土したものと、南東端部一帯に残されていたいくつかの一括品、それに端部堆積土内からのものは、3者とも廃棄・遺棄の性格の違うものであろう。「一括遺物」の認定にはこれを混同してはならない。しかし時期的には大差はなく、ひとまとめに見て差し支えないであろう。

このように良好な土器の出土状態を示した本址の調査が、その半分しか及ばなかったことは非常に残念である。

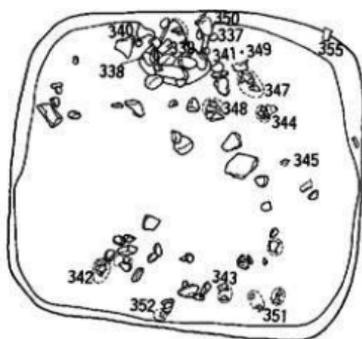
遺物 (第91・92図327~336)

遺物は土器のみで、10個体を図化・提示できた。このうち南東部から出土したのは、327・329・332・333・334・335・336の7個体である。土師器のみで、器種は、坏(330・331)、高坏(327)、甗(328・329)、壘(334・335)、壺(332・333・336)が見られる。330の土師器坏は、新しい時期の須恵器蓋坏を模倣したものと指摘されている。3点の壺は、大小の寸法(「規格」とまで言ってもいいか)を持ち、長い古墳時代の壺の伝統の最後を飾る土器を示している。壺が多いので、一見して、今回調査の古墳時代後期のなかでは特に古い様相のように感じるが、その他の器種から見るとそれほど差はないと考える。時期は、第33号住居址との重複関係もあるので古墳時代後期2段階としておくが、遡る可能性もある。

(24) 第32号住居址

遺構 (第48図)

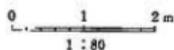
1地区中央北寄り、(7~13, 48~53)に位置する。第33号住居址の南西隅を切り、第31号住居址に接する。平面形は東西4.4m、南北4.9mの隅丸長方形で、主軸方向はN-80°-Wを示す。壁は直に掘り込まれ、壁高は約40cmを測る。床は、北半では掘り方をそのまま用いた下層の地盤の黒色弱粘質土を、また南半では黄色砂質土と褐色砂質土を僅かに貼って床面としている。全体的には平坦で堅緻である。床面積は17.7m²を測る。カマドは西壁中央に構築されている。石芯粘土カマドで遺存状況は良く、黄色粘土を用いた袖の他、天井部・煙道も確認された。芯材として利用された石はカマド周辺に遺存しており、その大きさは10~50cm大であった。火床は80cm×50cmの範囲で、被熱土の堆積は厚いところで10cmを測る。この中にはブロック状に堆積した被熱土と炭化物の混入があり、一度、火床中をかきまわしたと考えられる。ピットは、P₁(50×40、-16cm)、P₂(68×44、-18cm)、



遺物出土状況

337:	高坏	土師器
338:	坏	*
339:	鉢	*
340:	坏	*
341:	*	*
342:	鉢	*
343:	*	*
344:	瓶	*
345:	*	*
347:	壺	*
348:	*	*
349:	*	*
350:	*	*
351:	*	*
352:	*	須恵器
355:	壺	土師器

番号は実測図に対応する



第49図 第32号住居址遺物出土

P_3 (40×32、-24cm)、 P_4 (52×52、-40cm) の4ヶが検出された。何れも砂質土が優勢であり特に P_3 中には砂礫が多く含まれている。また、 P_4 のI層は柱痕と考えられる。 P_1 ・ P_2 が浅いものの、配置から支柱穴とみて間違いないであろう。覆土は概ねI層：焼土・炭化物を少量含んだ砂礫質の褐色土、II層：粘性の暗灰色土を含む褐色土の堆積である。このうちI層中には、5～20cm大の礫が多数みられ、これらは人為的に投入されたものと判断された。

遺物の出土状況 (第49図)

土器、鉄器が出土した。土器はI層の人為的に投入された礫中より一括品がいくつか出土している。また、カマド脇のかなり高い位置からも一括品の土師器壺などが得られた。土器の小片は覆土上層から下層まで散発的に出土した。一括品に対し、その他の覆土中からの小片には、廃棄の性格が異なるものもあろうが両者の分離は不可能である。

遺物 (第93・94図337～355、第131図12)

土器19点、鉄器1点(鉄)を図化・提示することができた。土器には土師器と須恵器があるが須恵器は非常に少なく、図示できたものも1点に過ぎない。器種は、土師器に坏(338・340・341)、高坏(337)、鉢(339・342・343)、瓶(344・345)、壺(347～351・353・354)、小形壺(346)、壺(355)、須恵器には壺(352)、である。2点のうち瓶のうち1点は底部に単孔、他は細かい孔が多数あけられるという違いが対照的である。土師器の食膳用具に全形のわかるものが多く、非常に良好な資料となった。古墳時代後期2段階に比定される。

(25) 第33号住居址

遺構 (第50図)

I地区中央北寄り、(4~10, 44~51)に位置する。北壁・南西隅・東壁を、それぞれ第30号住居址・第32号住居址・第55号住居址に切られる。平面形は5.80×5.80mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-79°-Wを示す。壁はほぼ直に掘り込まれ、壁高は約40cmを測る。床面は黄色砂質土をたたきしめ、固く良好である。東西にゆるやかな傾斜をもっているが、ほぼ平坦である。カマドは西壁中央に構築されている。石芯粘土カマドで、袖と煙道が遺存し、石材はカマド内及び周辺に落ち込んでいた。火床は80×40cmの範囲で、そこからカマド前面にかけて被熱土が堆積している。その厚さは約10cmを測る。奥壁は、ややすばまったうえで、ゆるやかにたちあがり煙道へ続く。煙道は壁より130cmのび、掘出しと考えられる部分には炭化物もみられた。ピットは5ヶ検出された。このうち、P₂(43×41×48cm)、P₃(63×54×27cm)、P₄(40×31×40cm)、P₅(67×36×50cm)の4ヶが配置・規模から支柱穴と考えられる。なお、P₅は当初1ヶのピットと考えられたが、断面の土層観察より重複(I層の堆積部分)が確かめられた。床面積は27.5m²を測る。

遺物の出土状態 (第51図)

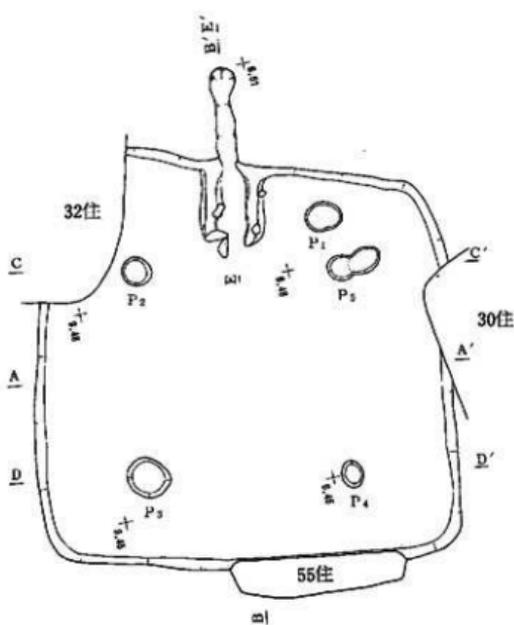
土器以外の遺物はない。覆土I層下面、II層中に径10~30cmの罫が2~3か所にまとまってあり人為的に投入されたものと判断したが、この罫の間や上層から大小の土器の破片が出土した。しかしこの罫のある層より下の床に至るまでは出土数が非常に少なくなり、しかも小破片ばかりとなる。また、カマド内と周辺からは一拵品が何点か出土した。特にカマド左袖の外側には、土師器壺の一拵品(367)が袖に寄り掛かるように遺存していた。これらの土器は、罫中とそれ以上からのもの、罫以下のもの、カマド周辺からのもの、の3種に分けて捉えることが考えられるが、いずれも時期的な差はない。

遺物ではないが、前述の覆土中の罫のなかで北西隅にあるものは大きさがそろい、かなりまとめである。床面より浮いていたので、本址の施設ではないのであろうが、何らかの意図を持って置かれたものである可能性がある。

遺物 (第94・95図356~369)

14点の土器を図化・提示した。須恵器は1点もない。器種は、土師器の坏(356~358)、鉢(361)、小形壺(359)、甕(363・365~368)、小形壺(360・362・364)、壺(369)である。364は頸部のくびれ具合からみて小形壺ではなく「小形の壺」と言ったほうが良いかもしれない。359の小形の甕形の土器は、ミガキが施されている点から壺として扱い「小形壺」に分類した。356の体部に稜のある坏や、357・358の体部下端に稜のある坏は、本址を含めて4・5棟の住居からしか出土しておらず、そのほとんどが本址のように遺構の重複の古い方である。土器群の相対的な前後関係の指標になろう。

本址は先の第23号住居址や、後述の第44号住居址と同様、周囲にある遺構のすべてに切られる、そのまとまりのなかでは最も古い遺構の一つである。従って出土土器もその周辺の住居からのもの



- I : 竪堀内埋戻土
- II : 穴すみに沿って黄色砂質土ブロック層入埋戻色砂質土
- III : 穴すみが深く、扉平柱等の太4段埋色砂質土
- IV : 0.5m程度の黄色砂質土塊状に為人の埋堀内砂質土
- V : 穴に沿って黄色砂質土塊より多量埋入の埋戻色砂質土 (セキド草垣のマツションに21型参照)

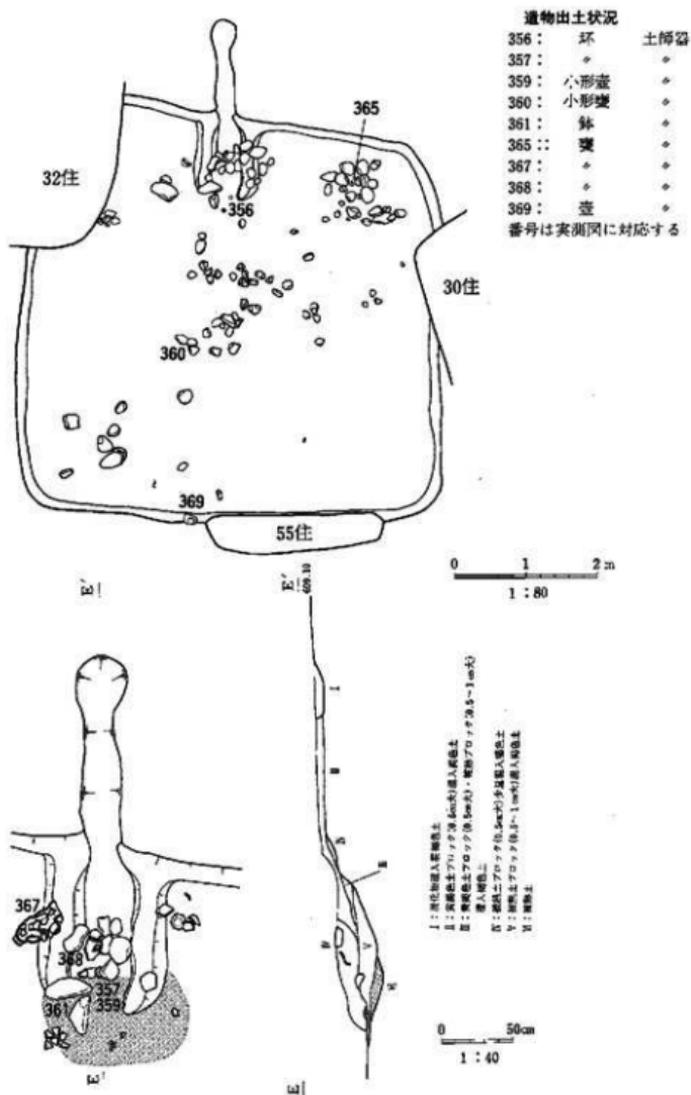
- I : 埋色砂質土
- II : 1m程度の黄褐色土ブロック埋入埋色砂質土
- III : 1.5~2m程度の黄褐色土ブロック埋入の埋堀内土
- IV : 0.5~1m程度の黄褐色土ブロック埋入の埋堀内土
- V : 黄褐色砂質土

- I : 0.5~2m程度の黄褐色土ブロック埋入埋堀内土
- II : 0.5m程度の黄褐色土ブロック埋入埋堀内土

- I : 埋色砂質土
- II : 1~2m程度の黄褐色土ブロック埋入埋堀内土

0 1 2 m
1 : 80

第50図 第33号住居址



第51図 第33号住居址遺物出土・カマド

より古柁を帯びていなければならない。その点についての詳しい検討は第5章で触れるが、ここに示したものはある程度それを満足させるものと考えている。本址出土土器は古墳時代後期1段階に位置付けられる。

(26) 第36号住居址

遺構 (第52図)

1地区中央部西寄り、(22~25, 51~53)に位置し、第35号住居址に切られ、第37号住居址を切る。主軸方向はN-0°、規模・平面形は、南北3.8m、東西3.4mの長方形を呈する。壁高は8cm前後と非常に浅く、掘り込みの傾斜などははっきり確認できない。床は地山をそのまま用いているようだがあまり堅くなく不明瞭、地山は礫を多数含む黒褐色粘質土で塊状に壊れていくというものであった。床がこのようなものなのでピットの検出は難しく、見落としがあるかもしれない。見つかったピットは、北西隅に2個、南西に1個だが、いずれも柱穴とは結び付かない。カマドは北壁中央部のやや西寄りにあり、北端部を第35号住居址に破壊されている。袖もまったく削られ、火床だったと見られる、わずかに窪んだ部分の底に被熱土が残って、袖の石芯が点在する。床面積は11.7m²を測る。

遺物 (第95図370・371)

土器のみが出土しているが、浅く狭い住居址であったので量は非常に少ない。出土状態も散発的でまとまったものはない。図化・提示できた土器は2個体のみ、しかも全形を知りえない。いずれも土師器で、器種は甕(370)と壺(371)である。時期はかなり不確実な推定で、古墳時代後期2段階をあてる。

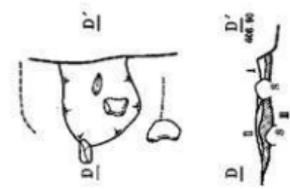
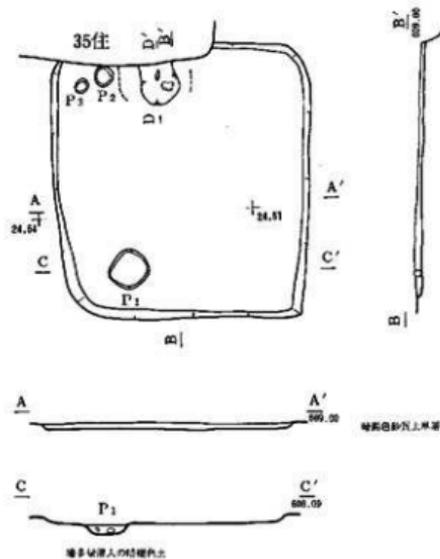
(27) 第37号住居址

遺構 (第52図)

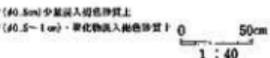
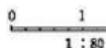
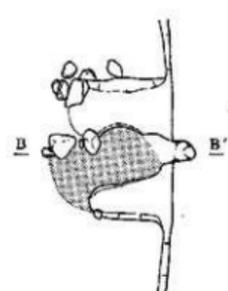
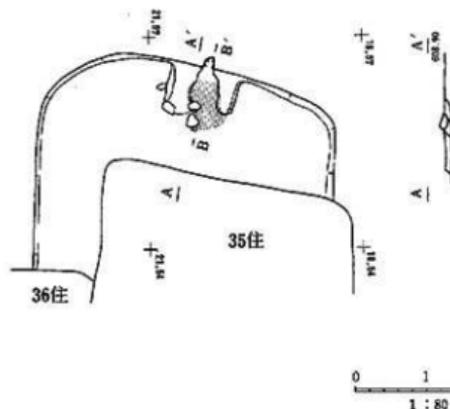
1地区中央部西寄り、(19~22, 54~56)に位置し、第35・36号住居址に切られる。規模・平面形は、一辺4m前後の隅丸方形と推定される。主軸方向はN-80°-Wを指す。壁は高さが数cmしかなく、傾斜などの状態はまったくわからない。床面は礫が多量に混じる地盤がむき出しになっており、ピットなどは検出できなかった。カマドは西壁中央にあり、両袖とその間に焼土を残している。本址自体が非常に浅いのでカマドの袖も上部はかなり削られているはずだが、天井部へのせり出しもわずかに残っている。煙道は壁外へ約20cmほど延びているが、本来の長さではないであろう。

本址を含む第35~37号住居址が重複する一帯は、地盤が礫質で一定せず、加えて各住居の残存状態が悪く、遺構検出およびその後の掘り下げには、プラン確認・再確認の連続で非常に苦労した。最終的に第52図に示す形になったが、出土土器などが混じって、整理段階で帰属住居を変更したこともある。

第36号住居址



第37号住居址



第52図 第36・37号住居址

遺物 (第95・96図372~377)

土器片が散発的に出土した。狭く浅い住居なので量も非常に少ない。図化・提示できたのは土師器が6点のみである。器種は、坏(372・373・375・376)、甕(377)、小形甕(374)、がみられる。時期は古墳時代後期2段階を推定するが信頼度は低い。

(28) 第38号住居址

遺構 (第53・54図)

1地区中央やや西寄り、(28~34, 47~54)に位置し、4Cの流路址1を切っている。平面形は南北6.8m、東西6.3mの僅かに南北に長い隅丸長方形を呈す。また、主軸方向はN-85°-Wを示している。壁はほぼ直に掘り込まれており、壁高は約40cmを測る。床は掘り方をそのまま用いている。流路の影響であろうか、灰色粘質土と黄色・黄灰色砂質土に小礫が混じる床面となっている。南北にやや傾斜をもっているが平坦であり、床面積は36.4m²を測る。カマドは西壁中央に設けられている。石芯粘土カマドで、粘土袖と煙道が遺存し、石材はカマド内に落ちこんでいた。火床は、140cm×95cmの範囲で、被熱土が約5cm堆積している。奥壁はやや急にたちあがって、長さ200cm、幅35cmの煙道へと続く。ピットはP₁(62×58×32cm)、P₂(73×65×18cm)、P₃(38×34×13cm)、P₄(76×70×26cm)、P₅(98×86×21cm)の5ヶが検出された。このうちP₁は二段底を呈しており柱痕と考えられる。配置からP₁・P₂・P₄・P₅の4ヶが主柱穴となる。規模のわりには浅いこと、他の住居址の主柱穴に比べ、より隅に近いことが特徴としてあげられよう。

本址も今回調査のなかでの大形住居の一つである。面積こそ第17号住居址に次いで第4位だが、煙道の長さは最長。隅丸長方形だが各辺がわずかに胴張り状になって作る独特の平面形の量感は圧倒的である。尚、主軸と直交方向の土層図がないのは、調査中の強い降雨のため観察用の群が崩れて測図不能になった理由による。

遺物の出土状態

覆土の全般にわたり、土器の小破片が点在していた状態で、大形の住居の割に量が少ない。唯一まとまって出土したのは、東壁の中央部付近に、床から覆土中層くらいの範囲にかけて遺存していた土師器の把手付煮の大型品のみである。カマド周辺に一括品が集中しているということもなかった。

遺物 (第96図378~386)

9点の土器が図化・提示できただけで、大形の住居にしてはあまりに寂しい。土師器と須恵器がある。器種は、土師器が坏(378)、高坏(379)、甕(385)、小形甕(383)、壺(382)、把手付壺(386)、須恵器が壺または瓶と思われるもの(380・381)が見られる。381の須恵器は平瓶か提瓶の口縁部、380は長頸壺の一種の肩部以上と推定する。386の土師器把手付壺は、大形の壺の胴部に穴をあけ、把手を指し込んで接着させたもので、非常に珍しい器種といえる。今回調査では第19号住居址と第

44号住居址から1点ずつ出土しているだけである。第147図に集成を行っているので、参考にされた。本址出土土器群の時期を考えるのにまず須恵器の存在が問題になるが、ここに示した須恵器は壺・瓶という比較的可成りな器種で、坏と蓋の出土はない。あまり考慮に含めなくとも良いのではないかと考える。それで古墳時代後期2段階をあてはめたい。

(29) 第39号住居址

遺構 (第55図)

1地区南部西寄り、(39～41, 50～53)に位置する。第5号建物址と重複し、同址の掘り方4個に切られる。規模・平面形は、南北3.2m、東西3.4mの隅丸長方形を呈し、主軸はN-5°-Wをとる。壁は一律に高さ20cmを測り、ややなだらかに立ち上がる。床は、地盤の黄色～黄白色砂質土をそのまま用い、平坦である。カマドは北壁中央のやや東寄りに設けられており、袖と煙道を残す。しかし袖はかなり崩れていて、芯の石材が露出している。袖間60cm、煙道は壁外へ50cmほど延びる。床面積8.6m²を測る小形の住居である。

遺物の出土状態 (第55図右上)

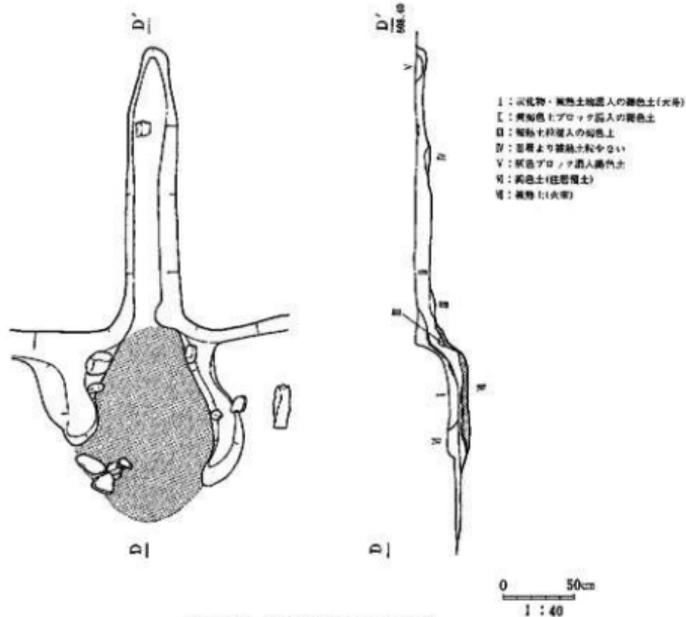
ほぼ床上の中央部に長さ1m程の炭化材が横たわり、その東から北側にかけて径20～40cmの礫が散らばっていた。礫のとなりには細かい炭化物が散布している範囲もあった。礫は自然の営力により流入したのではなく、明らかに人為的に持ち込まれたものである。遺物は土器と鉄器があるが、これら礫や炭化材の間から、床より若干浮いて出土した。大形の破片、半完形品も見られた。礫と一緒に廃棄されたものと考えられる。炭化材はこの1本の他にまったく無く、住居焼失の跡とは見なし難い。炭化材の樹種は針葉樹で、太い構造材である。

遺物 (第97図387～392、第131図13・14)

土器と鉄器を図化・提示した。土器は6点で、須恵器が1点減じる。壺類は土師器は坏(389・390)、高坏(388)、壺(391・392)、須恵器は蓋A(387)である。387の須恵器は焼成が悪く非常に軟質な小破片でボロボロになっており、外形の細かいところはよくわからない。土師器の坏は2点とも腰部に稜のあるもので、古手の資料とみたい。

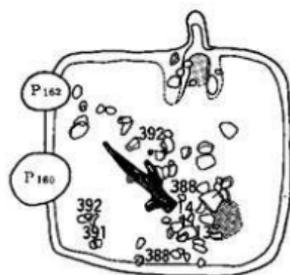
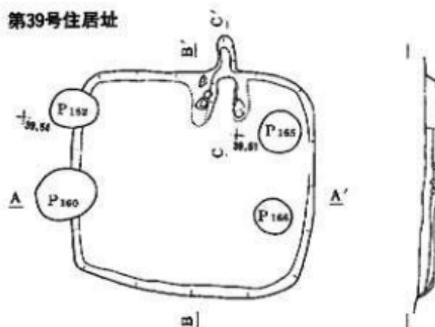
鉄器は2点で、刀子あるいは鎌と考えられるものと、壺類不明品である。

本址出土土器群は土師器坏の様相から古墳時代後期2段階に置きたいが、若干さかのぼる可能性も残す。

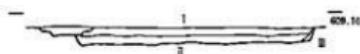


第54図 第38号住居址カマド

第39号住居址

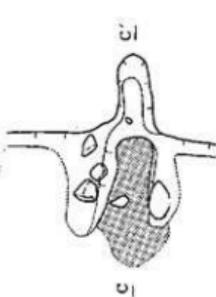


土器：388・391・392
 鉄器：13・14 遺物番号は実測図に対応する

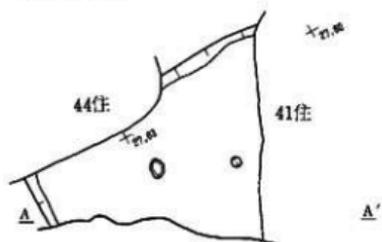


□：60センチ砂質土
 丁：炭化燐石人の黄褐色粘土砂質土
 Ⅲ：黄褐色砂質土

I：10.5m大の黄褐色アロッタ泥人の黄褐色土
 II：0.5m大の黄褐色土・炭化物混入の黄褐色土
 III：黄色土アロッタ泥土アロッタ泥人の黄褐色土
 IV：黄色粘質土
 V：黄褐色砂質土
 VI：黄褐色土層



第45号住居址



Ⅲの炭化燐石人黄褐色砂質土層
 (a：柱穴の位置に黒線)

0 1 2 m
 1 : 80

第55図 第39・45号住居址

(30) 第41号住居址

遺構 (第56図)

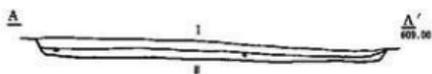
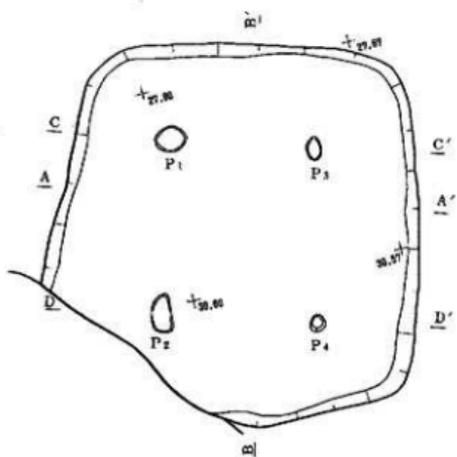
1地区南西隅、(26~32, 56~62)に位置する。平面形は南北5.40m、東西5.10mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-15°-Wを示す。西壁で45住を切り、南西隅は調査区域外へと続いている。壁はやや斜めに掘りこまれており、壁高は約40cmを測る。床面は小礫を含んだ黄色砂質土である。やや凹凸があるものの、たたきしめられており堅緻である。カマドは検出されなかった。ピットはP₁(46×36、-33cm)、P₂(55×30、-40cm)、P₃(34×22、-10cm)、P₄(25×23、-10cm)の4個が検出された。このうち、P₁とP₂からは褐色砂質土の柱痕が検出されている。一方、規模が小さいP₃・P₄の底には平石が置かれていた。この4ヶを主柱穴として問題はなからうが、西列と東列があまりに対称的な状況を呈しており興味深い。床面積は残存部分で20.4m²、推定部分で22.0m²を測る。

遺物の出土状態

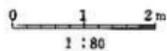
土器と鉄器(器種不明)が出土しているが、覆土中にごくまれに点在していただけで、一括品、半完形品はまったくない。このような出土状態であったので、比較的大きい住居でありながら遺物の量は驚くほど少ない。

遺物 (第97図393~395、第131図15)

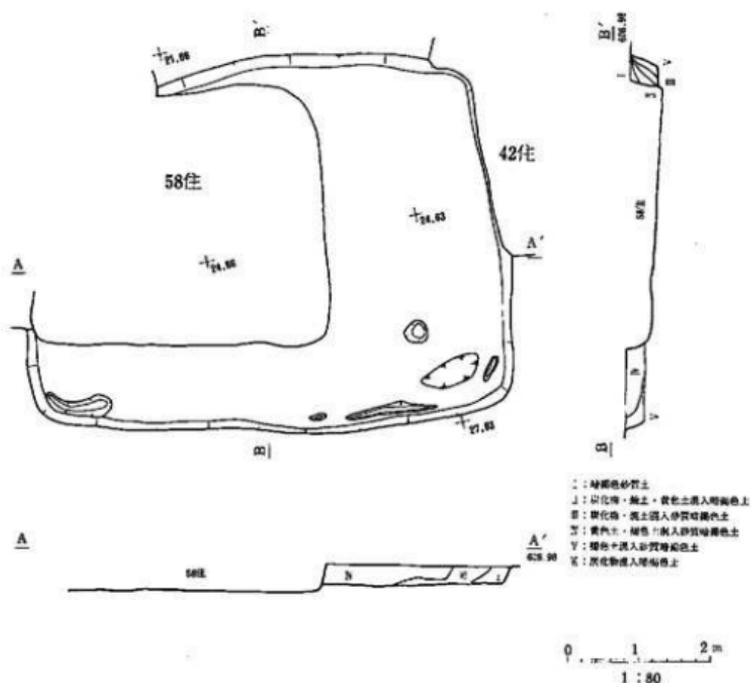
図化・提示ができたのは、土器が3点、鉄器が1点だけである。土器は土師器2点、須恵器1点で、器種は土師器坏(394)、同小形甕(395)、須恵器坏B(393)となっている。時期については少ない土器点数で判断するのは危険だが、須恵器坏Bの存在から、一応、古墳時代後期4段階としておく。



I : 暗褐色砂质土
 E : 0.5-1.5m深的硬土内夹暗褐色砂质土



第56图 第41号住居址



第57図 第44号住居址

(31) 第44号住居址

遺構 (第57図)

1地区西側、(22~26, 63~68)に位置する本址は、3軒の住居址に切られているため、調査できる範囲はかぎられていた。第42号住居址に東壁上部を切られ、第58号住居址は本址の中央部にすっぽりおさまって切っており、また西壁は第43号住居址に破壊されている状態で、全体のプランは捉え難いが、残された壁より南北5.4m、東西6.8mの隅丸長方形を呈し、主軸は、 $N-30^{\circ}-E$ にとることが推定できた。壁高は30cm前後を測り、立ち上がりははっきりしている。床面は、礫の混入した黄色砂質土の地山に、黄色・黄灰色粘質土を貼って構築している。検出できた床は平垣で傾斜はほとんどない。南壁直下からは、壁面にそった細長い溝が点在する。幅は15cm前後で周溝の残骸とみることができるかもしれない。その他の施設としてピットが検出されたが、用途は不明である。床面積は残存部で16.1m²、推定復元で29.3m²を測る。

本址は検出段階より、他との重複が多くラインを決めるのに苦労したが、掘り下げ中の第58号住居址存在の発見は、さらに情勢を混乱に陥れた。再度の切り合い関係とプランの確認、取り上げ済の遺物の番号の振り直し、等で何とかここに示せるものになったが、最後の整理段階で、本址と南東の第45号住居址の切り合いまで逆転してしまった。即ち、実際には本址の南東隅を第45号住居址が切っている。第55・57図の修正はできていないので、調査地全体図で御確認願いたい。

遺物の出土状態

土器・土製品・石製品が出土している。土器は覆土の中層（第58号住居址に切られている部分は除く）から一括品、半完形品が10点ほど出土した。中小破片は、これらに混じって多数出土した。全体的に見て、出土土器の量が住居といえる。礫の投入もなく、カマド周辺にまともまっているわけでもなく、ただ覆土中にいくつも土器がまともであるという状態は、今回の調査では珍しい。検出面出土で提示した第104図502の須恵器（平瓶）は本址と第58号住居址が重なり合う北壁のすぐ隣りから重機による排土作業中に出土した。土器自体の時期が問題だが、出土地点から見ると本址か第58号住居址に帰属する。

遺物（第97～99図396～421、第136図4、第137図7）

図化・提示できたのは土器26点、石製品（磨石）1点、土製品（手捏ね）1点である。土器には土師器と須恵器があるが、須恵器は3点のみと少ない。器種は、土師器が坏（398～403・407・408）、高坏（396・397）、小形甕（409）、甕（414・421）、小形甕（410～413）、壺（416～420）、把手付壺（415）、須恵器が坏A（405・406）、蓋A（404）という組み合わせである。

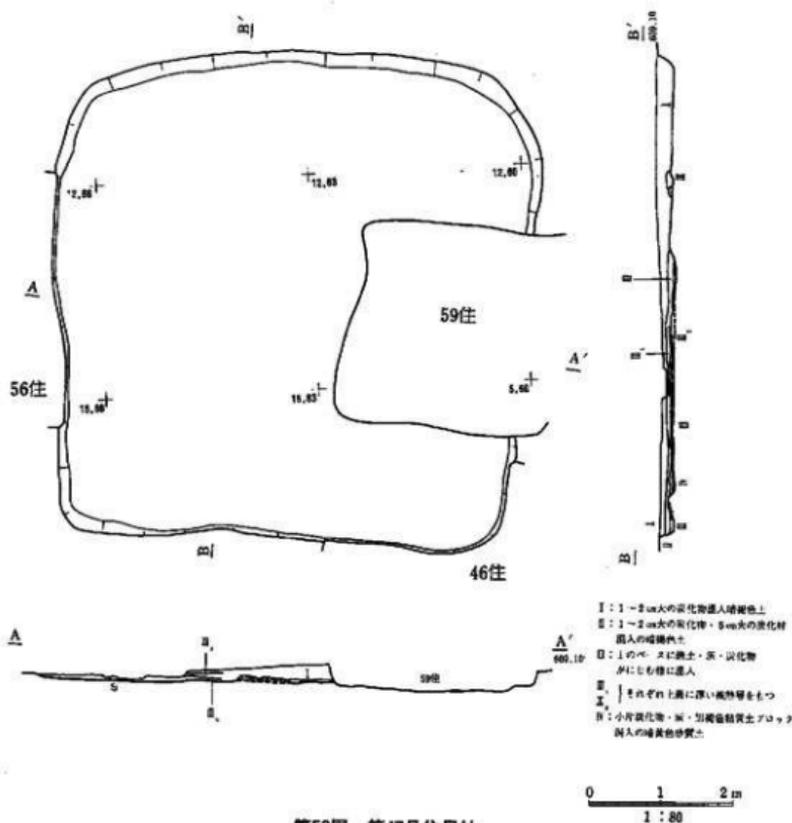
土師器の坏には体部に稜があり薄手のもの（401～403・407・408）と、そうではない厚手のものがあり、前者は古い時期の住居に伴っている。3点の須恵器坏と蓋はいずれもA類で、特に蓋A（404）は、天井部と体部の境界の稜が明確で、体部がほとんど開かず下方へまっすぐ向かっている。今回の調査出土の蓋Aの中でこの外形を呈するのは本品だけで、他は体部が下方へ開くものばかりである。本品は古い要素をもつと考える。土師器の壺が多いことも見落とせない。壺の量の減少は时期的な推移に伴うのであろうか。

本址土器群は上記の特色からみて古墳時代後期1段階に相当する。

(32) 第45号住居址

遺構（第55図）

1地区西側、(27～29, 61～66)に位置する。本址東壁を第41号住居址が切り、また南半分を調査区域外に残すため、僅かに北西の一部分を検出したのみであった。平面形や規模など不明な点が多い。壁は、かなり急な立ち上がりを示し、壁高は28cmを測る。床面は、本址を切る第41号住居址と非常に酷似しており、小礫を含んだ黄色砂質土である。床面からは、小形のピットが2ヶ検出されたが、用途などは不明である。残存部の床面積は5.3m²を測る。

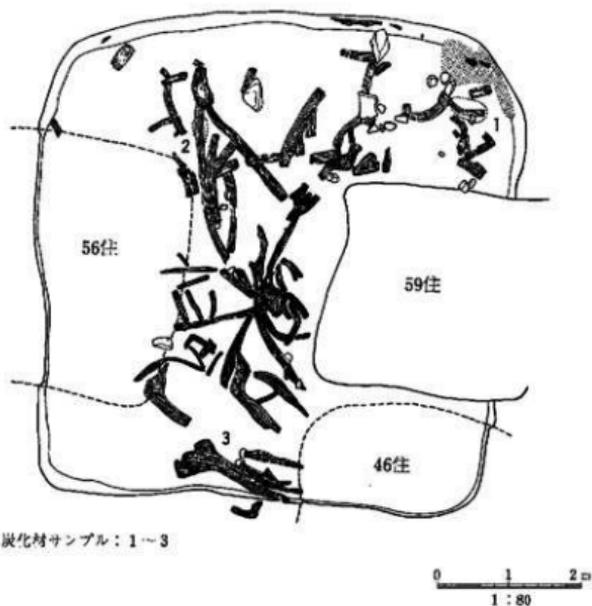


第58図 第47号住居址

尚、第55図では本址が第44号住居址に切られる様になっているが、土器による時期の検討から、新旧関係が逆転している誤りがあることが判明した。

遺物 (第99図422~426)

覆土中から土器の小破片が散発的に出土した。住居の面積が狭いので、量は非常に少ない。図化・提示できたのは、土器が5点のみ。器種は土師器の高坏 (425)、甕 (426)、須惠器の坏A (423)、坏B (422・424) であるが、須惠器の423は第44号住居址からの紛れ込みであろう。土師器甕、須惠器坏Bの時期をとって、古墳時代後期3段階くらいに置きたい。



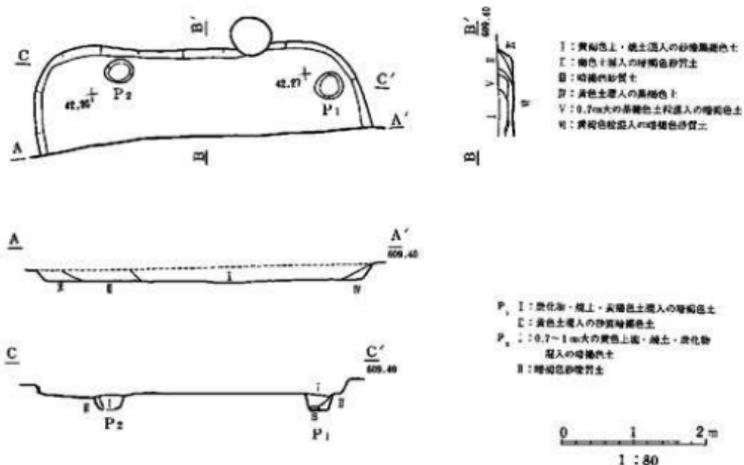
第59図 第47号住居址遺物出土

(33) 第47号住居址

遺構 (第58図)

1地区西部、(11～17, 59～66)に位置する。北東部で第53号住居址を切り、東側を第46・59号住居址に、西側を第56号住居址に切られる。ただし第46・56号住居址は本址より浅く、床までは破壊していなかった。第59号住居址の東に現われる第60号住居址と本址の関係は、発掘時の所見によると本址のほうが新しいのだが、遺物整理の結果ではその逆となっており、調整はついていない。本書では遺物の所見に基いて、第60号住居址は新しい奈良時代のほうで扱っている。

本址の規模・平面形は、南北6.8m、東西6.6mの隅丸方形を呈する。床面積は現況で33.7m²、推定復元面積は40.3m²で、今回調査の住居址のなかで最大の規模をもっていた。照高は20cmで、若干の傾斜がある。床は強度の砂礫質土の地盤そのまま、堅いが凹凸が激しく、時に不明瞭となってしまう。このためピットなどはまったく掘えられなかった。カマドもどれかの住居に破壊されたく、見当たらない。



第60図 第51号住居址

遺物の出土状態 (第59図)

本址の床面上やそのやや上層には多量の炭化材・炭化物が遺存していた。炭化材はいずれも濃れて5~10cmの厚さになっていたが、長さは最大2m、幅は40cm近いものがあった。炭化材の配列に強い規則性は見られないが、放射状を呈す部分もある。炭化材の樹種は、サンプル1がカシワ、サンプル2がコナラ、サンプル3がクヌギで、いずれも太い構造材の一部である。住居北東隅から北壁にかけては、カヤ状の炭化したものも残っていた。本址一帯は住居の重複が多かったが、炭化材が存在しない部分は他の住居があるところ、という視点で掘り下げが可能だったほど多数の炭化材・炭化物であった。いわゆる、焼失住居、火災住居の一種であろう。

遺物はこれら炭化材の間から出土したが、この種の住居址にしては、量は異常に少ない。まったく一括品がなく、土器の破片と鉄器が1点、まとまりもなく出土したにすぎない。

遺物 (第99・100図427~432、第131図16)

土器を6点、鉄器(器種不明)を1点、図化・提示できた。土器は土師器ばかりで、高坏(427)、甕(429~432)、小形の壺状のもの(428)の器種が見られる。時期は、甕の様相から古墳時代後期2段階くらいに位置付けたいが、土器の個体数が少ないので非常に不安定な見解である。

(34) 第51号住居址

遺構 (第60図)

1地区南端、(39~41, 26~31)に位置する。大部分は区域外にかかり、北端を検出したのみである。全体の平面形や規模、主軸などは不明であるが、壁は壁高を17cmに測り、なだらかに立ち上がる。床面は地山の黄色砂質土を直接掘り込んだものであるが、かなり軟弱で確認が難しかった。本址に伴う施設としてピットが検出されたが、用途は不明である。残存部分の規模は南北1.2m、東西4.7m、面積にして4.9m²を測る。

遺物 (第100図433)

覆土中から土器片が微量出土しただけである。図化・提示できたのは土師器の甕1点(433)のみ。ほとんど時期の推定もしようがないが、他の破片のなかにも須恵器がないことから、一応、古墳時代後期2段階に置いておく。

(35) 第52号住居址

遺構 (第61図)

1地区西端、(21~26, 72~77)に位置する。第54号住居址を切り、南・西壁は調査区域外にかかる。主軸はN-4°-Eを指し、平面形は、東・北壁よりみて、隅丸の方形あるいは長方形と推定する。検出された部分の規模は、南北3.5m、東西4.6m、床面積は14.9m²であった。壁高は40cmを測り、しっかりした立ち上がりの壁をもつ。床面は、地山の黄褐色色砂質土を直接床として使っているが、中央部のみ黄灰色砂質土がうすく貼られ、概して堅緻で良好である。東壁にはカマドが設置されているが、煙道の部分は調査区域外にかかり確認できない。袖間幅60cm、長さ90cmをとり、袖は粘土が剥落して芯の石材が露出している。北側には、ピットが集中しているが、P₃・P₅が位置からみて支柱穴に相当する可能性がある他は、いずれも用途不明である。

遺物の出土状態 (第61図下段)

本址のカマド周辺からは土器類が非常に見事な出土状態を示した。カマドの向かって右側には、まず、50cmのところには置き台と見られる壺口縁頸部(453)が逆位に置かれ、そのすぐ北には小形甕(444)が転がっていた。さらに、1.5mほど離れて壺の完形品(454)が潰れていた。カマドの左側には、すぐ脇に坏(439)、50cmほど離れて壺(448)と小形甕(447)がまるで寄り添うように完形で立て掛けられていた。さらに調査区域外にめり込むように、小形甕が2個体(442・446)、転がっていた。いずれも土師器である。この8個体の土器の出土位置が、本址居住者の日常の道具を置いた位置なのか、本址廃棄時に意図的に置かれた位置なのかは、本址の廃絶の原因等も含めて考えなければならない問題なので難しいが、本址廃絶についてのみ見るならば、覆土の埋没は緊急性を示してはいないし、炭化材等の出土による罹災の状況もなかった。とにかく、土器の組み合わせでも、出土位置でも第一級の資料である。

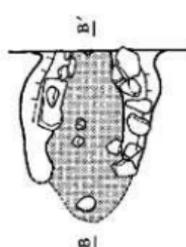
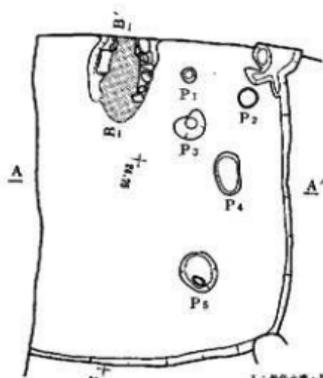
カマド周辺から出土した土器の一括品の他は、覆土中から散発的に土器の中小破片、土製品（手捏ね）が得られた程度で、その点ではとりわけ他の住居址と出土状態に差はなかった。先の一括品と厳然と区別すべきものであろうが、時期的には大差なく扱ってよいと考える。

遺物（第100・101図434～454、第137図3）

土器と土製品（手捏ね）を図化・提示した。土器は21点で、すべて土師器である。器種は、坏（434～440）、小形甕（441～447）、甕（448～450）、壺（451～454）で、点数が多い割には構成は単純であった。坏類はいずれも厚手で、半球状やわずかに体部上半が反る外形を呈し、薄手で体部に稜をもつものはない。451は胴部内外面にミガキがあるために壺としたが外形はむしろ甕に近い。

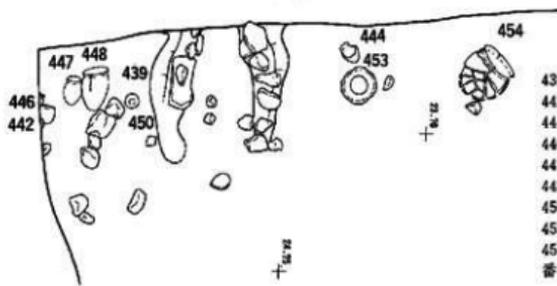
ここに示した土器で前述の一括の出土状態のものを列挙すると、439、442、444、446、447、448、453、454、の8点である。これらも含めた本址出土土器群の時期は、須恵器がまったくないことから前半期に上がるのは確かで、薄手の坏類が見当たらないことを考慮すると、古墳時代後期2段階に相当する。その時期の一つの基礎的な資料となろう。

手捏ねのミニチュア土器は1点で、本章8節で触れる。



- I : 焼土ブロック径0.5cm・灰化炭層入焼色砂質土
- II : 焼土時・焼土ブロック径0.5~1cm焼入焼色土
- III : 黄緑色土
- IV : 黄褐色砂質土
- V : 焼土層

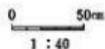
- I : 黄色土層・灰化炭層入焼色砂質土
- II : 下部に焼分層入焼色土
- III : 灰色土・黄色土層入焼褐色砂質土
- IV : 黄褐色土層入焼色土



遺物出土状況

番号	品名	土師器
439	坏	土師器
442	小形甕	◇
444	◇	◇
446	◇	◇
447	◇	◇
448	甕	◇
450	◇	◇
453	壺	◇
454	◇	◇

番号は実測図に対応する



第61図 第52号住居址

(36) 第58号住居址

遺構 (第62図)

1地区西側、(21～55, 64～67)に位置する。第44号住居址をすっぽりおさまるように切り、第43号住居址に切られる。主軸はN-7°-Eを指し、規模・平面形は南北3.5m、東西4.0mの隅丸方形を呈する。壁は断面観察によると、40cm程度の壁高を測り、しっかりした立ち上がりをもっていた。稜を混入する黄褐色土に黄色砂質土を貼って床としている。ピット・カマドは検出できなかった。

当初、本址はその存在に気づかず、44号住居址の覆土として掘られたが、掘り下げの過程で確認され、新たに第58号住居址として輪郭を得た。このため前述の様に壁は第44号住居址より深い部分を除き、土層断面で捉えるという悲惨な結果となった。

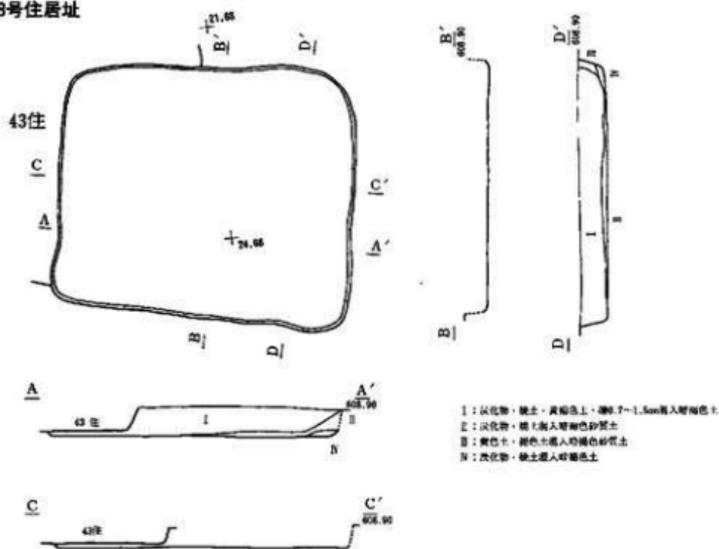
遺物の出土状態

土器のみが覆土中から散発的に出土した。一括品はなく、すべて中小破片である。量もそれほど多くない。調査時に本址の存在が確認されるまえは、本址からの遺物も第44号住居址出土として取り上げており、確認後に急遽、出土地名を振り変えたがそれほど混乱はなかった。前述のように、第44号住居址の遺物出土状態は他とは異なっており、本址確認前、むしろ本址の範囲内の出土遺物が同様の状態を示さないことのほうが不思議であつたくらいである。

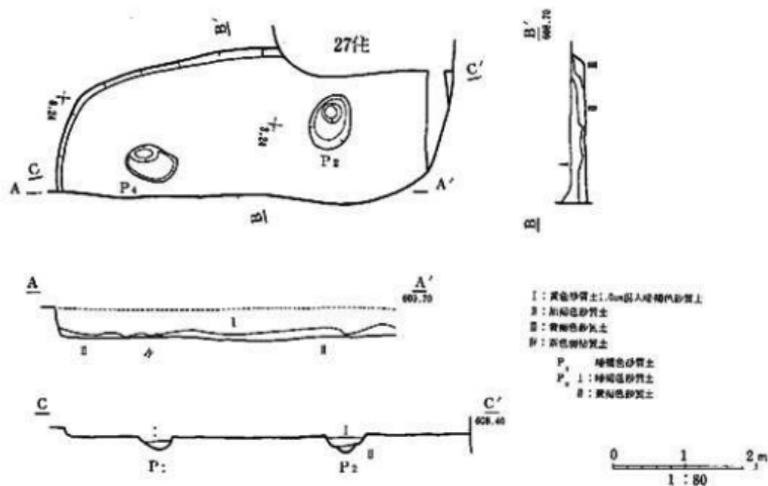
遺物 (第102図455～464)

土器のみ10点を図化・提示できた。すべて土師器で、器種は坏(457～460)、高坏(455・456)、埴形の壺(461)、小形壺(462～464)に分かれる。459の坏は体部に稜のあるもので若干古い要素であろう。このほかにも461の埴形の壺(この名称が正しいかどうかは疑問)も古い感じがする。本址出土品は総体として古墳時代後期2段階の時期を与えておく。

第58号住居址



第61号住居址



第62圖 第58・61号住居址

(37) 第61号住居址

遺構 (第62図)

1 地区北東、(3~6, 23~26)に位置する。北・東壁は調査区域外にかかり、西壁一部は第27号住居址に切られ、第28号住居址を切っている。検出された部分は、南東部のわずかな部分にすぎなかったため、規模・主軸などは不明である。壁は壁高を40cmに測り、しっかりした掘り込みをもつ。床面は地山の黄褐色砂質土をそのまま用い、平坦ではあるがやや軟弱であった。本址に伴う施設はピットが2つ検出された。全体の配置が確認できないため確実なことは言えないが、P₂・P₁は位置からみて支柱穴の一部と考えられる。床面積は8.2m²を測る。

本址は調査時所見では明らかに第27号住居址に切られ、ここでも同じ立場をとっているが土器の観察からは、これについて若干の疑問が生じている。

遺物 (第102図465~467)

覆土中から点在するように土器片が微量に出土した。まとまったものはまったくない。図化・提示できたのは須恵器が3点のみ、器種は長頸壺の口縁部(465)、坏C(466)、攪鉢(467)である。これらのみから見る限り本址土器群はかなり新しい。第27号住居址からのものと比べてもこちらが新といわざるをえない。遺構の前後関係は前述したとおりなので、かなり強引ではあるが、本址からの遺物は少なく、本址の時期を適切に示す土器の提示はできなかったと言うことで納得したい。

(38) 第62号住居址

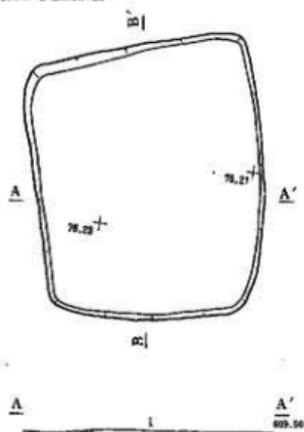
遺構 (第63図)

2 地区南東、(73~77, 26~31)に位置する。主軸はN-9°-Wにとり、平面形は南北3.8m、東西3.2mの長方形を呈する。壁は壁高が一様に10cm程度と浅く、掘り込み状態も確認できない。床は黄褐色砂質土の地山に掘り込まれているが、起伏が激しく軟弱なものであった。床面積は10.6m²を測る。本址に伴う施設は特に存在しなかった。

遺物 (第102図468)

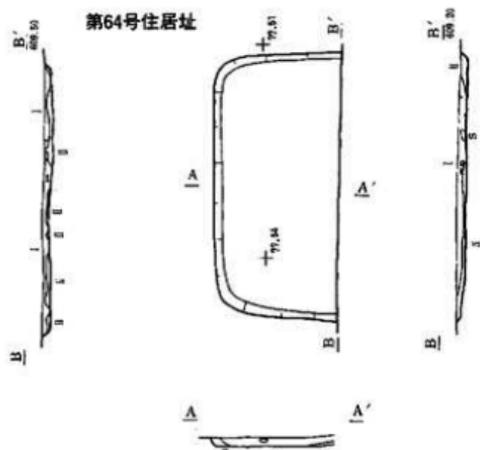
覆土中から数点の土器が出土したにすぎない。土師器の甕を1点図化できた。

第62号住居址



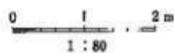
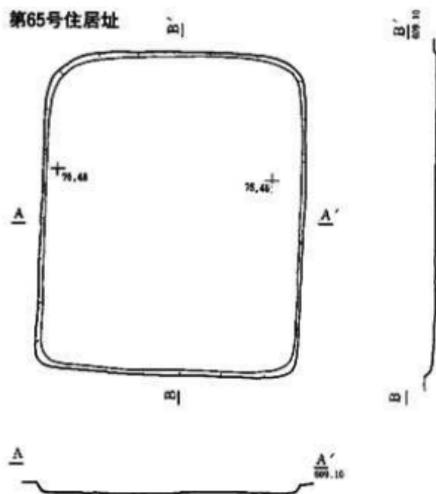
Ⅰ：黄色砂瓦土アロク層入山崎色砂瓦土
Ⅱ：黄褐色砂瓦土

第64号住居址



Ⅰ：暗褐色砂瓦土
Ⅱ：黄褐色砂瓦土

第65号住居址



第63図 第62・64・65号住居址

(39) 第64号住居址

遺構 (第63図)

2地区南西、(76~78, 51~55)に位置する。南側は調査区域外にかかり、北側半分を検出したのみである。主軸はN-40°-Wを示し、現況で南北1.8m、東西3.6mを測る。一辺3.6m前後の方形、あるいは長方形のプランになると推定する。壁は壁高が10~14cmで、なだらかな立ち上がりを示す。床面は地山の黄褐色砂質土中に掘り込まれ、比較的平坦ではあるが西側に向けてわずかに傾斜をもつ軟弱なものであった。床面積は5.6m²を測る。本址に伴う施設は発見されなかった。

遺物

土師器坏の小片が出土したが図示できなかった。

(40) 第65号住居址

遺構 (第63図)

2地区南側、(73~78, 45~49)に位置する。規模・平面形は南北5.5m、東西3.7mの隅丸長方形を呈し、主軸はN-5°-Wを指す。砂礫層で構成される自然流路中に掘り込まれているため、壁面や床に礫が多数露出している。壁高が14cm程度と浅く、壁の傾斜は不明確だが非常に緩やかに落ち込んでいる様子が窺える。床面は礫質だがやや軟弱で、平坦なものとなっている。床面積は15.3m²を測る。尚、本址に伴う施設はまったく検出されなかった。

一般的にみて、2地区の古墳時代後期の住居は規模、施設ともに貧弱なものが多い。

遺物

土師器坏の小片が出土したが図示できなかった。

2. 掘立柱建物址

(1) 第1号建物址

遺構 (第64図)

1地区東南端(42~46, 5~12)に位置する側柱式の建物址である。西側P₁₂₈、P₁₃₀は第12号住居址に切られ、南側は調査区域外にかかるため西側、東側に続く全体の規模は把握できない。本址では、東西方向を長軸にとって概略を報告したい。平面形は長方形を呈し、主軸はN-88°-Wを示す。規模は東西3間・6.0m、南北2間・4.8mを測る。柱間寸法は、東西1.6m~1.8m、南北1.8m~2.0mである。今回調査の対象となったピットは7個である。これらのピットの規模・平面形は次のとおりである。P₁₉₀(120cm×90cm×68cm)円形、P₁₂₈(106cm×104cm×60cm)円形、P₁₂₆(100cm×96cm×60cm)円形、P₁₂₇(80cm×80cm×46cm)円形、P₁₂₈(96cm×64cm×48cm)楕円形、P₁₂₉(130cm×110cm×52cm)楕円形、P₁₃₀(150cm×150cm×50cm)不明。各ピットは掘り込みがしっかりしており、断面形はほとんどが長方形または台形である。柱礎は、検出面では輪郭がかすかに確認できたが、断面ではそれらしい土層が確認できなかった。わずかにP₁₉₀のみが、平面と土層断面で確認できている。本址周辺は、礫が多量に混入する暗褐色砂質土であり、本址のピットもこの地山に掘り込まれている。

(2) 第2号建物址

遺構 (第65図)

1地区中央(22~28, 29~36)に位置する総柱式の建物址である。本址は古墳時代前期の第21号住居址の東側を、P₂₄、P₂₅、P₂₃、P₂₂が切っている。平面形は正方形を呈し、主軸方向はN-5°-Eを示す。規模は東西2間・4.6m、南北2間・4.4mである。柱間寸法は、両方向とも1.8m~2.0mを測る。検出されたピットは全部で8個で、本来南東隅にもう1個あったと考えられるが、調査では検出できなかった。本址を構成するピットの規模と平面形は次のとおりである。P₂₂(80cm×80cm×40cm)円形、P₂₃(80cm×80cm×60cm)円形、P₂₄(100cm×100cm×60cm)円形、P₂₅(80cm×80cm×50cm)円形、P₂₆(90cm×80cm×40cm)楕円形、P₃₁(100cm×80cm×20cm)楕円形、P₃₂(80cm×80cm×30cm)円形、P₂₉(90cm×80cm×20cm)楕円形。ほとんどのピットは規模・平面形が類似しており、覆土も暗褐色砂質土をベースにしたものが大半である。断面形は、P₂₂~P₂₆が掘り込みの深い台形、P₃₁は掘り込みがしっかりしない不整な半円形を呈し、P₃₁~P₃₃は掘り込みの浅い台形を呈している。ピットは第1調査区で一般的な、黄褐色砂質土の地山に掘り込まれている。

(3) 第3号建物址

遺構 (第64図)

1地区中央東寄り(17~21, 26~31)に位置する側柱式の建物址である。東南端を古墳時代後期の第4号住居址に切られ、柱穴1個が破壊された可能性がある。平面形は正方形を呈し、主軸方向はN-17-Eを示す。規模は南北2間・3.8m、東西2間・3.4mである。柱間寸法は、両方向とも1.8mを測る。本址を構成するピットの規模と平面形は次のとおりである。P₃₅(54cm×54cm×48cm)円形、P₃₆(60cm×40cm×20cm)楕円形、P₃₇(40cm×40cm×50cm)円形、P₃₈(50cm×50cm×30cm)円形、P₃₉(60cm×50cm×40cm)楕円形、P₄₀(50cm×45cm×35cm)楕円形、P₄₁(60cm×50cm×30cm)楕円形。個々のピットの掘り込みは概してしっかりしておりほぼ垂直に立ち上がっている。柱痕は、検出面ではすべてのピットで確認されているが、土層断面で柱痕が確認されたのは、P₃₅、P₃₇、P₄₀のみである。各ピットは黄褐色砂質土の地山に掘り込まれている。

(4) 第4号建物址

遺構 (第66図)

1地区北端(1~5, 30~34)に位置する側柱式の建物址である。北側は調査区域外に接し、西側は古墳時代後期の第22号住居址に切られている。建物址の北側は調査区域外に伸びる可能性がある。主軸方向は2通り考えられるが、ここでは東西列の主軸方向N-87-Wをとって本址を説明したい。平面形は長方形を呈し、規模は東西3間・4.4m、南北1間・1.6mを測る。柱間寸法は東西1.2m~1.6m、南北1.6mである。本址を構成するピットの規模と平面形は次のとおりである。P₄₁(90cm×85cm×30cm)円形、P₄₂(100cm×80cm×20cm)楕円形、P₄₃(90cm×90cm×30cm)円形、P₄₄(90cm×85cm×15cm)円形、P₄₅(70cm×60cm×30cm)楕円形、P₄₆(80cm×80cm×20cm)円形。検出面からの掘り込みは浅く、各ピットの断面形は半円形でなだらかな立ち上がりをもつ。検出面においては柱痕の輪郭が検出できたが、断面で柱痕を示す土層を確認できたのはP₄₁のみである。

(5) 第5号建物址

遺構 (第66図)

1地区南西(37~40, 50~54)に位置する、側柱式の建物址である。古墳時代後期の第39号住居址を切っている。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-7°-Eを示す。規模は南北2間・2.6m、東西1間・3.0mを測る。柱間寸法は、南北1.2~1.3m、東西3.0mである。本址を構成するピットの規模、平面形は次のとおりである。P₁₀₀(80cm×70cm×30cm)楕円形、P₁₀₂(65cm×55cm×20cm)楕円形、P₁₀₃(65cm×60cm×30cm)円形、P₁₀₄(60cm×60cm×20cm)円形、P₁₀₅(60cm×60cm×4cm)円形、P₁₀₆(35cm×25cm×4cm)楕円形。P₁₀₅・P₁₀₆は削平されているため覆土が確認できなかった。なお、P₁₀₂~P₁₀₄は2段底のピットで柱痕に対応するものとする。覆土は一律に暗褐色砂質土をベースにしたものであった。

(6) 第6号建物址

遺構 (第67図)

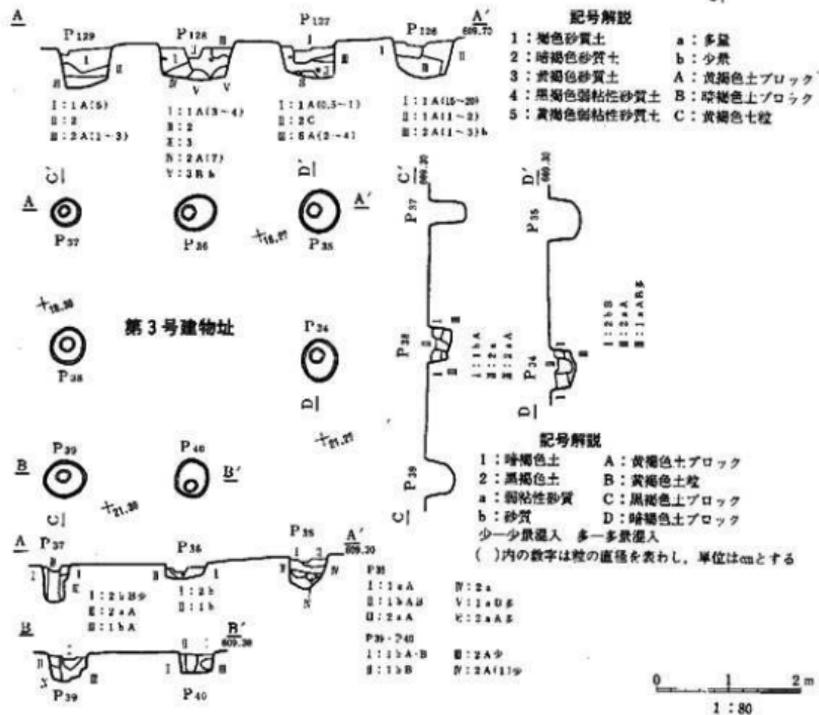
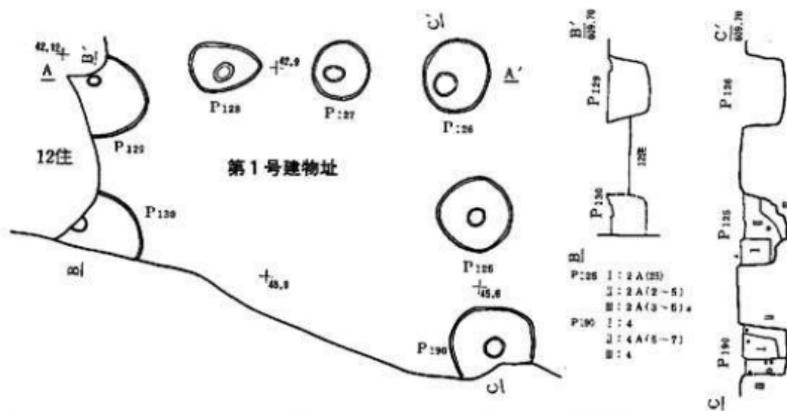
1地区北東(11~20, 14~24)に位置する側柱式の建物址である。本址は古墳時代後期の第2号住居址を南側で切っている。平面形は長方形を呈し、主軸方向はN-21°-Eを示す。規模は東西5間・7.6m、南北4間・5.4mで、面積は38.9m²である。柱間寸法は東西1.4m~1.6m、南北1.2m~1.6mを測る。建物址を構成するピットの平面形は、円~楕円形を呈し、規模は長径90~150cmと幅があり、深さは50cm前後である。ピットの断面は半円形、長方形、台形、二段底になっているもの、不整なものなどさまざまな形態がみられた。覆土は暗褐色土、褐色土に黄色土ブロックが混入する土層が一般的であった。

本址は非常に特殊な建物址で、検出当初は遺構として捉えられなかった。第2号住居址の掘り下げの際、5cm程掘り下げたところで1本のラインが確認され、さらに掘り進めると住居址を切る溝を確認することができた。そこで、ベルトをつくってこの溝を5cmほど掘り下げると、一定間隔ごとに大形のピットが検出された。この時点で別の大きな遺構があると判断して周囲の検出を行った。その結果、溝状の遺構は直角に曲って伸び、溝底ではほぼ等間隔に並ぶピットを確認することができた。さらに北東では礫が多量に含まれる層でピットが列をなしてならんで検出され、この段階でこれらは一軒の建物址であることが判明した。これらのことから、本址は一般的に言われる布掘りではなく、浅い溝をつくってそこから掘り方を構築する、きわめて特殊な建物址であると考えている。

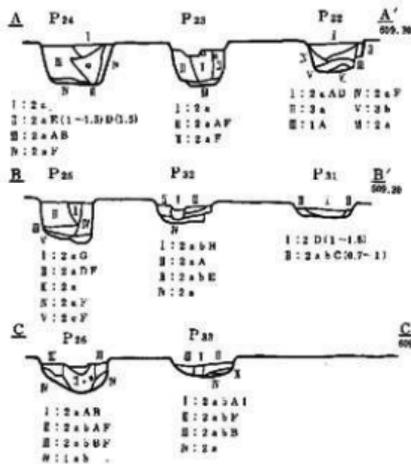
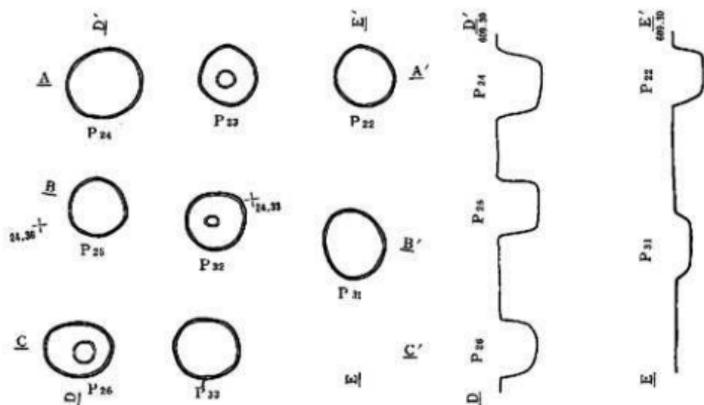
なお、本址のP₁₀から土師器の坏、P₁₁から須恵器の坏、P₉から須恵器の甕が出土している。このほかに土師器の坏1点が出土している。これらの伴出遺物から、本址の時期は古墳時代後期3段階以降と考えられる。

建物址一覧

番号	主軸方向	柱間寸法(m)	規模(m)	平面形	柱 穴				備 考
					No.	平面形	No.	平面形	
1	N-88°-W	桁1.6~1.8	3間×2間	長方形か	125	円形	128	楕円形	125~130 柱痕アリ
		梁1.8~2.0	6.0×4.8		126	〃	129	〃	
					127	〃	130	円形	
2	N-5°-E	桁1.8~2.0	2間×2間	正方形	22	円形	32	円形	23・32・26柱痕アリ
		梁1.8~2.0	4.4×4.2		23	〃	31	楕円形	
					24	〃	26	〃	
					25	〃	33	〃	
3	N-17°-E	桁1.8	2間×2間	正方形	35	円形	39	楕円形	34~40 柱痕アリ
		梁1.9	3.8×3.4		36	楕円形	40	〃	
					37	円形	34	〃	
					38	〃			
4	N-87°-W	桁1.2~1.6	2間×1間	長方形	51	円形	54	円形	51~54・56柱痕アリ
		梁1.5	4.4×1.6		52	楕円形	55	楕円形	
					53	円形	56	円形	
5	W-83°-E	桁1.2~1.3	2間×1間	長方形	160	円形	164	円形	160~165 柱痕アリ
		梁30	30×26		162	〃	165	〃	
					163	〃	166	〃	
6	N-21°-E	桁1.4~1.6	6間×5間	長方形	141	楕円形	150	楕円形	
		梁1.3~1.4	7.6×5.4		142	〃	151	-	
					143	〃	152	楕円形	
					144	〃	153	〃	
					145	-	154	〃	
					146	-	154	〃	
					147	-	155	円形	
					148	-	156	〃	
					149	楕円形	157	楕円形	



第64図 第1・3号建物址



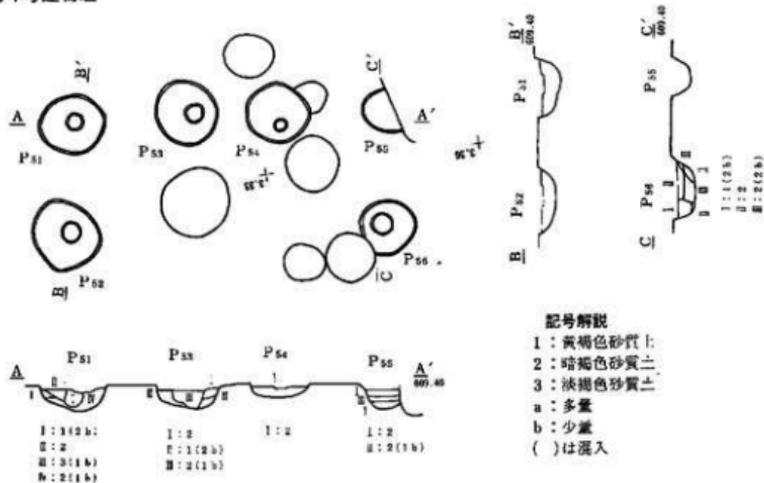
記号解説

- 1 : 褐色土 a : 砂質
 2 : 暗褐色土 b : 礫質
 3 : 黒褐色土 c : 粘質
- A : 炭化物 F : 褐色土ブロック
 B : 焼土 G : 暗灰色土ブロック
 C : 黄色土ブロック H : 灰褐色土ブロック
 D : 礫 I : 赤褐色土ブロック
 E : 黄褐色土ブロック
- ()内の数字は径の直径を表わし、単位はcmとする

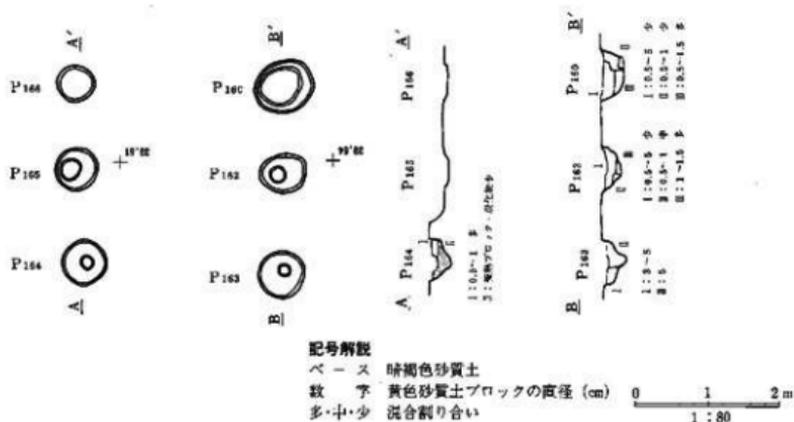


第65図 第2号建物址

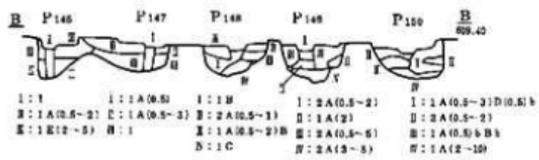
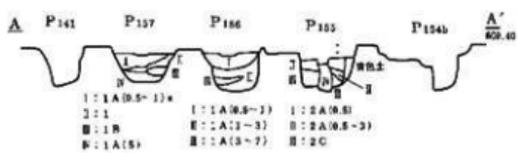
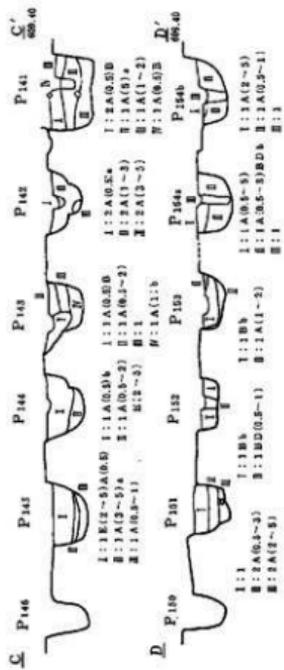
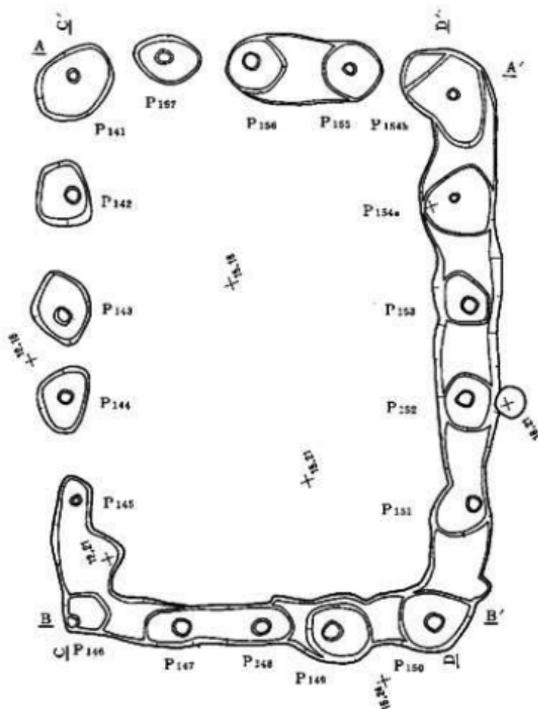
第4号建物址



第5号建物址



第66図 第4・5号建物址

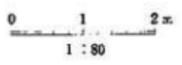


記号解説

1 暗褐色土: A 黄色土ブロック
 2 褐色土: B 炭化物
 C 黄色土粒
 D 濘土ブロック
 E 礫

a 多量
 b 少量
 c 大量

()内の数字は柱の直径を表わし, 単位はcm



第67図 第6号建物址

3. ビット群

建物址としてまとまらずに取り上げることができなかったビットのなかには、かなり集中してあるものが何か所が見られる。

第2号建物址を2×2間の総柱式と考えたが、外周にもう1列ずつビットがめぐっている。ただし間数が合わないのであるが、第2号建物址の規模は拡大して捉えた方が良いのであろうか。この他にもそのすぐ南にも側柱式状にビットがならぶ所があり、やはり平行する2列の柱間数がそろっていない。この時期の建物址の特徴としてこのような現象は一般的なのだろうか。

ビットが無秩序にまとまる場所は、第8号住居址の南、第14号住居址の南、第15号住居址の西、第54号住居址の1帯である。

4. 流路址2

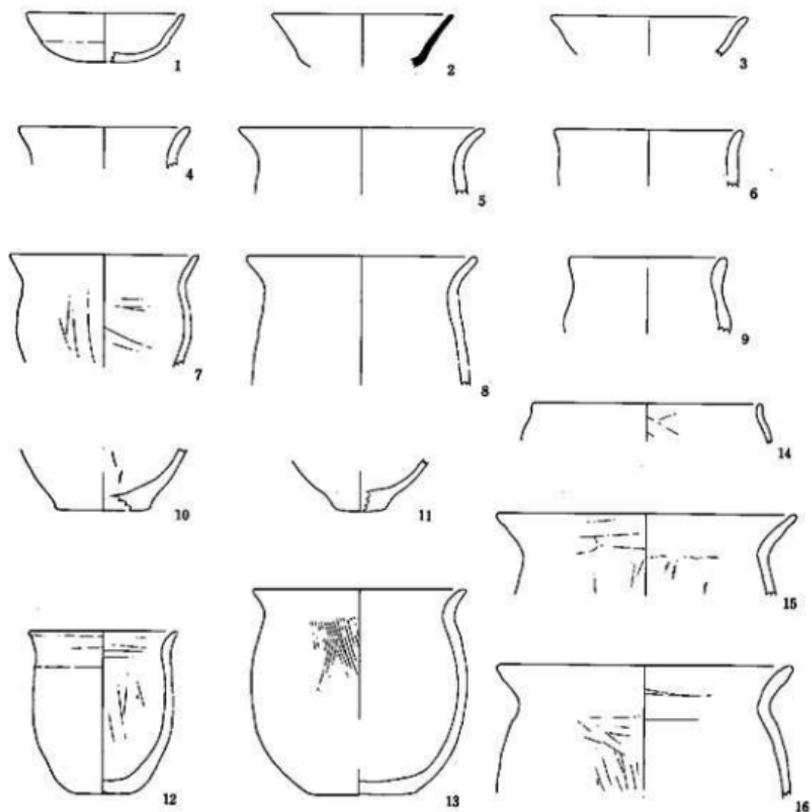
2地区に検出された流路址2は、多量の礫を伴うが始点と終点のはっきりせず、2地区東部北側で突如現れて西側へ行くと徐々にわからなくなってしまう。調査区間を西流する逢初川の旧流路の動いた痕跡の深い部分と推定される。隙中には古墳時代後期の遺物を伴い、平安時代後期の第63号住居址に切られている。古墳時代後期の一過的なものであろう。第63号住居址脇からは緑釉陶器片が出土したが、これは住居址にともなうものであろう。

5. 遺構外出土の遺物

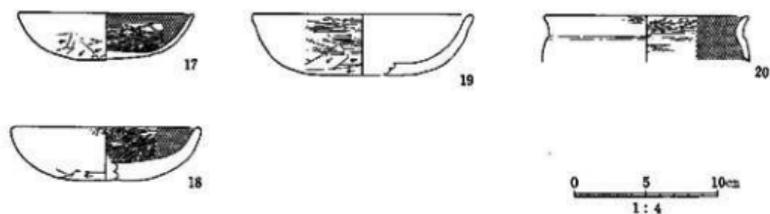
1地区の検出面を中心にいくつかの同時土器が出土している。また一部の後代住居址内からも混入して出土した。量的には同様な出土状態をした同前期の土器よりはるかに少なく、混入あるいは検出面出土品の性格について一考を要する。

種別は土師器と須恵器で、器種は当然のことながら多種にわたる。主要なものは土師器の坏、高坏、小形壺、壺、須恵器坏A・B、蓋A・C、などで、502の平瓶は第44号住居址あるいは第58号住居址に属するものであろう。

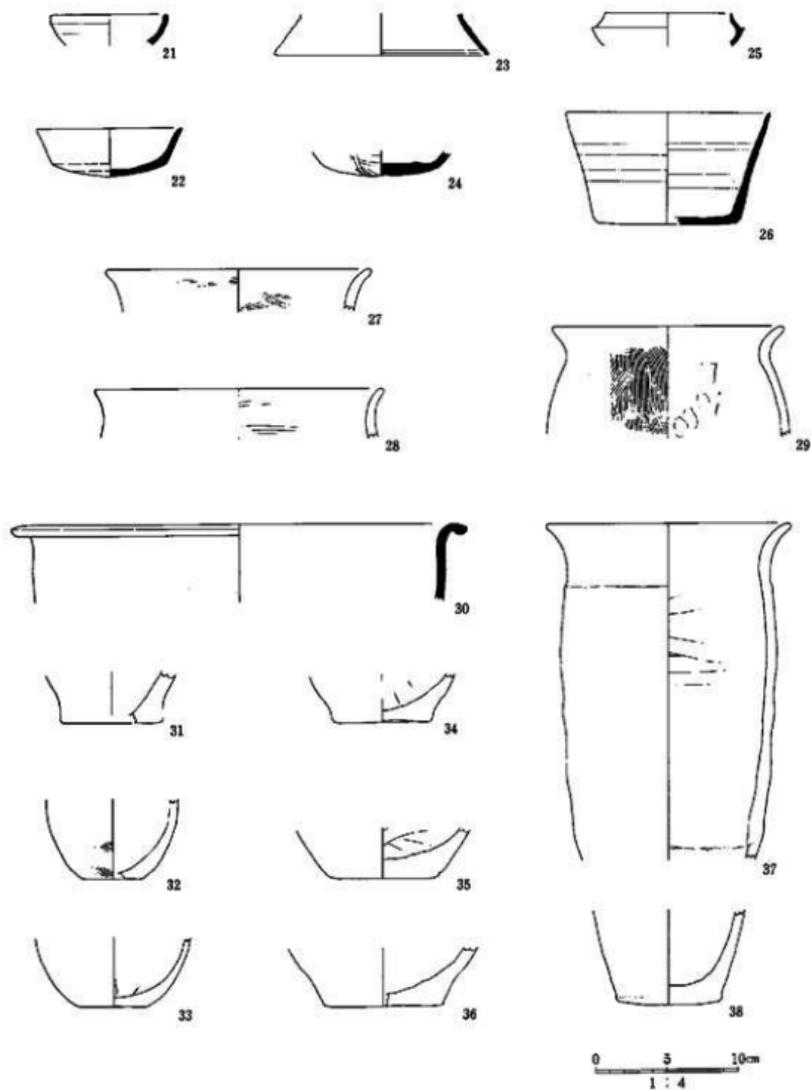
第2号住居址



第3号住居址

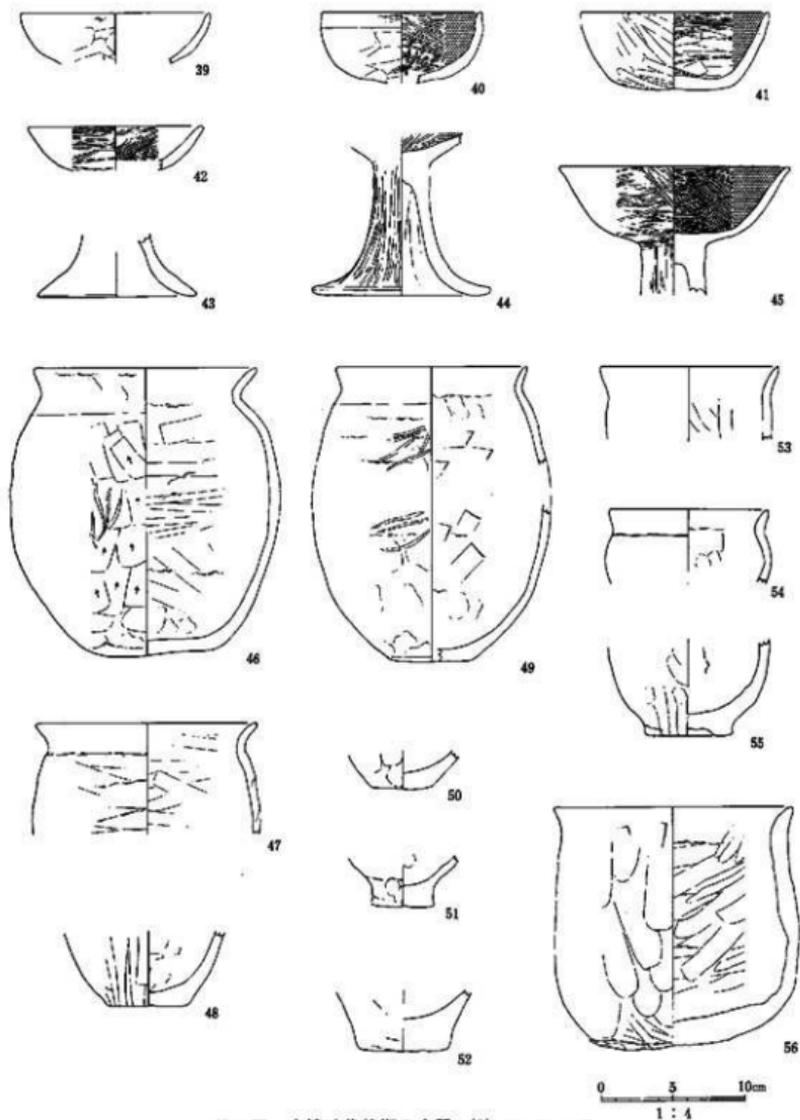


第68図 古墳時代後期の土器 (1) 1~16: 2住 17~20: 3住

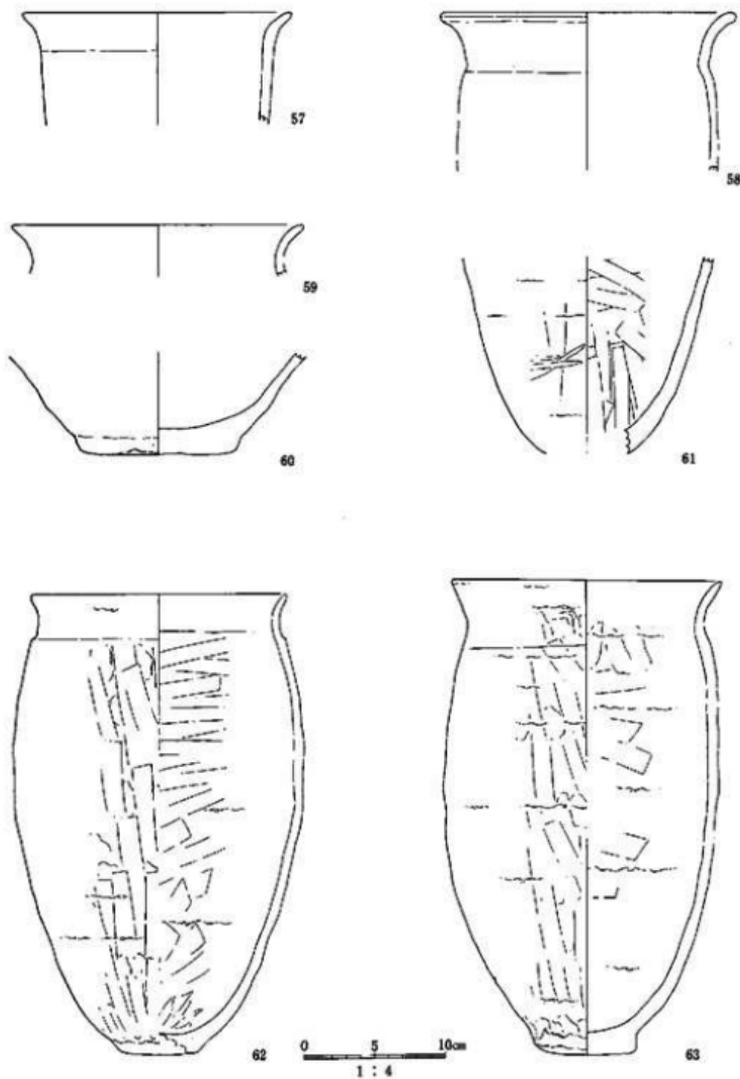


第69図 古墳時代後期の土器 (2) 21~38 : 3件

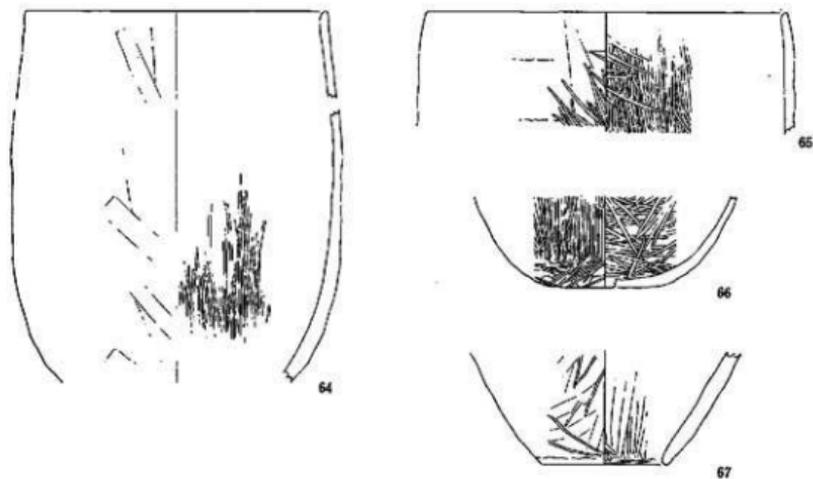
第4号住居址



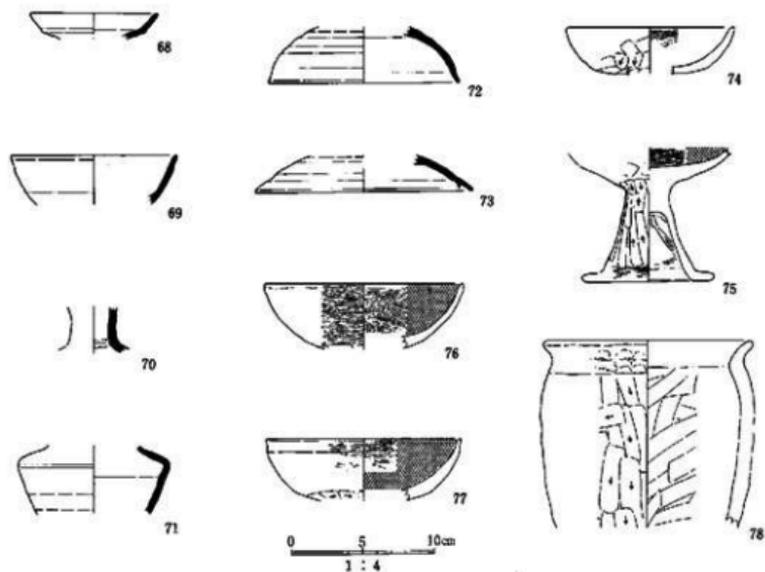
第70図 古墳時代後期の土器 (3) 39~56 : 4住



第71図 古墳時代後期の土器 (4) 57~63: 4位

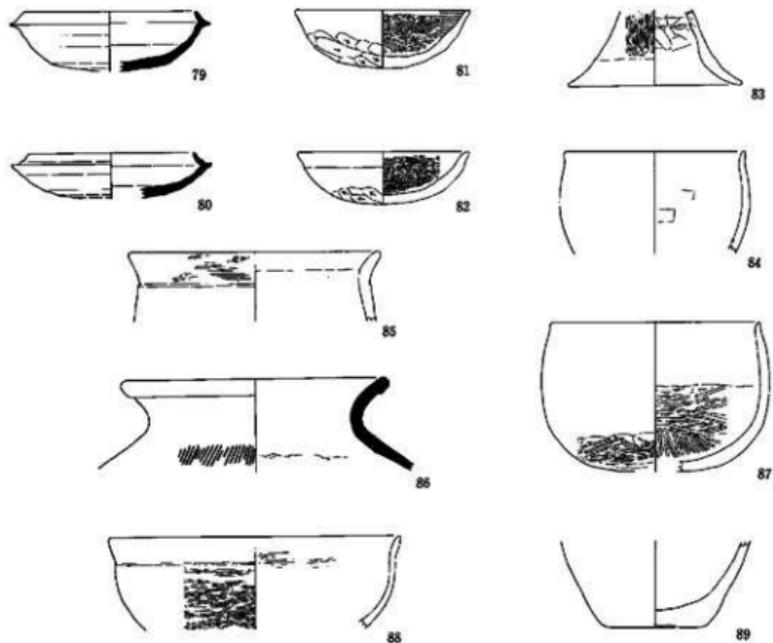


第5号住居址

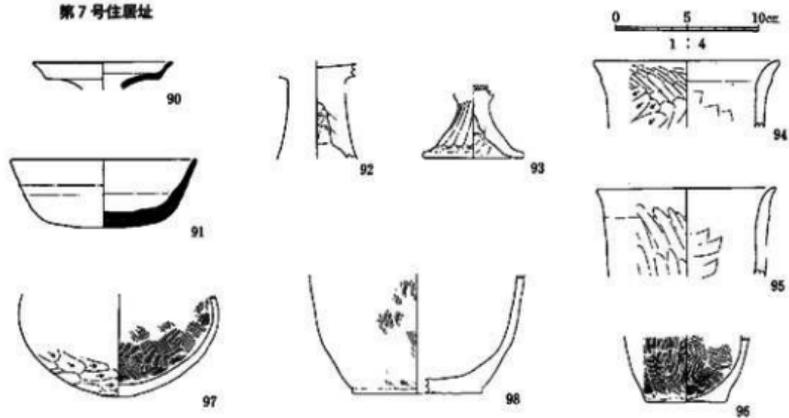


第72図 古墳時代後期の土器 (5) 64~67: 4生 68~78: 5生

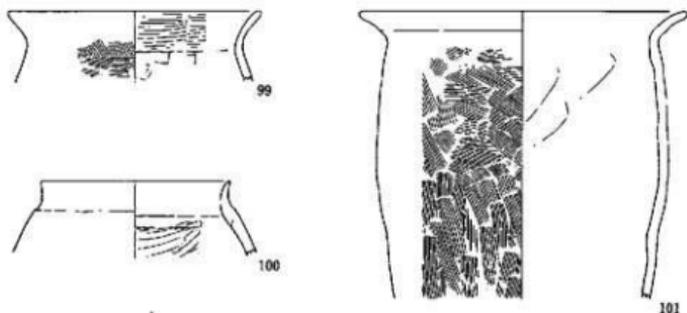
第6号住居址



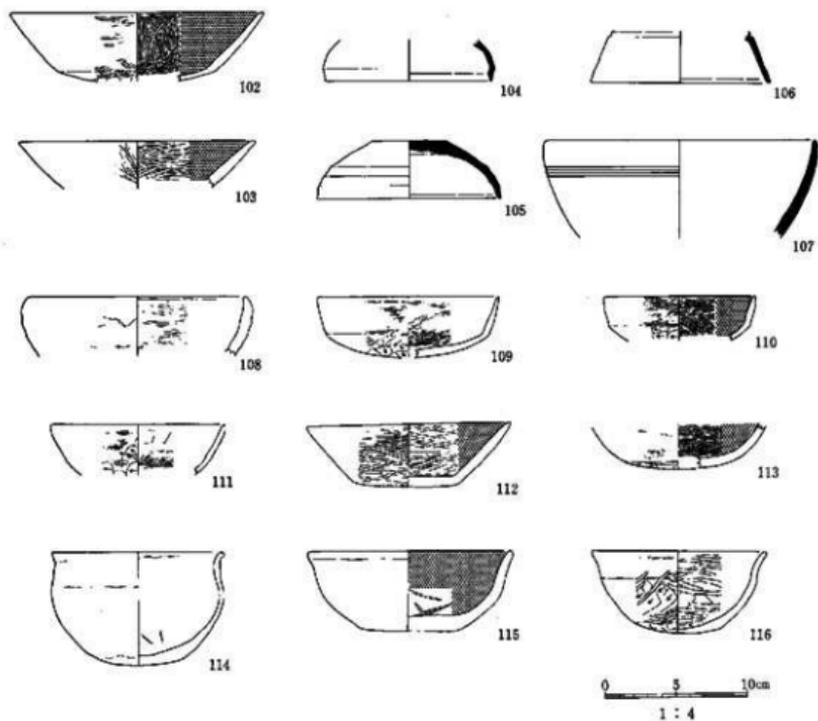
第7号住居址



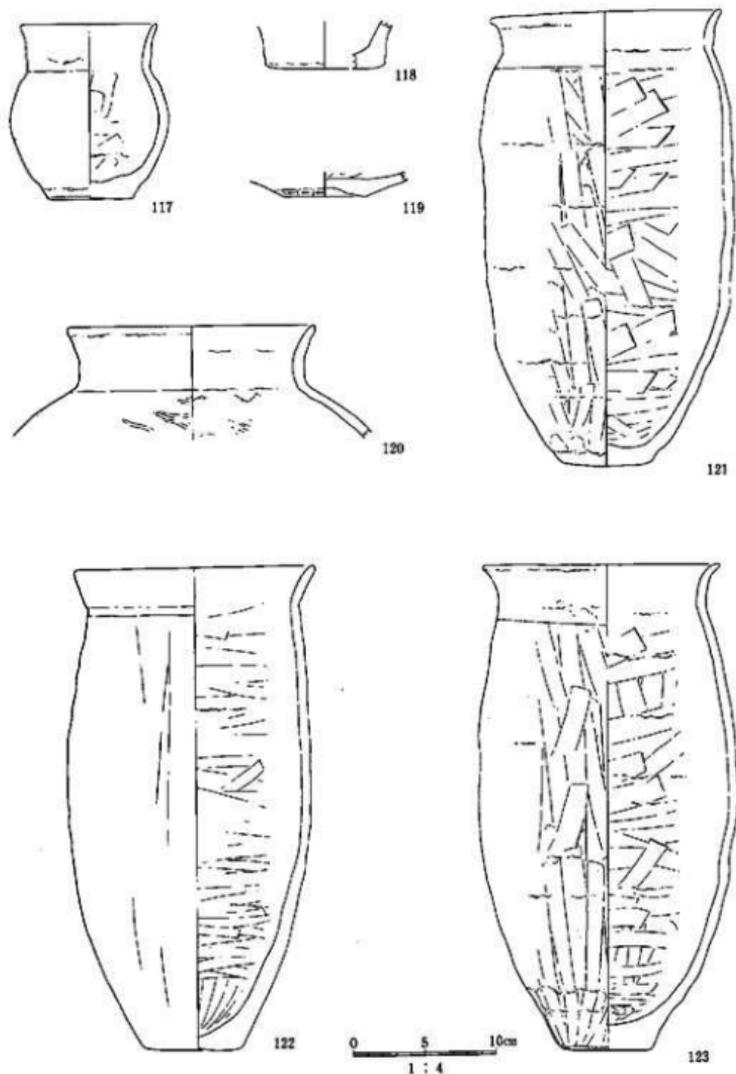
第73図 古墳時代後期の土器 (6) 79~89: 6住 90~98: 7住



第8号住居址

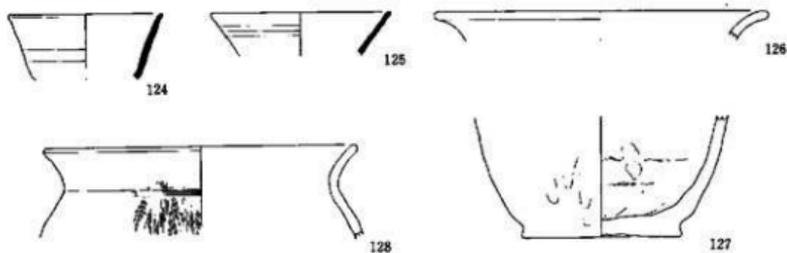


第74図 古墳時代後期の土器 (7) 99~101 : 7住 102~116 : 8住

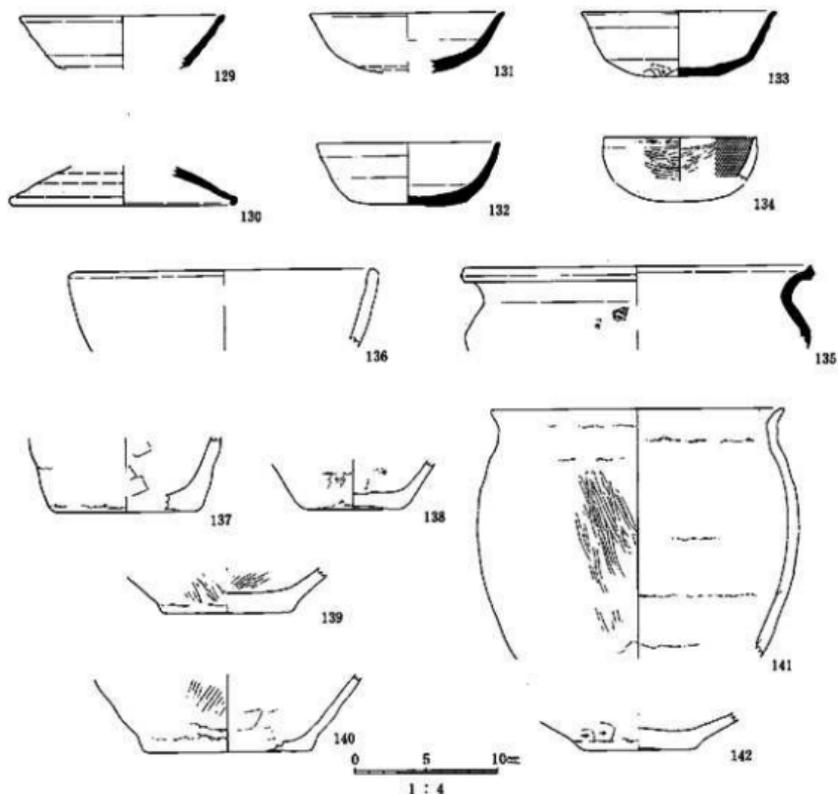


第75図 古墳時代後期の土器 (8) 117~123: 8生

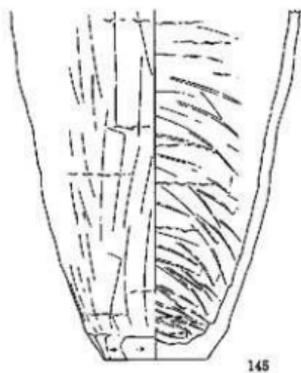
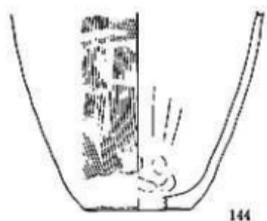
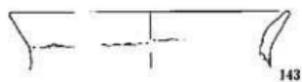
第9号住居址



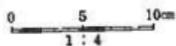
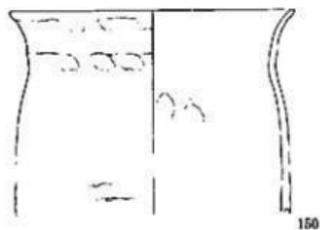
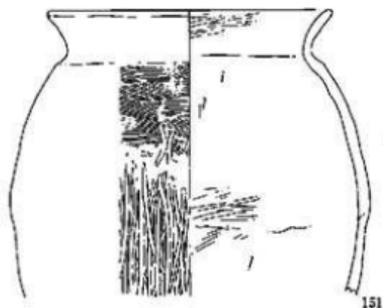
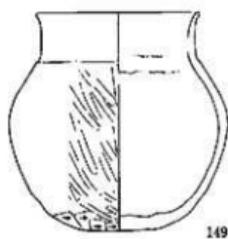
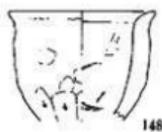
第10号住居址



第76図 古墳時代後期の土器 (9) 124~128 : 9住 129~142 : 10住



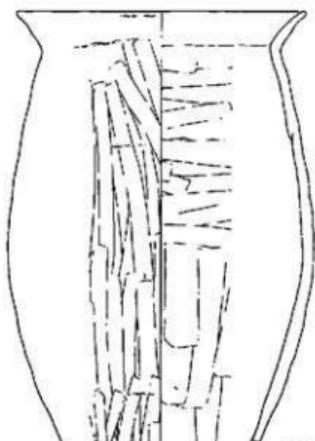
第11号住居址



第77図 古墳時代後期の土器 (10 143~145:10件 146~152:11件)



153



154

第12号住居址



155



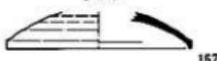
1 : 4



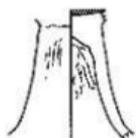
158



156



157



161



159



160



166



167



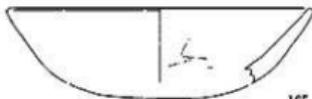
162



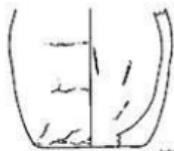
164



163

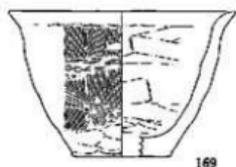


165

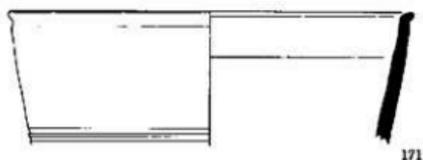


168

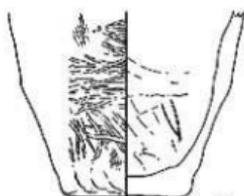
第78図 古墳時代後期の土器 (1) 153~154 : 11住 155~168 : 12住



169



171



170



172

第13号住居址



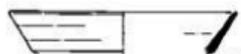
173



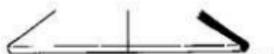
174



175



176



177



178



179



180



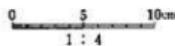
183



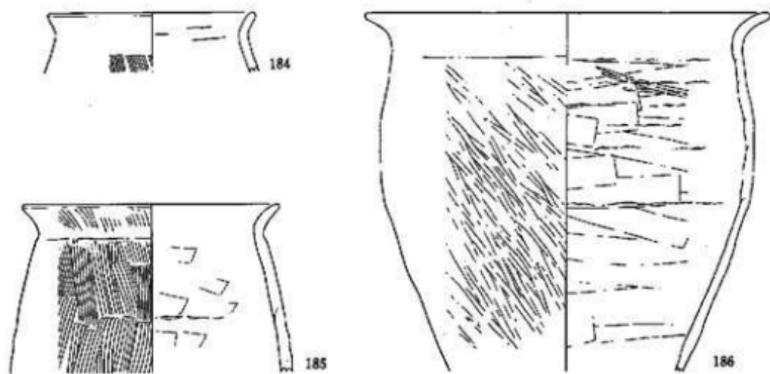
181



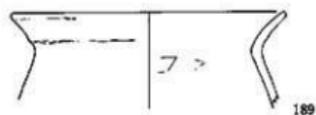
182



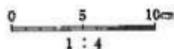
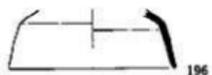
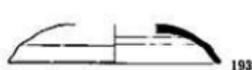
第79図 古墳時代後期の土器 ⑫ 169~172 : 12住 173~183 : 13住



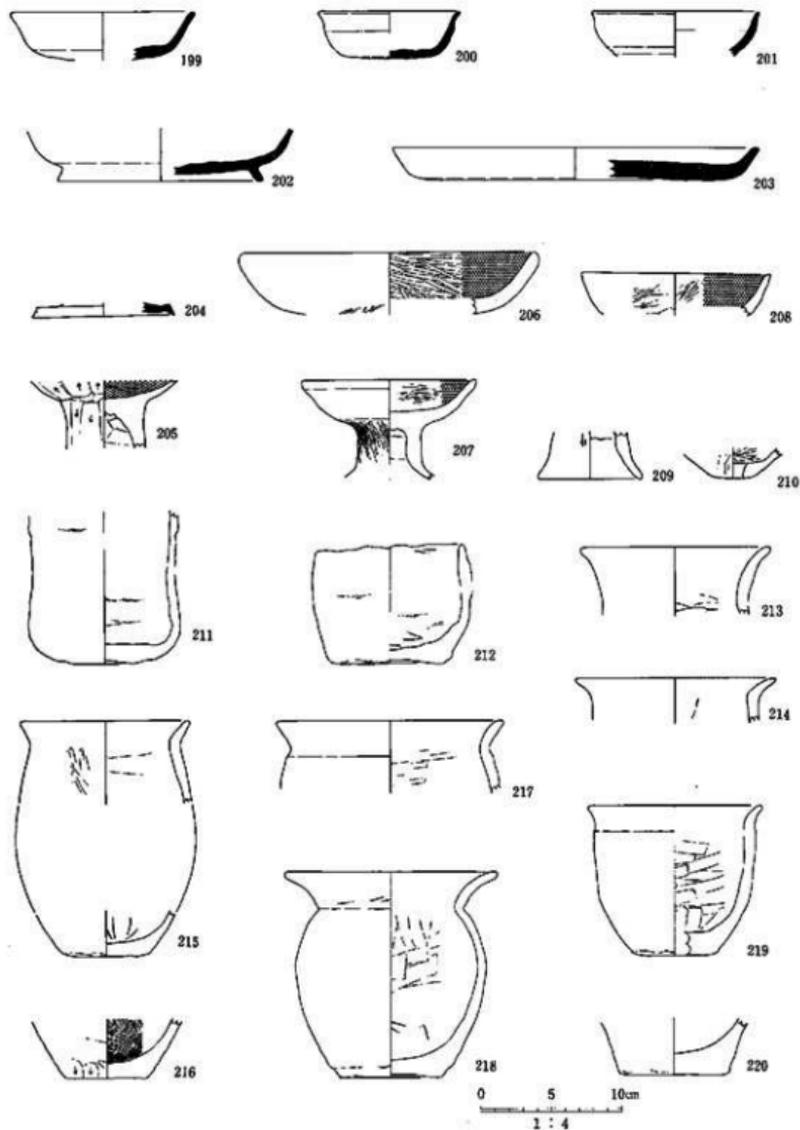
第14号住居址



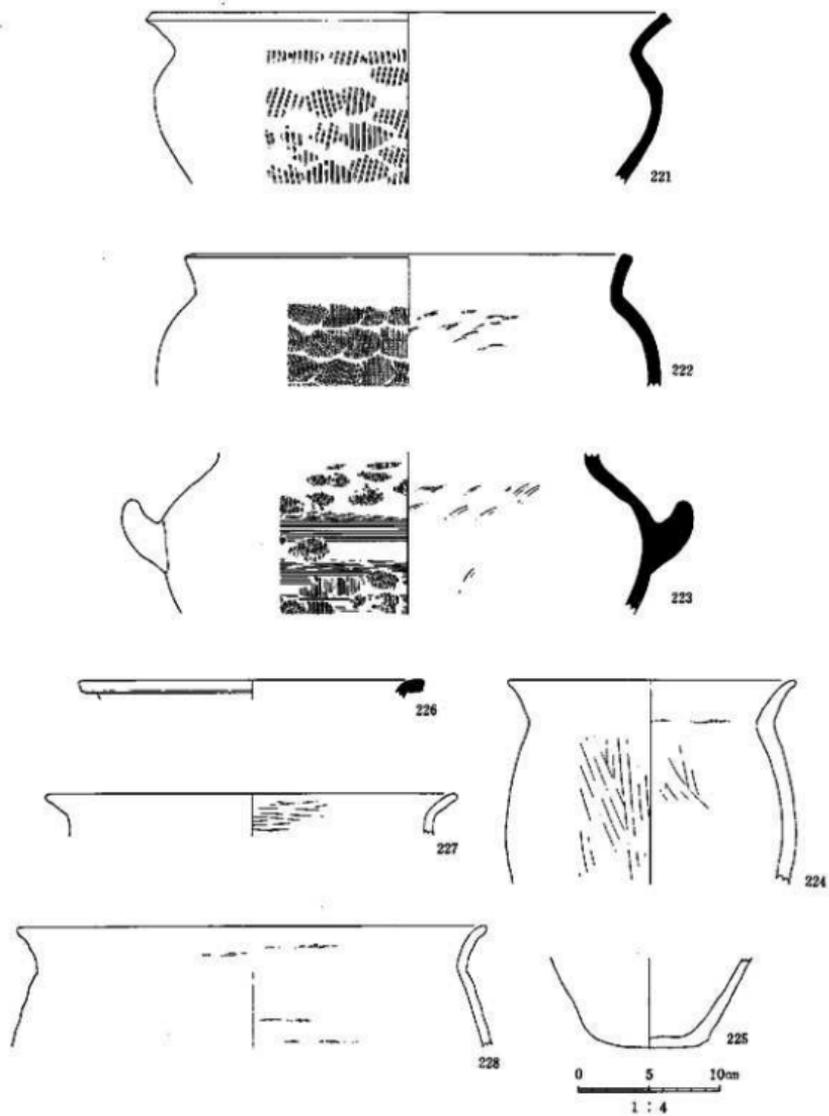
第15号住居址



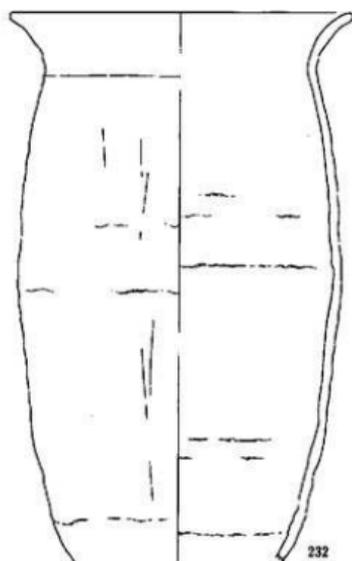
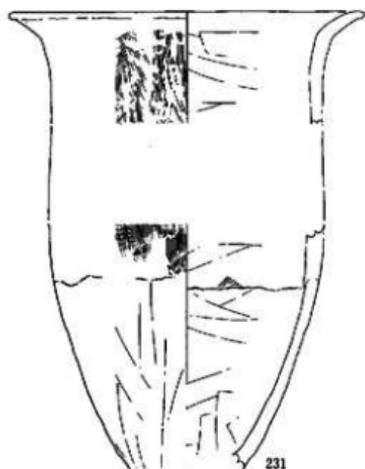
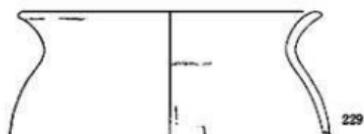
第80図 古墳時代後期の土器 (184~186: 13住 187~190: 14住
191~198: 15住)



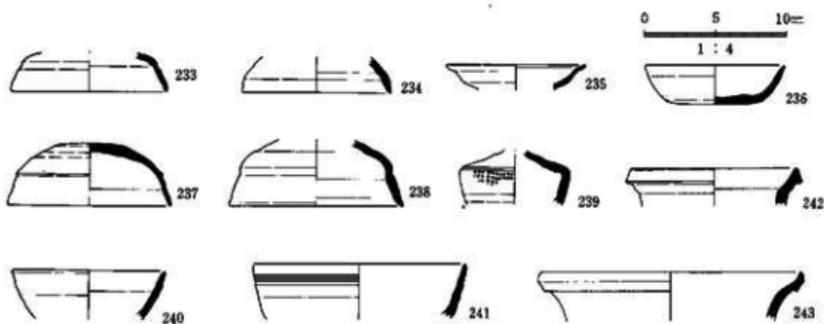
第81圖 古墳時代後期の土器 (4) 199~220:15件



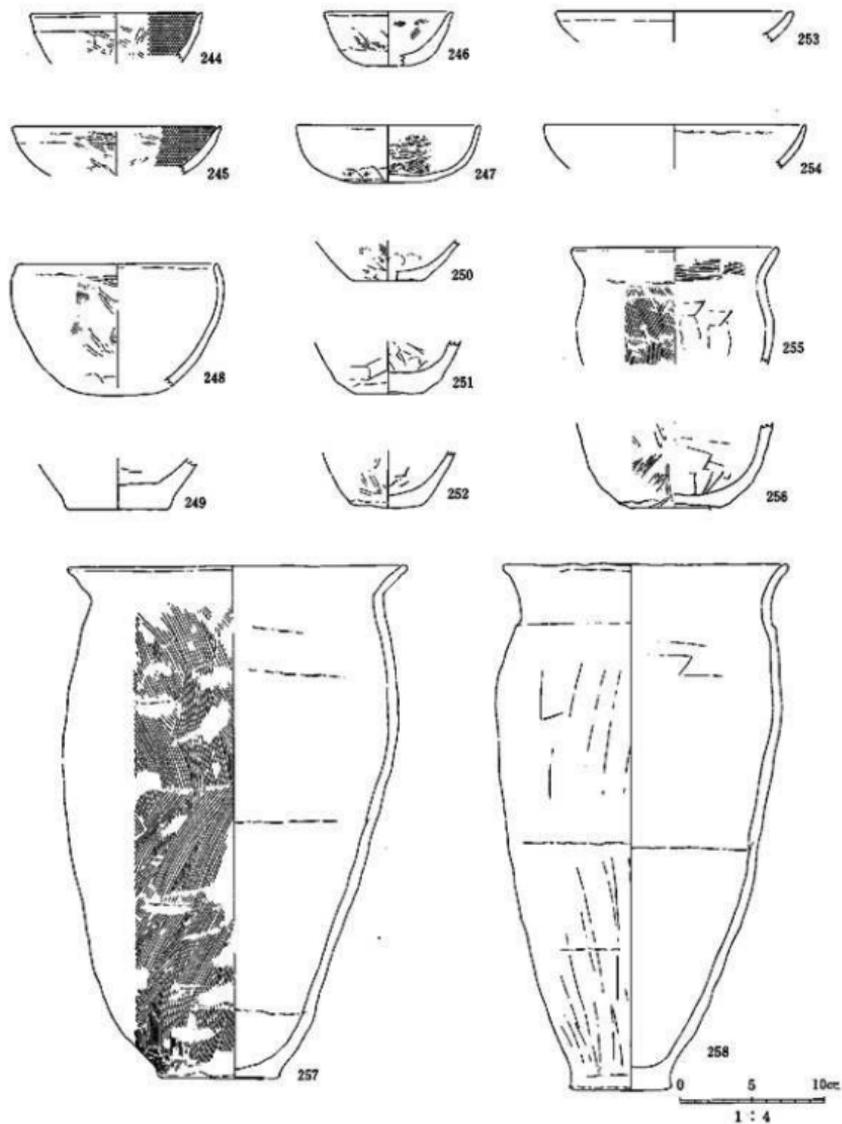
第82図 古墳時代後期の土器 (15) 221~228 : 15/生



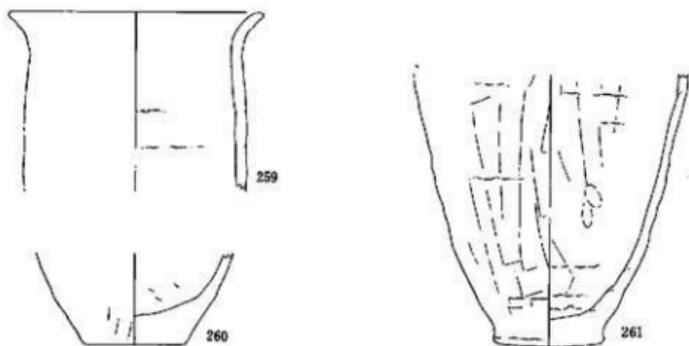
第16号住居址



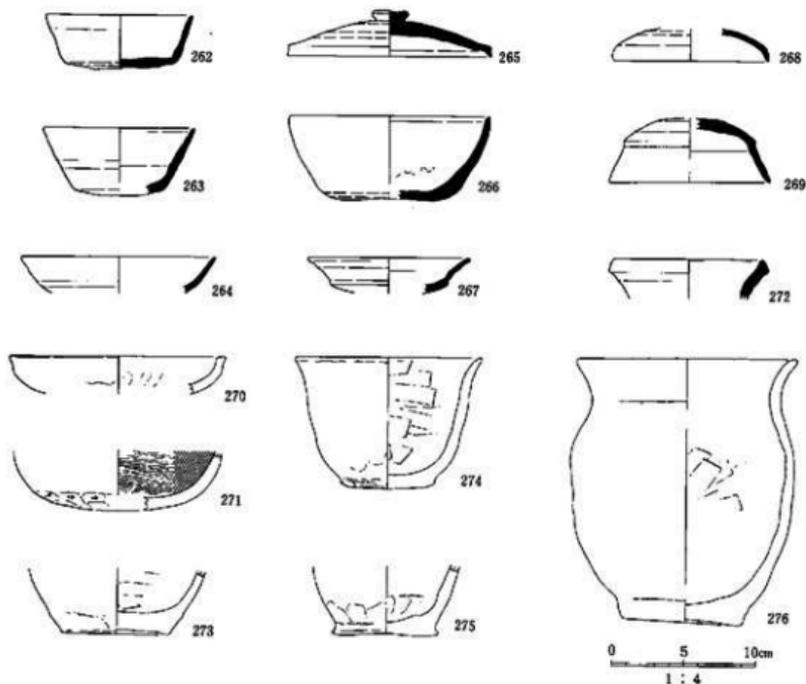
第83図 古墳時代後期の土器 (16 229~232: 15生 233~243: 16生)



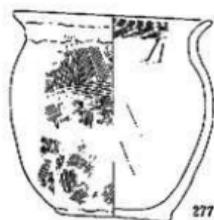
第84図 古墳時代後期の土器 (17) 244~258 : 16住



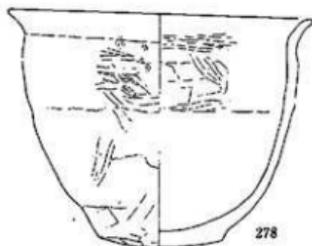
第17号住居址



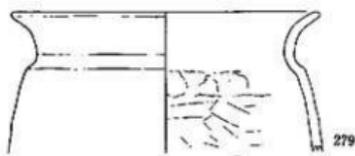
第85図 古墳時代後期の土器 ⑧ 259~261:16件 262~276:17件



277



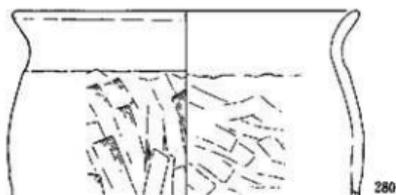
278



279



281



280

第19号住居址



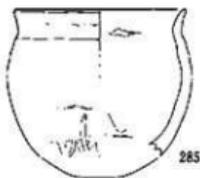
282



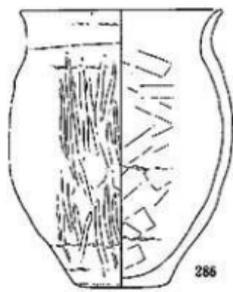
283



284



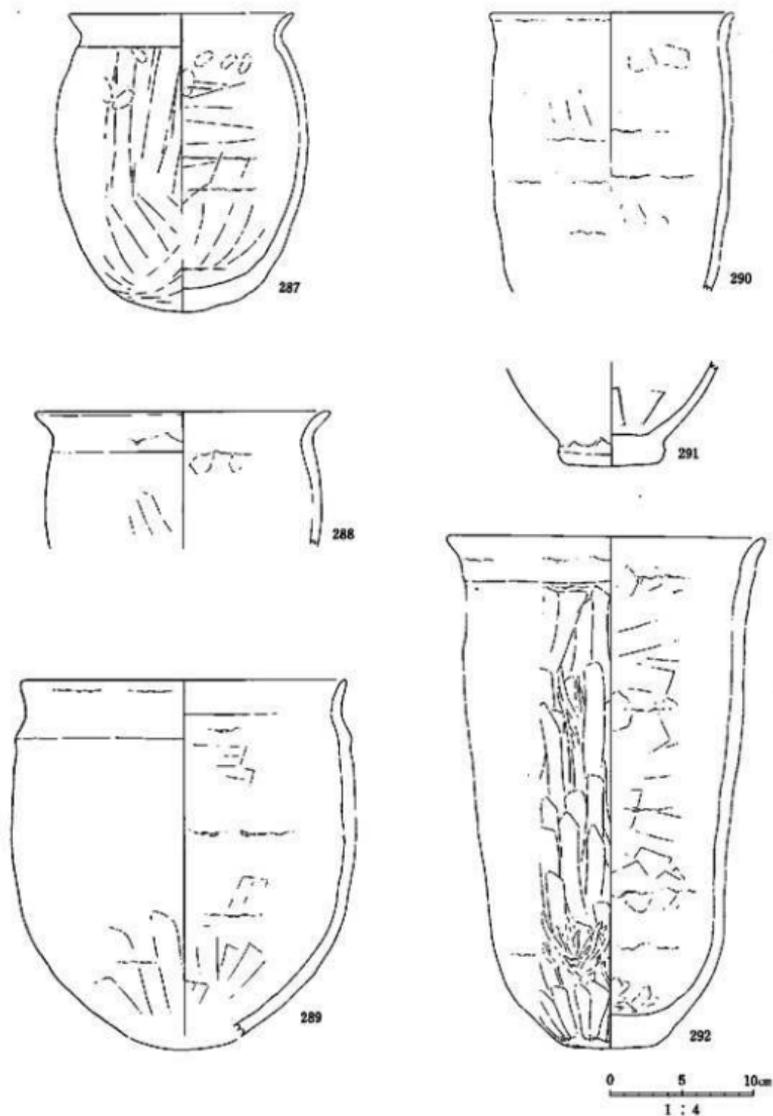
285



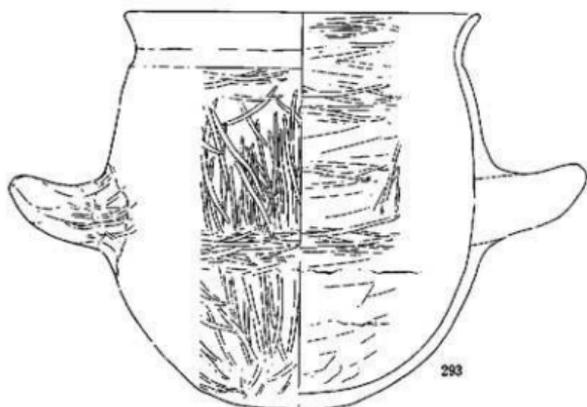
286

0 5 10cm
1 : 4

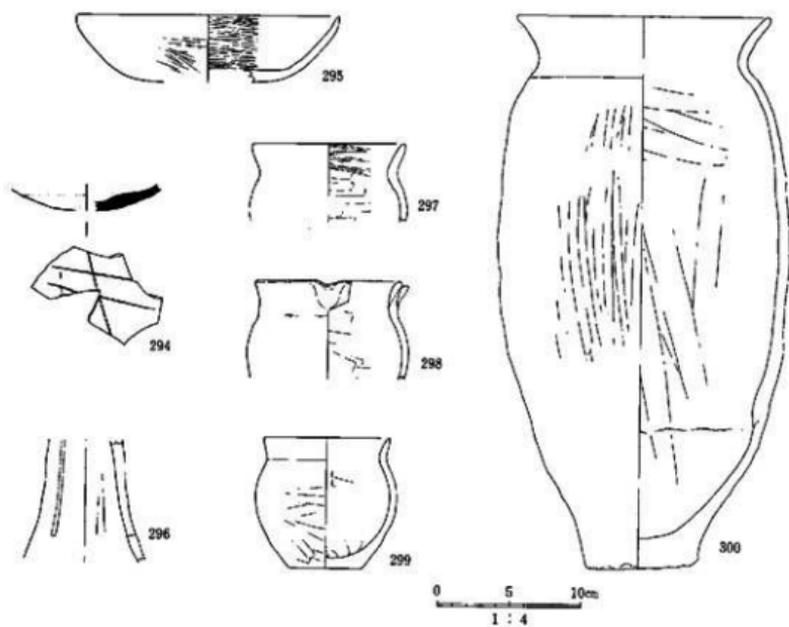
第86図 古墳時代後期の土器 (19 277~281:17住 282~286:19住)



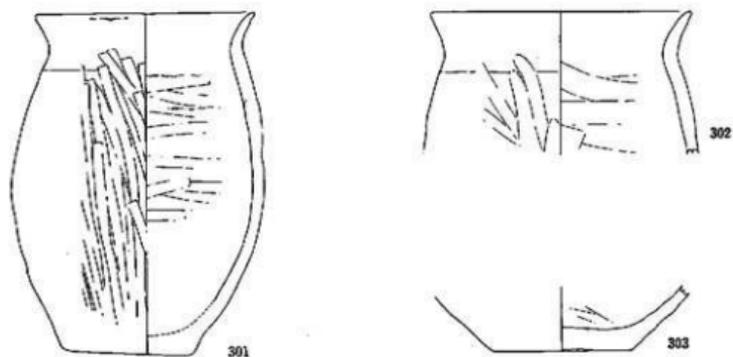
第87図 古墳時代後期の土器 287～292：19住



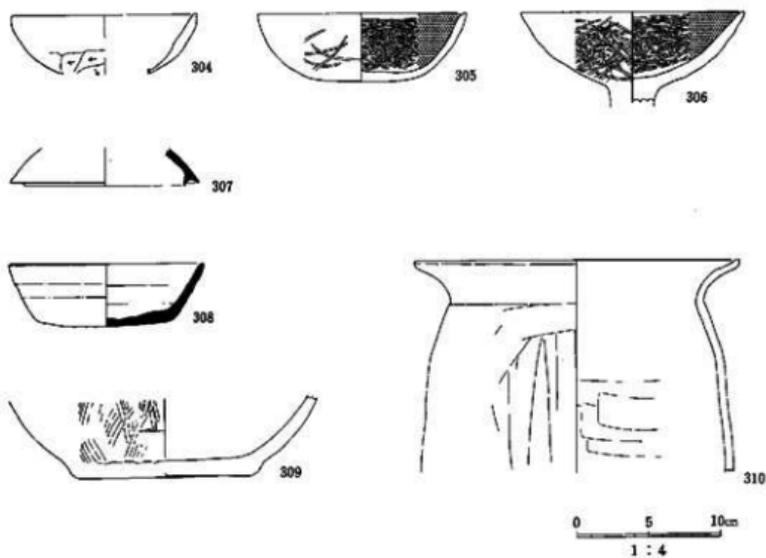
第20号住居址



第88図 古墳時代後期の土器 ② 293:19住 294~300:20住

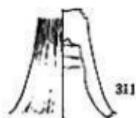


第22号住居址



第89図 古墳時代後期の土器 ② 301~303: 20住 304~310: 22住

第23号住居址



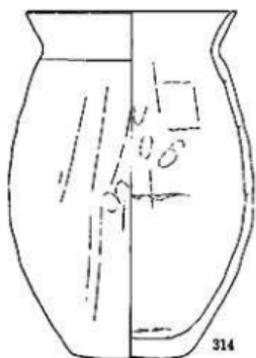
311



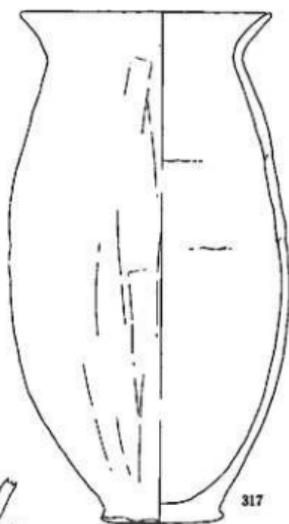
312



313



314



317



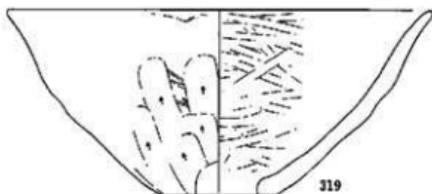
315



316



318



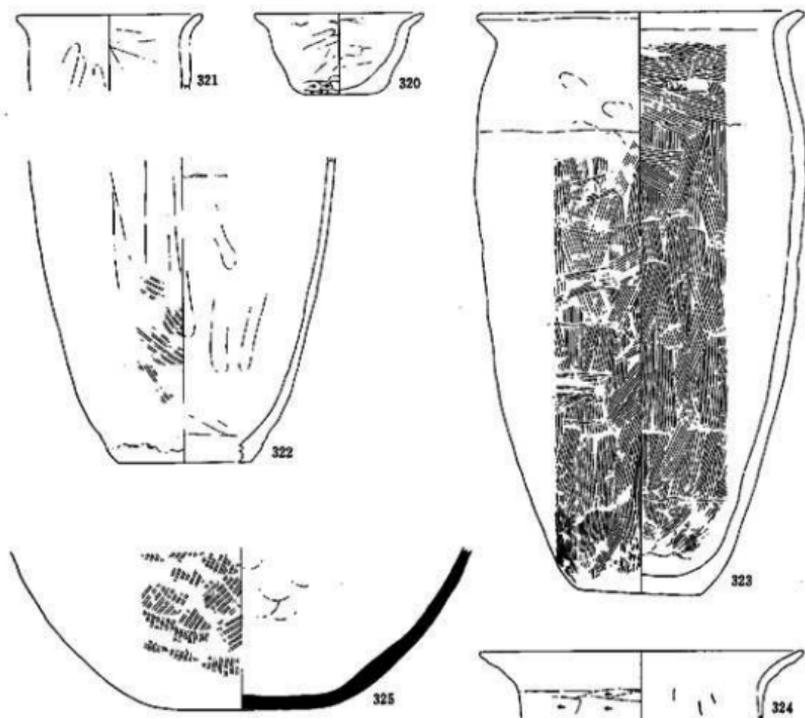
319

0 5 10cm

1 : 4

第90図 古墳時代後期の土器 (23) 311~319 : 23住

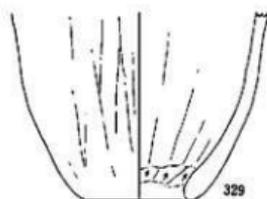
第27号住居址



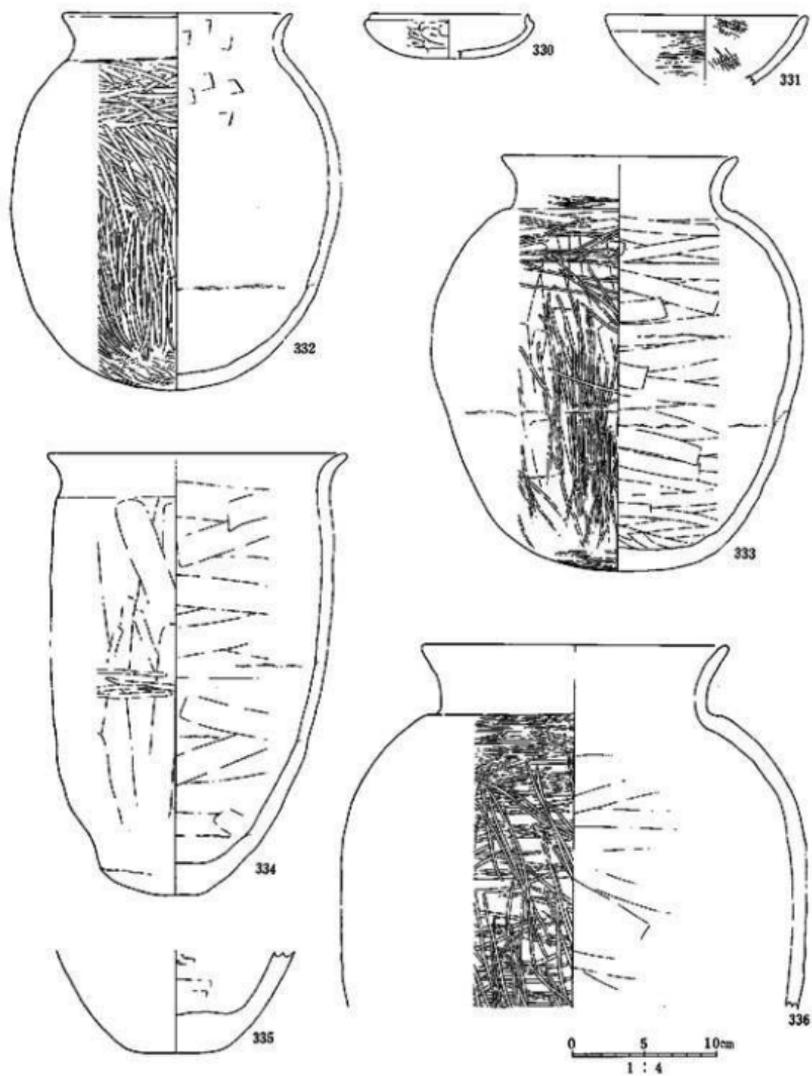
第29号住居址



第30号住居址

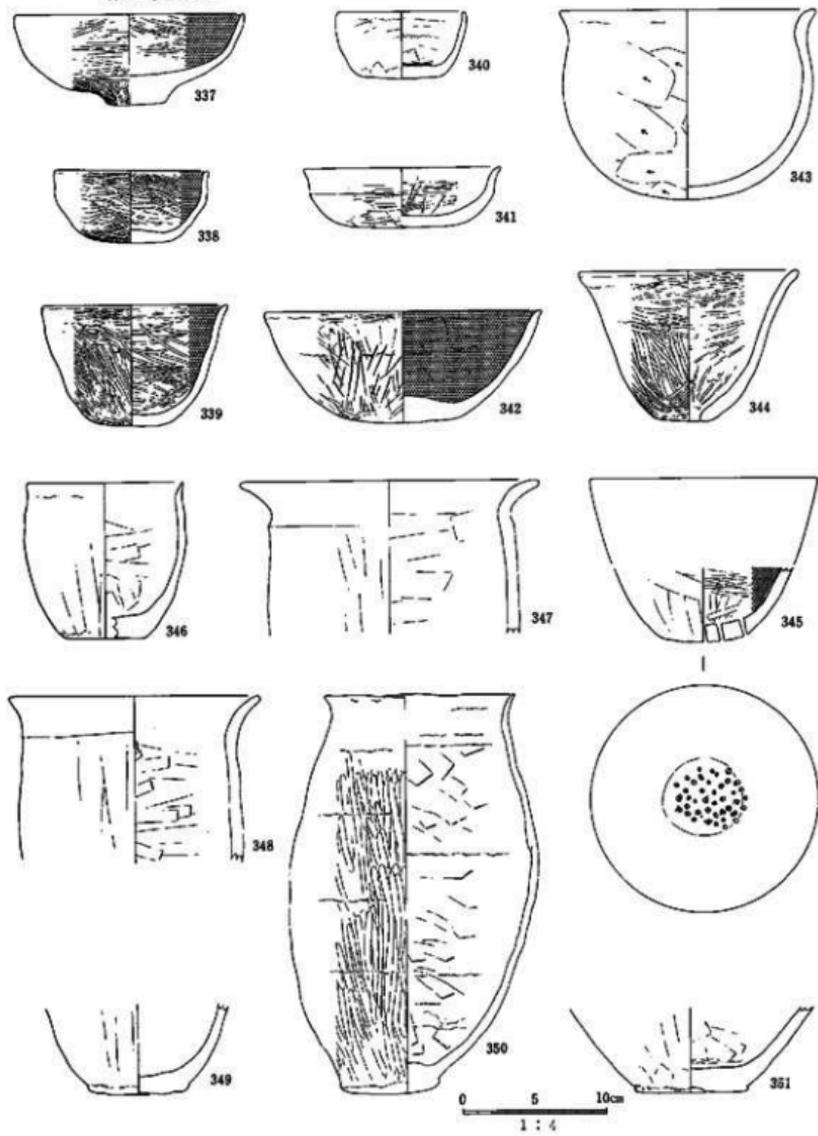


第91図 古墳時代後期の土器 ②4 320~325: 27住 326: 29住
327~329: 30住

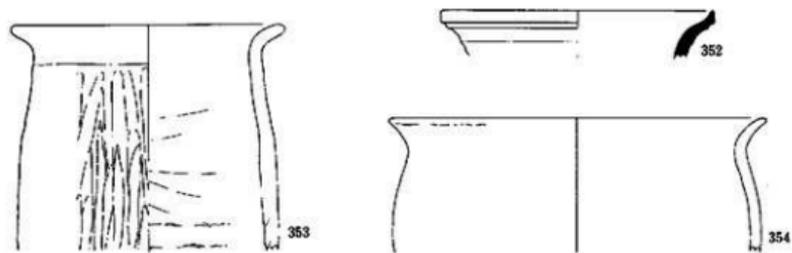


第92図 古墳時代後期の土器 29 330~336 : 30住

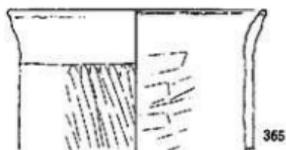
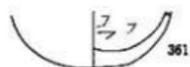
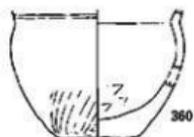
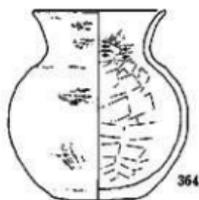
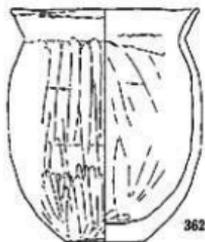
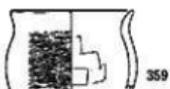
第32号住居址



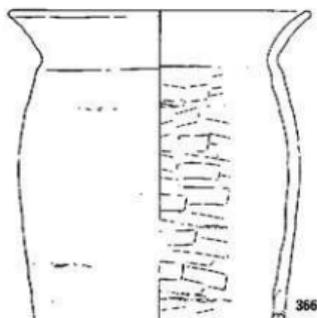
第93図 古墳時代後期の土器 (26 337~351: 32件)



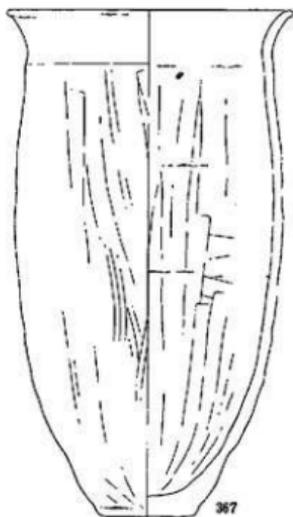
第33号住居址



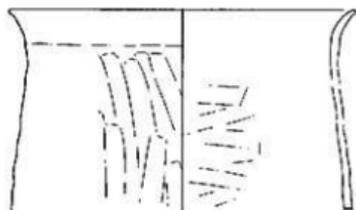
第94図 古墳時代後期の土器 (27) 352~355 : 32住 356~365 : 33住



366



367



368



369

第36号住居址

0 5 10cm
1 : 4

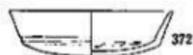


370



371

第37号住居址



372



373



374

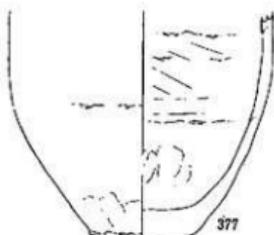
第95図 古墳時代後期の土器 ② 366~369 : 33住 370~371 : 36住
372~374 : 37住



375

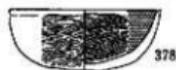


376



377

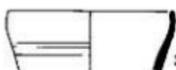
第38号住居址



378



380



381



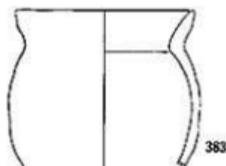
379



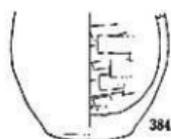
382



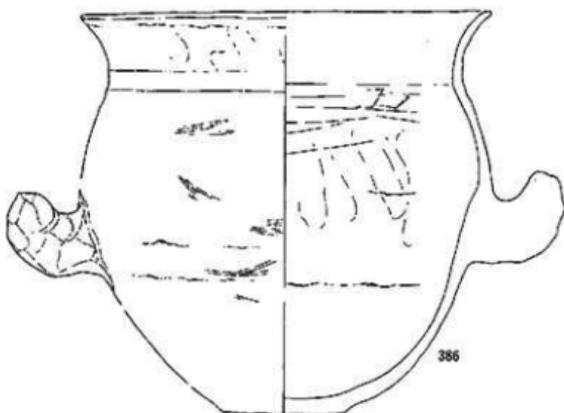
385



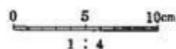
383



384

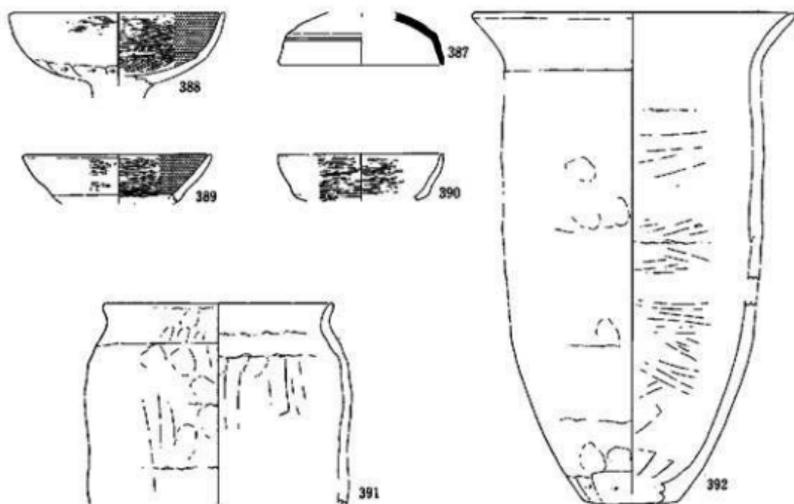


386

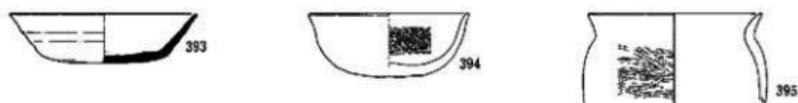


第96図 古墳時代後期の土器 ④ 375~377: 37生 378~386: 38住

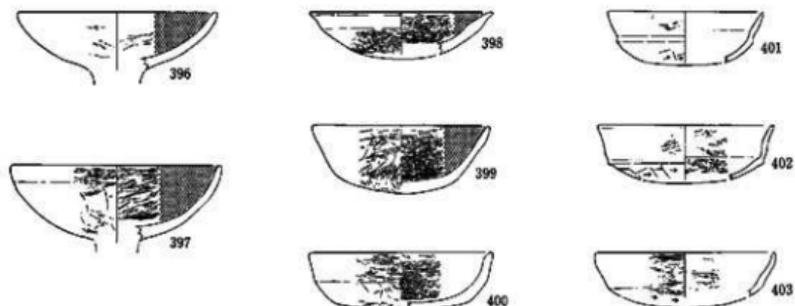
第39号住居址



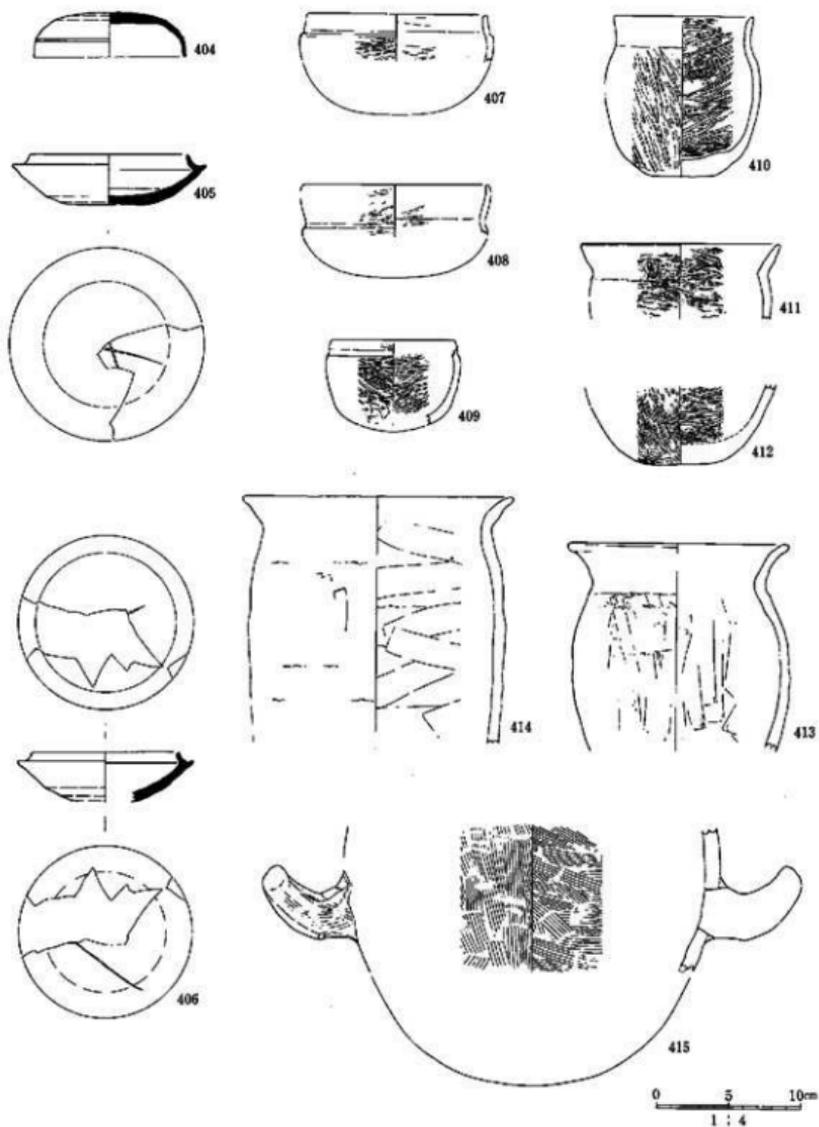
第41号住居址



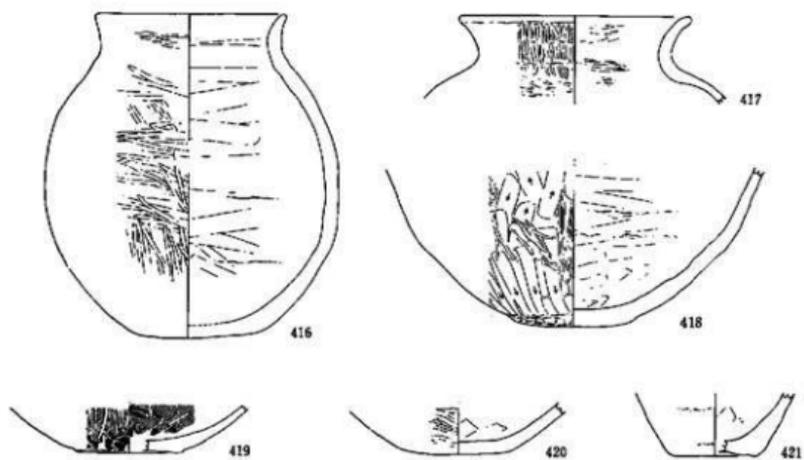
第44号住居址



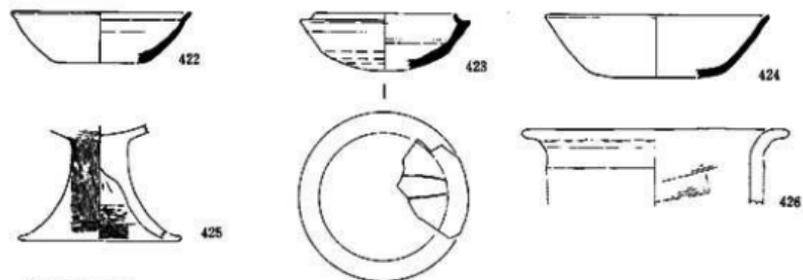
第97図 古墳時代後期の土器 ③ 387~392 : 39住 393~395 : 41住
396~403 : 44住



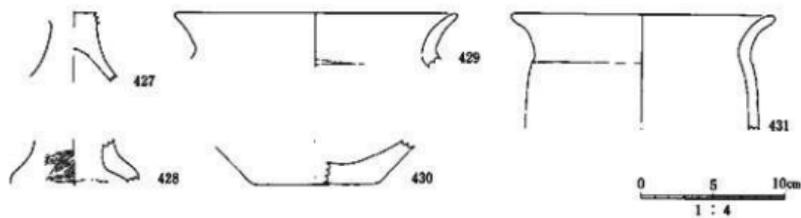
第98図 古墳時代後期の土器 30 404~415: 44件



第45号住居址



第47号住居址



第99図 古墳時代後期の土器 ③ 416～421：44住 422～426：45住
427～431：47住

第51号住居址



432



433

第52号住居址



434



435



436



437



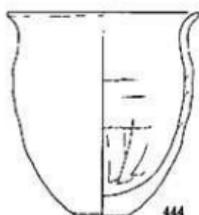
438



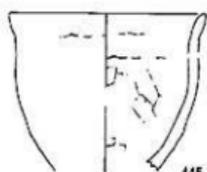
439



440



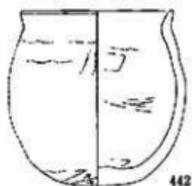
444



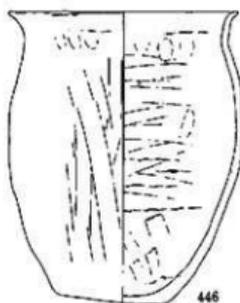
445



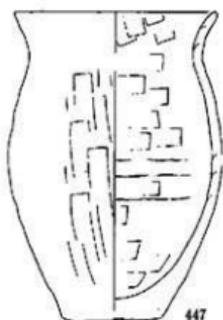
441



442



446



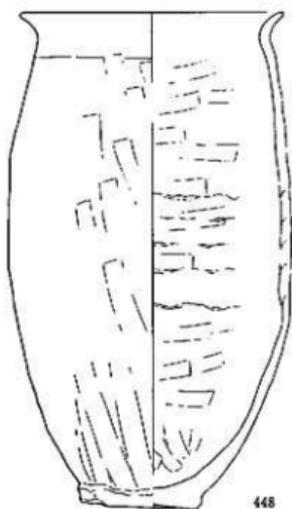
447



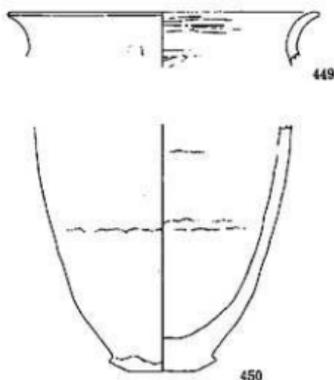
443

0 5 10cm
1 : 4

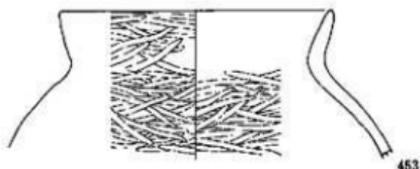
第100図 古墳時代後期の土器 ③ 432 : 47住 433 : 51住 434~447 : 52住



448



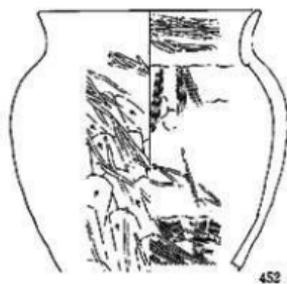
449



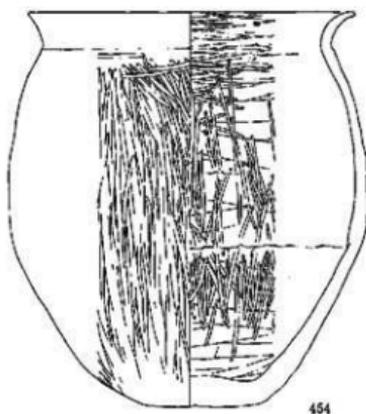
453



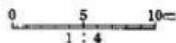
451



452

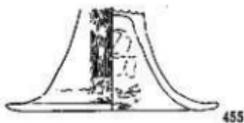


454



第101図 古墳時代後期の土器 34 448~454:52件

第58号住居址



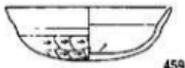
455



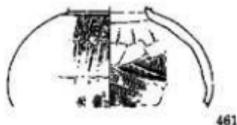
456



457



459



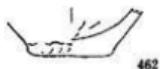
461



458



460



462



463



464

第61号住居址



465



466



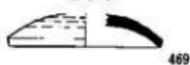
467

第62号住居址



468

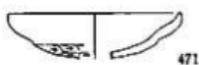
ピット



469



470

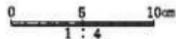


471



472

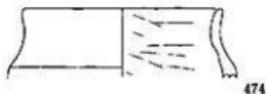
第102図 古墳時代後期の土器 ③ 455~464 : 58住 465~467 : 61住 468 : 62住 469~472 : ピット



ビット



473



474



475

建物址 6



476



477

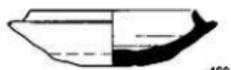


478



479

流路址 2 第1号溝址



480

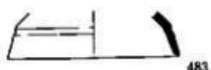


481



482

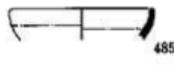
検出面



483



484



485



486



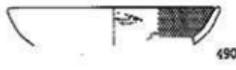
487



488



489



490



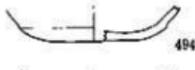
491



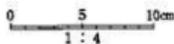
492

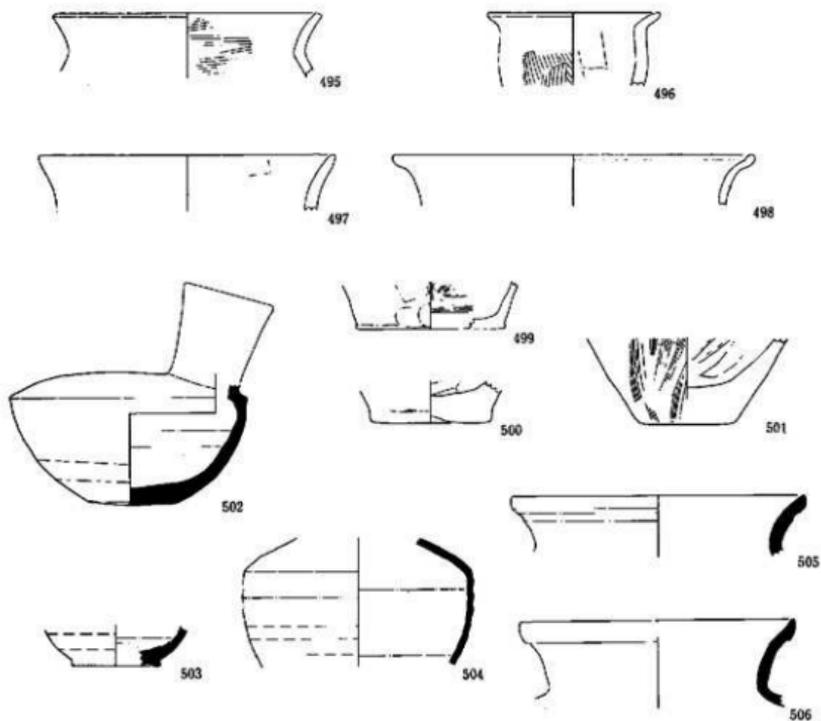


493

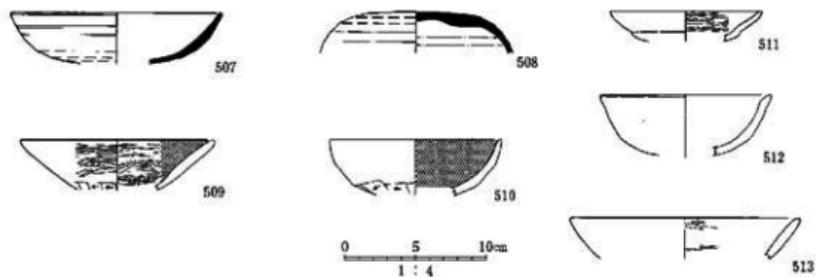


494





遺構外 (後代遺構への混入)



第104図 古墳時代後期の土器 ③ 495～506：検出面 507～513：遺構外

第4表 古墳時代後期土器一覽表

出土地点	種別	形状	寸法(cm)	重量(グラム)	色	内面	外面	裏面	成形・窯焼・彫飾の特徴	番号・調査No. 注記
1	土師器	杯	(10.0)		灰		赤褐色		口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面平	3-1, 3位ア上層
2	土師器	杯B	(12.4)		灰	白灰濁	白灰濁		内・外面ナデ	2-2, 2位上層
3	土師器	杯	(13.4)		灰	赤褐色	赤褐色		口縁部ヨコナデ、体部内面工員ナデ、外面平	2-10, 2位中層
4	土師器	小形盃	(11.8)		灰	赤褐色	赤褐色		口縁部ヨコナデのみ内・外面ナデ	3-7, 3位下層
5	土師器	小形盃	(17.0)		灰	赤褐色	赤褐色		口縁部ヨコナデのみ内・外面ナデ	3-11, 3位中層
6	土師器	小形盃	(12.3)		灰	赤褐色	赤褐色		口縁部ヨコナデのみ内・外面ナデ	2-13, 2位中層
7	土師器	小形盃	(13.3)		灰	赤褐色	赤褐色		口縁部ヨコナデのみ内・外面ナデ	2-16, 2位中層
8	土師器	盃	(12.8)		灰	赤褐色	赤褐色		口縁部外縁工員ナデ、胴部内・外面ナデ	2-12, 2位中層上層
9	土師器	小形盃	(10.8)		灰	赤褐色	赤褐色		口縁部ヨコナデ、胴部内・外面ナデ	2-9, 3位ア上層
10	土師器	盃	(6.6)		(赤)	赤褐色	赤褐色		外縁工員ナデ、内面平ナデ	2-23, 2位中層
11	土師器	盃	(3.4)		(赤)	赤褐色	赤褐色		内面工員ナデ、外面平	2-21, 2位中層
12	土師器	盃	(10.2)		(赤)	赤褐色	赤褐色		口縁部内面ナデ、外面平	2-24, 2位中層
13	土師器	盃	4.9	11.5	(赤)	赤褐色	赤褐色		口縁部内面ナデ、外面平	2-25, 2位中層
14	土師器	盃	34.3	7.9	14.5	赤褐色	赤褐色		胴部外縁ハコナデ→口縁部ナデ、胴部内面平	2-9, 3位中層
15	土師器	盃	(15.3)		灰	赤褐色	赤褐色		口縁部ヨコナデ→胴部内面工員ナデ、外面ナデ	2-18, 2位中層下層
16	土師器	盃	(20.5)		灰	赤褐色	赤褐色		口縁部ハコナデ→胴部内・外面工員ナデ	2-14, 2位下層
17	土師器	盃	(12.2)		3.3	(赤)	赤褐色		口縁部内面ナデ、外面平	3-3, 3位中層
18	土師器	盃	(12.4)		(3.8)	(赤)	赤褐色		胴部内面ナデ、外面平	3-4, 3位中層
19	土師器	盃	(15.6)		(4.3)	灰	赤褐色		胴部ナデ→体部外縁ハコナデ、外面平	3-17, 3位中層
20	土師器	盃	(14.7)		灰	赤褐色	赤褐色		口縁部ヨコナデ→口縁部内・外面ナデ	3-8, 3位中層
21	土師器	盃	(4.0)		灰	赤褐色	赤褐色		ヨコナデ	3-15, 3位ア上層
22	土師器	盃	(14.2)	(8.0)	(3.4)	灰	赤褐色		ヨコナデ、口縁部ヨコナデ、胴部内面ナデ	3-21, 3位ア上層
23	土師器	盃	(14.3)		灰	赤褐色	赤褐色		ヨコナデ、口縁部内面ナデ	3-20, 3位下層
24	土師器	盃			(灰)	赤褐色	赤褐色		ヨコナデ、胴部ナデ、胴部内面ナデ	3-24, 3位ア上層
25	土師器	盃	(6.8)		灰	赤褐色	赤褐色		ヨコナデ、口縁部ヨコナデ、胴部内面ナデ	3-22, 3位ア上層
26	土師器	盃	(14.2)	(5.7)	(7.8)	(赤)	赤褐色		ヨコナデ、口縁部ヨコナデ、胴部内面ナデ	3-24, 2位中層
27	土師器	盃	(18.2)		灰	赤褐色	赤褐色		内・外面ナデ	3-5, 3位ア上層
28	土師器	盃	(19.4)		灰	赤褐色	赤褐色		口縁部ヨコナデのみ内面ナデ	3-9, 3位ア上層
29	土師器	盃	(16.3)		灰	赤褐色	赤褐色		口縁部ヨコナデ→胴部外縁ハコナデ、内面工員ナデ及び胴部ナデ	3-15, 3位中層
30	土師器	盃	(12.0)		灰	赤褐色	赤褐色		口縁部ナデ→体部外縁ハコナデ、胴部内面ナデ	3-25, 3位中層
31	土師器	盃	(7.2)		(赤)	赤褐色	赤褐色		胴部内・外面ナデ、外面平	3-31, 3位ア上層
32	土師器	盃	(4.2)		(赤)	赤褐色	赤褐色		口縁部ヨコナデ→外縁工員ナデ及びハコナデ、外面平	3-12, 3位下層
33	土師器	盃	(4.8)		(赤)	赤褐色	赤褐色		口縁部内・外面工員ナデ	3-11, 3位中層
34	土師器	盃	6.8		(赤)	赤褐色	赤褐色		口縁部内面工員ナデ→外縁ナデ、外面平	3-15, 3位中層

№	巴士名	種別	形状	寸法 (cm)	重量 (kg)	乗客数	機軸	色	内装	内装	特徴	備考
35	3年	大型	要	17.0	(9.4)				緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	3-15, 3 40018
36	3年	大型	要	17.0	(9.4)				緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	3-14, 3 40012
37	3年	大型	要	15.8					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	3-11, 3 40016
38	3年	大型	要	15.8					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	3-2, 3 40012
39	4年	大型	要	13.0					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-2, 4 40015
40	4年	大型	要	13.0					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-1, 4 40015
41	4年	大型	要	12.8					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-3, 4 40015
42	4年	大型	要	12.2					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-6, 4 40012
43	4年	大型	要	11.1					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-5, 4 40012
44	4年	大型	要	12.5					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-25, 4 40012
45	4年	大型	要	15.9					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-5, 4 40012
46	4年	大型	要	15.6					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-5, 4 40012
47	4年	大型	要	15.4					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-5, 4 40012
48	4年	大型	要	15.6					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-5, 4 40012
49	4年	大型	要	13.4	(9.8)				緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-28, 4 40012
50	4年	大型	要	14.2					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-11, 4 40012
51	4年	大型	要	4.4					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-11, 4 40012
52	4年	大型	要	16.2					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-18, 4 40012
53	4年	大型	要	12.3					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-18, 4 40012
54	4年	大型	要	19.5					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-7, 4 40012
55	4年	大型	要	6.0					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-8, 4 40012
56	4年	大型	要	11.6	(9.8)				緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-23, 4 40012
57	4年	大型	要	13.7					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-23, 4 40012
58	4年	大型	要	19.2					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-23, 4 40012
59	4年	大型	要	19.4					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-23, 4 40012
60	4年	大型	要	19.5					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-23, 4 40012
61	4年	大型	要	19.5					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-23, 4 40012
62	4年	大型	要	17.8	(15.4)				緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-17, 4 40012
63	4年	大型	要	18.9	7.7				緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-23, 4 40012
64	4年	大型	要	18.4					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-23, 4 40012
65	4年	大型	要	25.2					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-23, 4 40012
66	4年	大型	要	—					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-14, 4 40012
67	4年	大型	要	18.6					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-23, 4 40012
68	4年	大型	要	19.0					緑	内装	前部内・外装工員ナリ、水害迄	4-23, 4 40012

品名	仕上程度	種別	用途	寸法 (mm)	重量 (kg)	色	内面	外面	特徴	備考・規格・記
69	5仕	鋼製	外箱	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	外箱用鋼板 5-5、5仕用
70	5仕	鋼製	外箱	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	内・外箱コテ	内外箱用鋼板 5-6、5仕上層
71	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	外蓋用鋼板 5-4、7仕用
72	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-5、5仕上層
73	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-1、5仕上層
74	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-9、5仕上層
75	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-10、5仕上層
76	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-11、5仕上層
77	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-12、5仕上層
78	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-13、5仕上層
79	6仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-14、5仕上層
80	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-15、5仕上層
81	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-16、5仕上層
82	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-17、5仕上層
83	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-18、5仕上層
84	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-19、5仕上層
85	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-20、5仕上層
86	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-21、5仕上層
87	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-22、5仕上層
88	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-23、5仕上層
89	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-24、5仕上層
90	7仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-25、5仕上層
91	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-26、5仕上層
92	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-27、5仕上層
93	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-28、5仕上層
94	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-29、5仕上層
95	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-30、5仕上層
96	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-31、5仕上層
97	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-32、5仕上層
98	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-33、5仕上層
99	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-34、5仕上層
100	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-35、5仕上層
101	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-36、5仕上層
102	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-37、5仕上層
103	5仕	鋼製	蓋	口径 111.0	—	黒	鋼板	鋼板	コテコテ、口縁部コテ	5-38、5仕上層

№	地上位置	高さ	形状	寸法(㎡)	面積	種類	色	用途	備考	形成・調査・形跡の特徴	調査年度・施設
104	5位	鉄製	圓形	(11.0)	1.0	灰白	灰白	外周	円形	ロクロナデ、口縁部までコナデ	8-6、8位コナデNo.1
105	8位	鉄製	圓形	(13.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	ロクロナデ、口縁部までコナデ、実用部内側へ切り	8-7、8位コナデ
106	8位	鉄製	圓形	(12.5)	1.0	灰	灰	外周	円形	ロクロナデ、口縁部までコナデ	8-8、8位コナデ
107	8位	鉄製	圓形	(19.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	ロクロナデ、口縁部までコナデ、外周部中心位2本の平行状溝	8-9、8位コナデ
108	土部	鉄製	圓形	(12.2)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデ、外周部外周ナデ・内周部内周ナデ	8-10、8位コナデ
109	8位	鉄製	圓形	(4.3)	1.0	灰	灰	外周	円形	内周まで、外周下縁ナデのみを造り上げる	8-10、8位コナデ
110	8位	鉄製	圓形	(12.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	内周まで、外周下縁ナデ・上縁まで	8-11、8位コナデ
111	8位	鉄製	圓形	(12.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	内周まで、外周下縁ナデのみを造り上げる	8-11、8位コナデ
112	8位	鉄製	圓形	(14.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	内・外周部全面まで	8-12、8位コナデ
113	8位	鉄製	圓形	(11.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	内周まで、外周部まで	8-13、8位コナデ
114	8位	鉄製	圓形	(11.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデ・内周部内周ナデ、内周部外周ナデ	8-13、8位コナデ
115	8位	鉄製	圓形	(14.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデ、内周部外周ナデ・外周ナデ	8-13、8位コナデ
116	8位	鉄製	圓形	(5.6)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデ・外周部外周ナデ・外周ナデ	8-13、8位コナデ
117	8位	鉄製	圓形	(12.5)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデ・外周部外周ナデ・外周ナデ	8-13、8位コナデ
118	8位	鉄製	圓形	(12.5)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデ、内周部内周ナデのみを造り上げる	8-17、8位コナデ
119	8位	鉄製	圓形	(7.8)	1.0	灰	灰	外周	円形	内・外周部全面まで	8-4、8位コナデ
120	8位	鉄製	圓形	(17.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	内周まで、外周部まで	8-4、8位コナデ
121	8位	鉄製	圓形	(25.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
122	8位	鉄製	圓形	(25.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
123	8位	鉄製	圓形	(17.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
124	8位	鉄製	圓形	(17.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
125	8位	鉄製	圓形	(17.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
126	8位	鉄製	圓形	(17.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
127	8位	鉄製	圓形	(11.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
128	8位	鉄製	圓形	(14.3)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
129	8位	鉄製	圓形	(14.3)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
130	8位	鉄製	圓形	(15.4)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
131	8位	鉄製	圓形	(15.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
132	8位	鉄製	圓形	(22.9)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
133	8位	鉄製	圓形	(16.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
134	土部	鉄製	圓形	(16.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
135	土部	鉄製	圓形	(14.2)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
136	土部	鉄製	圓形	(26.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
137	8位	鉄製	圓形	(10.0)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ
138	8位	鉄製	圓形	(6.8)	1.0	灰	灰	外周	円形	口縁部までコナデのみを造り上げる	8-12、8位コナデ

機	品名	形状	寸法(cm)	材質	色		備考・商標 No. 記載
					外	内	
174	11底	織物	山径 47.3	1	赤	黒	ロクロナデ、口輪部ヨコナデ、天井板取ナデ
175	17	織物	山径 47.3	1	赤	黒	ロクロナデ、口輪部ヨコナデ、胴部ヨコナデ
176	17	織物	山径 47.3	1	赤	黒	ロクロナデ、口輪部ヨコナデ
177	17	織物	山径 47.3	1	赤	黒	ロクロナデ、口輪部ヨコナデ
178	17	土師器	山径 41.2	1	赤	黒	体部外周下ナデの全周をガキ・内周をガキ
179	17	土師器	山径 44.5	1	赤	黒	体部外周下ナデの全周をガキ・内周をガキ
180	17	土師器	山径 43.9	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、体部内周ナデ・外周ナデ、胴部ナデ
181	17	土師器	山径 40.1	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、口輪部ヨコナデ
182	17	土師器	山径 47.4	1	赤	黒	胴部内周ナデ・内周ナデ、水置
183	17	土師器	山径 45.6	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
184	17	土師器	山径 44.6	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
185	17	土師器	山径 43.0	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
186	17	土師器	山径 43.0	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
187	14底	織物	山径 44.7	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
188	17	土師器	山径 44.7	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
189	17	土師器	山径 43.9	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
190	17	土師器	山径 43.3	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
191	15底	織物	山径 41.0	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、天井板取ナデ、口輪部ヨコナデ
192	17	土師器	山径 46.4	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
193	17	土師器	山径 44.6	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
194	17	土師器	山径 43.0	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
195	17	土師器	山径 42.0	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
196	17	土師器	山径 41.6	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
197	17	土師器	山径 47.5	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
198	17	土師器	山径 46.6	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
199	17	土師器	山径 42.4	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
200	17	土師器	山径 45.6	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
201	17	土師器	山径 41.4	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
202	17	土師器	山径 44.4	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
203	17	土師器	山径 43.0	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
204	17	土師器	山径 49.9	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
205	17	土師器	山径 40.4	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
206	17	土師器	山径 43.1	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
207	17	土師器	山径 43.1	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ
208	17	土師器	山径 43.1	1	赤	黒	口輪部ヨコナデ、胴部内周ナデ、外周ナデ

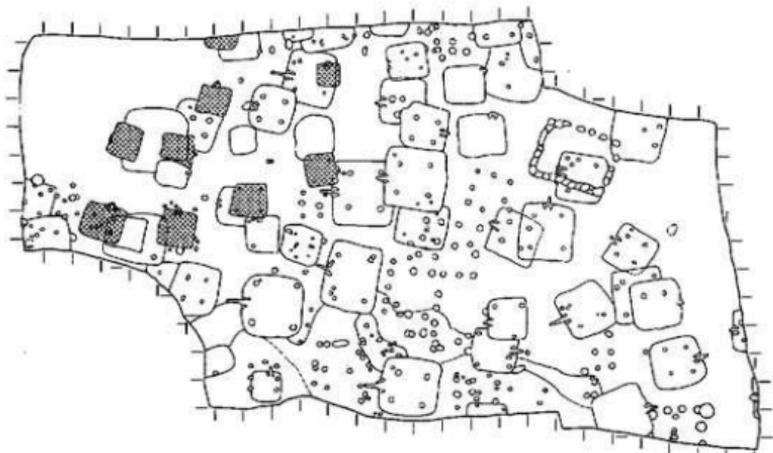
地	地土地点	標高	形状	寸		積算	色		説明	備考
				門柱	基礎		外	内		
200	土庫	57.4	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	外周土ナギ・内周内張	15-12, 15年フタ土
210	土庫	53.1	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	副都内・外周土ナギ・基礎中央に穿孔	15-6, 15年フタ土
212	土庫	56.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-11, 15年M17
213	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-10, 15年M17
214	土庫	8.3	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-9, 15年フタ土
215	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-9, 15年フタ土
216	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-41, 15年
217	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-14, 15年フタ土
218	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-38, 15年フタ土
219	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-50, 15年M2
220	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-23, 15年M13
221	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-42, 15年
222	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-20, 15年M4
223	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-21, 15年M1
224	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-2, 15年フタ土
225	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-5, 15年M3
226	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-40, 15年フタ土
227	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-8, 15年フタ土
228	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-4, 15年M18
229	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-7, 15年フタ土
230	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-10, 15年フタ土
231	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-1, 15年M16
232	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-3, 15年M3
233	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-6, 15年フタ土
234	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-5, 15年フタ土
235	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-8, 15年フタ土
236	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-10, 15年M18
237	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-7, 15年フタ土
238	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-1, 15年M16
239	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-3, 15年M3
240	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-6, 15年フタ土
241	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-5, 15年フタ土
242	土庫	8.0	重	(4)	(4)	(4)	赤	赤	全周土ナギ・外周土ナギ・敷土ナギ	15-13, 15年フタ土

機	出土地点	類別	形状	寸法(cm)	材料		色		内面		成形・構造・彫刻の特長	備考・実測地・表記
					種類	厚薄	表面	裏面	底	裏		
242	16庄	山止盤	圓	(13.3)	瓦	瓦	灰	灰	灰	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外縁部のみがヤケ	12-14, 16庄フタ土
244	〃	木輪盤	円	(14.6)	瓦	瓦	灰青	灰青	灰青	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	内面	12-14, 16庄フタ土
245	〃	〃	〃	(14.6)	瓦	瓦	灰青	灰青	灰青	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	内面	15-15, 16庄フタ土
246	〃	〃	〃	(12.9)	瓦	瓦	灰青	灰青	灰青	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	内面	15-15, 16庄フタ土
247	〃	〃	〃	(12.9)	瓦	瓦	灰青	灰青	灰青	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	内面	15-17, 16庄フタ土
248	〃	〃	〃	(14.0)	瓦	瓦	灰青	灰青	灰青	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	内面	15-17, 16庄フタ土
249	〃	〃	〃	7.1	(5)	明緑青	明緑青	明緑青	明緑青	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-5, 16庄
250	〃	〃	〃	(5.0)	(4)	赤茶	赤茶	赤茶	赤茶	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-5, 16庄
251	〃	〃	〃	4.8	(6)	赤茶	赤茶	赤茶	赤茶	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-5, 16庄
252	〃	〃	〃	5.0	(6)	赤茶	赤茶	赤茶	赤茶	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-5, 16庄
253	〃	〃	〃	(16.6)	〃	赤茶	赤茶	赤茶	赤茶	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-5, 16庄
254	〃	〃	〃	(17.2)	〃	赤茶	赤茶	赤茶	赤茶	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-5, 16庄
255	〃	〃	〃	(14.3)	〃	赤茶	赤茶	赤茶	赤茶	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-5, 16庄
256	〃	〃	〃	6.2	(5)	赤茶	赤茶	赤茶	赤茶	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-5, 16庄
257	〃	〃	〃	24.4	8.5	36.9	赤	赤	赤	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-5, 16庄
258	〃	〃	〃	20.0	7.2	37.3	赤	赤	赤	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-5, 16庄
259	〃	〃	〃	(17.5)	〃	赤茶	赤茶	赤茶	赤茶	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-5, 16庄
260	〃	〃	〃	7.6	(5)	明緑青	明緑青	明緑青	明緑青	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-5, 16庄
261	〃	〃	〃	7.6	(5)	明緑青	明緑青	明緑青	明緑青	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-5, 16庄
262	17庄	山止盤	円	(19.2)	7.6	3.7	(6)	灰区	灰区	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄
263	〃	〃	〃	(19.5)	〃	〃	〃	灰区	灰区	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄
264	〃	〃	〃	(13.5)	〃	〃	〃	灰青	灰青	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄
265	〃	〃	〃	(14.0)	—	3.2	〃	灰青	灰青	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄
266	〃	〃	〃	(14.0)	(8.4)	(6.6)	〃	灰区	灰区	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄
267	〃	〃	〃	(11.4)	〃	〃	〃	灰区	灰区	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄
268	〃	〃	〃	(19.3)	〃	〃	〃	灰区	灰区	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄
269	〃	〃	〃	(11.2)	〃	〃	〃	灰区	灰区	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄
270	〃	〃	〃	(15.2)	〃	〃	〃	灰区	灰区	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄
271	〃	〃	〃	(14)	〃	〃	〃	灰区	灰区	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄
272	〃	〃	〃	(19.4)	〃	〃	〃	灰区	灰区	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄
273	〃	〃	〃	(19.4)	7.6	(5)	〃	灰区	灰区	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄
274	〃	〃	〃	(13.2)	6.6	9.3	(5)	赤茶	赤茶	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄
275	〃	〃	〃	7.4	〃	〃	(5)	赤茶	赤茶	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄
276	〃	〃	〃	15.2	8.4	18.6	〃	赤茶	赤茶	口縁部内面1/3部、外縁部外周のみをヤケニ口縁部直下の中心部	外周部	15-28, 16庄

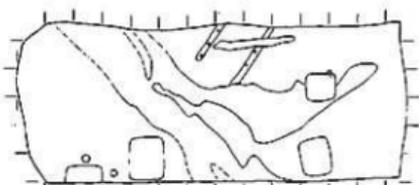
No.	出土地点	種類	形状	寸		重量 (g)	材質	色		内	外	新	形成・調整・形造の特徴	調査番号・所在地
				口径	底径			内	外					
317	23住	土器	小形壺	(13.4)	5.4	12.1	(6)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面割線、腹部工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	内面上半部	22-1, 22(6a)
318	23住	土器	小形壺	(13.2)			灰	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
319	23住	土器	壺	(14.4)	7.8	24.5	(4)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
320	23住	土器	壺	(16.0)			(4)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
321	23住	土器	壺	(16.0)	6.1		(6)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
322	23住	土器	壺	(17.5)	8.5	36.1	(6)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
323	23住	土器	壺	(18.1)	8.8		(6)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
324	23住	土器	壺	(20.0)	(8.2)	(13.1)	(4)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
325	23住	土器	壺	(22.0)	(5.7)		(4)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
326	23住	土器	壺	(11.0)			(4)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
327	23住	土器	壺	(12.7)	(4.6)		(4)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
328	23住	土器	壺	(14.2)	5.3	6.4	(6)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
329	23住	土器	壺	(11.0)	7.6		(6)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
330	23住	土器	壺	(13.7)	3.1		(4)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
331	23住	土器	壺	(13.7)			(4)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
332	23住	土器	壺	(15.4)	26.5		(4)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
333	23住	土器	壺	(20.0)	19.3		(6)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
334	23住	土器	壺	(21.4)	6.6		(6)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
335	23住	土器	壺	(21.4)			(6)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
336	23住	土器	壺	(16.0)			(4)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
337	23住	土器	壺	(10.7)	5.9	5.1	(6)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
338	23住	土器	壺	(6.0)	5.0	5.5	(6)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
339	23住	土器	壺	(9.8)	5.4	4.7	(6)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
340	23住	土器	壺	(13.0)		(4.2)	(4)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
341	23住	土器	壺	(19.4)	8.2	7.8	(6)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
342	23住	土器	壺	(17.8)		(13.4)	(6)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)
343	23住	土器	壺	(10.3)	4.2	10.6	(4)	赤褐色	赤褐色	口縁部コナナク、胴部内面工ナク、外面工ナク	内面工ナク、外面ケズリ工ナク	22-2, 22(6b)	外面上半部	22-1, 22(6a)

No	出上地点	種類	製法	寸法 (cm)		特殊 用途	色		調	成形・製法・形の特徴	備考・実用施設
				口徑	厚さ		外面	内面			
370	38庄	土製器	扁平		12.2		赤梅	赤梅		新製器コナダ、新製内籠ケズリ・内籠ナダ	38-10、38庄ナダ6
381	#	土製器	皿		11.5		灰	灰		ワラコナダ、外籠成造	38-10、38庄ナダ
382	#	土製器	皿		11.5		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ及び内籠ナダ・外籠ナダ	38-11、38庄ナダ
383	#	土製器	皿		12.4		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
384	#	土製器	皿		3.8		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
385	#	土製器	皿		3.8		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
386	#	土製器	皿		8.7	24.3	赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
387	39庄	土製器	皿		10.4		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
388	#	土製器	皿		10.0		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
389	#	土製器	皿		13.1		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
390	#	土製器	皿		11.5		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
391	#	土製器	皿		16.1		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
392	#	土製器	皿		22.5	65.9	赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
393	41庄	土製器	外皿		13.1	6.5	赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
394	#	土製器	外皿		13.2	—	赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
395	#	土製器	外皿		12.9	—	赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
396	44庄	土製器	外皿		13.9		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
397	#	土製器	外皿		14.7		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
398	#	土製器	外皿		12.9		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
399	#	土製器	外皿		12.5	—	赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
400	#	土製器	外皿		13.0	17.6	赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
401	#	土製器	外皿		13.9		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
402	#	土製器	外皿		12.3		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
403	#	土製器	外皿		10.5	—	赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
404	#	土製器	外皿		10.5	—	赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
405	#	土製器	外皿		13.0	15.5	赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
406	#	土製器	外皿		13.0		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
407	#	土製器	外皿		12.5		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
408	#	土製器	外皿		12.4		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
409	#	土製器	外皿		12.4		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
410	#	土製器	外皿		8.8	6.3	赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造
411	#	土製器	外皿		13.9		赤梅	赤梅		口籠器コナダ、新製内籠ケズリ、新製内籠ナダ	38-4、38庄器内籠成造

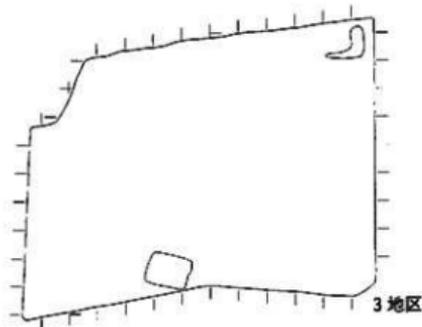
No	北土地点	類別	形状	寸法(cm)		成積表 (個数)	色		家	形状・調色・形物の特徴	備考・実測値・注記
				高さ	幅		外	内			
446	52区	土留部	小笠原	16.2	7.4	20.5	茶	茶	口取部コナナク、裏面内側加工ナク及フタコナエ・外周加工ナク、唇部縁	50-22、52位幅4	
447	#	#	#	14.2	7.0	21.8	茶	茶	口取部コナナク、唇部内・外周加工ナク、水溝溝	50-3、50位幅3	
448	#	#	#	18.4	8.7	35.6	茶	茶	口取部コナナク、唇部内・外周加工ナク、唇部縁ナク、唇部縁加工ナク	50-22、50位幅2	
449	#	#	#	(7.4)		(7.4)	茶	茶	唇部内・外周加工ナク、唇部縁ナク	50-17、50位幅7	
450	#	#	#	(16.4)		(16.4)	茶	茶	唇部内・外周加工ナク、唇部縁ナク	50-18、50位幅8	
451	#	#	#	(15.6)		(15.6)	茶	茶	口取部コナナクのみ内側加工ナク、唇部縁加工ナクのみ加工ナク、外周加工ナクのみ加工ナク	50-20、50位幅20	
452	#	#	#	19.2		19.2	茶	茶	口取部コナナクのみ内側加工ナク、唇部縁加工ナクのみ加工ナク	50-2、50位幅2	
453	34区	#	#	22.9	7.3	27.9	茶	茶	口取部コナナクのみ内側加工ナク、唇部縁加工ナクのみ加工ナク、唇部縁加工ナクのみ加工ナク	49-6、49位幅6	
454	#	#	#	(15.0)		(15.0)	茶	茶	外周加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-8、49位幅8	
455	#	#	#	(13.1)		(13.1)	茶	茶	外周加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-6、49位幅6	
456	#	#	#	(11.6)		(11.6)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	
457	#	#	#	(14.3)		(14.3)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	
458	#	#	#	5.9	(6.8)	(6.8)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	43-3、43位幅3	
459	#	#	#	(13.1)		(13.1)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	43-3、43位幅3	
460	#	#	#	(14.3)		(14.3)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	43-3、43位幅3	
461	#	#	#	5.9	(6.8)	(6.8)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	43-3、43位幅3	
462	#	#	#	(13.1)		(13.1)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	43-3、43位幅3	
463	#	#	#	(14.3)		(14.3)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	43-3、43位幅3	
464	#	#	#	(13.1)		(13.1)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	43-3、43位幅3	
465	61区	土留部	真田	11.5		11.5	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	50-1、50位幅1	
466	#	#	#	(12.8)		(12.8)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	
467	62区	土留部	豊	15.2		15.2	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	50-3、50位幅3	
468	#	#	#	(13.1)		(13.1)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	
469	27区	土留部	豊	10.6		10.6	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	
470	#	#	#	(10.6)		(10.6)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	
471	#	#	#	(12.2)		(12.2)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	
472	129区	#	#	(8.0)		(8.0)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	
473	26区	土留部	豊	17.4		17.4	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	
474	17区	土留部	豊	(13.1)		(13.1)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	
475	#	#	#	(11.0)		(11.0)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	
476	25区	土留部	豊	9.0		9.0	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	
477	#	#	#	(11.0)		(11.0)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	
478	#	#	#	(6.6)		(6.6)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	
479	#	#	#	(6.0)		(6.0)	茶	茶	唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク、唇部縁加工ナク	49-3、49位幅3	



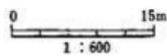
1地区



2地区



3地区



第105図 奈良時代の遺構配置

第5節 奈良時代の遺構と遺物

1. 住居址

(1) 第18号住居址

遺構 (第106図)

1地区中央、(15~18, 44~47)に位置する。第20号住居址・第24号住居址と重複関係にあり、それぞれ西壁・南壁を切っている。平面形は南北3.2m、東西3.0mの長方形を呈し、主軸方向はN-83°-Eを示す。壁はほぼ直に掘り込まれ、壁高は約20cmを測る。床面は掘り方をそのまま用いている。平坦であるがやや軟弱で安定していない。カマドは東壁やや南寄りに設けられている。幅65cm、奥行50cmにわたって掘り込まれており、奥壁は直に立ち上がっている。また焚口の左右の壁には、20~30cm大の石が据えられている。この張り出し部がそのまま火床となっており、被熱土の堆積が認められる。ピットはP₁(21×20×8cm)、P₂(19×19×4cm)、P₃(18×21×5cm)、P₄(16×15×10cm)の4個が検出された。主柱穴としてふさわしい位置にあるが、非常に浅いため疑問も残る。覆土は壁際の砂質黄褐色土・暗褐色土を除いて、概ね灰色粘質土の堆積である。この下層には、拳大以上の礫が集中しており、人為的に投入されたものと判断された。床面積は8.8m²を測る。

遺物の出土状態

本址の覆土中には径20cm大の多数の礫が存在し、その間から遺物も出土した。礫は中層から下層にかけてあり、径がそろっていることから人為的に持ち込まれ、あるいは投入されたものと判断できた(第106図右下)。遺物は土器のみであるが、中小破片にまじり一括品もみられた。礫と共に廃棄された可能性がある。その他の覆土中からも小破片が散発的に出土したが、これはまったくままりのない状態であった。

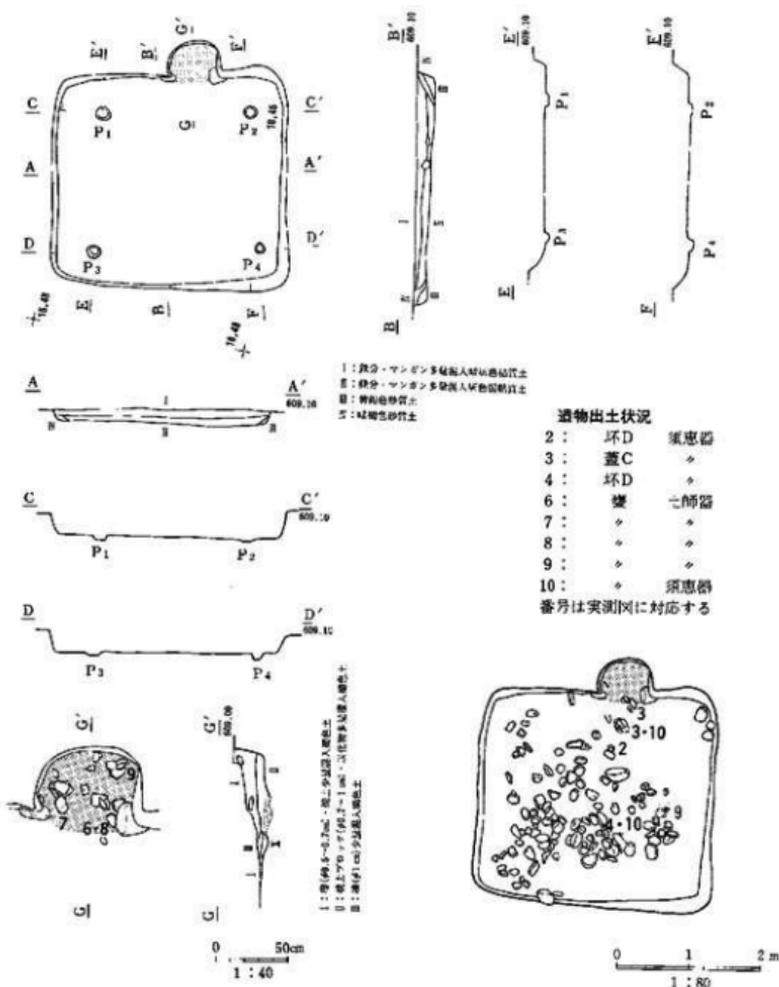
遺物 (第112図1~10)

土器のみ10点を図化、提示した。土師器と須恵器があり、器種は、土師器坏(5)、同壺(6~9)、須恵器坏D(1・2・4)、同蓋C(3)、同甕(10)である。土師器甕はいずれも外面ハケメ、内面ナア・オサエ、口縁内面横のハケメという斉一性の強いものである。本址出土土器群は、須恵器坏の主体がDであること、ロクロナア・内黒の土師器坏があることから見て、奈良時代でも新様相に属する土器群と考える。

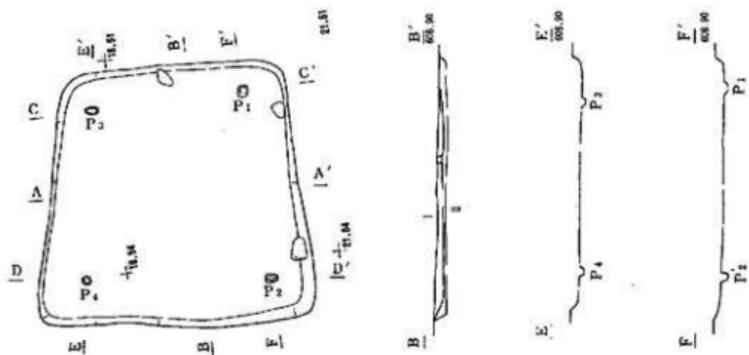
(2) 第35号住居址

遺構 (第107図)

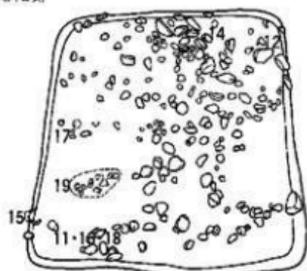
1地区中央西寄り、(18~22, 51~55)に位置し、第36号住居址・第37号住居址を切って構築されている。平面形は東西3.6m、南北3.4mの台形を呈し、主軸方向はN-6°-Eを示す。壁は斜めに掘り込まれている。壁高は10~20cmと非常に浅い。床面は掘り方をそのまま用いている。地山の礫



第106図 第18号住居址



I : 灰区粘質土(粘土成分多量あり)
 II : 母岩区粘質土(1層より若干砂質)
 III : 層状褐色粘質土



土層 : 11・12・14・15・16・17・18・19
 土器番号は実測図に対応する



第107図 第35号住居址

が突出し凹凸があるが、非常に堅く、検出時には著しい鉄分の沈澱が確認された。床面積は11.3m²を測る。カマドは精査したが検出されず、焼土の散布もなかった。ピットはP₁(18×16×10cm)、P₂(18×14×8cm)、P₃(19×11×7cm)、P₄(14×12×8cm)の4ヶ検出された。配置からは支柱穴ととらえられようが、第18号住居址のピット同様、規模が非常に小さく問題が残る。覆土は灰色～暗灰色をした粘質土の堆積が主体であり、人為的に投入された拳大の礫を多量に含んでいる。

遺物の出土状態 (第107図右下)

人為的に投入された礫が全面に点在しており、その間から遺物の出土があった。遺物には土器と鉄器がある。土器は、とりわけ一ヶ所に集中するということではなかったが、半完形品や一拵品が点々としていた。平面的に見ると外周部に多い。とはいえ狭く浅い住居址であるため総量は少ない。

遺物 (第113図11～19)

土器9点を図化、提示した。土師器と須恵器があり、器種は土師器坏C(14)、同小形甕(16・17)、同甕(18・19)、須恵器坏D(11～13)、同甕(15)が見られる。土師器の小形甕は胴部外面にカキメが施され、底面には回転糸切り痕が残るものである。土師器の甕の口縁内面はカキメになっている。本土土器群の時期は、須恵器坏Dや土師器甕・小形甕の形態から奈良時代新様相に属する(実際には平安初期まで下るかもしれない)。

出土した須恵器坏に附着している薄紙状のものが見られたが、植物質の穀類の細粒を煮て焦げ付いたものと判明した。

(3) 第42号住居址

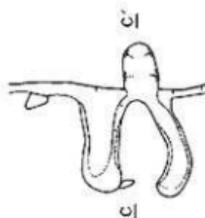
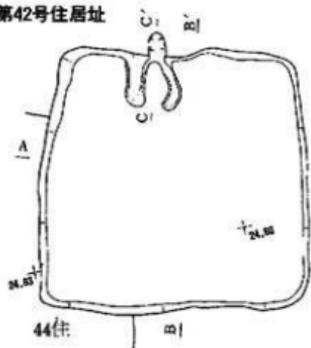
遺構 (第108図)

1地区東側、(21～25, 59～63)に位置する。第44号住居址及びP219, P221を切って構築されている。平面形は3.6m四方の方形を呈し、主軸方向はN-11°-Wを示す。壁は、ややゆるやかな傾斜となっている西壁を除いて、ほぼ直に掘り込まれている。壁高は約40cmを測る。床は、黄色砂質土と褐色砂質土で貼っており非常に堅い。また西半では、この下にさらに床面が確認された。黄色砂質土と暗灰色粘質土より成っており、こちらも非常に堅い。カマドは北壁中央やや西寄りに設けられている。石芯粘土カマドであったと思われるが石材は遺存しておらず、粘土袖と煙道が検出された。火床は65×35cmの範囲で、奥壁は直に立ち上がり煙道へと続いている。カマドの他には本址に付随する施設の類は一切見つからない。覆土は四層に分かれ、自然堆積状を呈している。礫等の混入はなく、概ね砂質・シルト質の土層である。床面積は11.8m²を測る。

遺物の出土状態

土器と石器(打製石斧)があるが、土器の大半は小片で覆土中から散発的に出土した。これには一括品としてまとまるものはまったくない。この他にカマドの左脇から二次焼成を受けた状態で土師器のやや大形の破片が出土したが数は少ない。全般的に見て本址出土の土器はほとんどまとまりのない無作為的な廃棄の状態が想定できるものばかりであった。石器は縄文時代のもので混入品で

第42号住居址

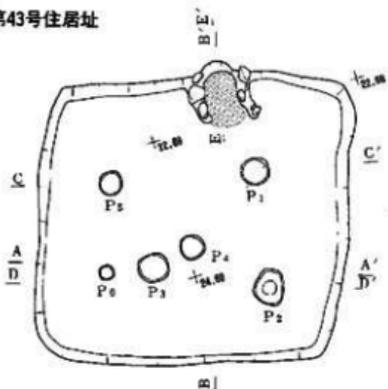


- I : 粘土中に埋入褐色土
- II : 埋設ブロック(40.5cm)・竪穴埋入褐色土
- III : 被熱層
- IV : 炭化物埋入口等



- I : 褐色砂質土埋入褐色土
- II : 被熱層
- III : 被熱層
- IV : 炭・灰・埋入砂質褐色土

第43号住居址

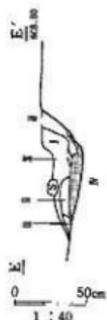
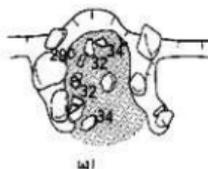


- I : 褐色・黄色・灰色砂質土ブロック状埋入褐色土
- II : 埋設ブロック

- I : 黄褐色土ブロック(40.5cm)埋入褐色土
- II : 埋設ブロック(40.5cm)埋入褐色土
- III : 黄化物(41-2cm)埋入褐色土
- IV : 被熱層(灰床)

土器 : 29・32・34

土器番号は実測図に対応する



0 1 2 m
1 : 80

0 50 cm
1 : 40

第108図 第42・43号住居址

あろう。

遺物 (第113・114図20~27、第134図5)

土器8点、石器1点を図示した。土器には土師器と須恵器があるが、食膳用具はすべて須恵器に占められる。器種は土師器には小形甕(26・27)のみ、須恵器には坏C(20・21・23)、蓋C(22)、甕(24)、瓶類の頸部(25)が見られる。須恵器の坏はすべて坏Cで、無台の坏Dがないことは注目に値する。土師器の小形甕はロクロ不使用である。これらの特徴を合わせ見て、本址の時期は奈良時代古様相と推定する。石器については本章8節で扱う。

(4) 第43号住居址

遺構 (第108図)

1地区東端、(20~25, 66~71)に位置する。第44号住居址・第58号住居址と重複し、それぞれの北西隅部を切っている。平面形は東西4.2m、南北4.0mの僅かに東西に長い長方形を呈している。主軸方向はN-18°-Eである。壁はやや斜めに掘り込まれており、壁高は約30cmを測る。床面は、掘り方をたたくしめて用いている。すなわち、第44号住居址との重複部分ではその覆土が、他は地山の黄色砂質土が床面となっている。やや凹凸がある。なお、床面積は14.8m²である。カマドは北壁中央に構築されており、半円形に小さく張り出している。石芯粘土カマドで、粘土袖と芯の石材が左右3個ずつ遺存している。火床は80×50cmの範囲で、被熱土の堆積は約10cmを測る。奥壁は斜めに直線的に立ち上がっている。ピットはP₁(40×40×15cm)、P₂(50×42×10cm)、P₃(43×40×10cm)、P₄(35×35×5cm)、P₅(34×33×4cm)、P₆(21×20×4cm)の6個が検出された。P₁・P₂に可能性があるものの、確実に支柱穴ととらえられるものはない。覆土は二層に分かれる。I層：褐色・黄色・灰色砂質土ブロック斑状混入、II層：暗灰褐色砂質土で、自然堆積状を呈している。

遺物 (第114・115図28~34、第135図12)

土器を7点、石器を1点、図化、提示した。土器には土師器と須恵器があり、器種は、土師器の甕(31)、大形の鉢状のもの(32)、須恵器の坏C(28・29)、甕(30・33・43)が見られる。32の土師器は須恵器の摺鉢を大きくしたような体部で、当初須恵器かとも考えたが、焼成や内面調整から見ると土師器の感が強い。31の土師器の甕は外面に強いケズリ状のハケメがなされるが、口縁端部を面取りされ、口縁内面にカキメ痕がわずかに見える。土師器甕の調整にロクロ使用に伴う初期の資料として重要である。本址土器の時期は、須恵器の坏がCのみであり、土師器の甕も古い形態をもつことから、奈良時代古様相に属するとみたい。

(5) 第49号住居址

遺構 (第109図)

1地区中央西寄り、(8~10, 56~58)に位置し、第53号住居址の北壁を切る。規模・平面形は一辺3mの方形を呈し、主軸方向はN-11°-Eを示す。壁はなだらかな傾斜をもち、壁高は20cmを測

る。床面は地山の黄褐色土をたたきしめて用いており、堅緻なものである。床面積は7.1m²を測る。カマドは北壁中央に構築されており、壁外に半円形に張り出して小さな煙道を作っている。右芯粘土カマドで、芯の石材が露出している。火床は80×40cmの範囲に広がり、被熱土の堆積は4cmと浅い。尚、本址にともなうカマド以外の施設は検出されなかった。

遺物の出土状態

覆土中に人為的に混入したとみられる径10~20cmの礫が散見され、その周辺から土器、鉄器(鎌)が出土した。土器はほとんどが破片である。カマド内からは土師器の甕1個体分が大破片に割れて折り重なる様に出土した。鎌は北西隅の壁に半分かかる状態で出土したが先端が欠けるのみで残存状態は良かった。他に覆土全般から土器の小片がわずかに出土したが量はさきわめて少ない。

遺物(第115区35~40, 第132区17・18)

土器6点、鉄器2点を凶化、提示した。土器には土師器と須恵器があり、器種は土師器坏C(38)、同小形甕(39)、同甕(40)、須恵器坏C(36・37)、同坏D(35)が見られる。須恵器坏Cは底部のみであるが、高台が太く四角いものになっている。土師器の甕は口縁内面の調整がハケメでなされている。本址出土土器の时期的特性は、須恵器の坏にCとDが伴うこと、土師器の甕が薄手のハケメ調整のものになって現れることに見られる。従って奈良時代新様相に属する。

(6) 第55号住居址

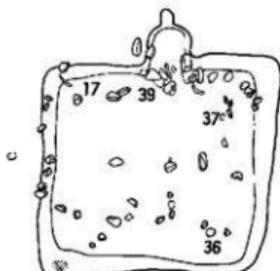
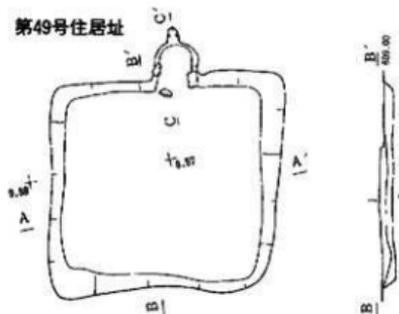
遺構(第110区)

1地区中央北側、(4~7, 42~43)に位置する。第33号住居址と重複し、東壁一部を切っているが本址の方が若干浅い。規模・平面形は、南北2.8m、東西3.0mの南北にわずかのびる長方形である。主軸方向はN-4°Eを指す。壁はしっかり張り込まれており、壁高を25cm前後に測る。床は第33号住居址覆土の暗褐色砂質土上に、わずかに黄褐色砂質土を貼って構築している。堅緻なものであるが層がうすいので端部では下層(第33号住居址覆土)との判別がむずかしい。床面積は6.8m²を測る。カマドは北壁中央に設置され、壁外へわずかに張り出している。煙道は確認されなかった。袖は先端が削られ石材が露出しているが、焚き口の天井石が崩落したまま残っている。この時期のカマドの用材・構造がある程度推測できる好例といえよう。その他の施設は検出できなかった。

遺物の出土状態

遺物には、土器、鉄器(鎌)、炭化材がある。本址覆土中層には径10~20cmの礫が点在していたが、土器の一括品や鉄器はこれらと同様だが若干壁際へ寄った感じで出土した。その他の土器の小破片は、数量自体が非常に少ないが、覆土中に散見する程度である。一括品の土師器坏はカマド左脇の壁際から、須恵器坏は東壁中央部から、また土師器甕(45)は西壁直下より出土している。鉄器の鎌は大小2点あり、南部に近接して遺存した。これらとは別にカマド内からも土師器甕の一括品が出ている。カマドに架けたままの状態で底部が抜けて下方へずり落ち、カマド支脚が甕の内部にはり込んでいた。カマド前にあった炭化材の樹種はコナラである。

第49号住居址

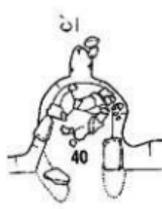


土器：36・37・39・40
鉄器：17

遺物番号は実測図に対応する

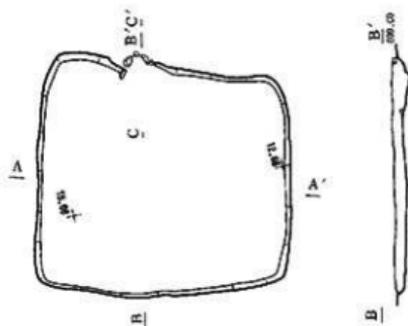


I：鉄器・マンガン含有燧石製土
II：燧石製土
III：燧石製土

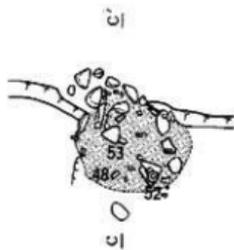


I：燧石アゾノクワ(約3.0m)層
II：燧石アゾノクワ(約3.0m)層
III：燧石アゾノクワ(約3.0m)層
IV：燧石アゾノクワ(約3.0m)層
V：燧石層

第56号住居址



I：燧石アゾノクワ(約0.5-1.0m)層
II：燧石アゾノクワ(約0.5-1.0m)層
III：燧石層
IV：燧石層
V：燧石層



土器：48・52・53

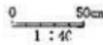
土器番号は実測図に対応する



燧石アゾノクワ(約0.5-1.0m)層・燧石・燧石層

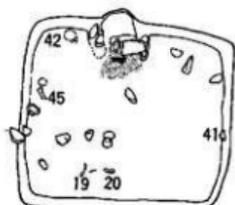
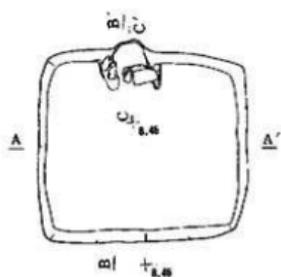


1:80



1:40

第109図 第49・56号住居址



土器：41・42・45

鉄器：19・20

番号は実測図に対応する

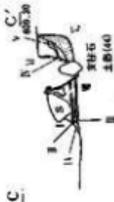
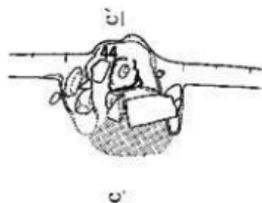
- I：炭化物物量、赤褐色土混入暗褐色土
- II：焼土少量、赤褐色、赤褐色土混入暗褐色土
- III：焼土混入暗褐色土
- IV：炭化物多量、暗灰色土混入暗褐色土
- V：暗褐色土

0 1 2 m
1 : 80



土器：44

土器番号は実測図に対応する



- I：焼土プロック(1m)少量混入暗褐色土
- II：(0.5~0.8m) 焼土混入多量混入暗褐色土(穴状)
- III：+ 炭化物混入暗褐色土
- IV：炭化物多量混入暗褐色土
- V：焼土プロック(0.2~1.2m・厚)によるいふし色混入暗褐色土
- VI：焼土混入暗褐色土(穴状)
- VII：焼土(層土)
- VIII：焼土層

0 50cm
1 : 40

第110図 第55号住居址

遺物 (第115・116図41~45, 第132図19・20)

図化・提示できたものは土器5点、鉄器(鎌)2点である。土器には土師器と須恵器があり、点数は少ないがいずれも全形を知ることのできるものばかりがそろっている。器種は、土師器坏(42)、同小形甕(43)、同壺(44・45)、須恵器坏D(41)が見られる。42の土師器坏は内面黒色、非常に細かいミガキが施されていて、体部は平滑かつ均整がとれていてロクロナデの痕を窺わせない。41の須恵器Dも、この時期によくある同器種の他の個体と異なり、内面は底部と体部の稜が失われる型、仕上げナデで平滑にしている。43の土師器小形甕は、ロクロナデを行い底面を糸切りしているが、胴部外面と口縁部内面にハケメをかけている。この種の小形甕の初源に近いものであろう。土師器の甕は2点を示したが双方共通点を持ちながら、口縁内面のハケメ、あるいは胴部内面のハケメの有無に違いが表れている。ここに示した土器は一括して奈良時代の古様相から新様相へ移りかわる姿を捉えていると考える。

(7) 第56号住居址

遺構 (第109図)

1地区西側、(11~19, 65~68)に位置し、第47号住居址の西側の一部を切る。ただし本址の方が浅い。規模・平面形は南北3.6m、東西3.2mの長方形を呈し、主軸はN-78°-Wを指す。壁は高さ10cm前後とかなり浅いものである。南・北壁は垂直に近いが、東・南壁はなだらかな傾斜をもつ。床はきわめて平坦である。第47号住居址の覆土中に掘り込まれているため、床や壁も礫の混じった暗褐色砂質土で構築されていた。床面積は10.1m²を測る。西壁中央に位置するカマドは、煙道・袖などが破壊され、石材が散乱していた。火床の範囲は明確にできないが、焼土層はかなり広範囲にひろがり、80cm×60cmの楕円形で5cmの層をもつ。カマド奥壁は2段に立ち上がり、煙道の痕跡をとどめている。カマド以外に本址にともなう施設は検出されなかった。

遺物の出土状態

土器、鉄器が出土しているが、土器はほとんどが中小破片が覆土中から散発的に出土した。ただしカマド周辺からは一括品が2・3点あった。いずれの出土状態のものもその遺存状態に人為的なものはまったく感じられない。カマド内から出土した炭化種子はクリの実である。

遺物 (第116図46~57, 第132図21~23, 第135図15)

図化・提示できたのは、土器12点、鉄器3点(刀子、刀子らしきもの)、石器1点(凹石)である。土器は土師器と須恵器で、器種としては土師器坏(52)、同小形甕(54・55)、同壺(56・57)、須恵器坏D(48・53)、同蓋C(49~51)、同壺(47)、同高盤(46)が見られる。須恵器の蓋Cは天井部端が盛り上がり気味になっている。同坏Dの体部はかなり直線的なものもある。これらの点などが本址土器群の時代的特性を示すと考えられ、従って奈良時代新様相に該当する。

(8) 第57号住居址

遺構 (第111図)

1地区北側、(2~4, 54~58)に位置し、第48号住居址を切る。北側は調査区域外にかかり、南半分を掘出したのみであった。規模は現況、南北が1.5m、東西が3.9mを測る。主軸プランなどは推定できない。壁は高さが20cm程度をはかり、しっかり掘り込まれている。礫混入の褐色砂質土のベースをそのまま用いた床は、堅緻にたたきしめられわずかに茶色を帯びているようであった。調査区域境と本址東壁に接している部分には、35cm程度の焼土のひろがりが見出され、カマドの位置が推定できた。その他本址にともなう施設は検出されなかった。床面積は4.3m²を測る。

遺物の出土状態

覆土中から土器の中小破片が少量出土したのみである。遺存状態に人為的なものはまったくみられず、無作為の混入ないしは廃棄の結果と扱う。

遺物 (第117図58~62)

図化・提示できたのは土器のみ5点である。土師器と須恵器があり、器種は土師器甕(62)、須恵器坏C(61)、同坏D(58~60)で構成される。須恵器坏Dを主要構成要素とし、薄手で口縁内面にカキメをもつ土師器甕が伴うことから、本址土器は奈良時代新様相(実際にはもう少し下るかもしれない)に位置付けられる。

(9) 第59号住居址

遺構 (第111図)

1地区西側、(13~16, 60~63)に位置する。第60号住居址、第47号住居址と重複しており、本址が最も新しい。平面形は南北2.9m、東西3.0mの長方形を呈し、主軸方向はN-9°-Eを指す。壁高は北壁20cm、南壁20cm、西壁30cm、東壁30cmを測り、東西壁はしっかりした立ち上がりをもつが、南北壁はゆるやかに傾斜している。床面は大部分が第47号住居址の覆土・暗褐色砂質土をそのまま床としたものである。多少起伏をもち、西側にいくにしたがってなだらかな傾斜を示す。床面積は7.4m²を測る。本址に伴う施設は検出されなかった。

遺物の出土状態

本址の覆土からはかなり多数の土器が出土した。当初本址はその存在に気付かれず第47号住居址の一部として掘り下げられていたのだが、その段階から実際の第47号住居址の範囲内では見られない程の出土量を示し、正式に一個の住居址と認められてからも同様であった。この様な経緯のため上部から出土した土器は第47号住居址出土品として処理されてきたがここではそれも並列する。土器実測図中、本址の続きに第47号住居址出土品名称で、実は本址上層から出土したものを載せ、土器一覧表も同様としてある。

この第47号住居址上層出土扱いとなっていたものおよび本址出土品の実際の出土状態は、覆土中からあまりまとまりなく一括品、大形破片が現れるという形で、他の同期住居とは若干異なっていた。この様に土器が多いこと自体、廃棄に人為的なものがあるのだろうが、その実像は想起し難い。

遺物 (第117・118図63~89: 第47号住居址出土品と扱われていたものを含む)

土器のみであるが27点を図化・提示した。土師器と須恵器があるが、圧倒的に須恵器の方が多い。器種は、土師器に坏(69)、小形甕(74・86)、甕(73・75~77・88・89)、須恵器に坏C(70・83・84)、坏D(63~65・79・80・85)、器形不明の坏(78・81)、蓋C(66・68)、罎(59)、鉢(82)、長頸壺(72)、甕(71・87)、が見られる。69の土師器坏の体部外面には「大」の字の墨書がある。本址に伴うこの土器群の特徴は、食膳用具がほとんど須恵器で占められ、しかも坏Dが最多であること、土師器の甕は89を除き、いずれも薄手で外面に縦のハケメ、口縁部内面にカキメまたは横のハケメをもつこと、などであり、時期は奈良時代新様相が当てられる。

(10) 第60号住居址

遺構(第111図)

1地区西側、(3~6, 58~60)に位置する。調査時の所見では、第47号住居址に西側大部分を切られ、さらにその上から第59号住居址に切られている。ただし遺物整理の結果は本址の方が第47号住居址より新しく、その見解に従って本址はここへ収録する。

東壁一帯が残っていたのみであるため、規模・平面形などは不明である。壁はゆるやかに立ち上がり、40cm位の壁高を測る。残された東壁には長さ40cm程度の煙道をもつカマドが設置されている。袖はすでに破壊されており、芯に使われていた石材が散乱していた。火床の規模などは不明であるが、焼土層は5cmを測る。カマドのほかには本址にともなう施設は検出されなかった。床面の面積は1.8m²を測る。

遺物の出土状態

カマドの周辺や覆土内からまとまりがなく出土した。本址残存部分も狭く、そのために土器の量も少ない。土器以外の遺物はない。

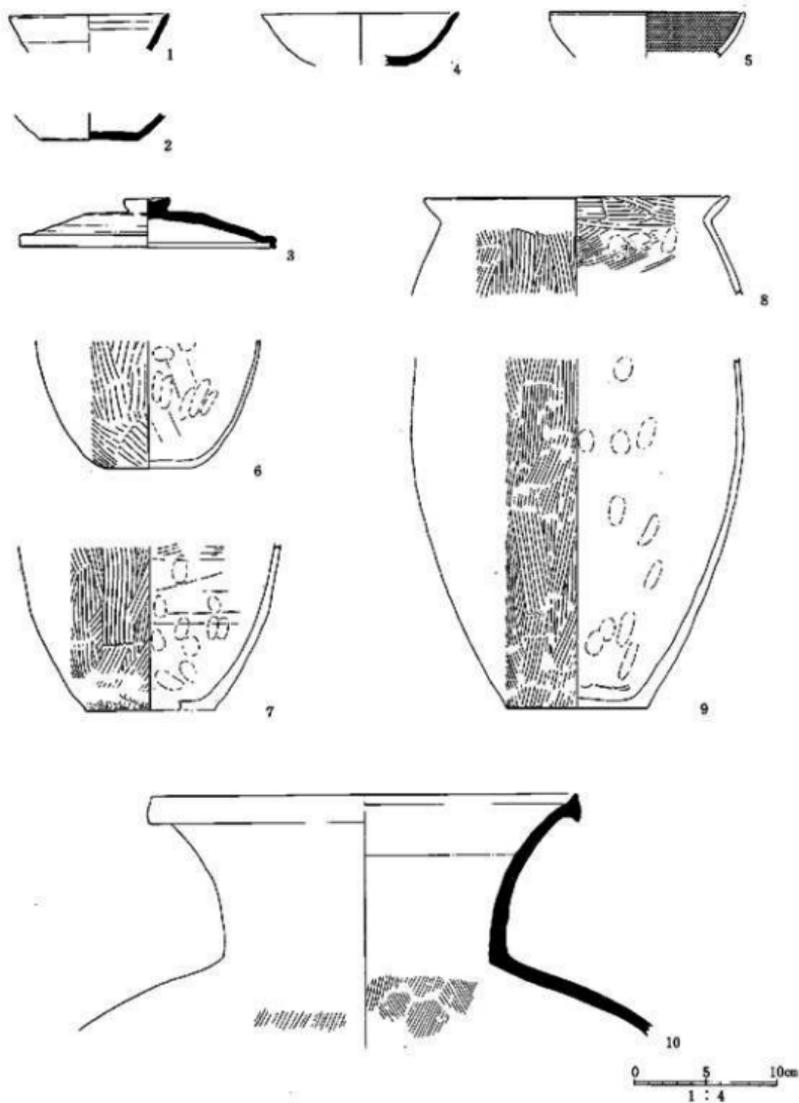
遺物(第118・119図90~96)

土器のみ7点を図化・提示した。土師器ばかりである。器種は小形甕(90)、甕(91~96)しか見られない。同じ甕でも96は外面に強いケズリが施され非常に薄手になるもので、いわゆる武蔵型甕である。94も同じものの可能性がある。他は外面にハケメが刻まれる同期の他住居から一般的に出土する薄手の甕となる。90の小形甕は底面に回転糸切り痕をのこしている。これらの土器は奈良時代新様相に等しく、どう操作してもそれより古くすることは不可能であろう。即ち調査時の、本址が第47号住居址(古墳時代後期)に切られるという所見と相反する結果となる。ここでは遺物に従う立場をとっている。

2. 遺構外出土の遺物

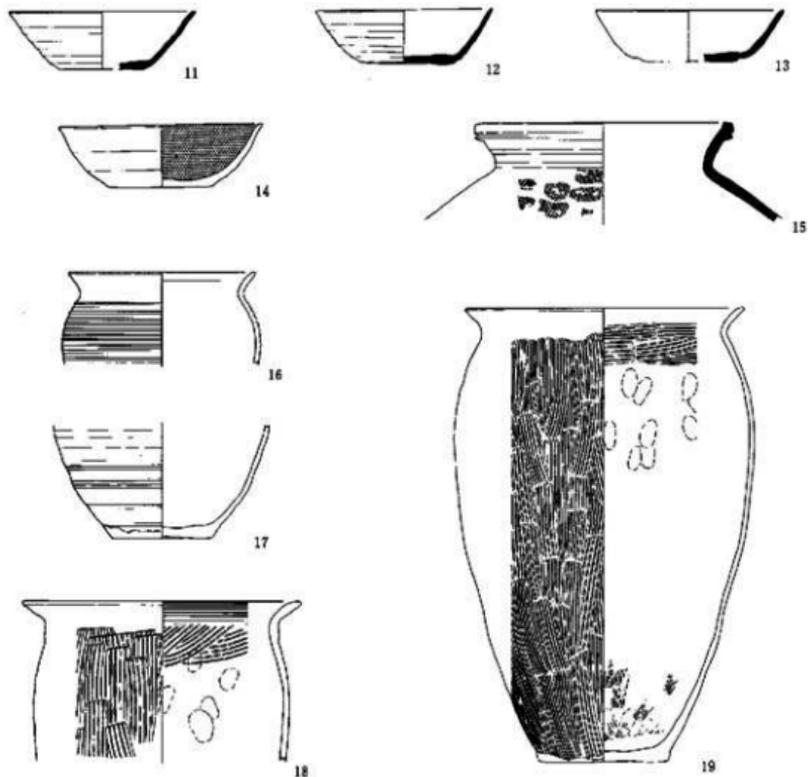
前代古墳時代前・後期に比べて驚くほど少ない。図ができたのは須恵器の坏C・D各1点のみである。遺構分布の中心が去り、散乱する遺物自体の絶対量が減ったためと考える。

第18号住居址

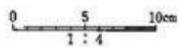
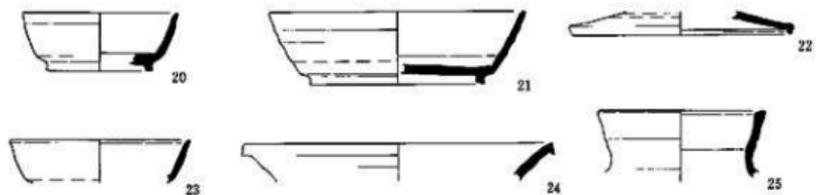


第112図 奈良時代の土器 (1) 1~10:18住

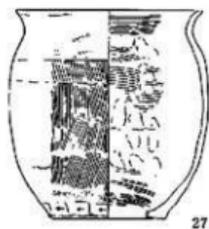
第35号住居址



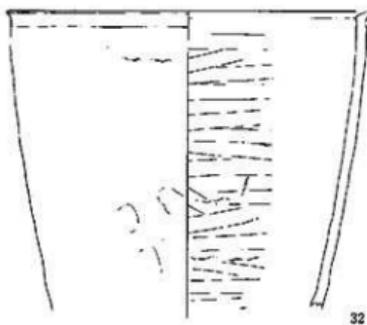
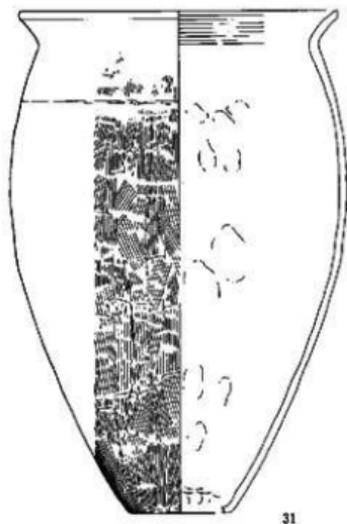
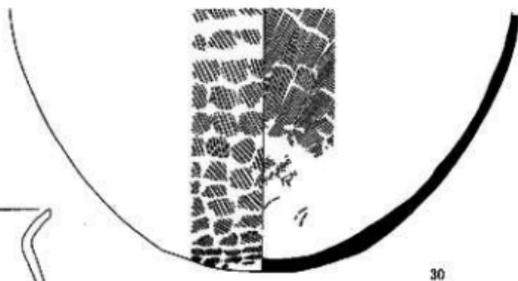
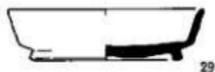
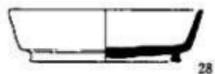
第42号住居址



第113図 奈良時代の土器 (2) 11~19: 35住
20~25: 42住



第43号住居址

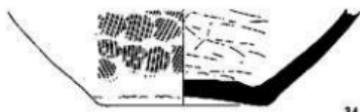


0 5 10cm
1 : 4

第114図 奈良時代の土器 (3) 26~27:42住 28~32:43住



33



34

第49号住居址



35



36



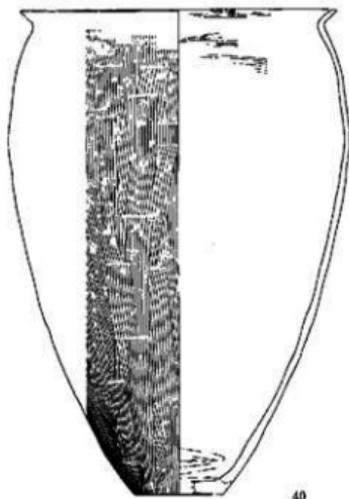
37



38



39



40

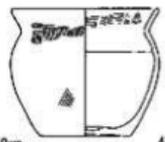
第55号住居址



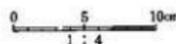
41



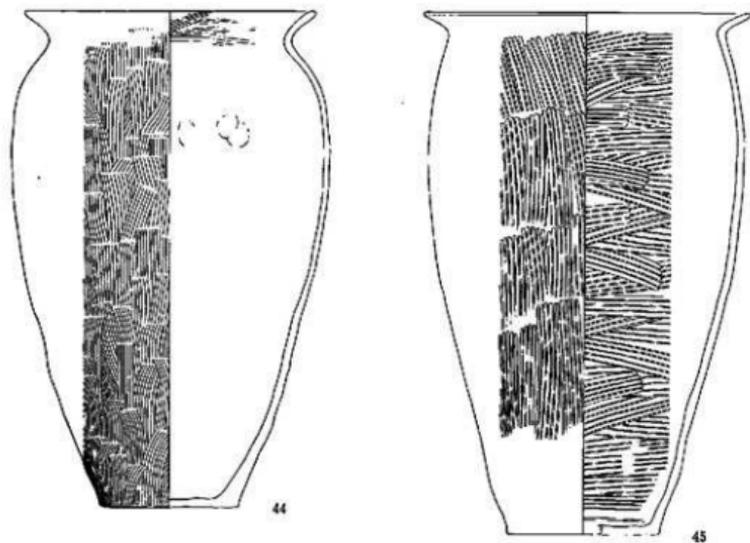
42



43

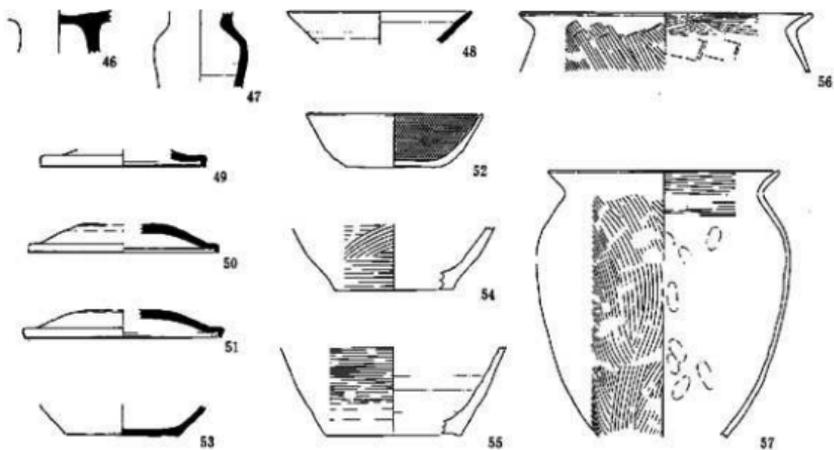


第115図 奈良時代の土器 (4) 33~34 : 49住 35~40 : 49住
41~43 : 55住



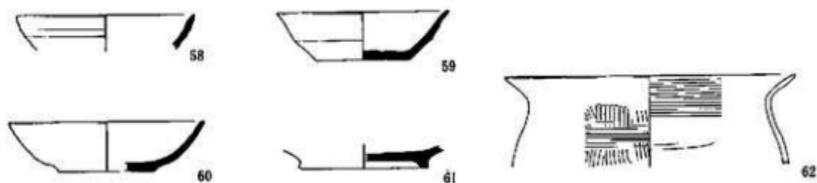
第56号住居址

0 5 10cm
1 : 4

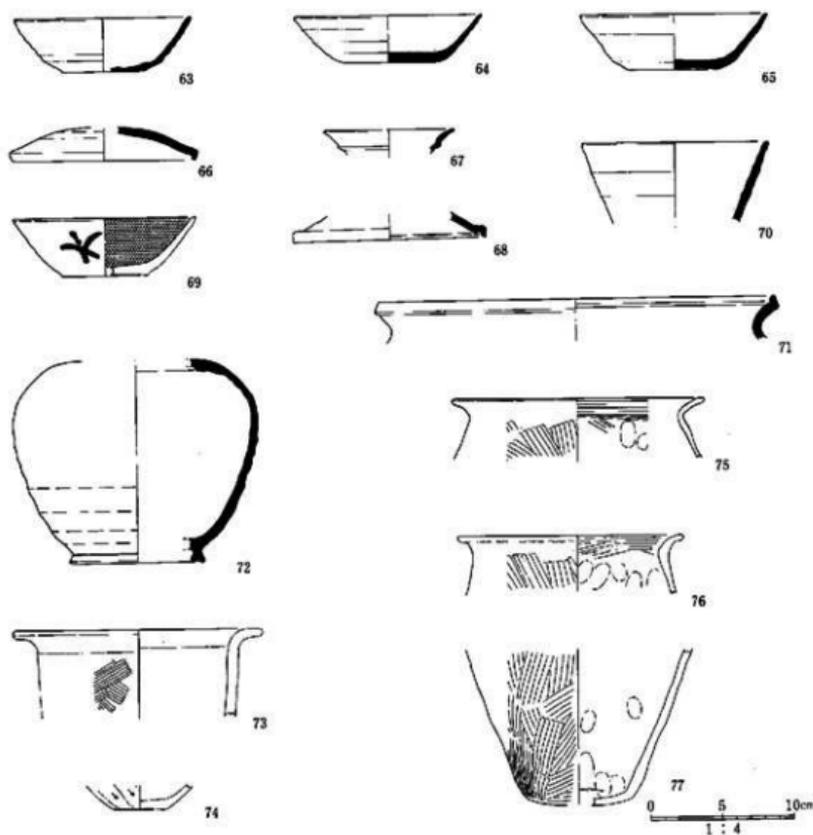


第116図 奈良時代の土器 (5) 44~45 : 55住 46~57 : 56住

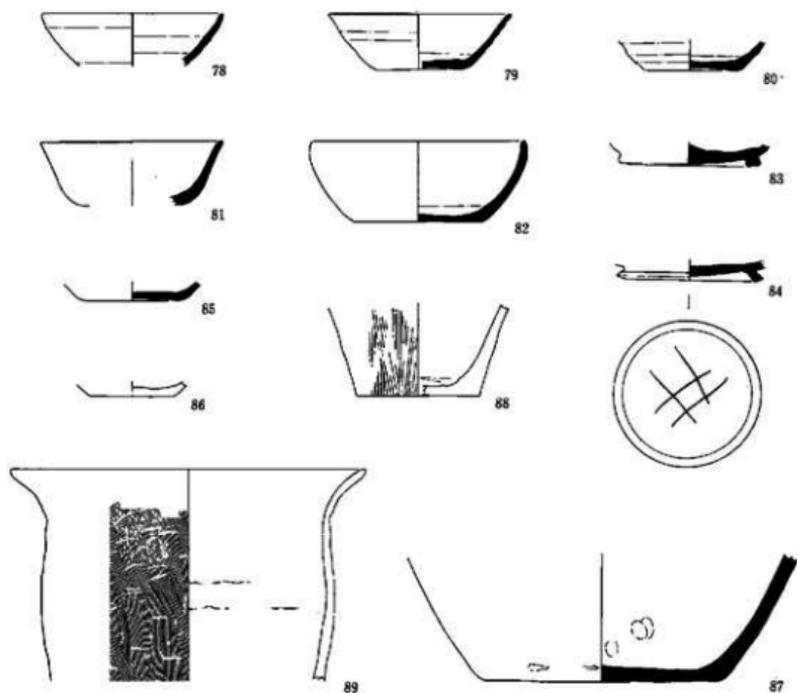
第57号住居址



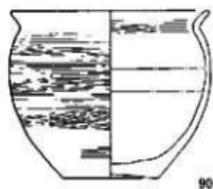
第59号住居址



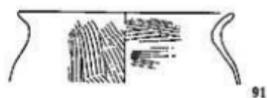
第117図 奈良時代の土器 (6) 58~62: 57住 63~77: 59住



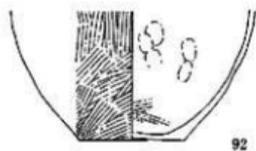
第60号住居址



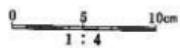
90



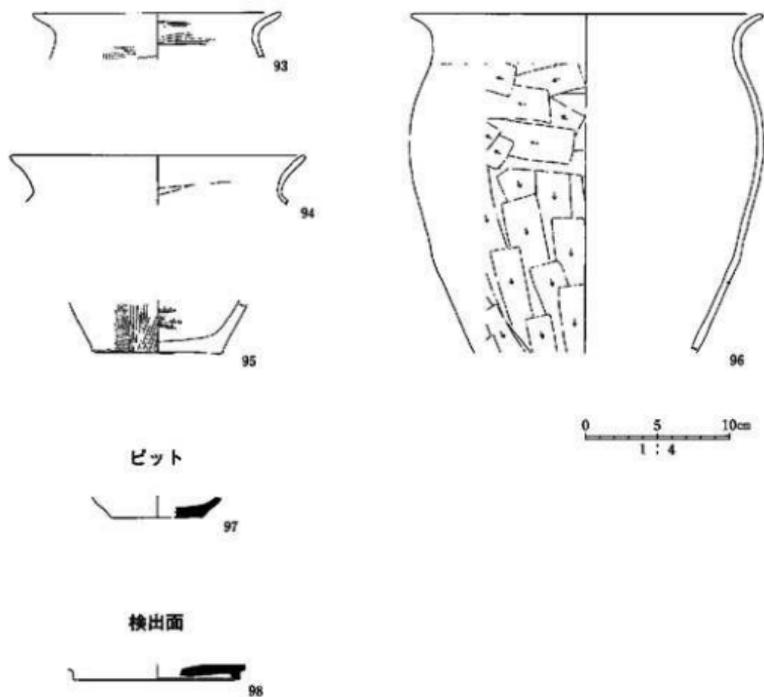
91



92



第118図 奈良時代の土器 (7) 78~89:59住 90~92:60住



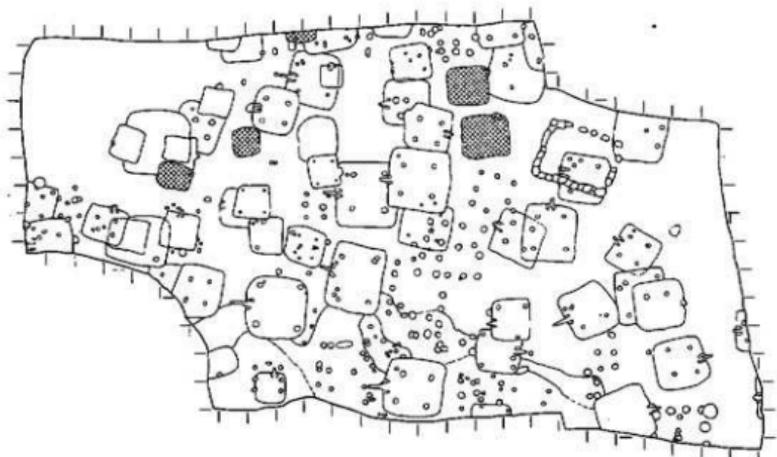
第119図 奈良時代の土器 (8) 93~96: 60住
97: ビット 98: 検出面

第5表 奈良時代土器一覽表

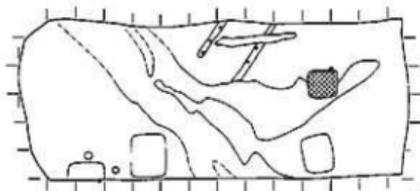
No	出土地	類別	器形	寸 寸 (cm)		口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	色		説明	備考、式例 No. 註記
				口径	高さ				外	内		
1	18坪	甕	厚底	口径 11.2	高さ 5.6	灰	灰	灰	灰	ロクロナデ	18-1, 18E, 77土	
2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ	18-9, 18C, 3	
3	〃	〃	〃	口径 28.0	高さ 3.3	灰	灰	灰	灰	厚底	18-7, 18D, 3・5	
4	〃	〃	厚底	口径 (13.4)	高さ (3.7)	灰	灰	灰	灰	ロクロナデ	18-9, 18E, 14	
5	〃	〃	土器	口径 (13.0)	高さ (4.2)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-3, 18E, 77土	
6	〃	〃	〃	口径 (13.0)	高さ (4.2)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-6, 18E, 27	
7	〃	〃	〃	口径 (13.0)	高さ (4.2)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-1, 18E, 11・13	
8	〃	〃	〃	口径 (11.2)	高さ (10.4)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
9	〃	〃	〃	口径 (9.8)	高さ (6.1)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-10, 18E, 4	
10	〃	〃	〃	口径 (13.0)	高さ (3.8)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-2, 18E, 10・17	
11	36坪	〃	厚底	口径 (13.0)	高さ (3.8)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
12	〃	〃	〃	口径 (13.1)	高さ (3.8)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
13	〃	〃	〃	口径 (13.1)	高さ (3.8)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
14	〃	〃	〃	口径 (14.2)	高さ (4.4)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-3, 18E, 77土	
15	〃	〃	〃	口径 (14.1)	高さ (4.4)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-3, 18E, 77土	
16	〃	〃	土器	口径 (13.0)	高さ (7.0)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
17	〃	〃	〃	口径 (13.0)	高さ (7.0)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
18	〃	〃	〃	口径 (9.5)	高さ (9.5)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
19	〃	〃	〃	口径 (9.5)	高さ (9.5)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
20	42坪	〃	厚底	口径 (10.5)	高さ (7.5)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
21	〃	〃	〃	口径 (13.1)	高さ (5.1)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
22	〃	〃	〃	口径 (13.1)	高さ (5.1)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
23	〃	〃	〃	口径 (12.5)	高さ (5.4)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
24	〃	〃	〃	口径 (12.5)	高さ (5.4)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
25	〃	〃	〃	口径 (11.8)	高さ (5.4)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
26	〃	〃	土器	口径 (11.8)	高さ (5.4)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
27	〃	〃	〃	口径 (13.1)	高さ (8.2)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
28	43坪	〃	厚底	口径 (13.5)	高さ (10.5)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
29	〃	〃	〃	口径 (13.7)	高さ (10.7)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
30	〃	〃	〃	口径 (13.7)	高さ (10.7)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
31	〃	〃	土器	口径 (12.4)	高さ (7.2)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
32	〃	〃	〃	口径 (12.4)	高さ (7.2)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	
33	〃	〃	〃	口径 (12.4)	高さ (7.2)	灰	灰	灰	灰	厚底	18-8, 18E, 11・12	

No.	出土地点	種別	形状	寸 径 (cm)	重量 (g)	時期	色		図	成彩・調製・形装の特徵	備考・実測No. 注記
							外	内			
34	47号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-11, 49, 50, 51, 52
35	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-2, 49, 50, 51, 52
36	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-3, 49, 50, 51, 52
37	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-4, 49, 50, 51, 52
38	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-1, 49, 50, 51, 52
39	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-2, 49, 50, 51, 52
40	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-3, 49, 50, 51, 52
41	50号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-4, 49, 50, 51, 52
42	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-1, 49, 50, 51, 52
43	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-2, 49, 50, 51, 52
44	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-3, 49, 50, 51, 52
45	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-4, 49, 50, 51, 52
46	50号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-1, 49, 50, 51, 52
47	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-2, 49, 50, 51, 52
48	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-3, 49, 50, 51, 52
49	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-4, 49, 50, 51, 52
50	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-1, 49, 50, 51, 52
51	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-2, 49, 50, 51, 52
52	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-3, 49, 50, 51, 52
53	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-4, 49, 50, 51, 52
54	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-1, 49, 50, 51, 52
55	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-2, 49, 50, 51, 52
56	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-3, 49, 50, 51, 52
57	49号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-4, 49, 50, 51, 52
58	57号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-1, 49, 50, 51, 52
59	57号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-2, 49, 50, 51, 52
60	57号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-3, 49, 50, 51, 52
61	57号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-4, 49, 50, 51, 52
62	57号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-1, 49, 50, 51, 52
63	59号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-2, 49, 50, 51, 52
64	59号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-3, 49, 50, 51, 52
65	59号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-4, 49, 50, 51, 52
66	59号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-1, 49, 50, 51, 52
67	59号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-2, 49, 50, 51, 52
68	59号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-3, 49, 50, 51, 52
69	59号	片断	環	(12.4)	5.9	(7)	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	48-4, 49, 50, 51, 52

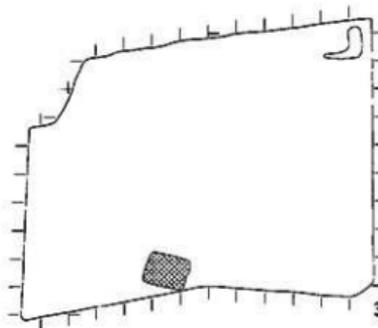
No.	出土地点	種類	形状	寸法(cm)		底径	高さ	底径		底径	色	調		成彩・調査・形名の特徴	備考、発掘元、注記
				口径	口縁			外	内			片	面		
67	59坪	須恵器	鉢	9.2				片	片	灰	灰	灰	ロクロナガ、口縁部までロコナガ	59-14、59注1	
68	69	土師器	埴C	13.6				片	片	灰	灰	灰	ロクロナガ、口縁部までロコナガ	59-3、59注1	
69	土師器	埴C	12.3	(6.0)	(4.1)			灰	灰	赤	赤	赤	内底・外底	59-4、59注1	
70	須恵器	埴C	33.0					片	片	灰	灰	灰	ロクロナガ	59-15、59注1	
71	須恵器	埴C	(27.8)					片	片	灰	灰	灰	ロクロナガ、口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	59-7、59注1	
72	須恵器	埴	(17.6)					片	片	灰	灰	灰	ロクロナガ、口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	59-8、59注1	
73	土師器	埴	小形					灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	59-9、59注1	
74	須恵器	埴	小形					灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	59-10、59注1	
75	須恵器	埴	小形					灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	59-11、59注1	
76	須恵器	埴	小形					灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	59-12、59注1	
77	須恵器	埴	小形					灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	59-13、59注1	
78	47坪	須恵器	埴	(12.7)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	47-4、47坪東北中層	
79	須恵器	埴	小形	(12.4)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	47-3、47坪東北中層	
80	須恵器	埴	小形	(12.4)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	47-2、47坪東北中層	
81	須恵器	埴	小形	(12.4)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	47-1、47坪東北中層	
82	須恵器	埴	小形	(14.7)	(9.9)	(5.7)		灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	47-1、47坪東北中層	
83	須恵器	埴	小形	(14.7)	(9.9)	(5.7)		灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	47-1、47坪東北中層	
84	須恵器	埴	小形	(14.7)	(9.9)	(5.7)		灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	47-1、47坪東北中層	
85	須恵器	埴	小形	(14.7)	(9.9)	(5.7)		灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	47-1、47坪東北中層	
86	土師器	小形	埴	(7.2)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	47-8、47坪北下層	
87	須恵器	埴	小形	(5.9)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	47-2、47坪北下層	
88	須恵器	埴	小形	(5.8)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	47-2、47坪北下層	
89	須恵器	埴	小形	(5.8)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	47-2、47坪北下層	
90	伊王	須恵器	埴	(24.2)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	47-20、47坪北下層	
91	伊王	須恵器	埴	(13.4)	(5.8)	(1.8)		灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	47-15、47坪北下層	
92	須恵器	埴	小形	(15.0)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	60-3、60坪北下層	
93	須恵器	埴	小形	(15.0)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	60-3、60坪北下層	
94	須恵器	埴	小形	(17.3)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	60-4、60坪北下層	
95	須恵器	埴	小形	(20.3)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	60-7、60坪	
96	伊王	須恵器	埴	(24.4)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	60-2、60坪	
97	伊王	須恵器	埴	(24.4)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	60-5、60坪北下層	
98	伊王	須恵器	埴	(24.4)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	60-8、60坪北下層	
99	伊王	須恵器	埴	(24.4)				灰	灰	赤	赤	赤	口縁部までロコナガ、口縁部内面は焼	60-9、60坪北下層	



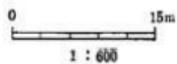
1地区



2地区



3地区



第120図 平安時代の遺構配置

第6節 平安時代の遺構と遺物

1. 住居址

(1) 第25号住居址

遺構 (第121図)

1地区中央東寄り、(11~15, 27~31)に位置する。平面形は一辺5.0mの方形を呈し、主軸はN-0°を指す。壁は20cm前後の高さをもつ比較的浅いものである。東壁の中央に非常になだらかな立ち上がり部がある。床面は概して平坦で、茶褐色を呈す鉄分の集積がみられる堅固なものであった。床面積は13.4m²を測る。カマドは北壁東寄りに設置されている。石組みカマドで石が露出している。火床は60cm×50cmの規模をもつ。カマド以外の本址に伴う施設は検出されなかった。

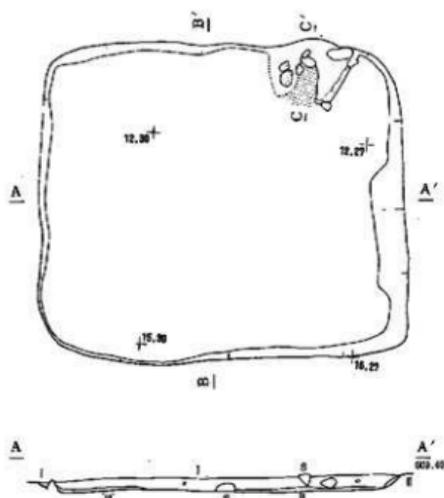
本址の覆土の土壌はまったく特徴的なもので、灰色系統の土色を示し、層中に多量の鉄・マンガンの集積を認めた。下部へ行く程にこの傾向は強まり、床面に至ってその上面に板状に集積層が形成されていた。前代までの他の住居址には1例もない状況を示していた。

遺物の出土状態 (第121図下段)

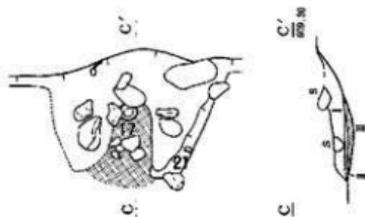
本址中央部からカマド前面の中~下層に径20~50cmの礫が40個ほどあり、遺物はその間やカマド周辺から主に出土した。遺物の種類は土器・陶器と鉄器(器種不明)で、特に土器・陶器は一括品、半完成品がいくつもあった。上記の礫は規模・状態から自然に本址内にはいり込んだものではなく人為的に集められ、投入されたもので、遺物もこれに伴って遺されたものが多いと考える。床面まで下ると土器小片が小量出土したのみである。

遺物 (第125図1~23、第133図24)

土器・陶器23点、鉄器1点を図化・提示した。土器の点数が多く、良好な資料である。土器・陶器には土師器、須恵器、灰釉陶器があり、器種は土師器に坏(9・12・13・16)、埴(14・15・17・18・20)、皿(19)、盤(10・11)、鉢(23)、小形甕(21・22)、須恵器に壺(8)、灰釉陶器に碗(5~7)、段皿(1~4)が見られる。土師器坏は口径に比して器高が低くなり体部が直線的な外形を呈している。これに対して埴(碗)は土師器と灰釉陶器で作られ、腰の張った深味のある外形をとっていて、大形品(5~7・17)、小形品(14・15・18)に分かれている。時期的には平安時代後半の様相と捉えることができる。鉄器は本章8節で触れる。



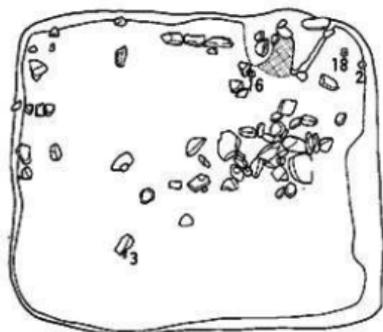
- I : 赤土層入・鼓さび地味基壇部同色赤土
- J : 黄褐色土層入・鼓さび地味同色土
- : 礫化土層入・鼓さび地味同色土



- I : 0.5cm穴層入ブロック・0.5cm穴層入土ブロック層入赤土
- II : 0.8cm穴層入ブロック層入赤土
- : 礫化土(赤土)

土器 : 1・2・3・16・17・18・21
土器番号は実測図に対応する

0 50cm
1 : 40



0 1 2m
1 : 80

第121図 第25号住居址

(2) 第26号住居址

遺構 (第122図)

1地区中央東寄り、(6～9, 29～32)に位置し、第28号住居址を切る。規模・平面形は南北4.4m、東西4.3mの南北にわずかに長い隅丸長方形を呈し、主軸はN-68°-Eを指す。壁は壁高が北壁10cm、南壁10cm、東壁18cm、西壁8cmと非常に浅く、掘り込みの様子が確認できなかった。床は中央部に堅緻な部分があったがその周辺になると不明瞭で、全般的に起伏が激しい。覆土が全体的に堅く、床の検出は困難であった。床面積は17.3m²を測る。東壁北端にはカマドが設置されている。袖には構築時に組まれたであろう石材が多数残存しており、石組粘土カマドであったように推定される。火床は70cm×60cmの規模をもち、焼土の広がり直径40cm、厚さ4cmの範囲をしめる。カマドのほかにピット・周溝などの本址にともなう施設はなかった。

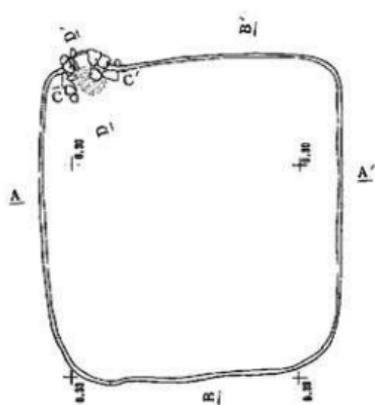
本址覆土は前項第25号住居址と同様、前代の遺構とはまったく異なるものであった。上下2層にわかれ、いずれも土色は灰色系統を示し粘性が強い。層中には、鉄・マンガン分の集積が斑状にあり、土質は堅く締って掘り下げ作業に非常に苦労した。床面に達すると集積層が板状に固まっていたため床の認別は容易だったが、非常に違和感を受けた。

遺物の出土状態 (第122図下段)

本址中央部一帯に10～30cm大の礫が多く集まっており、遺物は床面よりかなり浮いてこの礫周辺から出土した。土器の中小破片がほとんどで、量的には少ない。上記の礫は人為的に集められたものであり、主な土器片も本址廃絶後に覆土に混じったものと考えられる。

遺物 (第125・126図24～33)

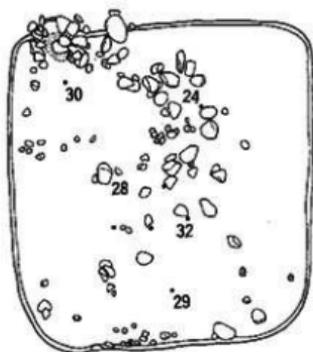
土器・陶器を10点区画・提示した。遺物の種別は土師器と灰釉陶器で、器種は土師器が坏(29)、埴(30～32)、皿(25・26)、盤(24)、小形甕(33)、灰釉陶器が碗(27・28)で構成されている。31の土師器は端部が著しく外反する珍しい外形で、一応埴としたが坏かもしれない。本址出土土器の中には前項第25号住居址で見た、腰の張る深味のある埴(碗)が存在しない。この点から考えて時期は平安時代後半に近いが、第25号住居址を遡る頃としておきたい。



I : 鉄・マンガン酸化物の褐色結晶層
II : 褐色の結晶層

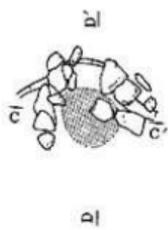


I : 黄土ブロック・灰化跡層入の灰褐色土
II : 灰化物少量層入の褐色土
III : 砂礫混入の褐色土
IV : 埋納層



土器 : 24・28・29・30・32
土器番号は実測図に対応

0 1 2 m
1 : 80



0 50cm
1 : 40

第122図 第26号住居址

(3) 第31号住居址

遺構 (第123図)

1地区中央西寄り、(12~15, 53~55)に位置し、北東隅が第32号住居址をわずかに切る。平面形は南北3.0m、東西2.8mの隅丸方形を呈し、主軸をN-0°にとる。壁は北壁22cm、南壁14cm、東壁16cm、西壁18cmと浅く、概してなだらかな立ち上がりをもつ。黒色~黒褐色弱粘質土の地山をそのまま掘り込んだ床面は軟弱で平坦である。床面積は6.8m²を測る。

本址に伴う施設は全く検出されず、住居かどうか疑問のあるところだが、掘り込みはある程度はっきりしていて、一応床の構築もあったのでこの様に判断した。

遺物の出土状態 (第123図右上)

覆土中から床上にかけて多数の15~30cm大の礫が存在した。この礫は自然に流入したものではなく、また本址の施設であった可能性も低い。本址廃絶時以降に人為的に運び込まれたものと推定する。遺物には土器と鉄器(釘)があり、この隙間や床上から出土したが、ほとんどのものはない。出土状態に意図的なものも感じられなかった。

遺物 (第126図34~44, 第133図25)

土器11点、鉄器1点を図化・提示した。土器には土師器の坏(37~41)、埴(42~43)、羽蓋(44)、灰釉陶器の段皿(34~36)、の器種が見られる。土師器には底部を欠くものが多く、埴としたが坏である誤りもあるかもしれない。平安時代後半、第26号住居址出土土器と同じ頃のものと考えられる。

(4) 第34号住居址

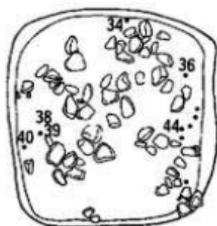
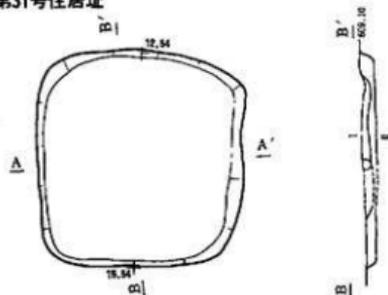
遺構 (第123図)

1地区北端、(2~3, 48~51)に位置する。第48号住居址と重複してその西半分を切る。本址北半分は調査区域外にかかり、南半分を検出したのみである。主軸方向はN-8°-Wを指し、規模・平面形は一辺3mの方形を呈すと推定する。壁高は38~42cmを測り、壁の立ち上がりははっきりしている。床は黒色弱粘質土の地山に暗灰色粘質土を貼って構築されている。床面上に鉄・マンガンの斑状集積があり概して堅いものである。床面中央にピットが1個検出されたが、用途などは推定できなかった。床面積は2.9m²である。

遺物

同期の住居の中では深い方であったにもかかわらず遺物は著しく少ない。器種の判別できるものでは土師器の小形の坏の破片が数点あるのみで、しかも図示は不能であった。平安時代後期の土器と考えられる。

第31号住居址

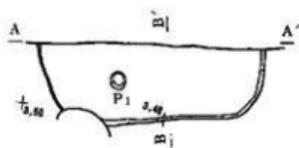


土器：34・36・38・39・40・44
土器番号は実測図に対応する



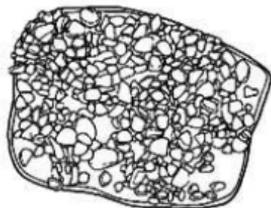
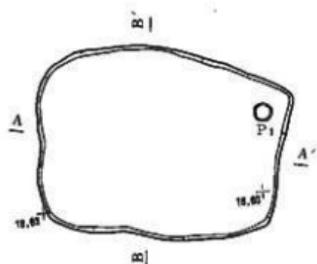
I：灰色粘質土
II：暗褐色粘質土
III：黄色土ブロック層入灰色土

第34号住居址

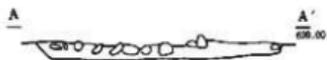


I：黄色粘質土ブロック多量混入わずかに灰色がかる暗褐色粘質土
II：暗褐色粘質土
III：所屬不明粘質土
IV：所屬不明土

第46号住居址



わずかに灰色がある暗褐色粘質土層



0 1 2m
1 : 80

第123図 第31・34・46号住居址

(5) 第46号住居址

遺構 (第123図)

1地区西側、(16~18, 60~63)に位置し、第47号住居址の東南隅を切る。規模・平面形は南北2.3m、東西3.4mのかなり不整な隅丸長方形を呈し、主軸方向N-85°-Wを指す。壁は北壁18cm、南壁16cm、東壁18cm、西壁24cmを測り、なだらかな立ち上がりをもつ。床は、第47号住居址の覆土の灰色土中にそのまま掘り込まれており、同址に伴う炭化材などが床面上にあらわれている。ピットが1個床面北東部より検出されたが、用途は不明である。その他本址に伴う施設は検出されなかった。床面積は7.7m²を測る。

遺物の出土状態 (第123図右下)

本址覆土中にはきわめて多量の礫が存在した。礫径は15~30cmで、その検出状態は住居の掘り込みの中へ土ではなくて石を詰めて埋めたと表現した方がふさわしい程であった。遺物はその隙間から少量の出土をみた。土器・陶器と鉄器(釘)で、まとまりをもって出土する状態はまったくない。

遺物 (第127図45~48, 第133図26)

土器・陶器4点、鉄器1点が図化・提示できた。土器・陶器は、土筋器坏(46・47)、灰釉陶器碗(45)、須恵器横瓶(48)、の器種がある。48の横瓶は時期的に本址に伴うものではなく、周囲の第47号住居址あるいは北隣の第59号住居址に属すると考える。本址に伴う土器・陶器の時期は平安時代後期、第26・31号住居址にごく近い頃と推定する。

(6) 第63号住居址

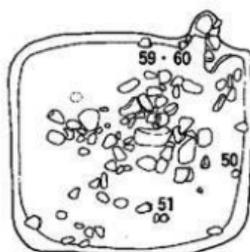
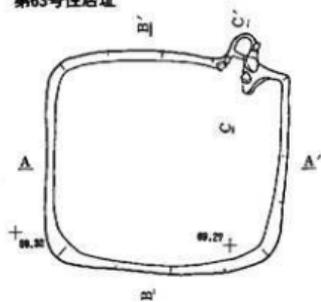
遺構 (第124図)

2地区中央東寄り、(66~69, 27~30)に位置し、流路址2を切る。規模・平面形は南北3.2m、東西3.4mの長方形を呈し、主軸方向はN-0°を指す。壁高は北壁30cm、南壁24cm、東壁28cm、西壁36cmを測り、しっかりした掘り込みをもつ壁である。床面は黄褐色砂質土の固くたたきしめた床である。カマドは北壁東隅に位置し、眼外へ40cm程張り出す。袖の石材は露出しており石組カマドであったと見られる。カマド内に焼土層は見られなかった。カマドの他に本址にともなう施設は検出されなかった。床面の面積は8.3m²を測る。

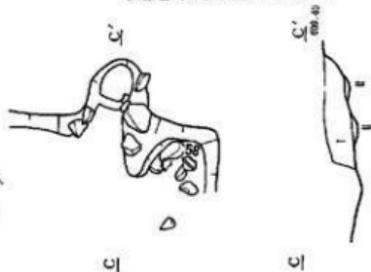
遺物の出土状態 (第124図右上)

本址中央部一帯に多数の礫が存在した。礫径は15cmから大きいものでは長径40cm程もあった。これらの礫は、ある程度以上の大きさのものしかないことやまとまり具合から人為的に運び込まれ、投入されたものと判断した。遺物は主にこれらの隙間やカマドの脇から出土した。特にカマドの脇からは大小破片も含めてある程度まとまって土器が出土した。その他の覆土から出土したものは少量の小破片ばかりである。

第63号住居址

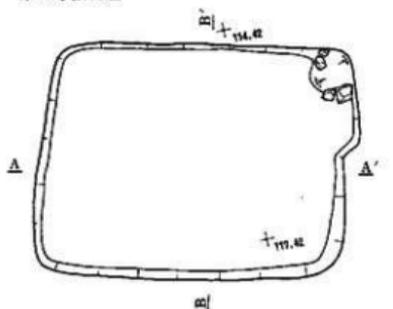


土器：50・51・58・59・60
 上層番号は実測図に対応する



- J: 黄土砂質土に混入褐色砂質土
- K: 褐色砂質土
- L: 黄白色砂質土ブロック混入褐色砂質土
- M: 褐色砂質土
- N: 黄土砂質土ブロック混入褐色砂質土
- O: 黄土砂質土ブロック混入褐色砂質土
- P: 黄土砂質土ブロック混入褐色砂質土
- Q: 黄土砂質土ブロック混入褐色砂質土
- R: 黄土砂質土ブロック混入褐色砂質土
- S: 黄土砂質土ブロック混入褐色砂質土
- T: 黄土砂質土ブロック混入褐色砂質土
- U: 黄土砂質土ブロック混入褐色砂質土
- V: 黄土砂質土ブロック混入褐色砂質土
- W: 黄土砂質土ブロック混入褐色砂質土
- X: 黄土砂質土ブロック混入褐色砂質土
- Y: 黄土砂質土ブロック混入褐色砂質土
- Z: 黄土砂質土ブロック混入褐色砂質土

第66号住居址



0 50cm
 1 : 40



0 1 2 m
 1 : 80

第124図 第63・66号住居址

遺物 (第127図49～58)

図化・提示できたのは土器のみである。すべて土師器で器種は、坏 (51～54・56)、鉢 (55)、埴 (49)、盤 (50)、羽釜 (58)、が見られる。57も羽釜の一種であろうか。土師器の坏は内面にミガキのない雑なつくりのものばかりである。時期的には、平安時代後期、第26・31号住居址と同じ頃と考える。

(7) 第66号住居址

遺構 (第124図)

3地区南端(42～43, 114～117)に位置する。南北4.6m、東西3.2mの長方形を呈し、主軸をN-13°-Eにとる。壁は壁高が10cm程度と浅く、掘り込みの状態も確認できなかった。床は暗褐色粘質土の地山に直接掘り込まれ、やや軟弱である。北壁東側にはカマドの痕跡がみられる。袖に使われたであろう石材が散在し、径20cmの円形の落ち込みがみられた。その他の施設はみられなかった。床面積は12.1m²である。

遺物 (第127図59～62, 第133図27)

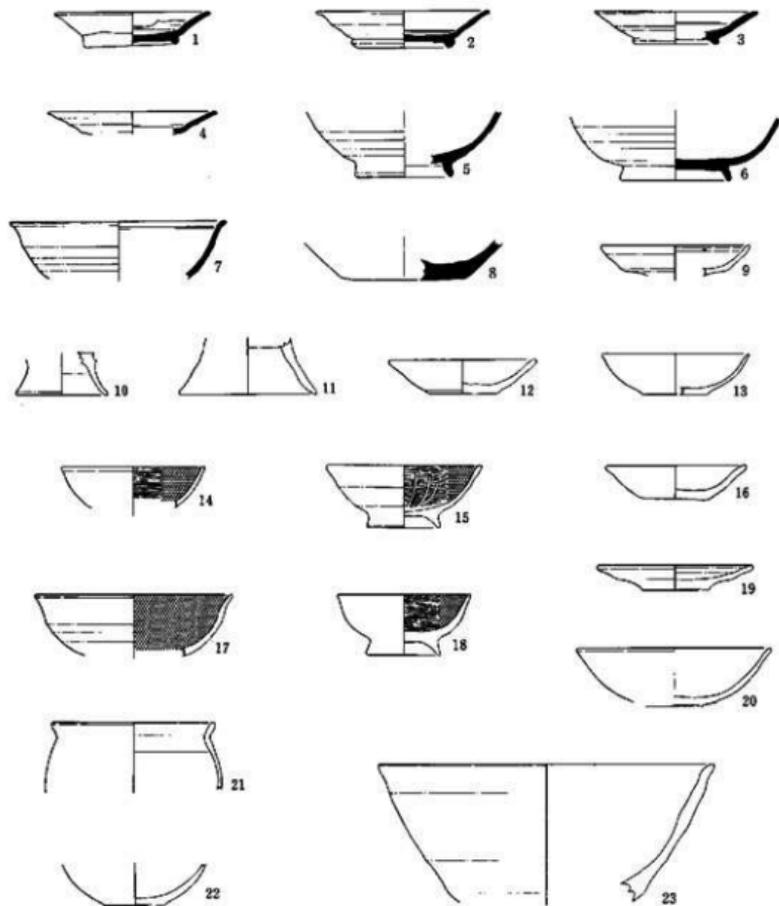
非常に遺物の少ない住居址で、土器片が10数点、鉄器(釘)が1点出土したのみである。出土状態も覆土中に点在していて、一括性はない。

図示できたものは、土器4点、鉄器1点と少ない。土器は土師器ばかりで、器種はすべて埴である。腰の張った深埴の大小があることから、第25号住居址と同じ頃の平安時代後期を所属時期として考える。

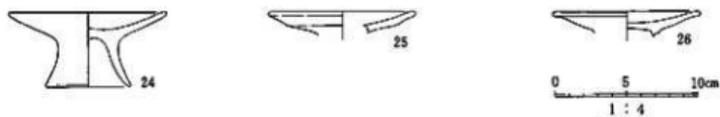
2. 遺構外出土の遺物

1～3区検出面から少量の土器・陶器が出土している。器種は土師器の坏と埴、灰釉陶器の碗で図化したのは8点である。奈良時代の遺構外・検出面からの出土品と同じ傾向をもつ。70の小形の土師器は第49号住居址(奈良時代)覆土から出土したが他に例がなく、平安時代のものの混入として分離してしまった。時期は、さらに下るものであろうか。

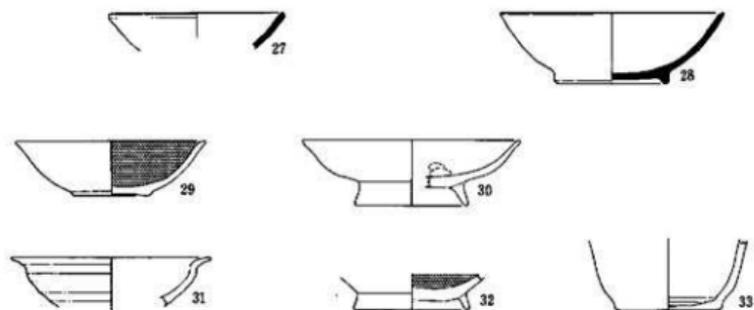
第25号住居址



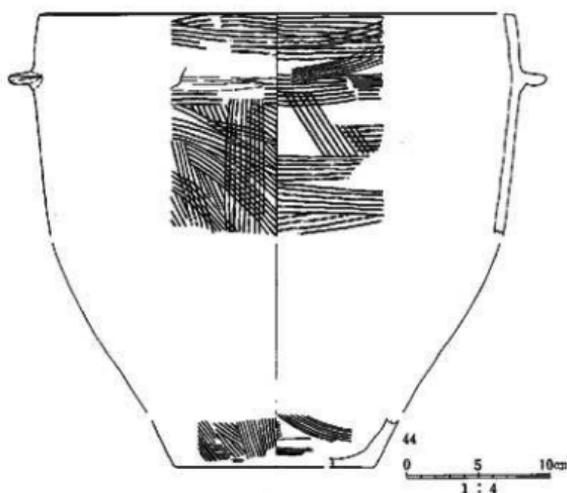
第26号住居址



第125図 平安時代の土器 (1) 1～23: 25件 24～26: 26件

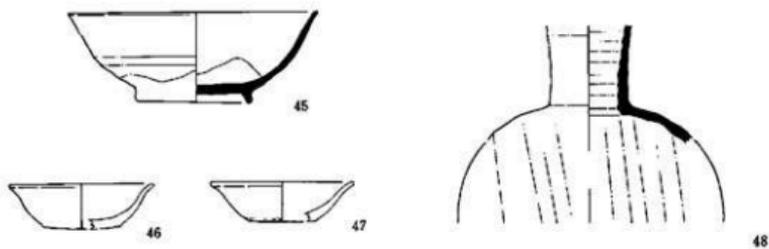


第31号住居址

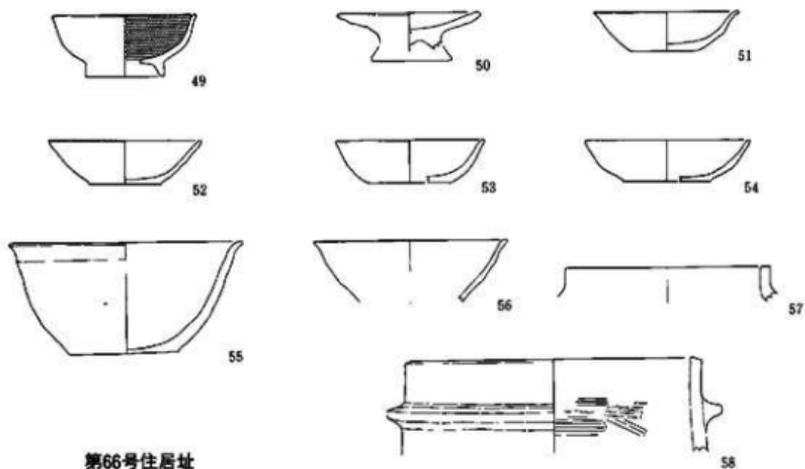


第126図 平安時代の土器 (2) 27~33: 26住 34~44: 31住

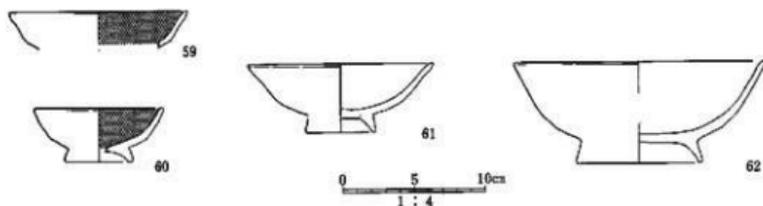
第46号住居址



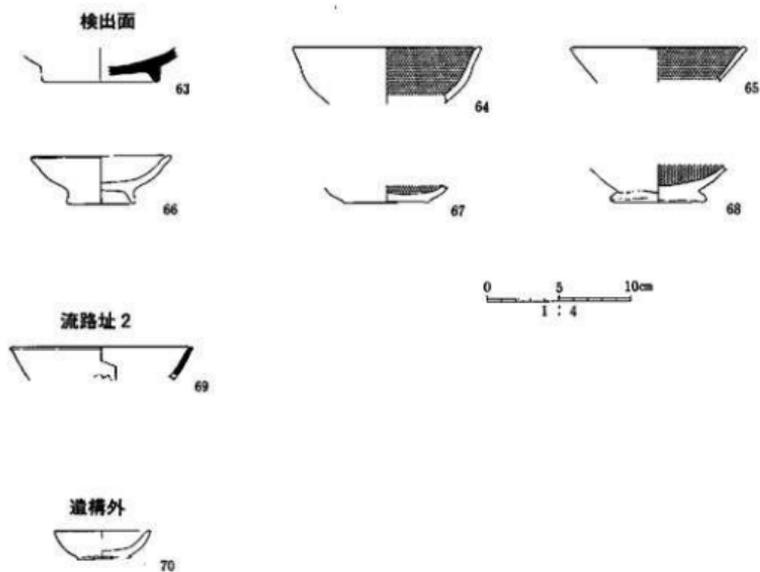
第63号住居址



第66号住居址



第127図 平安時代の土器 (3) 45~48:46件 49~58:63件 59~62:66件



第128図 平安時代の土器 (4) 63~68:検出面
69:流路址2 70:遺構外

第6表 平安時代土器一覽表

出土地点	種類	形状	口径	寸法		重量		色	内面	外面	成器・調査・形跡の特長	備考・実測地・誌記
				高さ	底径	胴径	底径					
1	灰胎	高足	(10.5)	6.6	2.4	克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫、付付蓋台	25-21、25DN.1	
2	灰胎	高足	(12.1)	7.2	2.6	克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫、付付蓋台	25-2、25DN.4	
3	灰胎	高足	(11.3)	6.0	2.3	克		灰白		ロクロナデ、付付蓋台	25-1、25DN.5	
4	灰胎	高足	(11.3)			克		灰白		ロクロナデ	25-3、25付	
5	灰胎	高足	(11.3)	(6.8)		克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫、付付蓋台	25-5、25付(ベル)	
6	灰胎	高足	(11.3)	(7.7)		克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫、付付蓋台	25-6、25付A	
7	灰胎	高足	(11.3)			克		灰白		ロクロナデ	25-4、25付	
8	灰胎	高足	(11.3)	(8.7)		克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫、付付蓋台	25-7、25付A	
9	灰胎	高足	(11.3)			克		灰白		ロクロナデ	25-12、25付A	
10	灰胎	高足	(11.3)	(6.4)		克		灰白		高台付コナデ	25-14、25付A	
11	灰胎	高足	(11.3)	(9.6)		克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫	25-15、25付A	
12	灰胎	高足	(11.3)	(4.5)	2.4	克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫	25-11、25付(ベル)	
13	灰胎	高足	(11.3)	(4.5)	(2.9)	克		灰白		ロクロナデ	25-13、25付	
14	灰胎	高足	(11.3)			克		灰白		ロクロナデ	25-9、25付	
15	灰胎	高足	(11.3)	5.1	4.4	克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫、付付蓋台、外部内面ミダキ	25-10、25付A	
16	灰胎	高足	(11.3)	4.8	2.4	克		灰白		ロクロナデ	25-21、25付A	
17	灰胎	高足	(11.3)			克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫	25-8、25付A	
18	灰胎	高足	(11.3)	5.2	4.3	克		灰白		ロクロナデ、付付蓋台、外部内面ミダキ	25-21、25付A	
19	灰胎	高足	(11.3)	4.5	1.8	克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫	25-8、25付A	
20	灰胎	高足	(11.3)			克		灰白		ロクロナデ、付付蓋台	25-17、25付	
21	灰胎	高足	(11.3)			克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫	25-10、25付A	
22	灰胎	高足	(11.3)	4.2		克		灰白		ロクロナデ	25-10、25付A	
23	灰胎	高足	(11.3)			克		灰白		ロクロナデ	25-10、25付A	
24	灰胎	高足	(11.3)	(6.0)	(5.2)	克		灰白		ロクロナデ	25-8、25付A	
25	灰胎	高足	(11.3)			克		灰白		ロクロナデ	25-6、25付A	
26	灰胎	高足	(11.3)			克		灰白		ロクロナデ	25-2、25付A	
27	灰胎	高足	(11.3)			克		灰白		ロクロナデ	25-1、25付A	
28	灰胎	高足	(11.3)	(6.0)	(5.0)	克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫、付付蓋台	25-10、25付A	
29	灰胎	高足	(11.3)	5.6	3.8	克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫、外部内面ミダキ	25-10、25付A	
30	灰胎	高足	(11.3)	(7.9)	(4.6)	克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫、付付蓋台	25-10、25付A	
31	灰胎	高足	(11.3)			克		灰白		ロクロナデ	25-9、25付A	
32	灰胎	高足	(11.3)	(6.1)		克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫、付付蓋台、外部内面ミダキ	25-4、25付A	
33	灰胎	高足	(11.3)	(7.0)		克		灰白		ロクロナデ、藍彩印面彫、外部内面ミダキ	25-7、25付A	
34	灰胎	高足	(11.3)	7.3	2.7	克		灰白		ロクロナデ	25-1、25付A	
35	灰胎	高足	(11.3)			克		灰白		ロクロナデ	25-3、25付A	

品名	品名	形状	寸法 (cm)		重量 (g)	材質 (JIS)	色		形状	用途	備考
			長さ	幅			外	内			
36	3位	天板	縦型 (12.7)	5.2	2.7	(6)	灰白	灰白	ロタコナダ、付付高台	内用	31-2, 31付高台
37	3位	土脚部	円形 (5.4)			(6)	黒	黒	ロタコナダ	外用	31-7, 31付高台
38	3位	天板	円形 (5.7)	4.5	2.6	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	31-9, 31付高台
39	3位	天板	円形 (5.8)	3.8	2.7	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	31-8, 31付高台
40	3位	天板	円形 (12.3)	3.7	3.4	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	31-10, 31付高台
41	3位	天板	円形 (14.4)			(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	31-4, 31付高台
42	3位	天板	円形 (14.4)			(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	31-6, 31付高台
43	3位	天板	円形 (14.4)			(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	31-6, 31付高台
44	40位	天板	縦型 (18.4)	8.2	6.4	(6)	灰白	灰白	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-1, 46付高台
45	40位	天板	縦型 (17.4)	8.2	6.4	(6)	灰白	灰白	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-2, 46付高台
46	3位	土脚部	円形 (10.2)	5.4	3.2	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-3, 46付高台
47	3位	天板	円形 (10.2)	5.0	3.7	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-4, 46付高台
48	3位	天板	円形 (10.2)	5.4	4.3	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-5, 46付高台
49	50位	土脚部	円形 (10.0)	5.4	4.3	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-6, 46付高台
50	3位	天板	円形 (10.1)			(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-7, 46付高台
51	3位	天板	円形 (10.2)	4.8	2.8	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-8, 46付高台
52	3位	天板	円形 (10.0)	5.0	3.3	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-9, 46付高台
53	3位	天板	円形 (10.4)	5.3	3.0	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-10, 46付高台
54	3位	天板	円形 (11.4)	6.0	2.9	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-11, 46付高台
55	3位	天板	円形 (10.4)	5.7	3.0	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-12, 46付高台
56	3位	天板	円形 (10.4)	5.7	3.0	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-13, 46付高台
57	3位	天板	円形 (10.4)			(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-14, 46付高台
58	3位	天板	円形 (10.4)			(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-15, 46付高台
59	60位	天板	縦型 (12.4)			(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-16, 46付高台
60	3位	天板	円形 (10.4)			(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-17, 46付高台
61	3位	天板	円形 (11.0)	4.8	4.9	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-18, 46付高台
62	3位	天板	円形 (11.0)	5.2	7.5	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-19, 46付高台
63	1位	土脚部	円形 (13.2)	7.0		(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-20, 46付高台
64	3位	土脚部	円形 (13.2)			(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-21, 46付高台
65	1位	土脚部	円形 (13.2)	4.4	3.4	(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-22, 46付高台
66	1位	土脚部	円形 (13.2)	6.0		(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-23, 46付高台
67	1位	土脚部	円形 (13.2)	6.7		(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-24, 46付高台
68	1位	土脚部	円形 (13.2)	12.8		(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-25, 46付高台
69	40位	天板	縦型 (12.8)			(6)	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-26, 46付高台
70	40位	土脚部	円形 (12.8)	5.5	3.7	2.0	黒	黒	ロタコナダ、裏面取込	内用	46-27, 46付高台

第7節 時期不明の遺構

1. 住居址

(1) 第24号住居址

遺構 (第129図)

1地区中央(11~15, 45~48)に位置し、南壁を第18号住居址に切られる。主軸はN-0°を指し、平面形は南北5.0m、東西4.4mの不整長方形を呈する。壁はなだらかな立ち上りを示し、壁高14cm程を測る。床面は地山の一種らしい黒褐色粘質土に掘り込まれたものであるが、一定の深さで土質が変わっていくという形で検出された。やや堅さはあるものの、本質的に住居の床とは異なっている感がした。床面積は、残存部分で16.5m²、復元推定で17.6m²を測る。

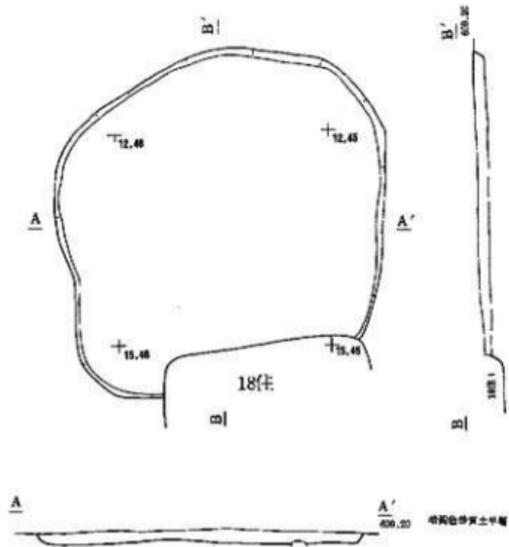
本址はプランや床の状況などから、住居かどうか疑い点が多く、特徴的な施設、遺物もないため時代の確認も不可能である。切り合いからみて奈良時代以前とすることができるだけである。

(2) 第48号住居址

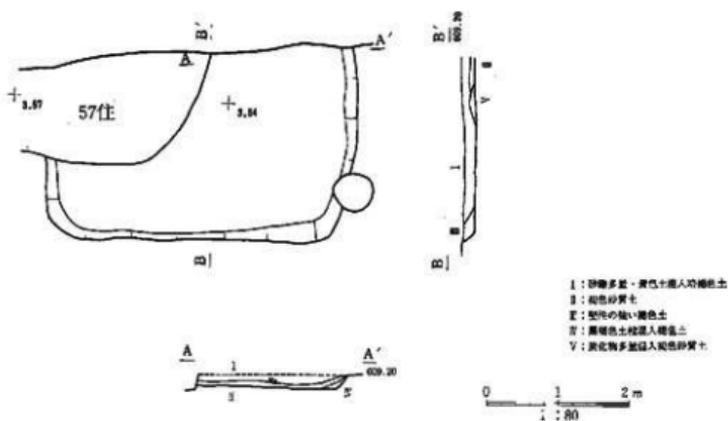
遺構 (第129図)

1地区北端(2~4, 53~58)に位置する。北側は調査区域外にかかり、西壁を第57号住居址に切られるため調査可能な範囲は限られていた。主軸・平面形などは不明である。壁高は20cm前後を測り、なだらかに立ち上がる。礫が多量に混じる黒褐色粘質土をそのまま床にしている。床面には本址に伴う施設は検出されず、時期を示す手掛りも見当らなかった。床面積は7.0m²を測る。

第24号住居址



第48号住居址



第129図 第24・48号住居址

2. 溝址 (第130図)

第1号溝址は2地区中央北端(62~64, 31~39)に位置している。第2号溝址より新しい。北を上みて長軸方向はN-85°-Eである。規模は長8.65m・幅0.52~0.94m・深6~26cmである。3ヶ所のみた溝底の比高差から、本址は東から西へ低い傾斜をもつ溝である。本址の時期は不明である。

第2号溝址は、2地区中央北端(62~68, 33~38)に位置している。北側は調査区域外に伸びており、南側は流路址2に切られている。長軸方向はN-33°-Eである。規模は長6.50m・幅0.45~1.03m・深7~27cmで、南から北へ低くなる溝である。溝の底ではピット2個が検出されている。本址からは木葉底のある土器の甕が出土している。平安時代の住居址に切られる流路址2との新旧関係と伴出土器から、本址の時期は古墳時代後期と考えている。

第3号溝址も2地区中央北端(61~65, 38~41)に位置している。北側は調査区域外に伸びている。長軸方向はN-33°-Eで、第2号溝址と平行している。規模は長4.23m・幅0.55~0.72m・深32~37cmである。溝底の比高差はほとんどなかった。なお、本址の溝底でもピット3個が検出されている。これらのピットは溝址に沿ってほぼ等間隔の位置関係にある。

なお、第2号・第3号溝址の溝底のピットはほぼ平行関係にある。また、2つの溝址の底からの立ち上がりはかなり傾斜をもつことは人為的な溝である可能性をうかがわせる。これらのことから2つの溝址が関連する遺構である可能性も考えられる。ただし、第3号溝址のピット間が1.75m、第2号溝址のそれは2.05mと若干異なっている。本址の時期は不明である。

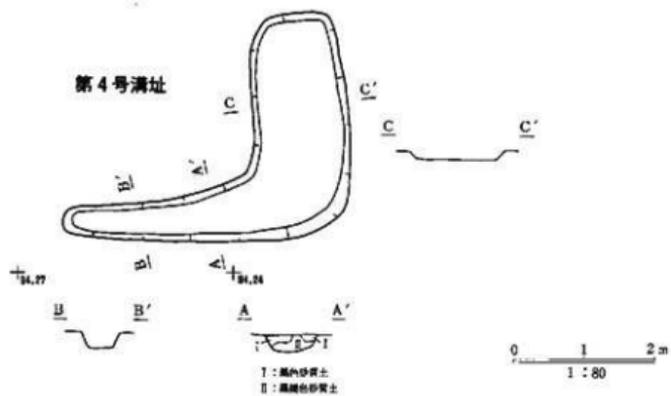
第4号溝址は3地区北東隅(90~94, 22~27)に位置している。ほぼ直角に曲がる溝址なので長軸方向は不明である。規模は東西長4.02m・南北長3.13m・幅0.44~1.48m・深13~20cmで、北側に行くにつれて幅広くなっている。覆土は黒~黒褐色の砂質土である。なお、本址からは紡錘車・ミニチュア土器が出土している。本址の時期は不明である。

3. 焼土

図示していないが、1地区(21, 9)Gに直径1mほどの範囲で焼土のある場所があった。検出当初は住居址のカマド部分の焼土が上面にまで及んだものであろうと思っていたが、結局、その焼土と結びつく住居址はなく、単独の遺構ということになってしまった。

周辺的地盤は黄褐色砂質土から礫質土へ切り替る付近で黒褐色粘質土もブロックで混じるのだがその様な土質の上で火を焚いた痕跡の様であり、焼土層の厚さは2~3cmで終わった。伴う遺物はなく時期不明である。

この一帯にある住居址の床下からは、さらに古い時期と考えられる遺構の覆土らしきものが現れたりして、非常に土層の読み難い場所であったので、検出面を下げれば、なんらかの遺構が下部から発見された可能性もあろう。



第130図 第1～4号溝址

第8節 その他の遺物

1. 鉄器

千鹿頭北遺跡からは33点の鉄器が出土している。これらの多くは竪穴住居址からの出土である。住居址については出土した土器から各時代に区分できるので、鉄器についても古墳・奈良・平安時代の各時代毎について述べることにする。

整理にあたっては実測可能なものはできるだけ図化し、報告することにした。また、すべての鉄器について出土地点・寸法等を一覧表に登載している。なお、本遺跡出土の鉄製品は錆(さび)によるふくろみ、剝落が激しいため十分に錆落しができなかった。そのため、実測も推定線に頼らざるを得ない部分が多かったことを付記しておく。

古墳時代の鉄器 (第131図1～16) 16点が出土している。器種別みると、鎌・刀子・鎌・釘がある。器種不明のものは鎌または刀子の茎部である。

鎌は2点(3・12)出土している。3は鎌身部と茎部の幅にほとんど差がない。12は逆刺をもつ鎌である。鎌身部の先端は失われている。錆のため鎌身部の刃部の形態・錆の有無等はわからない。莖被部は幅広い。なお、13は錆びぶくれが激しくて細部がよくわからないが、鎌または刀子と考えられるものである。ただし、刀子にしては刃部が短く、茎部が非常に長くなってしまい疑問が残る。また、鎌だとすれば片刃鎌になるが茎部が太い点で疑問に思われ、一器種に特定できなかった。

刀子は2点(4・10)出土している。10はわずかに先端を失っているが切先～胴部が残る、刃部最大幅が1.0cmの細長い刀子である。

鎌は1点(9)出土している。刃が内反りし、基部に着柄用の折り返し部が作られているものである。折り返し部分に沿って着柄されたと考えた場合、鎌と柄の着装角度は97°である。先端部が破損しているため、刃部の反り具合についてはわからない。

釘は1点(7)出土している。断面が円形の丸釘で、捻れた状態で出土している。

このほかに、鎌または刀子の茎部と考えられるものが5点出土している。茎の断面は円形と長方形を呈するものがある。ただし、円形のものには鎌である可能性も考えなければいけないだろう。

なお、5・6は第10号住居址出土の鉄器であるが器種が不明である。5は浅いV字状を呈する完形の鉄製品で、中心部に近くなるほど幅・厚さが増している。6は楔状を呈している。

奈良時代の鉄器 (第132図17～23) 8点出土し、7点を図示している。器種は刀子・鎌・釘がある。

刀子は第56号住居址から3点(21～23)出土している。ただし、21は刀子の茎部として扱ったが、茎部が中太になるのに対し、両端が先細になる点で疑問が残る。あるいは鉄鎌の茎部～莖被部にあたる部分、または工具の一種かも知れない。23はほぼ完形で茎部～莖被部の部分が認められることから

小形の刀子として扱った。22は両端を失っているが、刀子の基部〜関の部分である。茎の断面は長方形または楕円形である。18は刀子の基部と思われるものである。

鎌は3点(17・19・20)出土している。このうち17・19は刃が内反りし、基部に着柄のための折り返しが行われているものである。17は先端部と着柄部分をわずかに欠いているほかは、ほぼ完形である。鎌と柄の着装角度は127°である。19・20は同じ住居(第55号住居址)からの出土である。20は刃部のみで着柄部が失われているが、19に比べてやや小振りの鎌だったと考えられる。19はほぼ完形の鎌である。鎌と柄の着装角度は17と同じ127°である。

本道跡からは古墳・奈良時代の鎌4点のうち、基部が残っているものは3点(9・17・19)ある。これらを刃先を左にして置いた場合、9・17は着柄のための基部の折り返しが手前にくるのに対し、19は反対側に折り返されている。一般に古墳〜平安時代の鎌は刃先を左に置いた場合、基部の折り返しは手前にくるものが多い。鎌を実際に使用する場合、着装した柄は鎌の基部の上にあった方が作業を行い易いし、鎌と柄が作業中にズレにくいと思われる。そうであるなら、19の使用者は、9・17の使用者とは利き腕の違う人—おそらくは左利き—であったのかもしれない。基部の折り返しと柄の着装が鎌の生産・流通・人手後のどの段階で行われていたかにもよるが、今後検討していきたい。

釘は図示していないが丸釘と考えられるものが1点出土している。

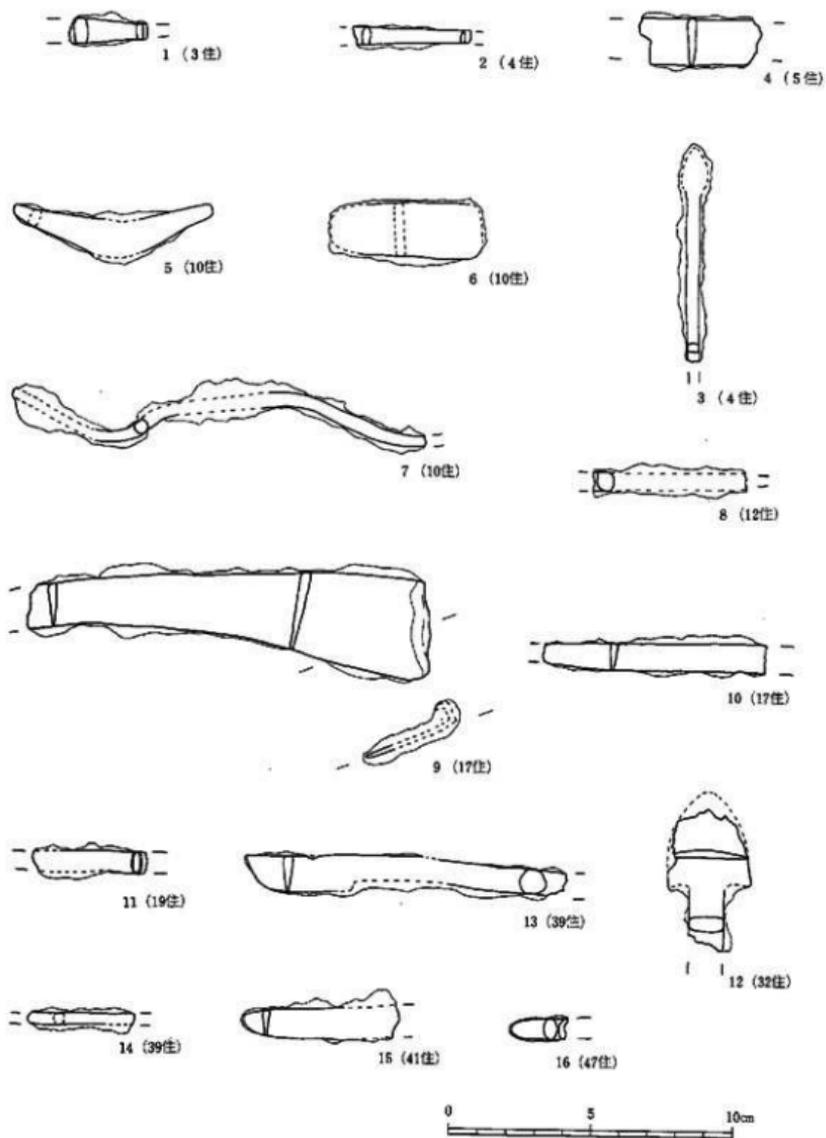
平安時代の鉄器(第133図24~27) 5点出土し、4点図示している。器種別にみると釘と工具と思われる不明鉄器が出土している。

釘は3点(25~27)が出土している。いずれも長10cmを超える、断面が長方形の角釘である。特に、27は末端をわずかに欠くだけで、頭部の逆L字形の部分がよく残っている。25・26は錆びぶくれが激しく細部の状況がよくわからないが釘が破損したものである。なお、平安時代になると住居址からの釘の出土例は比較的多い。これらの釘が何のために、何に対して打ちつけられていたかを知ることのできる発掘例は寡聞にして知らない。古墳・奈良時代については住居址の発掘例自体が少ないので、今後検討していかなければならないが、住居内での釘の使用—建築材の固定等—も考えていかなければいけないだろう。これからは、釘の寸法・形状・出土状態等についてもっと注目していかなければならないと考えている。

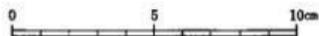
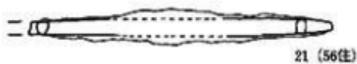
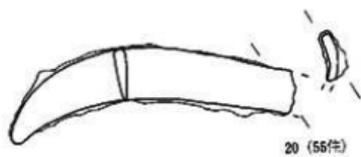
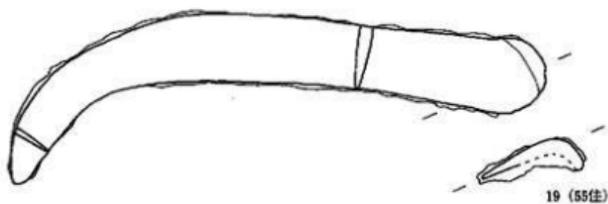
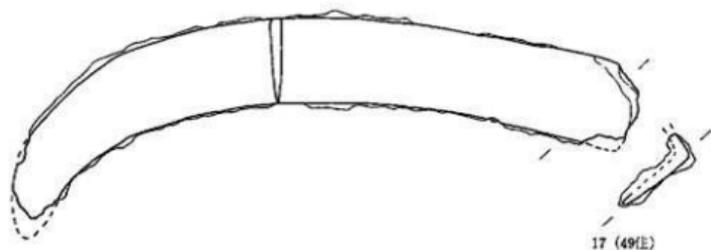
24は器種不明である。平面形はコ字形を呈している。断面J字形の部分をもつことから、はめ込み式の刃先の部分と考えている。ただし、刃部の先端は尖ってはいない。工具の一體と考えている。**時期不明の鉄器**(第133図28~30) 住居址以外の遺構では、図示していないが、溝1から刀子の基部と思われる小片が出土している。このほかに、遺構検出面から釘2点(28・30)・刀子1点(29)が出土している。28は釘がコ字状に曲ってしまったものである。破損部の断面は楕円形を呈している。30は釘の頭部である。29は先端をわずかに失っているが、ほぼ完形の刀子である。茎は茎尻が先細になるタイプのものである。錆化が激しく、関などの細部については不明である。

第7表 鉄器一覧表

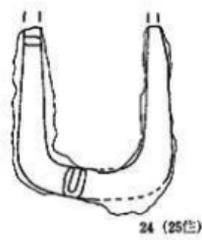
No	図 No	出土遺構	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	欠損状況	備 考
1	1	3 住	不 明	(2.8)	(1.0)	(0.5)	(3.3)	両側欠	基部
2	2	4 住	〃	(3.9)	(0.7)	(0.4)	(3.9)	〃	〃
3	3	〃	鎌	(7.7)	1.0	(0.3)	(7.7)	下部欠	基部幅0.5cm
4	4	5 住	刀 子	(4.3)	(1.7)	(0.3)	(7.0)	両側欠	
5	5	10 住	不 明	7.1	1.3	0.4	13.4	欠形	
6	6	〃	〃	5.4	2.0	0.3	26.7	〃	
7	7	〃	〃	(14.7)	(0.5)	(0.6)	(11.4)	両側欠	
8	8	12 住	釘	(5.4)	(0.7)	(0.7)	(10.4)	〃	
9	9	17 住	鎌	(14.3)	3.5	(0.4)	(74.4)	先端欠	
10	10	〃	刀 子	(7.9)	(1.0)	(0.3)	(9.2)	片側欠	
11	11	19 住	不 明	(4.1)	(0.8)	(0.3)	(4.0)	両側欠	基部
12	12	32 住	鎌	(5.1)	2.9	(0.5)	(11.0)	先端・基部欠	基部幅1.2cm
13	13	39 住	刀子又は鎌	(11.4)	1.3	(1.0)	(13.0)	基部欠	基部幅0.9cm
14	14	〃	不 明	(3.8)	(0.4)	(0.4)	(3.8)	両側欠	基部
15	15	41 住	〃	(5.5)	(1.2)	(0.2)	(9.5)	片側欠	形状を呈している
16	16	47 住	〃	(2.1)	(0.7)	(0.5)	(1.8)	両側欠	基部
17	17	35 住	釘	(10.4)	(0.5)	(0.5)	(3.0)	〃	
18	17	49 住	鎌	(21.5)	2.7	0.4	(84.0)	先端欠	
19	18	〃	不 明	(6.5)	(0.6)	(0.3)	(4.8)	両側欠	刀子の基部?
20	19	55 住	鎌	18.8	2.6	0.5	(72.6)	ほぼ欠形	
21	20	〃	〃	(9.7)	1.5	(0.4)	(25.8)	片側欠	
22	21	56 住	刀 子	(10.8)	0.7	(0.4)	(15.5)	片側欠	基部
23	22	〃	〃	(8.2)	1.1	(0.5)	(6.3)	〃	基部幅0.6cm
24	23	〃	刀子?	(7.3)	0.7	(0.3)	(2.9)	ほぼ欠形	基部幅0.4cm
25	24	25 住	不 明	(6.2)	5.5	(0.7)	(31.7)	〃	刃部断面U字形、工具の一翼か
26	24	〃	〃	(2.0)	(0.7)	(0.3)	(0.7)	〃	
27	25	31 住	釘	(10.8)	(0.6)	(0.4)	(10.8)	頭部欠	
28	26	46 住	〃	(10.7)	(0.7)	(0.5)	(14.9)	両端欠	
29	27	66 住	〃	(8.8)	(0.7)	(0.6)	(12.4)	ほぼ欠形	
30	27	〃	〃	(4.4)	(1.4)	(0.6)	(5.1)	両側欠	
31	28	I区検出面	釘?	(3.4)	(0.4)	(0.4)	(9.2)	〃	
32	29	〃	刀 子	(17.9)	1.1	(0.3)	(21.0)	ほぼ欠形	基部幅0.3cm
33	30	II区検出面	釘	(3.8)	0.9	(0.3)	(3.2)	先端欠	



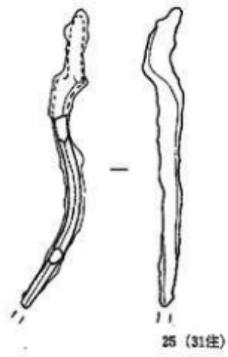
第131圖 鉄器 (1)



第132圖 鉄器 (2)



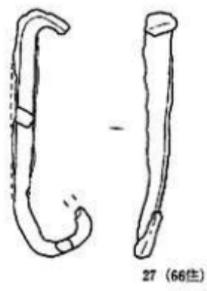
24 (25住)



25 (31住)



26 (46住)



27 (66住)



28 (I棟)



30 (II棟)



29 (I棟)



第133圖 鉄器 (3)

2. 石器

今回の発掘調査では少量ではあるが石器が出土している。内訳は、打製石斧・スクレイパー・磨製石包丁・浮子・砥石・凹石である。このうち、打製石斧・スクレイパーは縄文～弥生時代、石包丁は弥生時代の石器である。前者の石器は住居址の検出面または内部からの出土であるが、運搬に伴うものではない。磨製石包丁は古墳時代後期の住居址からの出土である。石包丁は弥生時代後期にも出土してはいるが、古墳時代前期まで下るかは疑問である。浮子は古墳時代後期の住居址から出土したものである。砥石は古墳時代～奈良時代の住居址から出土している。

遺物の整理は定形的な石器16点についてのみ実測・図化を行い報告することにした。個々の石器の出土地点・寸法・石材については一覧表に搭載している。

打製石斧は5点出土している。形態的には梨形(1～3)・短冊形(4)がある。刃部はすべて円刃である。また、刃部を形成している剥離面の稜の一部には使用痕と考えられる摩耗がみられる。この摩耗は刃部の両側にわたって見られるが、特に片側(実測図の面)に著しい。なお、4は刃部～胴部にかけて線条痕がみられる。その方向は石器の長軸方向に対してやや傾斜している。6は石の一端に両面加工の剥離が行われている。この剥離面には摩耗痕が見られることから石器として扱ったが、人為的な加工(剥離)が行われているのか断定できない。

7は長野県下では普通にみられる直刃・1孔タイプの石包丁である。刃部は主要剥離面側に研磨によって作り出されている。一方、背面は礫の表皮(自然面)を利用しているため背部から刃部にかけてわずかに湾曲している。そのため、作りだしの刃部は片面であるが、断面で見ると両刃状を呈している。紐通しの孔は両面穿孔である。また、鎌が回転するときには鎌の先端がぶれるのを防ぐための小孔が刃部側に2ヶ所あり、背面の穿孔部の端にもその痕跡が残っている。紐ずれ痕は観察されなかった。研磨は長軸に対して左下がりの方向で行われているが、刃部を作り出している研磨は長軸方向に沿ってである。なお、刃部が作り出されている面の刃部の右半は刃こぼれの状の小剥離が連続してみられる。刃部のある面で稲の穂首を押さえる使用方法を考えるなら、この石包丁は左利きの人が使用していた可能性が考えられる。

8は浮子である。いわゆる軽石製で、研磨を行って側面を面取りしながら平面を円形に仕上げている。断面で見ると上方が狭く、下方が広い台形を呈している。上部には1孔があげられており、その部分で破損している。穿孔は片側からと思われる。⁶⁾

9～14は砥石である。13は寸法・重地から置き砥石と考えられるが、その他は手持ちの砥石である。古墳時代後期の住居址から出土した11の砥石は凝灰岩製で、島立遺跡群で多く見られる石材と同じである。13は被熱によって礫の表面が赤色化している。ただし、砥のよく行われている部分はほとんど赤色化がみられない。すでに被熱している礫を砥石に使った可能性も考えられるが、破損面にも被熱による赤色化がみられることからすると疑問である。

15・16は、奈良時代～中世にかけて見られる石器である。縄文時代の凹石とは明らかに異なるた

め、各称の呼び方については問題があるが一応「凹石」として扱っておく。15は奈良時代の住居址から出土したものである。16は両面にくぼみがつけられている。

註1 孔をもつ軽石（浮岩）製の砥石は出川南遺跡の平安時代の竪穴式住居（第3号住居址）から出土している。

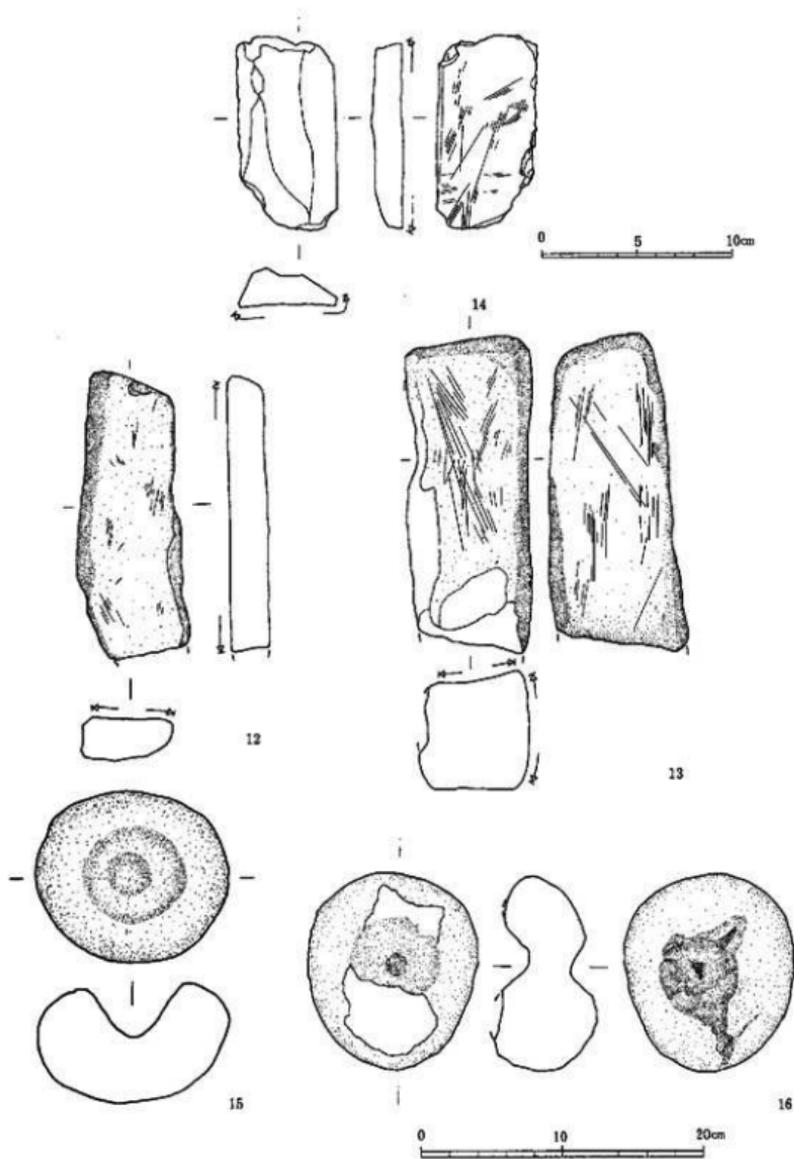
〔松本市出川南遺跡〕 松本市教育委員会 1987, 3 P.42

第8表 石器一覧表

No	出土遺構	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 材	欠損状況	備 考
1	13住検出面	打製石斧	(9.51)	6.55	(1.51)	(104)	千枚岩(石鼻片岩)	頭部欠	楕形・円刃、刃部摩耗
2	17 住	打製石斧	(9.19)	6.19	1.38	(101)	緑色凝灰岩	頭部欠	楕形・円刃、刃部摩耗、側縁部つよれ
3	17住検出面	打製石斧	(16.78)	9.05	3.77	(586)	硬砂岩(細粒)	頭部欠	楕形・円刃、刃部摩耗、側縁部つよれ
4	23 住	打製石斧	(5.86)	(2.90)	(1.09)	(24)	千枚岩(石鼻片岩)	頭部欠	短冊・円刃、刃・側部摩耗
5	42住検出面	打製石斧	(8.30)	(4.95)	(1.72)	(99)	硬砂岩(細粒)	刃部片削~刃部	不明・不明
6	50 住	スレイバー?	(9.64)	(5.66)	(1.90)	(121)	砂 岩	頭部欠	刃部摩耗
7	27 住	磨製石包丁	8.79	3.98	0.64	35.51	砂質泥岩	完 形	片面に磨ぶれを防ぐ小孔が2ヶ所あり
8	16 住	浮子	(7.22)	7.79	3.19	(57)	軽 石	頭部欠	片面穿孔の孔あり
9	1 住	砥石	12.72	(3.20)	(2.42)	(135)	泥 岩	ノ欠	砥面6
10	10 住	砥石	(8.29)	4.06	2.14	(135)	砂 岩	ほぼ完形	砥面3?
11	12 住	砥石	7.93	5.32	5.18	320	凝灰岩	完 形	砥面6
12	43 住	砥石	(19.90)	(7.96)	3.23	(723)	硬砂岩	ノ欠	砥面3?
13	50 住	砥石	(22.10)	(8.75)	(8.99)	(2700)	砂 岩	ノ欠	砥面2、被磨痕、貫き砥石である
14	1区検出面	砥石	10.16	5.02	2.17	148	砂 岩	完 形	砥面4?
15	56 住	凹石	17.40	15.25	10.50	3.300	安山岩	完 形	
16	検出面	凹石	13.85	11.70	(8.22)	(1.500)	安山岩	ノ欠	凹部は両面にあり



第134圖 石器 (1)

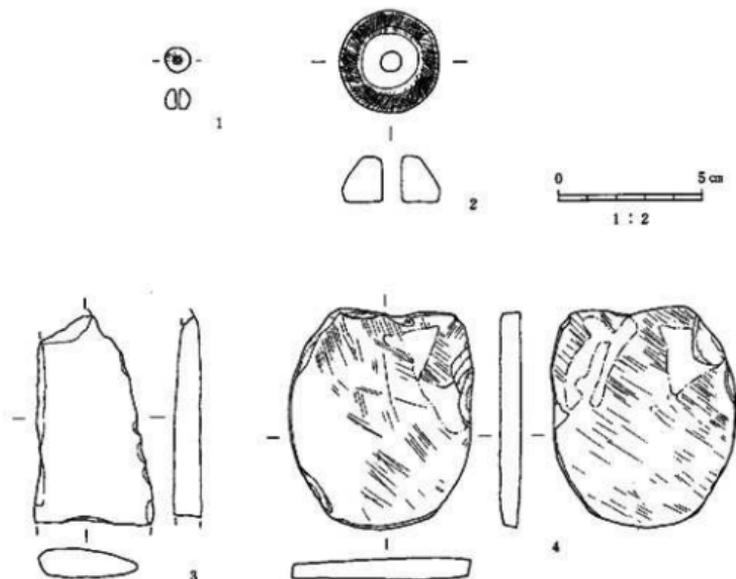


第135图 石器 (2)

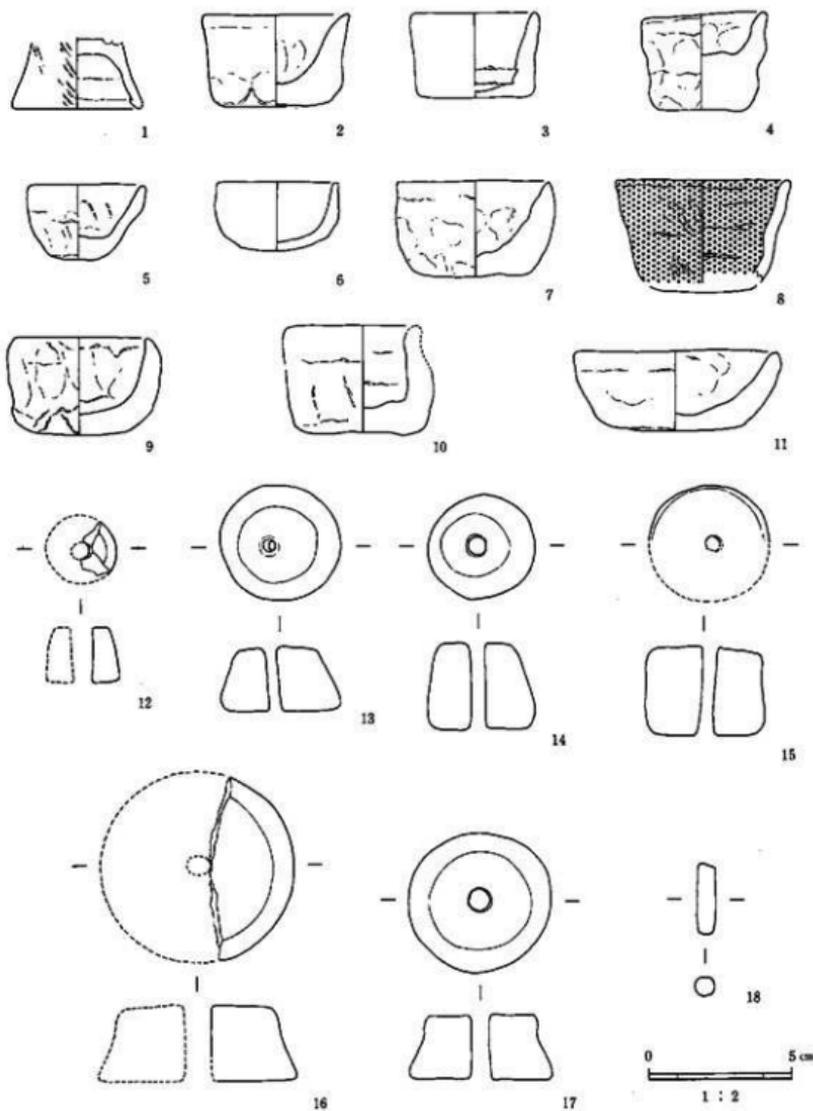
3. 石製品・土製品

石製品は古墳時代後期に属する4点が出土している。1は滑石製丸玉で5住出土。2は滑石製紡錘車で2住出土。側面は2方向からの線刻で8単位の鋸歯文を施しているが明瞭ではない。3(44住)は砂岩製、4(6住)は安山岩製の赤色顔料付着の石製品である。3は全面に研磨痕が見られ、周辺を面取りしながら円形に整形している。これらは祭祀に関係するものか。

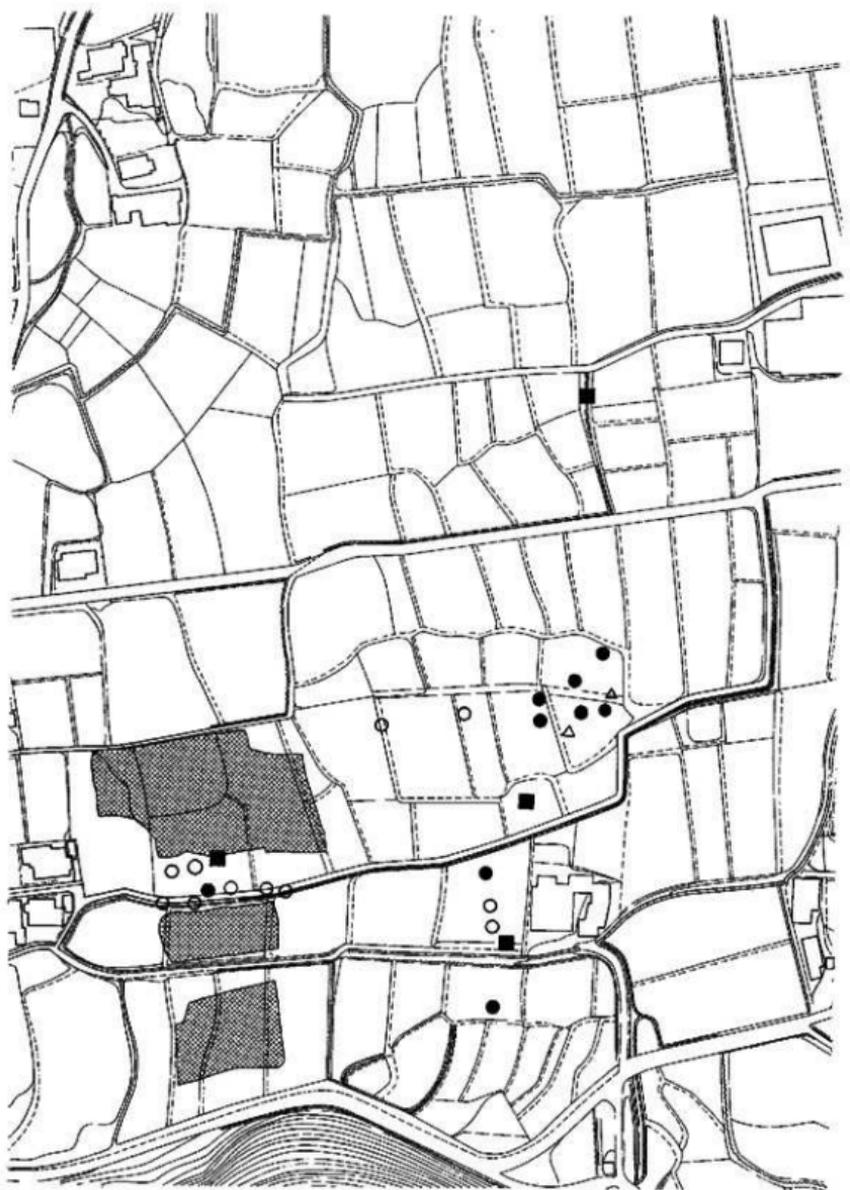
土製品は18点が出土している。1が古墳時代前期で、他は古墳時代後期のものである(11・14は不明)。1～11(21・13・52・5・15・62・44・16・15・15住、溝4)はミニチュア土器である。1は台付き壺の脚部であるが、小形のS字口縁の台付き壺の可能性もある。2以降は、一般的なもので輪積みと手捏ねの2つの整形方法が見られる。12～17(5又は7住、溝4、15・3・15・10住)は断面台形の紡錘車で、古墳時代には一般的なものである。18(4住)は棒状の土製品で、用途不明のものである。



第136図 石製品



第137圖 土製品



△ 縄文時代 ● 古墳時代前期 ○ 古墳時代後期 ■ 平安時代

0 50 100m

第138図 調査地周辺の地形と遺物出土地点

第4章 調査地周辺出土の遺物

当遺跡は今回の発掘調査地周辺にも広範に広がっており、工事の際に各種の遺物が多数出土している。ここではそれらの分布・時期的特徴の概略を示し、個々の遺物についても図化・提示できるものは紹介したい。

1. 出土の概略

第138図に示す一帯から出土している。ほとんどが土器で、石器・土製品がわずかに伴う。時期的には縄文時代から中世までの各時期のものが見られるが、中心は古墳時代のものである。時期についてもう少し詳しく見ると、次のようになる。

縄文時代：中期初頭・中葉・後葉・終末の土器片（深鉢）、打製石斧片、黒曜石

弥生時代：中期後半の土器片（甗）

古墳時代：前～中期の土器片（高坏・器台・甗・台付甗・甗）

後期の土器片（坏・高坏・甗・壺・把手付壺・須恵器坏・同蓋・阿高坏・同甗）

奈良時代：土器片（甗・須恵器坏・同蓋）

平安時代：土器・陶器片（坏・壺・甗・灰釉陶器碗・同段皿・同折縁皿・同瓶）

分布については、地点によっては主体となる時期に違いがみえる。第138図中に時期ごとに異なる記号で地点をおとしたが、一見して、東部に古墳時代前期のものが多く、西に同後期のものが多いことがわかる。縄文時代はA地点から中期中葉の土器片が4点と黒曜石がまとまって出土したが、ここはかなり深掘りをしたところで、現地表下1.5m以下からのものである。奈良・平安時代のものは、古墳時代にくらべて量が少なく、東西双方から出土がある。

上記の概要からみると当遺跡は東および北東に広がっていることが容易に推定される。時期的な遺構の集中は、発掘調査区域内では奈良・平安時代がそれぞれ西と北に偏り、古墳時代後期が全面に、また古墳時代前期はその間に点在という状態だったが、東・北東に行くに従い古墳時代前期の遺構が増えていくことが予想される。さらに、発掘調査では発見できなかった古墳時代中期、あるいは前期でもさきわめて中期に近い時期の遺物が、この北東方向から出土していることも重要で、古墳時代前期から後期まで遺構集中の核をずらしながら、間断なく続く遺跡である可能性も浮び上がる。縄文時代のものについては、前述の通りかなり下層からまとまって出土した事実は、今回の古墳時代遺構の検出面の1m以上下層に縄文時代中期の遺物包含層や生活面があることを示唆する。逢初川や二・三の河川の集まる低地で洪水に悩まされやすい地勢であるのに、原始から居住地に選ばれてきた理由は、むしろその川の水辺であるが故であろうか。

2. 図化・提示遺物について

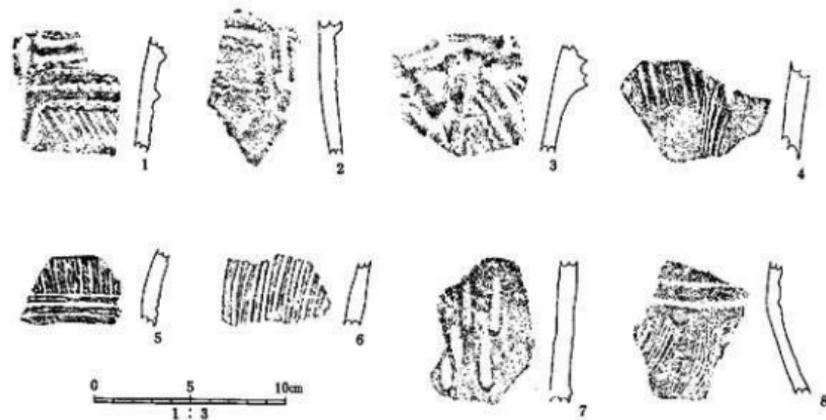
土器・陶器類のみ47点が提示できた。8点が拓影、37点が実測図である。

縄文土器は第139図1～7の拓影で示す。いずれも中期に属し、1は中期初頭の深鉢型土器の口縁部直下の文様帯、2～5は中期中葉のやはり深鉢型土器の胴部文様、6は中期後葉の同型土器の胴部下半の平行沈線、7は中期末葉の同型土器の胴部文様でかなり退変化したもの、である。2～5は第138図のA地点の下層からまとまって出土したもの。他は各所から単独で出土した。

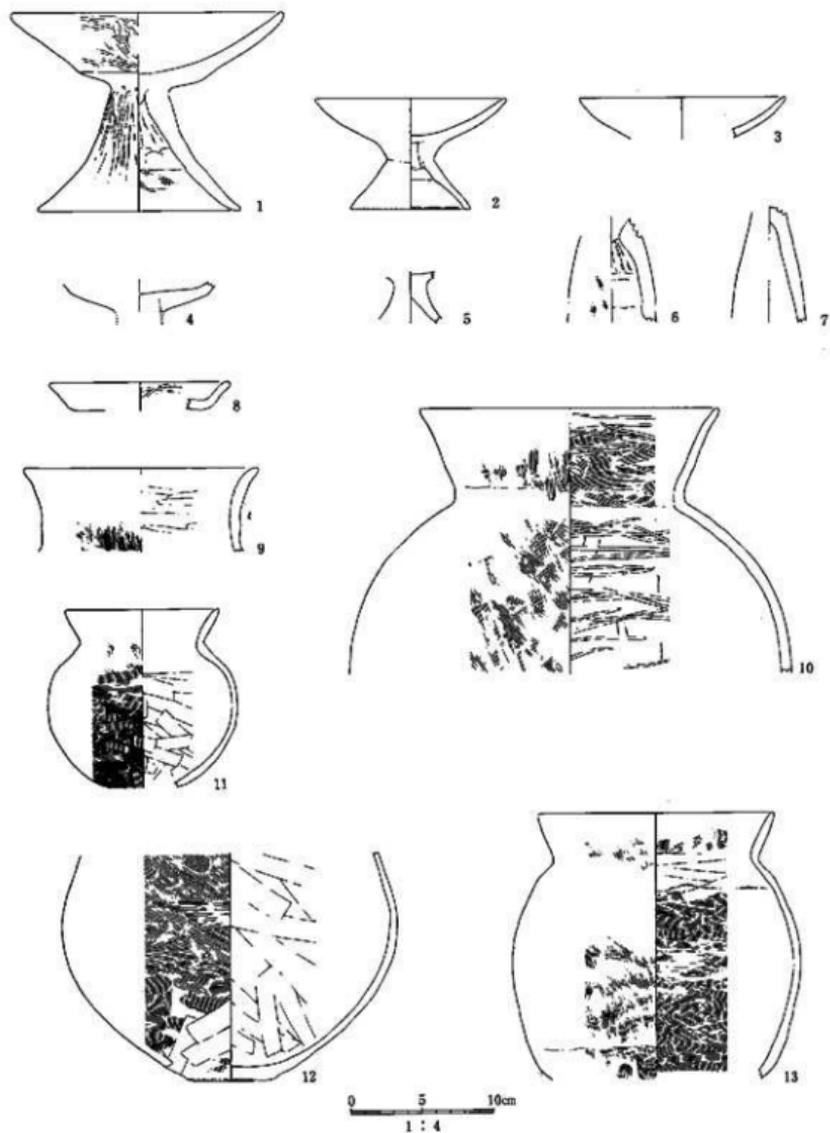
弥生土器は第139図8の壺の胴部上半の拓影1点のみ。標描によって懸垂横帯文状の文様が描かれ、中期後半に属するものと考えられる。

古墳時代前期の土器は第140～141図1～17が該当する。1～7は高坏で、いずれも東部・北東部からの出土。1は完形に近い逸品である。6・7の脚部は、脚上半と下半が別個に成形された後に接合される、四段成形の高坏の形態の特徴を備えており、古墳時代前期ではなく中期に比定される。出土地点も同一で、その周辺に同期の遺構の存在が予想できる。8～10・17は壺だが、口縁部形態がそれぞれ異なっている。東部出土。11～14は大小の甕で、やはり東部出土。14は若干疑問はあるが台付甕の口縁部と推定する。15・16はかわった形の小形甕で、あるいは後期のものかもしれない。15は東部、16は西部の出土。古墳時代後期の土器は第141・142図18～27が該当する。20・21・25が東部出土の他は西部からのものである。須恵器が3点混じる。土師器は、20・21が高坏、18が壺、24が頸部のくびれない壺、26が甕、25が甔、27が把手付壺、須恵器は19が「かえり」の蓋（蓋B）、22が壺類の底部と推定されるもの、23が壺ないしは瓶類の口縁部である。21の高坏のわずかに残る坏部内面には黒色処理が残る。24は第4号住居址の出土品にもあった珍しい器形で、二次焼成を受けていない点、外面の調整が壺に近い点などから壺として扱った。

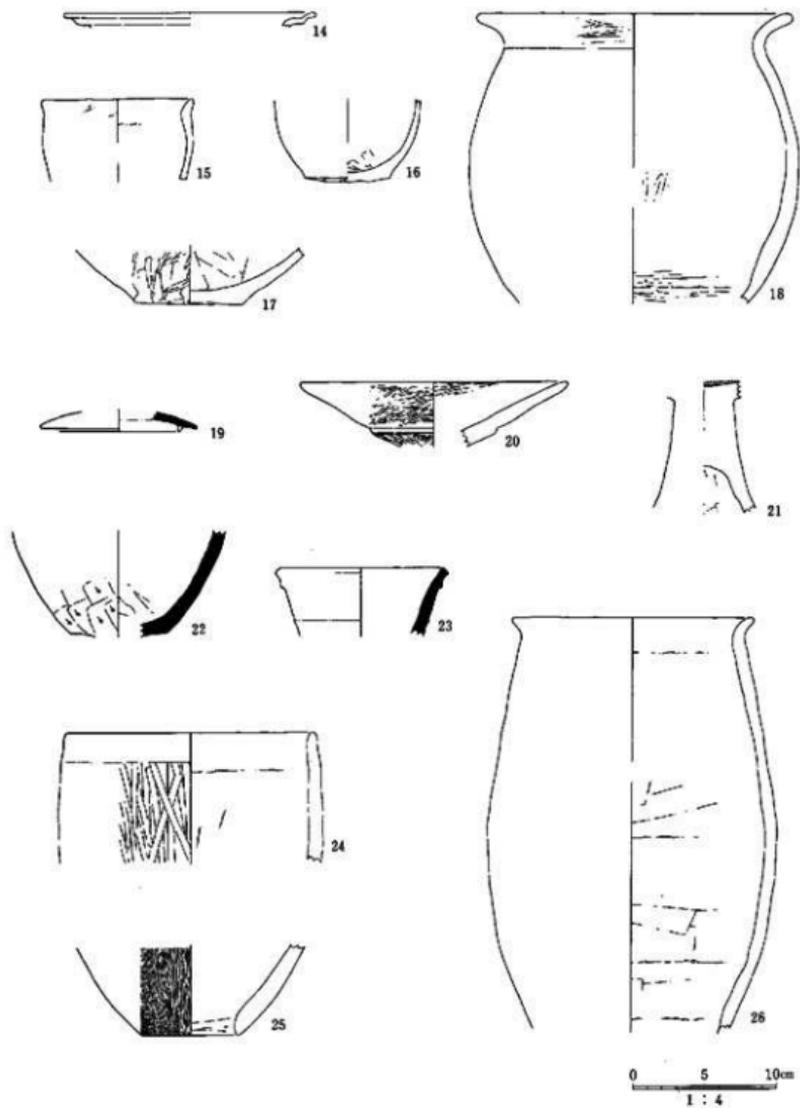
28～31は須恵器の坏と蓋で奈良時代に属するとみる。28とおそらく30も有台の坏で、31はその蓋、29は底面ヘラケズリの坏である。いずれも西部出土。32・33は灰釉陶器の段皿と折縁皿、35・36は



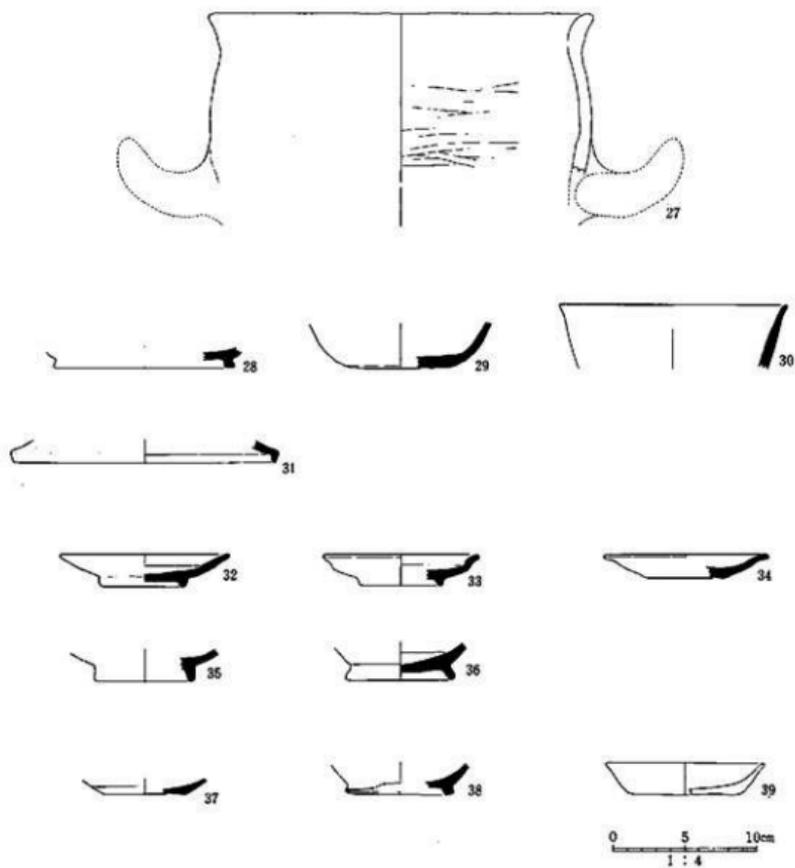
第139図 調査地周辺出土の遺物 (1) 縄文・弥生土器



第140図 調査地周辺出土の遺物 (2)



第141図 調査地周辺出土の遺物 (3)



第142図 調査地周辺出土の遺物 (4)

同じく灰釉陶器の碗である。平安時代に属する。34は須恵器製の皿で非常に珍しい器種といえる。皿である以上、平安時代のものとしなければなるまい。34を除き東部出土。

37・38は近世陶器。39は土師質土器の坏。37が西部、38・39が東部の出土だが、上層耕作土付近からのものであろう。

第5章 調査のまとめ

第1節 遺構について

1 古墳時代前期の遺跡と住居

松本市内での古墳時代前期（一部、弥生時代後期終末を含む）の遺跡の分布や住居址の発見例は、今のところあまり多くない。これはいままでの調査が奈良井川の西部地区にもっぱら集中していたためでもあるが、全般的に見て古墳時代の遺跡が少ないことも事実である。以下に、松本市内の該期住居址の発見例を示す。

遺跡名	立地	遺構
宮瀬本村	奈良井川右岸	住居址1
泉町	薄川扇状地扇端中央	住居址4
出川南A	田川左岸微高地	住居址1
出川	田川左岸微高地	住居址1
三の宮	奈良井川左岸段丘	住居址11
向畑	東山麓台地	住居址67、土壇
石行	東山麓台地	住居址9、土壇
白神場	東山麓台地	住居址3、土壇
千鹿頭北	薄川扇状地扇端南部	住居址7、流路

このように、出川水系、薄川水系、および東山麓に多く、全般的に松本市の東半部が中心となっている。これは弘法山古墳、中山36号墳という前期古墳の立地が、田川、薄川両水系の合するところの東山麓にあることと対応関係があるろう。

住居址の全形が完全に捉えられたのは、今回の調査では第50号住居址1棟のみであったので、ここではそれを中心に見ていくが、他例を併せると、その概略がおおむね浮かび上がる。平面形は、やや隅丸の正方形が僅かに長方形。三の宮、泉町、向畑の古い方などの例から見ると、弥生時代に近いものほど長方形のようだ。住居の各コーナーから約1m位の等距離に方形配列の柱穴があり、直径は20cm前後と小さいが、30～40cmと深い。これは各例ともかなり共通し、本例の他に向畑40・45号、石行6・8・14号に好事例が見られる。位置はほとんど変わらないが、大きいものになると直径50cmを超える柱穴をもつ古墳時代後期の住居と、好対称を見せる。炉址は住居中央部よりやや奥

の、柱穴間にある。床面を若干窪ませた地床炉で、入口側（ここでは西側）に炉礎石（枕石）が置かれている。炉の位置については他例もほとんど変わらないが、形態は、埋壁を持つもの（向畑37・45号、三の宮15・19号、県町9・14号）、簡単な石囲いのあるもの（三の宮17・19号）、単なる地床炉（多数）、など各種がある。古い時期の住居ほど、埋壁炉が多いと考える。住居の掘り込み（壁高）は、本遺跡でくらべるかぎり、比較的浅い。本遺跡ではこの時期のほか、同後期、奈良、平安の各時代遺構を同一面で検出したため、奈良・平安時代の遺構は前段で削り込みすぎていて浅くなっていることは十分納得できるが、最も掘り込みのしっかりした深いものは古墳後期のもので、前期はかなり貧弱な、同列に考えると合点が行かないものであった。これは調査時に削り込んでしまった分を差し引いても、古墳時代前期の住居はあまり深くないものであったことを意味する。後期との間に、住居構築方法の変化があったのであろうか。

集落という観点では、この時期の7棟は第40号住居址を除いて、東西軸が皆やや南東—北西に振っており、主軸をそろえている。配置も重複することなく点在し、同時に存在していた可能性がある。第40号住居址は規模が小さく、平面形もかなり長方形で、調査時の床が軟弱でしっかりしていなかったという所見と併せ見ると、住居としての扱いは適切ではないかもしれない。重複する同期の流路に伴うものであって、6棟の住居とその南を画する流路、という構図の方が本調査範囲での古墳時代前期の集落の様相に近いであろう。

2 古墳時代後期の住居

今回発見された住居址のうち全形がわかるものおよび欠損部分が推定できるものについて、床面積を規模毎にまとめたのが次の第10表である。40㎡を超える大きなものから、10㎡に満たない小規模なものまでであるが、全体的に古墳時代の住居の方が大きいことがわかる。

古墳時代後期の住居は20～25㎡、一辺が4.5～5 m位のものを中心として、各段階に標準的な分布を示す。最大は第47号住居址で推定復元40.3㎡、次いで第20号住居址が39.4㎡となるが、これでも同時期の他遺跡の大形住居址と比べるととりわけ大きいわけでもない。最小は第64号住居址の5.6㎡、次が第39号住居址の8.6㎡であるが、第64号はほとんど削平されてしまっていてカマドなどの施設もよくわからなかったのに対し、第39号は残存状態が良かったので、最小規模の該期住居址の代表としては第39号の方がふさわしい。

住居址の深さでは、古墳時代後期の住居の最深は第13号と第14号の70cmで、次いで第7号、第61号の50cm代となる。この他にも同期の住居は比較的深めで40cmを超えるものが40棟中17棟もあり、平均は31.8cmを示す。これは各時期の住居址の中で最も深い数値で、ちなみに古墳時代前期17.4cm、奈良時代は28.3cm、平安時代は24.3cmを測り、最も古い古墳時代前期のものが最も浅いという現象が読み取れる。古墳時代前期以降、生活面が下がったという考えはおよそ不可能で、住居構築の変化の可能性を指摘したい。

住居内の柱穴が最もしっかり把握できるのが古墳時代後期である。古墳時代前期の柱穴のあり方

については前項で触れたが、後期になると掘り方の規模がずっと大きくなる。同期の住居址で柱穴の4本配列がきれいに捉えられたのは、第2・3・4・6・8・10・14・15・16・17・19・20・32・33・38号の各住居址であり、特に第16・20号住居址のものは直径60cm以上あり柱痕らしき土層がみ

第10表 住居址の床面積段階別一覧

床面積(㎡)	該当する住居址 No			
	古墳前期	古墳後期	奈良	平安
5.1~10.0		39,64	18,49,55,59	31,46,63
10.1~15.0		22,36,58,62	35,42,43,56	66
15.1~20.0		6,13,32,65		25,26
20.1~25.0	21,50,53,54	2,4,5,7,8,10,14,19,23,41		
25.1~30.0		3,12,33,44		
30.1~35.0		15,16		
35.1~40.0		17,20,38		
40.1~		47		

られた。この土層からすると、柱穴は大きい柱自体が同じ様に大きいものではない。柱穴の配列は4本のほぼ方形で、住居の各コーナーから等間隔の位置にある。ただしその間隔も住居によって異なり、例えば第4・15号住居址のようにかなり内側にあるものもたいして、第14・38号住居址等は住居コーナーにずっと近づいている。この現象は単なる時期差では傾向を読み取れない。

カマドは後期の住居址は基本的に石芯粘土カマドであったが、粘土といっても良質なものを使っているわけでもなく、崩れて住居址覆土と接すると判別はきわめて困難であった。カマドの位置は西壁が多くまれに東と北がある。カマドが検出できた27棟の同期住居址のうち、西が18棟(67%)、東が6棟(22%)、北が3棟(11%)という比率であった。奈良時代の住居のようにカマド全体が壁外に張り出す(例えば第18・49・55号住居址)ことはなく、カマドをもつ壁もほぼ直線になる。煙道は大抵のカマドには付随し、長いものでは1mを超える。特に大形の住居は煙道も長い。

第2節 土器について

1 古墳時代前期の土器

該期の7棟の住居址、流路址、その周辺検出面、およびその付近の後代の遺構内から出土している。量は古墳時代後期の土器にくらべて少なく、特に該期の遺構内からまとまったかたちでの出土が乏しい。図示できたのは120個体である。ただし全形がわかるものは数える程しかない。

種類は、壺・甕・台付甕・高坏・器台・小型丸底・鉢などで、土器の外形の各部分に着目すると、このなかでさらに細かい器種・器形に分れるものがある。壺は口縁部の形から、有段口縁・折り返し口縁のもの、外反する口縁のもの、直口縁のもの、の3ないし4形態に分類できる。甕は全形を知るものがなく、口縁部だけでは「く」の字状に屈曲・外反するものといゆるS字状口縁台付甕の区別くらいしかできない。台付甕も同様で、口縁部では甕と区別がつかない。ただ脚部には先のS字状口縁台付甕とそうでない台付甕の見分けのつくものもある。高坏は全形を知り得るものがなく、詳しくわからないが、坏部に稜をもつものと持たないもの、脚部がやや反りながら外開するものと下半以下で急激に大きく外反して開くもの、などの形態差がある。後者の脚部は小型高坏になろう。器台は器受部に稜をもちそこからさらに大きく外反するものと、立ち上がり気味にやや小さく外反するものがあり、前者の脚部は外反しながら下方に開くのになし、後者はほぼ直線的に開いて端部近くで僅かに外反する。小型丸底土器は浅いもの、やや深いものなどいくつかがある。鉢は小型丸底土器のように体部から「く」の字に屈曲して口縁部が開くものと、平らな底部から直線的あるいは僅かに内湾気味で体部が開きそのまま口縁端部に至るもの、の2者が見られる。

文様が施されている土器が少数ある。118は口縁が単純に外反する形態と推定される壺の胴部だが、頸部から肩部にかけて縦方向の櫛描文が刻まれている。北信の弥生時代後期の箱清水式土器あるいは次の御厨敷式に連るT字文に類似するものと推定する。67は118と同様な外形の壺と考えられるが、頸部直下に櫛描の兼状文とその下に振幅の大きい波状文を巡らせている。南信の前代の中島式土器に通ずる要素とみたい。とすると口縁は大きく外反した後内側に「く」の字形に立ち上がるものが付くのであろうか。117は折り返し口縁で内外が赤色塗彩される壺で、口縁端部外面に広い平坦面をもち、4単位で棒状浮文の貼付けがある。他の壺類とは明らかに異質な土器で、東海地方の影響を窺わせる。

2 古墳時代後期の土器

今回出土の土器の主体を占め、量も多く、様々な器種・器形が見られる。ここでは器種・器形の分類を行い、特徴的な器種について集成して、さらに理解を深めてみたい。そのためには、先学の業績を参考にしていきたいが、長野県内でいくつかある古墳時代後期の土器が多量に出土し、器種・器形分類がなされ、あるいは編年作業が行われている発掘報告書、またはそれに類する論文も、松

本平か近隣でのものとなると限られてくる。ここでは諏訪市金鉢場遺跡(坂野1975)、大町市借馬遺跡(島田1982)、長野県史考古編(笹沢1988)の分類等を中心に引いていきたい。

(1) 分類

焼物の種別には土師器と須恵器があるが、須恵器はごく少数なので、須恵器を指す場合にのみ器種・器形に「須恵器」を冠し、何も無い場合は土師器を指すものとする。

大きく分けて、食膳用具に、坏・高坏・鉢・小形壺、須恵器蓋坏・同坏・同蓋・同高坏・同盤・同碗、煮炊き用具に、壺・小形壺・甗、貯蔵用具に、壺・把手付壺、須恵器甕・同把手付甕・同壺・同瓶類、などの器種が見られる。貯蔵用具とした壺・把手付壺は形態からみて煮炊き用具と考えられないこともないが、観察される土器製作技法や器面にあまり被熱の痕がない点からそう判断した。

(2) 特徴的な器種

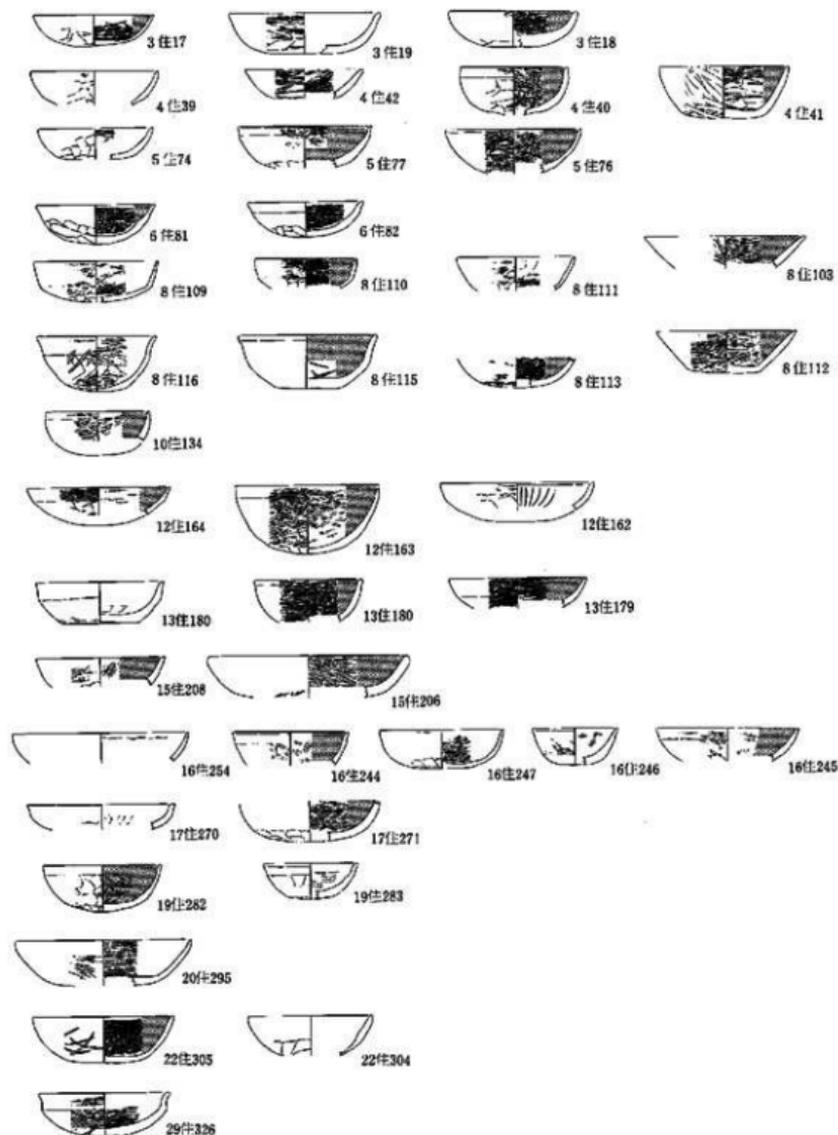
坏、甕、壺、把手付壺、須恵器蓋坏、同蓋、について取り上げ、ものによっては細分を試みる。ただし、この時期の土器が厳密に同器種の間で器形の分化をしているかどうかは不明で、坏などはむしろいくつかの祖形から型式変化を遂げた末期的な様相を呈していて、中間的な外形のものもあり、多分に感覚的な細分となっていることは否めない。とはいえ、以後の操作の上で欠くことのできない作業でもあるので、仮説の検証という側面を残していることを忘れずに進めたい。

①坏 坏と比べて、口径にたいして器高が高いものを鉢として分離したが、厳密な根拠はない。

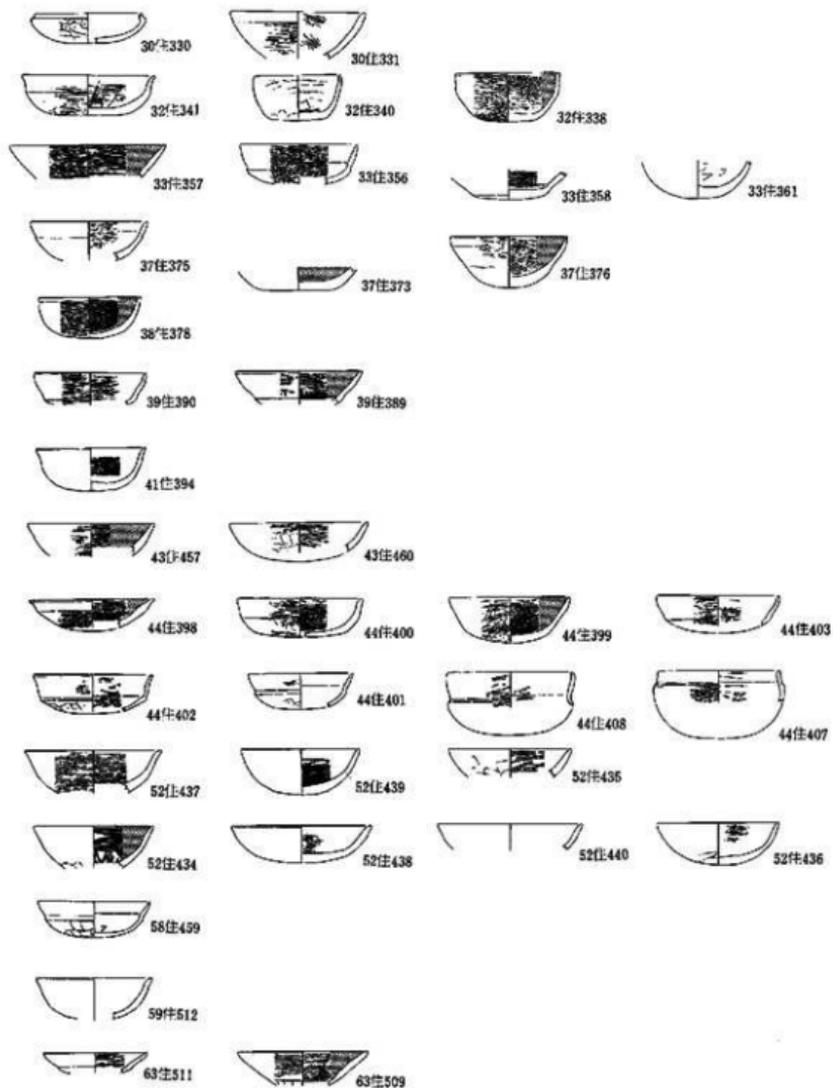
第143・144図に住居址出土の坏類を出土住居址ごとに集成した。これを見ると、坏のなかにもいくつかの器形があることがわかる。体部に稜(あるいは段)のあるものと無いもので大別されるが、例えば稜のないもののなかにも、体部が内湾しながら開き丸底のもの、同じく平底のもの、体部直線的に開くものなど多様性がある。製作手法等にふれずに、土器の外形の特徴で分類すると次の表のようになる。

第11表 古墳時代後期坏器形分類表

器形	特徴の説明	該当する個体
A	丸底。体部内湾しながらそのまま口縁部に至る。厚手。	76-134-436-439
B	丸底。Aに似るがより深めで、口縁部が僅かに反る。厚手。	40-180-282-378-394
C ₁	平底。体部が直線的に立ち上がり、全形が逆台形を呈す。やや厚手。	41-246-340
C ₂	C ₁ に似るが、体部の中位に単純な稜をもつ。やや厚手。	338
D	平底ないし平底気味。体部は内湾しながら開き口縁に至る。浅い。厚手。	18-206-438
D ₁	D ₂ と同じだが、薄手。	17-74-247-305
E	平底気味。全形はDに似るが、口縁部内側に凹を有する。やや厚手。	162-270
F	有稜坏。体部は深めで、稜より上は内湾。薄手。	407-408
G	有稜坏。浅い体部で、稜より上は内湾気味に外開。薄手。	109-110-356-390-401-403-459
G ₁	有稜坏。G ₁ に似るが、稜より上は外反。薄手。	402
H	有稜坏。体部は浅く、稜で著しく内部へ屈曲し、短い口縁が立ち上がる。薄手。	330
I ₁	有稜坏。丸底。体部は深めで、稜の位置は高く、稜より上は内湾気味に外開。薄手。	375
I ₂	丸底。I ₁ と同じだが、稜から上が外反。薄手。	116
J	丸底。浅い。体部中位に稜があり、その上は外反。厚手。	326-341
K	しっかりした平底。体部中位に単純な稜があり、その上は外反。厚手。	115-180
L ₁	平底気味。体部直線的に大きく外開。体部下位付近に稜。厚手。	307-358-389
L ₂	平底。体部直線的に大きく外開。L ₁ の稜がないもの。厚手。	103-112
M	丸底。浅い。大きく開く体部のかなり上位に稜があり、その上は外反。厚手。	82-164-398



第143图 土器钵坏集成 (1)



第144图 土師器坏集成 (2)

この表の分類の限界を連ねると、先述のとおり1)製作手法にはまったく言及できていないこと、2)対象とした坏の絶対数(標本数)が統計的な処理に耐えられない程度なので、単なるイレギュラー(偶発的・無意図的な外形の変化)をも一つの器形として扱っている可能性があること、3)各器形の系譜を考慮したものではないこと²⁶、などである。

各器形、器形間でいくつか注目すべき、または問題とすべき点がある。まず第一に、器形によって器厚の差が厳然とあるということ。これは製作上の手法の問題にまで掘り下げなければならないことであろうが、坏F・G・II・I₁は他に比べてかなり薄手で、作りも丁寧な観がある。若干感じは異なるが、坏D₁も薄い。坏Kを除き、たいていの器形は精粗の差こそあれ、体部外面下半・底面にヘラケズリの跡が窺えるのだが、これだけ歴然とした違いがあるのは、前4者の坏と他とは基本的異なるものであるといえよう。先学によれば、これらは復原器の蓋坏を模倣したもの、あるいはその変化したものと位置付けられている(笹沢 1988)。

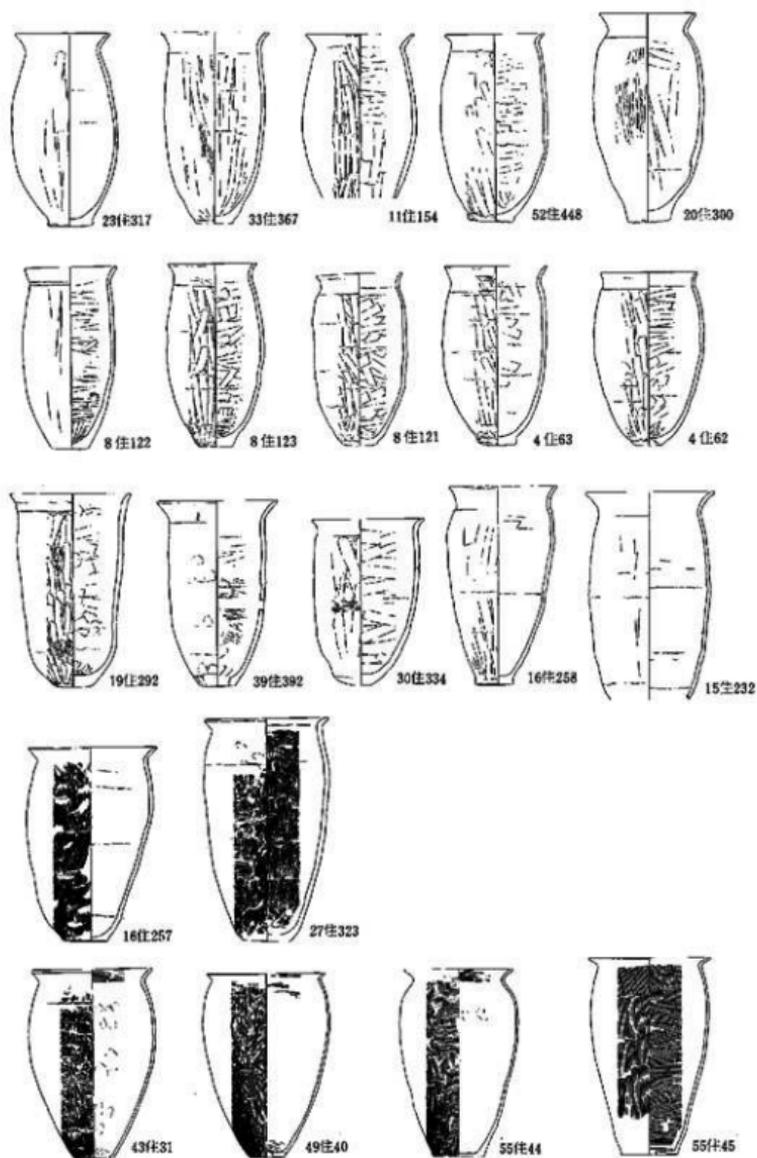
第二に、各器形間で類縁的なものがあり、それらの識別ということである。よく似た外形を呈するものは、例えば「C₁、C₂」のように分類したが、このように扱わなかったものなかにも他の器形と通じるところがある。その逆で、見似ているため、類縁的に扱ったが、実はそうではないというものもあるかもしれない。まず前者の例。坏Aが同口径を保って浅くなれば、必然的に平底気味になり、坏D₁と等しくなる。とすると、坏Aと坏D₁の違いは型式組列上の時間差であり、両者に別の器形名を冠してはいけなかったのかどうか。他にも、坏D₁の口縁部のヨコナデの稜の強いものと坏Mの類似が挙げられる。今の段階での結論は出せないが、この類似については坏C類や坏D₁、坏I₂のような中間的な器形が問題なのであって、坏Aや坏Mはそれぞれしかりとした系譜をもって存在してきたものと推測する。後者については、坏D₁と坏D₂、坏L₁と坏L₂が該当する。

第三は坏Eのごとく、これは他の坏にはない特徴を持ち器面の感じも焼成も異なっている。特に162の内面には細かい放射状の暗文が見え、畿内地方の飛鳥時代の坏に類例を求めたいものである。

②壺

ここで言う壺とは胴が長い、長胴壺あるいは烏帽子壺と呼ばれるものである。大形の煮炊き用具なので、従来調査においては破片での出土がほとんどで全形を捉えることが難しかったが、今回は一括して出土したものが多く、10数点が復元できた(第145図)。

製作手法から見ると、基本の成形は粘土紐巻き上げによるが、胴部の器面調整がヘラ状工具あるいは板状工具によるナデでなされる個体(第145図の上3段)と、ハケメによるもの(同図257・323)の2種類がある。特に前者は実測や記述にあたってその調整の表現に困るもので、同一個体でも部分によりケズリ状になっているところやミガキのように光沢を帯びるところがあり、しかもかなり雑で、この調整が及ばずに指頭疔痕や指ナデのみの箇所も見られる。先述の工具により器面の乾燥段階を無視して行われる結果と基本的には理解し、「工具によるナデ(または工具ナデ)」と呼称しておく。胴部調整の方向は、外面は工具によるナデもハケメも縦か縦に近い斜めで、内面はほとん



第145圖 土師器彙集成

どが横だが、まれに縦のものが見られる(第145図300・367)。口縁部は共通して強いヨコナデが施され、中にはヨコナデによってできた稜をもつものすらあり、口縁部の外反はこのヨコナデによって形成されると考える。とにかく成形・調整とも雑で・外形が歪み左右の対称が著しく崩れるものもある。底面には木葉圧痕を残すものが多い。

外形は、胴部の張りや最大径の位置、頸部のくびれ、底部の突出などで違いが特徴づけられる。これらの違いと、先の器面調整の差を組み合わせると以下の様に器形の分類を試みたいが、底部の突出については、相似の外形をとりながら底部のみ突出するものとそうでないものがあつたりするので、考慮に含めない。

Aa: 工具によるナデで器面調整されるもので、外形は、頸部にくびれ・胴部に張りをもつもの。

そのなかでも、頸部のくびれと胴部中央の張りがしっかりしているものをAa₁、胴部中央が張るあまり明瞭ではないものをAa₂、胴部最大径がかなり上方にあり、そこから下はあまり張らずに底部へ向かって集約していくものをAa₃と細分する。

Ab: 工具によるナデで器面調整されるもので、外形は、頸部のくびれも胴部の張りもない、下方に向かって徐々に細くなっていくもの。そのなかでも、丸底気味で口縁頸部が短いものをAb₁、平底で口縁頸部がやや長く外開するものをAb₂と細分する。

Ac: ハケメが器面調整に用いられるもの。

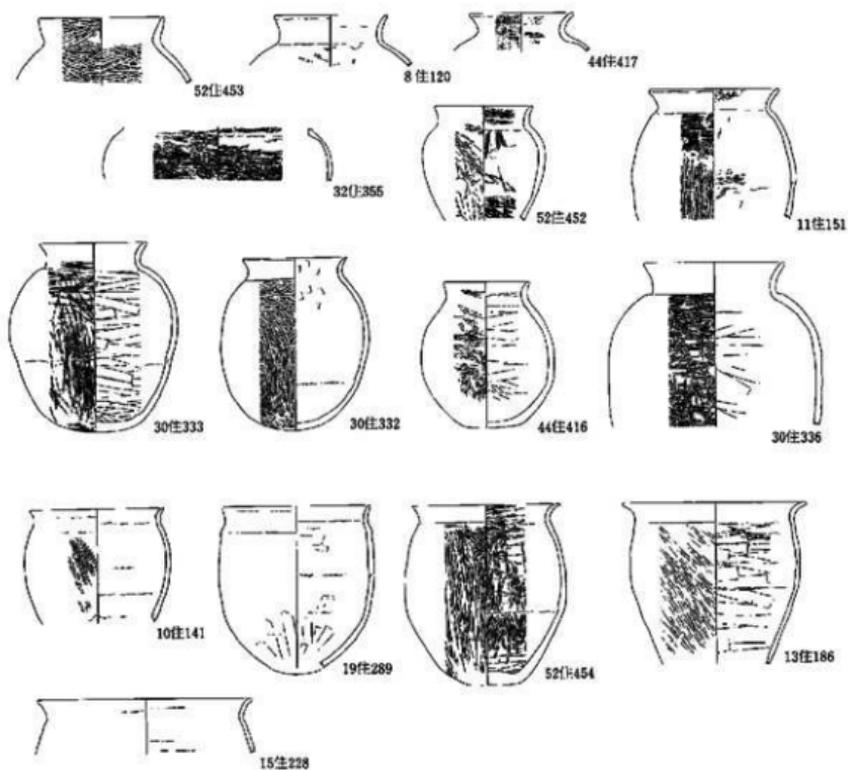
第145図では、壺Aaは上2段、壺Abに292・334・392、壺Acに257・323が属する。

壺Aa～Acの3器形のなかに時間差を見出すことができるであろうか。次代の奈良時代から平安時代の前半にかけての壺は、すべて外面が縦のハケメで間隙なく調整されるもののみとなり、外形も胴部最大径がかなり上位に上がって器高も高くなる。即ち、ハケメ・長胴化・胴部最大径の上昇、の3点が壺の型式発展の方向と考えられる。これをその前代にあたる当遺跡の例に当てはめると、壺Aaよりは壺Acのほうが新しく、壺Aaのなかでも壺Aa₁より壺Aa₃が新しい要素をもつと言う結論が得られる。ただし奈良時代の壺は、器壁が非常に薄いのも大きな特徴(例えば第145図40・44)で、それもひとつの型式発展の要素と見るなら問題はないが、その時期にまったく新しい種類の壺が登場した結果と理解するなら、先の結論は瓦解してしまう。この点については、ここでは結論を保留し、他の操作の結果と照合して検証してみたい。

③壺

胴が張り、器高に対して胴の最大径の比率が高いもの。「壺」の名称は、同様の外形・製作手法をもつ土器を「壺」としてまとめた、諏訪市金鐘場遺跡(坂野 1975)にならった。壺にくらべて出土数は少ない。第146図に外形の概略がわかるものを集成した。

製作手法上の特徴は、ほとんどの個体が器面、特に外面に、工具によるナデ、板ナデ、まれにハケメの後、ミガキを施している点で、それが無いものでも壺とは異なり平滑化が丁寧に行われている。内面は板ナデ、指ナデまでのものが多いが、一部にミガキを持つものもある。口縁頸部は一様



第146圖 土師器壺集成

に段ができるほど強くヨコナデが行われ、屈曲・外反が形成されている。また、器内がかなり厚い。

外形の特徴は、頸部が強くくびれるものとそうではないものの2者があり、その違いはかなり自然としている点である。前者を、壺A、後者を、壺B、と分類する。壺Aは頸部のくびれが強い分、胴部の張りが大きく見え、壺Bはその逆となる。底部まで残っている個体が少ないのであまり明らかではないが、壺Aは丸底または小さい平底気味となり、壺Bは平底と丸底の2種類があるようだ。また壺Bは、典型的なもの(第146図454)、より胴部の張りが少なく最大径が口縁端部にくるもの(第146図186)、前述のように丸底になり、口縁部の外反が弱いもの(第146図289)、に細分が可能で、それぞれB₁、B₂、B₃とする。壺B₁と壺B₂は同一型式上の前後関係(B₁→B₂)にすぎない可能性がある。

④把手付壺

第147図にまとめた一群である。前項の壺B₁やB₂に一对の把手を付けた外形を呈す。「把手付壺」の名称および「壺」としての位置付けは原明芳氏の論考(原 1983)を全般的に受け入れたものである。

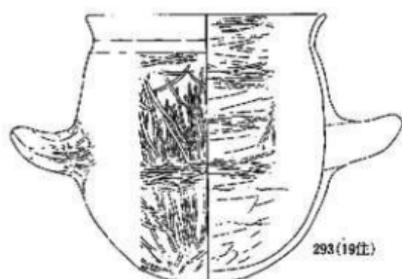
珍しい器種である。全形がわかるものが2点、把手部付近が図化できたもの1点があり、口縁部や胴部上半しか残っておらず壺として扱ったものにもこの把手付壺が混じっているかもしれない。従来、古墳時代後期の土器の中でこの種の把手が付くのは大形の甔であるとされ、事実、他の遺跡ではそのとおりで、今回のようなものはまったく見られない。ところが今回の調査では、逆に大形の甔自体はごく断片的にあっただけで、把手が付いた形で復元できたものは皆無である。その点で第147図415の口縁と底部一帯を欠く個体も、胴部の湾曲度合いを併せ見てやはり甔ではないと推定するのである。ただしこの個体には他の把手付壺と異なり、内外面や把手の表面にまでハケメが残っている。この1点を除けば、図示できなかった破片も併せて、製作手法や外形の特徴は、前項の壺Bと基本的にまったく同一である。把手の付し方は、器表面に貼り付けるのではなく、把手と同径くらいの穴を横腹に開け、予め作ってあった把手を差し込んで内側はナデで平滑化し、外側は粘土を足して土嚢と把手の間を埋めてつないでいる。

長野県内での類例は、各地の報告を丹念にあたっている時間がないので見落としがあると思うが、今のところ長野市塩崎遺跡群と同市田中沖遺跡で合せて4例を知るにすぎない。本例に非常によく似るが、把手がやや短いことと、底部がしっかりとした平底で中央があげ底となっている点が異なる。報告者の矢口忠良氏は埴(なべ)あるいは甔と扱い、把手付甔形土器の範疇に入ると考えている(矢口 1980)。

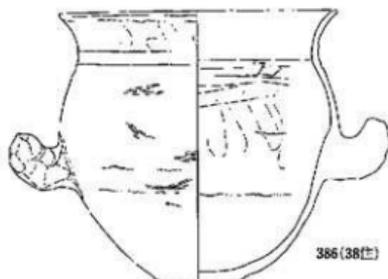
第147図223の須恵器把手付甔は参考例として示した。これも当地方では非常に珍しい器種であるが、把手付壺との類縁性・系譜性は今のところ一切不明である。

⑤須恵器坏

須恵器坏と呼称しているものには3つの器種がある。一つは、いわゆる蓋坏と呼ばれるもので、



293(19件)



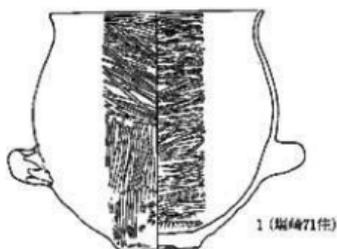
386(38件)



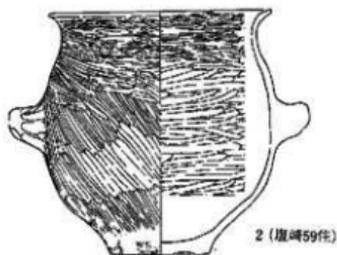
415(44件)



223(15件)



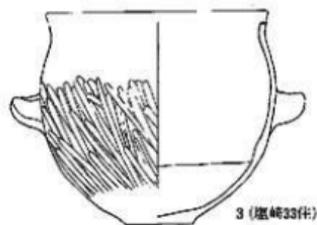
1 (坂崎71件)



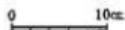
2 (坂崎59件)



4 (田中沖23件)



3 (坂崎33件)



第147圖 土師器把手付壺集成

体部に蓋受けの段を有し底面は台のない丸底、もう一つは台のない平底あるいは丸底気味の底部から体部が外開するもの、最後のものは高台の付いた箱形・逆台形を呈す。それぞれ、須恵器環A、同環B、同環C、と呼称し、須恵器環Bについてはさらに丸底気味のものを須恵器環B₁、平底のものと同B₂、と細分する。

環Aには25・79・80・405・406・423、環Bには22・91・131・132・133、環Cには202・241などが該当する。

古墳時代後期の須恵器の出土量はいたって少ないが、そのなかでも須恵器環Aは少なく、図化提示できたものは住居址出土が7点、その他を合わせても10点にすぎない。いずれも立ち上がり部が短くしかもかなり内傾して、この器種の終末期に近い様相を呈している。

須恵器環Bはある程度の量はあるが、土師器の環類に比べると少ない。しかも、須恵器環B₁は後述する須恵器蓋Aと判別しかねるものがあるがいくつもあり、蓋として図化・提示してしまったものもある。製作手法上の特徴は、底面が観察できるものすべてにヘラ切り痕や回転ヘラケズリ痕を残し、さらにそこを指や工具でナデたもの、ハケメを施したものなどが見られる。この須恵器環B類は生産地の調査から同環Aよりも新しいものであることがわかっており、当遺跡でも土器群の相対的な時期差を測るのに利用できる。同環B₁とB₂の差については、同環B₁に、先述のように同環Aと組み合するとされる同蓋Aとあまり区別がつかないものもある点からみて、同環B₁のほうが古い要素をもつものと考えたい。

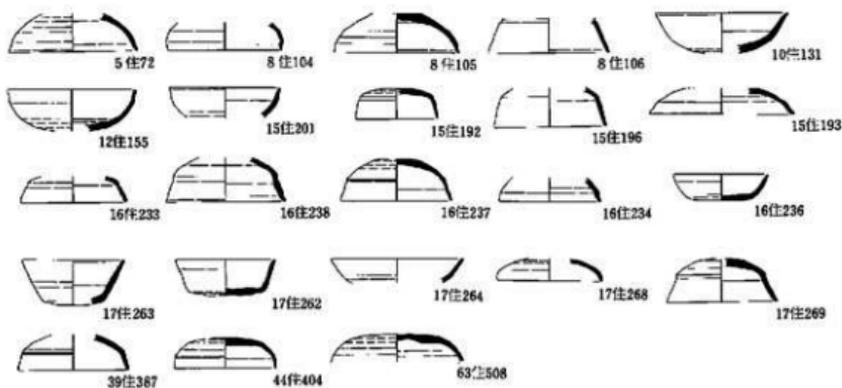
須恵器環Cは3点を図化・提示できただけの、非常に数少ない器種である。しかもその3点とも全形を知り得ず、特徴的な部分から同定したにすぎない。この器種は基本的に後代の奈良時代の後半から平安時代初期にかけて盛行するもので、今回捉えた個体は当地方における初期的な古いもののうちに含まれるのであろう。個々に見ると、第15号住居址出土の202は後代のものに比べて径が非常に大きく高台も高い。第16号住居址出土の241は体部に沈線が巡るもので、酸化炎焼成で橙色を呈し軟質である。これらはいずれも当器種の古い要素に数えられる。

⑥須恵器蓋

須恵器環同様出土数は少ないが3つの器種が見られる。須恵器蓋Aは天井部につまみを持たず、器高が他の蓋より深いもの。同蓋BはAよりずっと器高が低く、端部の内面に「かえり」をもつもの。同蓋CはBと同様だが「かえり」がなく、端部が下方に短く屈曲するものである。特に同蓋Cは同環Cと同様、後代にずっと盛行し、食器用具土器組成の主要な構成要素の一つとなる。

蓋Aには105・106・192・237・269、蓋Bには73・191・307、蓋Cには130・157・160・198・265などが該当する。

須恵器蓋Aは、本来、体部から天井部へ移行する境界に後または沈線をもち、あるいは口縁端部の内面に沈線が巡るという外形上の特徴があるのだが、これらが徐々に退化していくと、前述のように同環Bと区別がつかないものが出てくる。実際、当時（古墳時代の終り頃）においてもはつき



第148図 須恵器蓋A集成

り蓋と認識して生産し、また使用されていたのかすら疑ってしまう。このようなものは、今回、かなり怪しいものでも蓋Aとして図化・提示してしまったが、はたして適切であったかどうかは疑問が残る。第148図に集成を行ったので参考にされたい。製作手法では、天井部にヘラ切り痕や回転ヘラズリ痕を残し、一部にはさらにナデ等を加えたものもある。

同蓋Bは出土数が極めて少なく、3点を図化・提示できたのみである。しかも、いずれも破片で全形はわからない。この器種は、先学の生産地での研究³⁾によると、先の同蓋Aと、次にくる同蓋Cの間を占めるものと位置付けられているが、当遺跡の様相は同蓋A・Cにくらべてずっと少なく、生産地での成果をそのまま当てはめられないのではないかと、との感が生じる。

同蓋Cは10点を図化・提示できた。この器種は生産地では、先の同蓋A・Bより新しいものとされており、前述の蓋Bの問題はあるものの、当遺跡においても相対的な時間差を把握するのに有効な器種と見たい。外形の特徴は、口径に個体差があり、12cm前後、15~17cm、19cm以上のものの3種類くらいが見られることや、ほとんどの個体の天井部は大きな凹凸が無く、高さの違いはあるが穏やかなドーム状になること、などである。製作手法の上では、天井部の表面のかなり広い範囲に回転ヘラズリが施されるのが特徴であろう。ただし第15号住居址出土の194は、全形を推定復元すると口径が優に20cmを超えるとみられ、天井部も翼状に横へ大きく広がる形態をとる特殊なものと考えられる。

(3) 土器群とその時期

各遺構、特に住居址からは以上に述べた器種を中心に、各種の土器が出土している。次にこれらの組み合わせを見ていきたい。しかしその際に注意しなければならないことがある。それは、たとえば1棟の住居址から出土している土器群であっても、それらがその住居の居住者が保有していたものである可能性は極めて低く、したがってその土器群の組み合わせこそが当時の1棟の家で使っていた土器の種類を示すものであるという考えは、かなり特殊な出土状態を認めない限り成り立たない、ということである。住居址内からまとまって出土する土器群の持つ限界は、それらが出土した住居の廃絶、埋没あるいは埋め戻しの時点におけるその遺跡（集落）の土器様相の一部を示すに過ぎない、というところにあり、それ以上のことを求めるには調査時の特別な所見が必要であろう。その点で、逆に言うと、住居内のカマドの脇に並べられてあったいくつかの壺と壺を置く台に転用してあった壺の口縁部とか、住居の一隅にまとまっておかれていた状態で出土した土器などというものは、それなりの意味をもつもので、資料操作の目的によっては、覆土中から雑多に出土するものと区別しなければいけない場合もあろう。とにかく本項では、住居址出土の土器群は、まとまりとしてある時期の短い期間を示すもの、その期間の土器組成の様相の一端を示すものとして扱っていききたい。

前項で扱った器種のうちの坏・甕・須恵器坏・同蓋を取り上げ、各住居にこれらの器種がどのくらいの数があるかを示そうと試みたのが第12表である。今回の調査では整理期間の関係で、図化・提示不能の小片まで数量化することができず、この表は図化・提示できた個体数によって作成した。そのため完全な客観的データとは言い切れないが、全体的な傾向は充分把握できる。

この表から各住居址出土の土器群の類型を探ってみる。視点は、第一に、須恵器が伴うかどうか、またそのなかでも須恵器坏Bや同蓋Cがあるかどうかであり、第二に、複数の住居址でいくつかの器種・器形間に特定の組み合わせが頻出するかどうかである。特に前者の理由は、この記述の段階までで時間差を捉える材料は、前述の通り須恵器しか挙げられないからである。ただし基本的に、須恵器は全体量において時期が新しくなるほど過増する、という立場に立つ。そのため古い要素である須恵器坏Aの存否は、須恵器自体の絶対量が少ない中においてはむしろ偶発的なことと理解し、同坏Aのみが伴う場合に限って須恵器が伴わない土器群と一緒に扱う。また須恵器蓋Aは前述のとおり同坏B、との境界が曖昧なものが多いため、積極的に指標としてとりあげない。

まず須恵器の伴出関係で見ると次の様になる。

- a 須恵器坏・蓋を伴わない土器群：2・4・6・8・11・14・19・20・23・27・30・32・33・37・
38・47・52・58
- b 須恵器坏B・C、同蓋を伴う土器群：3・5・7・9・10・12・13・15・16・17・22・41・45・

次に、頻出する特定の器種の組み合わせは、須恵器類と壺の間で顕著であり下表のように一定の

傾向が現れる。標本数（個体数）が少なくかなり不安定な数値だが、壺Aa₁・Aa₂がほとんど0

第13表 土師器壺が須恵器類と組み合さる比率（単位%）

		個体数	須恵器 坏				須恵器 蓋		
			A	B ₁	B ₂	C	A	B	C
土師器壺	Aa ₁	5	0	0	0	0	0	0	
	Aa ₂	4	0	0	0	0	25	0	
	Aa ₃	4	25	100	50	25	50	0	
	Aa	21	10	14	19	10	24	10	
	Ab ₁	4	25	0	25	0	0	0	
	Ab ₂	2	0	50	50	50	100	50	
	Ac	9	22	56	67	33	44	11	

%ということ、壺Abは少なすぎて問題だが、壺Aa₃や壺Acがかなり大きな値を示すことは充分指摘できよう。この結果を、先の須恵器の存否による振り分けに合成すると、bの土器群に、より高い比率で壺Aa₃や壺Acが伴うという結論が得られ、一方、壺Aa₁や壺Aa₂はaの土器群と共にあるとの推定も成り立つ。矛盾は第27号住居址の土器群が壺Acを持ちながらaのグループに含まれているという1点のみで、これは壺Acの存在を優先させて解決する。次のように基本的な枠組が整理できる。

a 類型：須恵器坏・蓋類なし+壺Aa₁・壺Aa₂

b 類型：須恵器坏B・C、同蓋類+壺Aa₃・壺Ac

この二つの土器群の類型は、時間差において、a→b となることは須恵器の側から立証でき、したがって伴う壺も同様である。ここに至って前項②で保留した壺の型式発展の方向性が傍証できたことになる。即ち、壺は胴部最大径の上昇、長胴化、ハケメ調整へと変化・発展する。実際の土器群の様相とは別に、壺Aa₁→壺Aa₂→壺Aa₃→壺Acというモデルが想定され、それぞれの存在が時期を見る一つの指標となろう。

視野を転じて坏類に着目してみるとどうであろう。あまり特徴がない中で、坏G₁・G₂という古い時期の須恵器坏を模倣したとされている非常に類縁性をもつ2器形は、先のa類型の土器群の一部にしかなかった。このことは、坏G類は当遺跡の時期より前代から存在していて、a類型の時期に消滅したという推定を可能にする。これも一つの指標となろう。

先の基本的な枠組に、その後、導かれたことを加えて整理すると次のような相対的な時期差が設けられる。

- 1 段階：a 類型、坏G類あり
- 2 段階：a 類型、坏G類なし
- 3 段階：b 類型
- 4 段階：b 類型、須恵器坏C・同蓋Cあり

これに該当する各住居址出土の土器群を当てはめると次のようになり、それが住居自体の廃絶の時期にも近いものとする。(↓)は若干新しくなる可能性。(↑)はその逆。

1段階：2・8(↓)・23・33・44

2段階：4・6・11・14・19・20・29・30・32・37・38・39(↑)・52

3段階：3・5・16・45・61(↓)

4段階：7・9・10・12・13・15・17・22・27・41

3 奈良時代の土器

基本的に、食膳用具の坏類のほとんどが須恵器製で、しかも須恵器坏は有台のもの(須恵器坏B)、台のない底面に回転糸切り痕の残るもの(須恵器坏D)で構成される土器群をもって奈良時代として分離した。このため正確には奈良時代より若干時期の下るものもあるが、他の時期と画された一連のまとまりとして捉え敢えてこの名称を用いた。本遺跡の主体をなす時期ではないので資料は多くない。図示できたものは98点。器種は坏・甕・小形壺・須恵器坏・同蓋・同高盤・同長頸壺・同横瓶が見られる。この時期の土器については、松本市内では、島立地区で多くの調査例があり、器種・器形の種類、時期ごとの変遷もほぼ明らかになっているので、ここではそれに従う。

坏・甕・須恵器坏を取り上げ、少し詳しく見てみたい。

①坏

6点が図がされている(5・14・38・42・52・69)。いずれもロクロナデで、内面にミガキと黒色処理が施されている。底部まで残存しているものは42を除き、底面に回転糸切り痕が見られる(土師器坏C)。42の底面には手持ちケズリがある(土師器坏B)。外形は共通して、平らな底部から内湾気味の体部が大きく開いて、口縁端部がそのまま取まるかわずかに外反する。寸法では42を除き、口径12.4~14.2cm、底径6.0~7.2cm、器高3.8~4.4cmとかなり相似形を呈し、外傾指数も69~83を示す。これらに対して42は、口径15.7cmとひとまわり大きく、細かく見ると外形も内湾が強く、外傾指数は58と低い。このように坏については2器形(あるいは2つの寸法)が認められる。

後者の42についてもう少し触れたい。この個体は他とは異なり外面のロクロナデの痕跡が非常に稀薄・平滑で、外形の違いもあり、ロクロ不使用の坏かとも思われたが、上からみた円形が非常に均整がとれていることと内面底部に同心円状の窪みが見られることからロクロ使用と判断した。この種の外形を呈す坏の出土例は、ほとんど須恵器のみで構成される食膳用具の組成をもった時期の住居出土土器群から稀にあり、いずれも本例と同様に均整がとれた丁寧な作りで、ロクロ使用について判定に苦しんでしまうものばかりである。ロクロが土師器坏製作に導入された初期の頃の器形と考える。

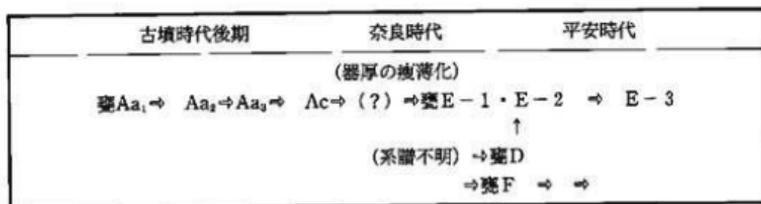
この土師器坏B・C類を総体の土器群の中で見ると、1)絶対数が少ないこと、2)須恵器類に混じって1点づつしかないこと、の特徴がある。ところで他の遺跡の調査例から見ると、次代の平安時代前期にはこの坏Cは非常に盛行し、1棟の住居址出土食膳用具土器の7割を占めるような場

合もある。この点からすると、今回発見の坏類は、その型式の流れのなかで初現に近い位置にあるといえる。

②甕

25点を図化・提示したが、全形がわかるものは4点しかない。これらは145図の古墳時代後期の甕の集成図の最下段に示した。ほとんどのものはこの4点と同じと見てよいであろう。外形は、平底からわずかに内湾する胴部が高く立ち上がり、胴部上半のかなり高い所で最大径をもったのち頸部へ向かって再びくびれ、口縁部はやや短めに強く外反して終っている。31の口縁端部には面が作られている。外形の最大の特徴は、甕という器種にしては器厚が薄く作られていることで、前代の甕と比べるとその違いが際立つ。器面調整は、胴部外面の縦方向のハケメは共通だが、内面はナデ、指オサエのものやハケメのものがある。口縁部は内面に横方向のハケメをもち、外面はヨコナデがなされるが、31は摩擦著しいが口縁部内面にカキメ、外面口縁部およびその下方数cmまでロクロナデがあるようだ。従来の分類では45が土師器甕E-1、40・44がE-2、31がDとなる。これらのほかに数はわずかだが胴部外面に強いケズリを行って器厚を極めて薄くしてある、甕Fも見られる(第119図96)。

前項の「古墳時代後期の土器」で甕について、奈良時代の甕の特徴を引用して「ハケメ無し→ハケメ」と基本的に型式発展することを推定したが、ここに示す甕D(31)などの存在を見ると、実相としては単一の流れでその変化が追えるという訳ではなさそうである。ちなみに次代の平安時代前期の甕は、外形的には甕E-2の変化したものと考えられるが、口縁部内面の横のハケメはカキメに変わる(甕E-3)。即ち当代の甕E-2にロクロの使用が加わったということであり、甕Dの影響が推定されるのである。まとめると下図のような形になる。



③須恵器環

高台をもち、外形が箱形を呈すもの(須恵器環C)と、台がない底面に回転糸切り痕の残る、断面形が台形に近いもの(須恵器環D)の2種類がある。まったく外形が異なり、おそらく産露も違うであろう両者をひとまとめにして扱うのは問題かもしれない。前者は10個体、後者は21個体を図化・提示できた。

須恵器環Cは全形のわかるものは4点しかないが、寸法にかなり差がある。口径18cm以上の大きいもの、同13cm前後(底径は10cm前後)のもの、同10cm前後(底径は8cm前後)の小さいもの、のほぼ3種類が認められる。製作手法の上では、37を除くすべての底面に回転ケズリが見られる。37は手持ちケズリである。

同環Dは、上記と異なりほとんど単一規格で作られているようである。すべての口径は11.5~13.5cmの範囲内にあり、特に12.5cm前後に集中する。製作手法の上でもすべて共通し、体部ログロナデの後、底面には回転糸切り痕を残している。

須恵器環の出土の組み合わせは、同環Cのみ出土している住居址と、逆に同環Dのみの住居址、双方見られるもの、の3種類がある。もとより1棟の住居址出土土器群のなかに2~4点ほどしか図示できているものがないのであるから、厳密な比較の数値が出るわけではないが、一つの傾向を示している。環Cのみ出土が第42・43号住居址、環C・D双方があるのが第49・57・59号住居址、環Dのみが第18・35・55・56号住居址となっているが、この3つのグループに時期的な前後の差があるのだろうか。当遺跡の資料では決め難いが、島立地区の遺跡での分析結果を参考にするとこの順序で新しくなると言える。

4 平安時代の土器・陶器

70点を図化・提示した。焼物の種別は土師器(内黒土師器を含む)・灰軸陶器の2種で、器種は坏・壺(碗)・皿・段皿・盤(足高台の皿)・鉢・小形甕・羽釜(土釜)がそろっている。しかも、坏・皿・盤・鉢・小形甕・羽釜は土師器製、壺(碗)は土師器・内黒土師器と灰軸陶器製、段皿は灰軸陶器製というように、器種と焼物の種別に対応関係がある。また、同一器種内で大小二つの規格寸法に分かれているものも見られる。以下に特徴的な器種について概観する。

①坏

ほとんどが土師器製。1点内黒土師器がある。土師器製のものは内外面ともログロナデ痕が明瞭に残り、底面には回転糸切り痕をもつ。また寸法の測定値が口径10cm前後、器高2.5~3cmに集中する。この規格からはずれるのは29・31の2点のみで、こちらは口径13cm、器高3.4cm・3.7cmとひとまわり大きくそろっている。31は坏に含めるべきか不明。

②壺(碗)

土師器・内黒土師器・灰軸陶器製があるが、よく見ると外形の感じが異なっている2群の存在に気付く。内黒土師器の14・15・17・18・49・60・64、灰軸陶器の5~7は寸法に大小こそあるが、

いずれも口径に対して器高の比率が高く、腰の張った深々とした外形を呈している。これに対して、土師器製の20・30・61・62、内黒土師器の43、灰釉陶器の28・45はやはり寸法に大小はあるが、前者よりずっと体部の外開度合いが強い。また寸法の点でも、前者を「小・中」とし、後者を「中・大」と表現するとふさわしい。

③皿・段皿

皿は土師器の19・26の2点で後者には高台が付く。段皿はすべて灰釉陶器製である。

④壺（足高台付きの皿）

土師器製で4点ある。大小の2規格があると考えられる。10・24・50は小形のもの。11は脚部のみであるが大形品の存在を示す。本器種は従来高台付きの皿の高台が型式発展して高くなったものと捉えられていたが、近年の研究で、この時期に現れる新来の器種と指摘されている（原 1988）。

第3節 集落の変遷について

1 相対的な時期

今回の調査で、古墳時代前期・後期・奈良時代・平安時代の4つの時期の遺構が発見されたことは、本書の初めから述べているとおりだが、古墳時代後期については土器の検討からさらに4段階に分けられた。また、奈良時代もはっきりはしないが二つの違う土器群の様相を示している。これら各時期、各段階の土器群を、松本市内の他の遺跡の調査成果に対応させて順番に並べ、前後の連続や断絶を明らかにし、これらを出土した遺構・遺構群を考えるための時間的な「物差し」としてみたい。

古墳時代前期から平安時代までを通して扱った、長野県史所載の笹沢浩氏の土器編年（笹沢 1988）を軸に、松本市とその周辺より短時間の編年あるいは時期区分案を並べ、それに今回調査出土土器の時期を対比させてみた（第14表）。編年案のできていない時期は市内発見の該当する遺跡・遺構名を入れてある。「島立」欄は松本市教委による一連の島立地区の調査報告中の時期区分、「原1987」欄は原明芳氏が平安時代の土器についての論考のなかで示された土器様式の段階（原 1987）である。今回出土土器との対比の方法は、古墳時代後期と奈良時代は須恵器の様相の比較によったが、その他は器種組成全体を比較したので若干不安定なところがある。

2 遺構配置の変遷

各時代ごとの遺構配置は第3章の各節の冒頭に示した（第6・21・105・120図）。そのなかでさらに時期の細分ができた古墳時代後期は1地区について第149図にその変遷を示す。中空になっている住居址は、出土土器が少なく大幅な予測で時期を当てはめたので資料価値が低い。以下、この第149図の古墳時代後期の住居址を中心に考えたい。

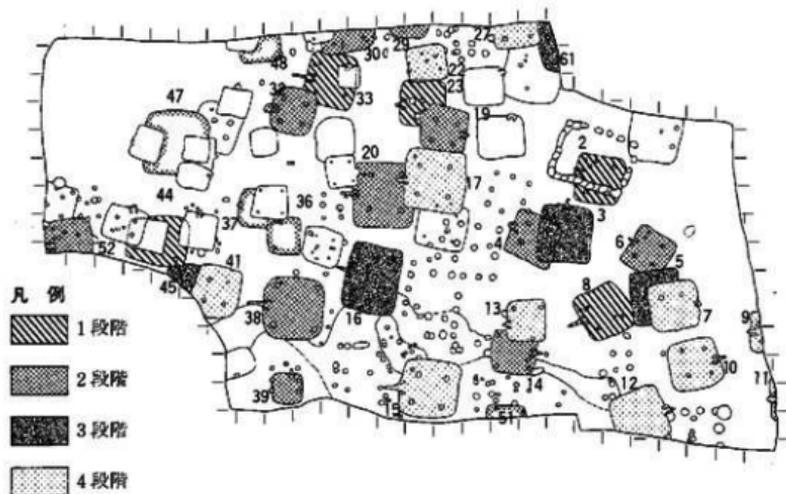
まず全体的な視野から見る。1段階は5棟の住居が現われる。調査地区内に偏りなく広がるが、

第14表 各時期の対比

時 期		笹沢1988	該当遺構、時期区分	千鹿頭北遺跡の時期	
古 墳 時 代	前期	初頭 前半	I 三の宮、県町9住 向畑	古墳時代前期 (調査地周辺東部)	
		後半	II 石行		
	中期	前半	III 向畑15住		
		後半	III 白神場12住		
	後期	前半 中頃 後半	IV 向畑7号墳 島立		古墳後期1段階 古墳後期2段階 古墳後期3・4段階
奈 良 時 代	前半	I	I	奈良時代古様相	
		II	II		
	後半	III IV	III IV V		原1987
		V	VI		1段階
平 安 時 代	前半	II	VII	奈良時代新様相	
		III	VIII・IX		
	中頃	IV	X	2段階	
		V	XI	3段階	
		VI	XII		
		VII	XIII		
					平安時代

中央部に空白があり、そこには第2号建物址がある。同址（他の建物址も同様だが）は出土土器が僅少で時期を決めかねるが、この配置から見ると1段階に伴う可能性がある。次の2段階になると調査地区内全域に広がり11棟（不明確なものも含せると15棟）と数も多い。次の3段階の棟数は少なく、調査地区内の東部に重心があるような感をうける。4段階になるとこの傾向は顕著になり、1棟を除いて調査地区東半分が集まってしまう。基本的に、新しくなるにつれ調査地区全体に分布していた住居が東へ集まっていくという図式で理解したい。また、第2号建物址の南一帯には建物址の掘り方らしき大きなピットがいくつもある。調査時には間数がうまく揃わずに建物址とすることができなかつたが、正直なところもう1・2棟の建物址があつたのではないかと反省している。この第2号建物址とその南一帯が、1段階や2段階の住居址の一部に取り囲まれて、この時期の遺構群の中心地をなしていたのではないかと考える。3・4段階になると中心地は1地区の北東部外のほうへ移っていったのであろう。4段階の住居群がそちらを囲むように弧を描くように見える。巨大で特殊な掘り方の第6号建物址はそれに関わるものの一つであろうか。

次に個々の住居址について見る。住居の重複（切り合い）があるものの中で、それが偶然の結果とは思われぬ部分があつかある。第1例は第17号住居址と第20号住居址の重複である。いずれも今回の一二を跨る大形の住居で、20作は2段階、17住は4段階に属する。この2棟が、規模・深さ・カマドの位置・主軸方向のいずれをもほぼ同じくして切り合っている。これは明らかに同一住



第149図 1地区の遺構配置変遷

居の移動・建て替えとして捉えられる。第2例は第5号住居址と第7号住居址。こちらは深さは後者のほうが深い、主軸を同じくしており、5住のカマドは東壁にあって7住に破壊されたと推定されるので、カマドの位置も同じということになる。そのほかにもこの2例ほど条件は揃わないが、第4号住居址と第3号住居址、第14号住居址と第13号住居址は疑うに値する。そもそも住居の切り合いが偶然の産物ばかりだとしたら、このように切り合うところと空間とがきれいに分かれるであろうか。同時代の、特に前後する段階の切り合いは双方に何らかの認知関係を想定しておいたほうがよい。また上記4例の切り合いはいずれも西から東へとずれるように動いている。個々の遺構レベルでも先に見出した図式が証明されるのである。そうすると重複関係にはないが近接して存在し、西から東へ移動した住居もあるかもしれない。南部の大形の住居の第38号住居址→第16号住居址→(第15号住居址)という移動の想定は可能と考える。

最後に奈良時代と平安時代についてであるが、奈良時代は1地区の北部西寄りにかたまり、平安時代は2・3地区まで点在する。集落の中心地を外れているのか、小規模な集落なのか判断がつかない。平安時代の住居址で最大規模の第25・26号住居址は、位置と主軸・規模からみて同一住居の移動と考えられる。

3 集落の変遷

第14表によってみると、当遺跡の各時期の間にはかなりの断絶があることがわかる。特に断絶の大きい部分は、古墳時代中期から古墳時代後期の前半の間と平安時代の前半の2か所で、実際の時間になるとそれぞれ約2世紀(200年間)ほどもある。これだけ大きな断絶があると、同じ遺跡内で地点を覚えて存在することはないかもしれない。ただし、第4章で扱った、調査地周辺出土の土器のなかにこの間を埋める資料が若干ある。それは調査地周辺東部からの古墳時代中期に下るもの(第140図6・7)で、これからすると調査地の東部あるいは北東部には古墳時代中期の遺構が存在している可能性がある。

周辺遺跡に目を向けると、東に隣接して、御神符、林、西に富士電気工業敷地、神田、と遺跡が続く。本遺跡で欠落する時期についてはこれらの周辺の遺跡も含めて集落の移動を考えていかねばなるまい。しかしこの周辺での発掘調査はまだ件数が少なく、不明なことが多い。ちなみに昭和63年12月に行われた神田遺跡の発掘調査は、本遺跡の南南西約500mの調査地点から奈良時代8世紀中頃と11世紀後半の竪穴住居址が発見されている。

証

- 1 当地域の大形住居については石上真藏氏の集成がある(石上、1983)。
- 2 種類・形形の分類にあたって系譜を考慮するというのも考えてみればおかしな極で、分類の後に導かれるはずのことを、実態にはそれ以前に供って見直しを立てている。いわば、導き出すべき結果をもってその途中の論証に用いると同義で、しかもしばしばこの種の分類の作業では行われ、むしろ先見性のある方法として評価されているようにも見える。仮説とその検証、修正という手順を明らかにできないのなら、強種・弱種の分類という非常に基本的な作業が、実は客観性を著しく欠いたものだという誇りを如何に免れ得ようか。
- 3 山辺昭三 1986 『陶器古部群Ⅰ』、
勸大塚文化財センター 1980 『海内Ⅲ』
- 4 松本市教育委員会 1985 『松本市島立東端北原遺跡、高野中学校遺跡、糸里の遺構』
松本市教育委員会 1988 『松本市島立糸里の遺構』
- 5 巖州は北原遺跡13号住居址(松本市教育委員会 1987 『松本市島立北原遺跡、糸里の遺構』)

参考文献

- 石上真藏 1983 『IV-3-② 大形住居』『丘中学校遺跡』塩尻市教育委員会
荻野繁尊 1981 『IV 出土遺物の検討』『巻別古宮跡発掘調査報告書』岐阜市教育委員会
笹沢 裕 1988 『II-4 古代の土器』『長野県史 考古資料編』1-4
高田哲男 1982 『III-1 出土土器の分類』『信濃遺跡Ⅲ 追分遺跡 前田遺跡 南原遺跡』大町市教育委員会
原 明芳 1983 『十師館の『鏡』』『東文雑記』No.1
原 明芳 1987 『松本平における平安時代の食器具』『信濃』39-4
原 明芳 1988 『古田向舟遺跡-5 成果と課題』『中央自動車道長野線榑原文化財発掘調査報告書 2』長野県教育委員会
斎野和樹 1976 『III-2-2) 古墳時代後期土器の手法と形態分類、3) 古墳時代後期土器の時期区分』『長野県中央道榑原文化財包圍地発掘調査報告書-諏訪市その4-』
矢口忠良 1979 『塩崎遺跡群』長野市教育委員会
矢口忠良 1980 a 『田中沖遺跡』長野市教育委員会
矢口忠良 1980 b 『西ツ城遺跡 徳岡遺跡 塩崎遺跡群』長野市教育委員会

第6章 結 語

古代における松本市周辺の開発は、現在の市域の東側地帯（東山麓）が中心であった、とは既に定説の様になっており、それは例えば信濃国府推定地であり、古文獻に見える筑摩（東間）の湯であり、遡っては弘法山古墳であり、桜ヶ丘古墳であった。しかしその様な象徴的なものではない、それらを支えた一般民衆の暮らしの跡となると、ほとんど把握できていない、というのも偽らざる現実であったと言えよう。折から、長野自動車道やほ場整備の進行で奈良井川河西部では大規模な発掘調査とそれにもまさる膨大な成果、古代集落の発見が相次いでいる。まるで東山麓の古代史が甦ってしまうかの様であった。この様な情勢の中での今回の発見の意義はきわめて大きい。以下にそれを具体的に列挙する。

第一は古墳時代前期の遺構の存在である。この時期といえば本遺跡南西1.3Kmにある前方後方墳弘法山古墳がまず思い浮かぶが、それを築造した人々のムラはどこにあったかが非常に重要である。現段階では同古墳から見下せる（同古墳を仰ぎ見られる）出川、南松本、筑摩、三才、里山辺一帯と推定されるが、本遺跡もこの範囲内のしかも古墳にごく近い位置にある。当然のことながらなんらかのつながりは考えねばなるまい。今回調査地の近くにより大規模な同期の遺構群が隠れていることを期待したい。

第二にして最大の成果は、古墳時代後期後半の多数の住居址を発見したことである。従来、松本平では古墳時代中～後期にかけての集落址の発見が少なく、塩尻市平出、大町市借馬の両遺跡を挙げるくらいである。今回調査した住居址66棟の内、実に40棟がこの時期であったことは集落の大きさ、家の集中のし方を考える上で絶好の資料となった。古墳時代後期になっても山辺・中山の一帯では盛んに古墳が築造されているが、その背後にあるエネルギーの源泉を垣間見た思いがするのである。事実、本遺跡には古墳時代後期には有力な集団が掘削していたのであろうし、当然それに伴う古墳もどこかに築かれているであろう。

第三は東山麓地帯での遺跡立地についてである。本遺跡に対して調査前の評価は、「山の北麓であるし頻りに逢切川が増水する所だから小規模なものであろう」というものであったが、結果は本昔の通りであった。これとまったく同様のことが昨年報告した林山腰遺跡（本遺跡の約1 Km北東、立地が類似する）でもあり、どうやら南側に強風避けの山を背負い、洪水の心配はあってもむしろ水の便の良さを求めて古代の人々は住みついていた姿が浮び上がってくる。我々の遺跡観、遺跡立地観を修正しなければならないであろう。今後も東山麓地帯の調査が続くので、非常に参考になる事項であった。

第四には調査地内で見られた各時期、時代の著しい重複である。同一検出面上に古墳時代前期、同後期、奈良時代、平安時代の4時期が広がり、それらがまた無作為に重複して、調査終了の光景

は圧巻であった。調査前半で遺構検出中には次から次へと現れる住居址に、地山がまったく残っていないのではないかと思っただけであった。とにかく、この様に数時代にわたって遺構が錯綜することこそが、古代からの繁栄を示すものであり、東山麓の遺跡のひとつの大きな特徴なのであろう。

以上4点、気の付くままに記してみたが、まだまだ興味関心と知識が至らず、問題にすべき、取り上げるべき事項を見落しているかもしれない。全容を網羅できたとはとても思えないが本書に基づき、御批判、御批評頂ければ幸いである。

尚、最後になりましたが、今回の調査が成功し、ここに無事調査報告を出すことができるのも、調査に協力して下さった皆様、薄川土地改良区、里山辺公民館・出張所の方々の尽力の賜と感謝しております。また、実際に調査に参加協力され汗を流して頂いた方々や、盛大かつ内容の深い現地説明会を開催して調査を盛り上げていただいた山辺歴史研究会の皆様への熱意に敬意を表し、本書がそれに報いることを願って結びといたします。

第15表 住居址一覽表

No	地区	位置 (N, W)	平面形	規模 (cm)		主軸方向	位置		備考	時期	建物関係		備考
				南北・東西・深さ	坪面積		種別	煙道			建物址1	建物址2	
1	1	10~16 9~15	隅丸長方形	(480)×540×8	23.9	N-12°-E	カマド	煙道80cm		古墳前期	建物址6	7区	
2	2	15~20 17~21	□	510×500×22	22.8	N-84°-W	カマド	煙道70cm		古墳後期	建物址6	22区	
3	3	21~26 20~24	□	600×580×20	28.9	N-0°	□	煙道40cm		□	4住	23区	
4	4	21~28 24~27	□	500×520×20	23.4	N-62°-W	□	煙道40cm		□	3住 建物址3	25区	
5	5	28~32 11~15	方形	520×320×20	13.2 (24.0)	N-12°-E	カマド	7住によって破壊され、 火更煙にあつたかも。		□	6住 8住	27区	
6	6	22~27 11~16	長方形	440×460×30	16.6	N-62°-W	カマド	煙道100cm		□	5住	28区	
7	7	29~34 8~13	隅丸長方形	500×520×45	23.8	N-80°-E	□			□	5住	29区	
8	8	29~34 15~24	隅丸長方形	530×550×20	23.6	N-114°-W	□	煙道130cm		□		30区	
9	9	32~35 3~4	不明	(460)×(180)×30	4.6	N-85°-W	□	煙道20cm		□		31区	
10	10	35~39 6~11	隅丸長方形	560×530×40	24.2	N-78°-E	□	煙道130cm		□		32区	
11	11	39~42 1~2	不明	(560)×(80)×40	1.6	(N-寛-W)	□	煙道40cm		□		31区 調査区域外	
12	12	40~45 12~17	隅丸長方形	540×540×40	20.4 (16.5)	N-76°-E	□	煙道70cm		□	建物址1	33区	
13	13	31~36 25~30	隅丸長方形	430×600×50	16.8	N-90°-W	□	煙道60cm		□	14住	34区	
14	14	34~38 25~30	隅丸長方形	500×500×40	20.4 (16.5)	N-94°-E	□	煙道64cm		□	13住	35区	
15	15	37~42 34~39	□	640×640×40	32.6	N-83°-W	□	煙道150cm		□		36区	
16	16	35~31 40~45	隅丸長方形	700×560×20	34.8	N-78°-W	□	煙道150cm		□		38区	

No	地区	位 置 (N, W)	平面形	規 模		主軸方向	形 態			備考	
				(cm)	(㎡)		類別	位 置	標 高		
17	1	15~21 33~39	長方形	南北・東西・高さ 660×640×30	36.7	N-85°-W	カマド	西壁中央	煙道70cm	古墳後期 13, 20, 21住	40型
18	11	15~18 44~47	□	320×300×20	8.8	N-83°-E	□	東壁中や南寄り		奈良 20住, 24住	106型
19	11	11~14 33~37	不正方形	460×300×15	19.5 (21.0)	N-100°-E	□	東壁中央	煙道35cm	古墳後期 23住	42型
20	11	16~21 39~44	長方形	680×620×30	34.5 (39.4)	N-90°-W	□	西壁中央	煙道140cm	□	43型
21	11	20~25 33~39	方形	520×440×15	19.4 (21.8)	N-10°-E	地床伊	中央		古墳前期	8型
22	11	4~7 35~38	隅丸長方形	360×400×15	13.6	N-93°-W	カマド	西壁中央		古墳後期 23住	45型
23	11	6~11 34~40	□	500×460×10	17.4 (21.7)	N-95°-W	カマド	西壁中央	煙道30cm	□	46型
24	11	11~15 45~48	不正長方形	500×440×14	16.5 (17.6)	N-0°				不明	129型
25	11	11~15 27~31	方形	500×500×20	13.4	N-0°	カマド	北壁裏側		平安	121型
26	11	6~9 29~32	隅丸長方形	440×430×10	17.3	N-65°-E	カマド	東壁北側		平安 28住	122型
27	11	1~6 25~30	隅丸方形	240×490×40	11.1	N-87°-W	カマド	東壁中央	煙道70cm	古墳後期	45型
28	11	3~12 23~28	不明	500×600×10	26.6	不明				古墳前期	9型
29	11	1~2 37~41	□	(140)×(440)×20	4.34	不明				古墳後期	47型
30	11	2~4 43~48	□	(240)×540×40	9.4	不明				□	47型
31	11	12~15 53~55	隅丸方形	300×280×20	6.8	N-0°				平安	123型
32	11	7~13 48~53	隅丸長方形	440×690×40	17.7	N-80°-W	カマド	西壁中央		古墳後期 33住	48型

地 区	位 置 (N, W)	平 面 形 状	規 模 (cm)		主 軸 方 向	種 別	伊 形 態		時 期	系 統 關 係	備 考
			形 状	面 積 (m^2)			位 置	備 考			
33	1 4~10 44~51	隅丸方形	南北・東西・深さ	東西長	N - 79° - W	カマド	西壁中央	西壁中央	古墳前期	30, 32, 56住	50区
34	2 2~3 48~51	不明	(320) × (100) × 30		N - 8° - W				平安	30住 調査区域外	12区
35	18 51~55	台形	360 × 340 × 20		N - 6° - E				奈良	36, 37住	107区
36	22 51~53	長方形	380 × 340 × 8		N - 0°	カマド	北壁中央		古墳後期	37住	32区
37	19 54~56	隅丸長方形	400 × 520 × 10		N - 80° - W	カマド	西壁中央	深さ1.4cm	#	33, 36住	52区
38	28 47~54	#	680 × 630 × 40		N - 85° - W	カマド	#	深さ200cm	#		53区
39	39 50~53	#	320 × 540 × 20		N - 5° - W	カマド	#	深さ50cm	#	5	55区
40	36 55~59	不明	280 × 300 × 10	9.2 (7.7)	N - 65° - E				古墳前期	調査区域外	7区
41	25 56~62	隅丸長方形	540 × 310 × 40	20.4 22.0	N - 15° - W				古墳後期	#	56区
42	31 59~63	方形	360 × 360 × 40	11.8	N - 11° - W	カマド	北壁や中西寄り		奈良	44住	108区
43	20 66~71	長方形	420 × 400 × 30	14.8	N - 15° - E	カマド	北壁や中西寄り		奈良	58, 44住	108区
44	22 63~63	隅丸長方形	540 × 680 × 30	16.1 29.3	N - 30° - E				古墳後期	42, 58 43住	57区
45	27 61~66	不明	(280) × (360) × 30	5.3	N - 5° - E				#	44, 41住 調査区域外	55区
46	16 60~63	隅丸長方形	230 × 340 × 20	7.7	N - 85° - W				平安	47住	123区
47	11 59~60	隅丸長方形	680 × 660 × 20	33.7 40.3	N - 5° - E				古墳後期	46住, 56住 59住	58区
48	2 53~58	不明	(260) × 440 × 20	7.0	N - 0°				不明	調査区域外 57住	129区
49	8 56~58	方形	360 × 300 × 20	7.1	N - 11° - E	カマド	北壁中央		奈良	53住	109区

No	地区	位置 (N, W)	平面形	規模		主軸方向	座標值			備考	時期	重複関係	備考
				棟高 (cm)	面積 (m^2)		類別	位置	座標				
50	I	22~28 45~51	隅丸長方形	棟高・棟高・深さ 590×520×40	23	N—120°—E				古墳前期		11區	
51	II	39~44 26~31	不明	120×470×17	4.9					古墳後期	調査区域外	60區	
52	II	21~26 72~77	隅丸長方形	350×460×40	14.9	N—4°—E	東壁中央			II	34住	61區	
53	II	10~14 57~60	隅丸長方形	560×510×20	23.5	N—7°—E				古墳前期	48住47住 59住60住	12區	
54	II	18~22 74~76	不明	380×320×15 (23.5)	14.0	N—18°—E				II	調査区域外 52住	12區	
55	II	4~7 42~43	長方形	280×300×25	6.8	N—4°—E	東壁中央			奈良	33住	110區	
56	II	11~19 65~68	長方形	360×320×10	10.1	N—78°—W	西壁中央			II	47住	109區	
57	II	2~4 54~58	不明	(140)×(360)×20	4.3	N—5°—W				II	調査区域外	111區	
58	II	21~25 64~67	隅丸長方形	359×400×40	13.6	N—7°—E				古墳後期	44住	62區	
59	II	13~16 69~63	長方形	290×390×30	7.4	N—9°—E				奈良	47住 60住	111區	
60	II	3~6 58~60	不明	(140)×(400)×40	1.8		北壁中央	壁厚40cm		II	47住 59住	111區	
61	II	3~6 23~26	不明	(560)×(200)×40	8.2					古墳後期	28住	62區	
62	2	73~77 26~31	長方形	380×320×10	10.6	N—9°—W				II	調査区域外	63區	
63	II	69~69 27~30	長方形	320×340×30	8.3	N—0°	北壁東西			平安		124區	
64	II	76~78 51~55	長方形	(180)×360×14		N—4°—W				古墳後期		63區	
65	II	72~78 45~49	長方形	440×320×20	15.3	N—5°—W				古墳後期		63區	
66	3	42~43 114~117	II	469×320×10	12.1	N—13°—E				平安		124區	



1地区全景



1地区全景

第1図版 調査地全景

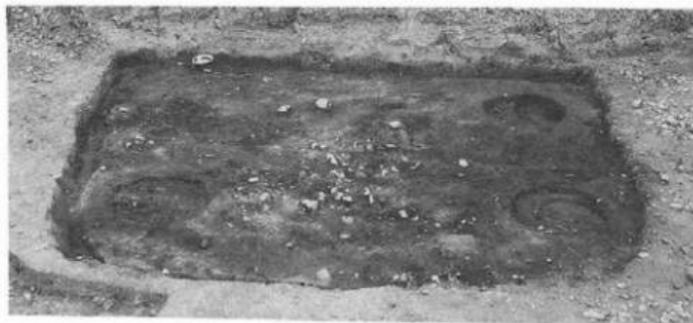


2 地区全景

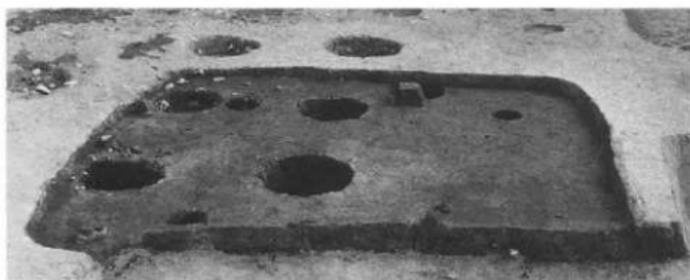


3 地区全景

第 2 図版 調査地全景



1住



21住



40住

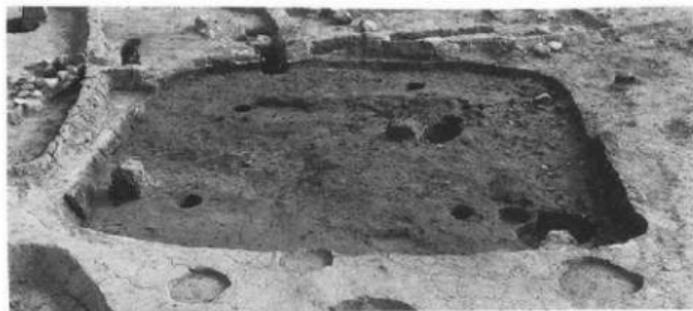
第3図版 古墳時代前期住居址 (1)



28住



28住
炭化材



50住

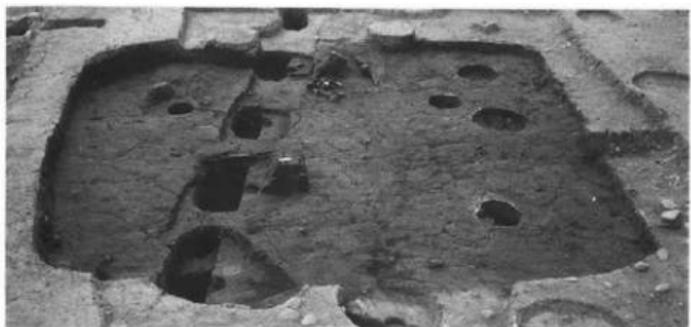
第4圖版 古墳時代前期住居址 (2)



53住



54住



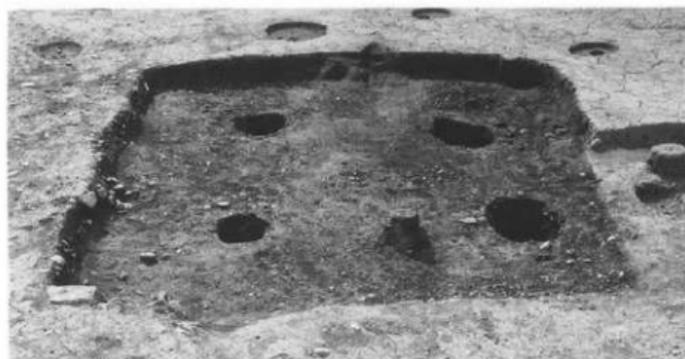
古墳後期

2住

第5図版 古墳時代前期住居址 (3)・後期住居址 (1)



3住



4住



4住
遺物出土

第6図版 古墳時代後期住居址 (2)



5住



6住



7住

第7図版 古墳時代後期住居址 (3)



8住



11住



9住

第8図版 古墳時代後期住居址(4)



10住



12住



13住

第9図版 古墳時代後期住居址 (5)



14住

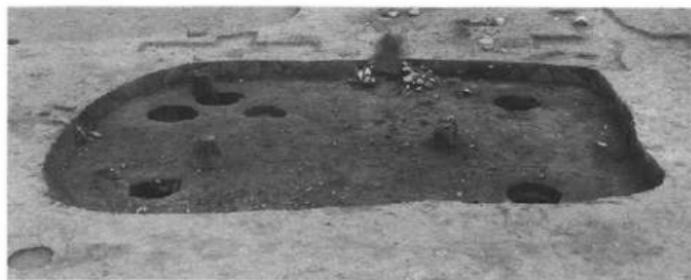


14住

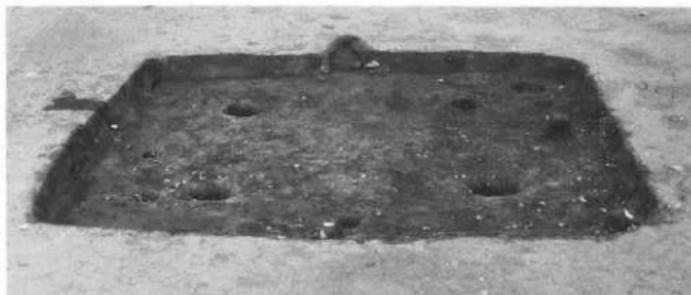
遺物出土



15住



16住



17住

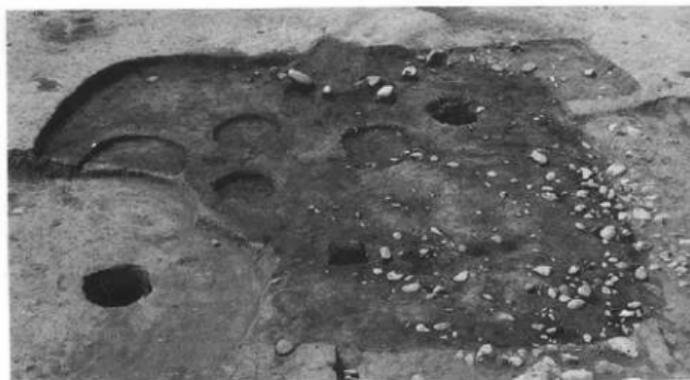


19住

第11図版 古墳時代後期住居址 (7)



20住



23住



27住

第12図版 古墳時代後期住居址 (8)



29住



30住



32住



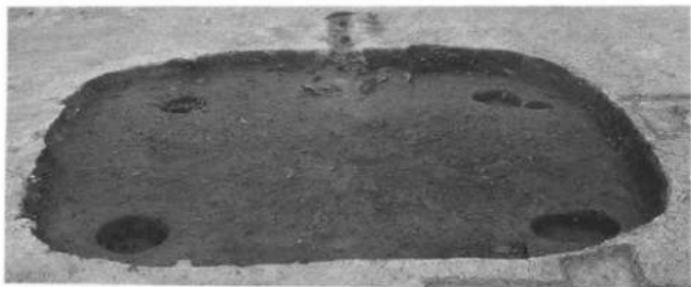
33住



36住



37住



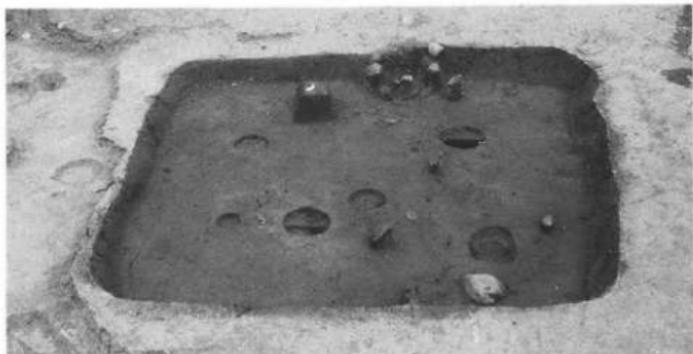
38住



39住



41住



43住

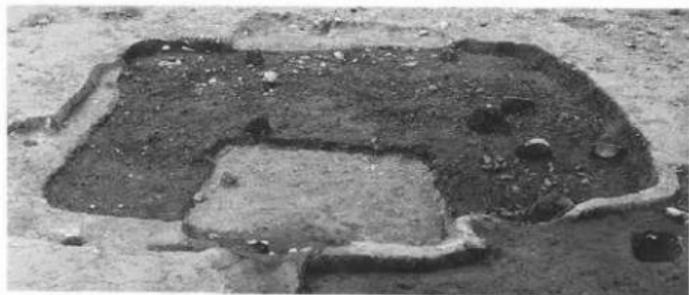


44住



51住

第16図版 古墳時代後期住居址 12



47住

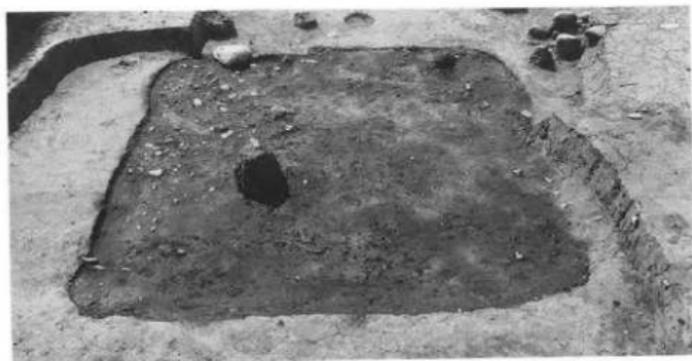


47住

炭化材



52住



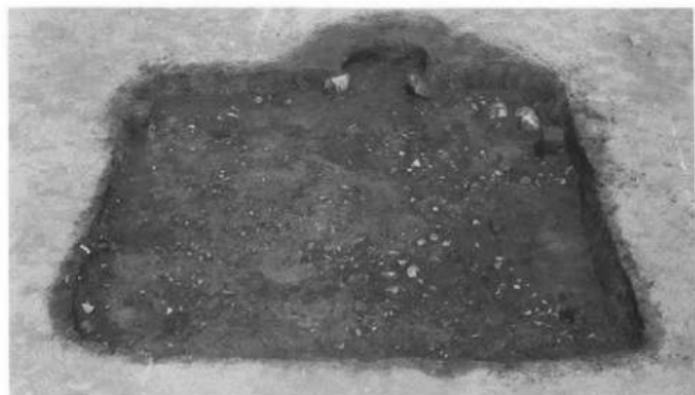
58住



61住



64住



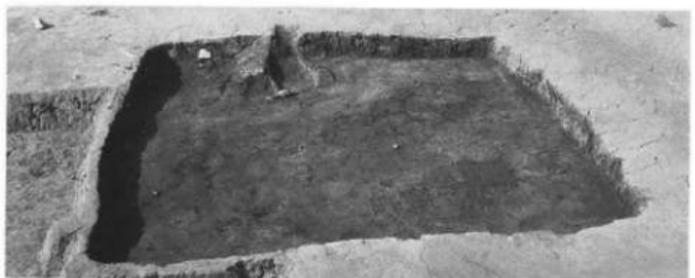
奈良

18住



18住

遺物出土



42住

第19図版 奈良時代住居址 (1)



49住



55住



56住



57住



平安

25住



26住

第21図版 奈良時代住居址 (3)・平安時代住居址 (1)



31住



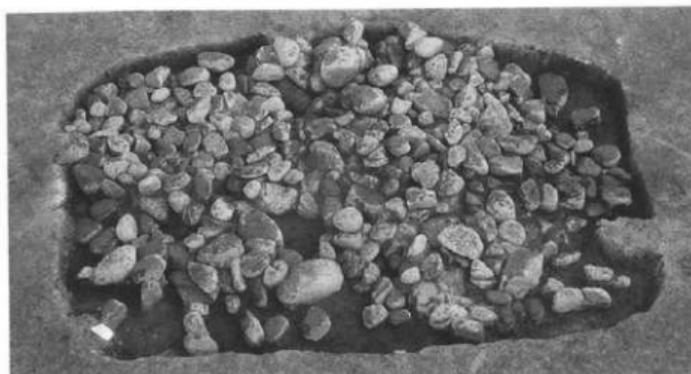
31住
遺物出土



63住



46住

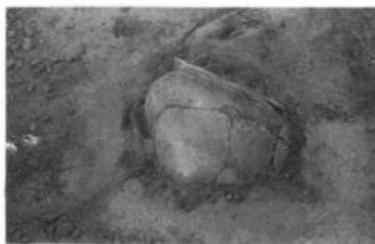


46住
遺物出土



66住

第23図版 平安時代住居址 (3)



28住遺物出土状況 (14:土器番号, 実測図と対応以下同じ)



28住遺物出土状況 (16)



28住遺物出土状況 (15)



3住カマド



6住遺物出土状況 (86)



6住カマド



11住遺物出土状況 (154)



13住カマド

第24図版 カマド・遺物出土 (1)



8住カマド



8住カマド・遺物出土状況



8住遺物出土状況 (122)



14住カマド



15住カマド



16住カマド



17住カマド



19住カマド

第25図版 カマド・遺物出土 (2)



20住カマド



20住カマド



22住遺物出土状況 (305・306・308)



23住カマド



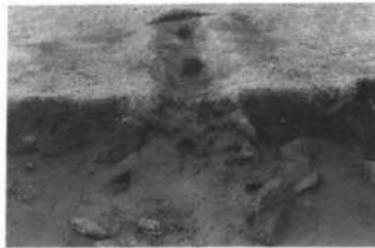
30住遺物出土状況



27住カマド



30住遺物出土状況 (333・332)



38住カマド

第26図版 カマド・遺物出土 (3)



32住遺物出土状況



32住カマド



33住遺物出土状況 (367)



33住カマド



52住遺物出土状況 (453)



52住カマド



52住遺物出土状況 (446・448)



52住遺物出土状況 (454)

第27図版 カマド・遺物出土 (4)



39住カマド



18住カマド



55住カマド・遺物出土状況 (44)



43住カマド



55住カマド



63住カマド



26住カマド

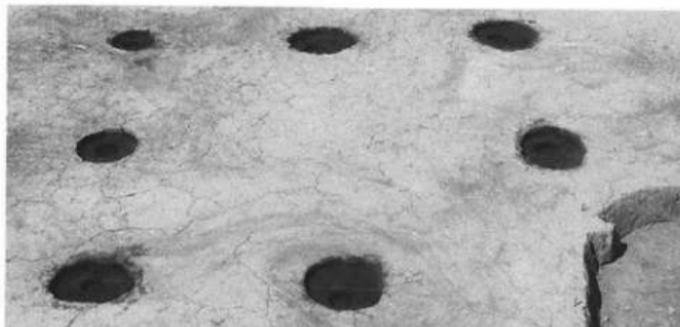
第28図版 カマド・遺物出土 (5)



建 1



建 2



建 3

第29图版 建物址 (1)



建 5



建 6



建 6



第31図版 調査スナップ



21住
7



21住
8



28住
14



28住
16



50住
19



28住
15



53住
32

第32図版 古墳時代前期の土器 (1)



50住
21



50住
20



1区検
47



1区検
46



4住
41



3住
17



21住
13



4住
44

第33図版 古墳時代前期の土器 (2)・後期の土器 (1)



4住
45



6住
79



4住
56



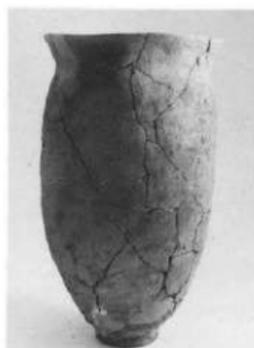
4住
49



4住
62



4住
46



4住
63

第34図版 古墳時代後期の土器 (2)



6住
80



6住
81



7住
91



10住
132



8住
112



5住
75



6住
86



8住
115



8住
114

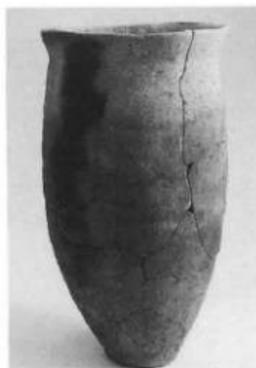
第35図版 古墳時代後期の土器 (3)



8住
121



8住
123



8住
122



11住
154



11住
153



10住
145

第36図版 古墳時代後期の土器 (4)



15住
198



13住
186



15住
207



15住
202



15住
218



15住
203



15住
212



16住
257

第37図版 古墳時代後期の土器 (5)



17住
277



17住
262



17住
278



16住
261



17住
274



19住
282



16住
258

第38図版 古墳時代後期の土器 (6)



17住
276



19住
284



19住
287



19住
284



19住
292



19住
289



19住
293

第39図版 古墳時代後期の土器 (7)



20住
299



20住
300



22住
305



20住
301



22住
308



22住
310



22住
306

第40図版 古墳時代後期の土器 (8)